

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集

上村貝塚発掘調査報告書

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

わむら
上村貝塚発掘調査報告書



序

本県には先土器時代の遺跡をはじめ、数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

宮古市磯鶏の宅地造成事業に関連する上村遺跡は、磯鶏海岸の西側に位置し、昭和62年の調査によって縄文時代から平安時代までの遺構と遺物が発見されました。特に弥生時代の集落跡の発見は沿岸部において貴重な資料を提供することとなりました。本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝を表します。

平成2年12月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市磯島第3地割字上村186に所在する上村遺跡の発掘調査の結果を取録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、宅地開発に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と宮古市都市計画課との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はLG34-1086、遺跡略号はWM-87、発掘調査面積は2500㎡である。
- 4 発掘調査期間は昭和62年6月1日～9月30日、整理期間は昭和62年11月1日～平成2年3月31日である。
- 5 野外調査および室内整理は小田野哲憲・高橋義介が担当した。
- 6 本報告書の執筆はIを見野靖、縄文・弥生時代を小田野、奈良・平安時代を高橋が担当した。
- 7 遺物の鑑定にあたっては次の方々に依頼した。人骨・百々幸雄氏（札幌医科大学）、自然遺物・佐藤正彦氏（陸前高田市立博物館）、石質・佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）、炭化材・早坂松次郎（岩手県木炭協会）。
- 8 発掘・整理・執筆にあたっては下記の方々に御協力・御指導いただいた。
相原康二・相原淳一・石川日出志・石田肇・稲野裕介・速藤正夫・太田昭夫・大島直行・岡田康博・鎌田祐二・菊地孝広・桐生正一・工藤竹久・工藤武・熊谷常正・小井川和夫・児玉準・小林和彦・小林克・斉藤尚己・佐藤甲二・佐藤信行・佐藤嘉広・鈴鹿良一・高田和徳・高橋亜希子・高橋憲太郎・高橋文明・武田将男・辻秀人・鶴丸俊明・中嶋隆・長崎元廣・中村良幸・芳賀英一・福田友之・藤沼邦彦・船木義勝・藤村東男・本堂寿一・三宅徹也・森幸彦・盛合義彦・山内幹夫。宮古市教育委員会。(50音順、敬称略)
なお、昭和53年の遺跡写真は宮古市・盛田隆氏の提供を受けたものである。
- 9 野外調査では北村昭一氏ほか24名の、室内整理では浅沼幸子さんほか20名のご協力を得た。
- 10 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。
- 11 本報告書の凡例は以下のとおりである。
 - (1) 遺構実測図は住居跡1/40、土壌1/10としたが規模に大小があるため各図版にスケールを付してある。
 - (2) 遺物実測図は1/2、1/3、1/4とし、各図版にスケールを付してある。
 - (3) 土器器と須恵器の区別は、須恵器の断面を黒塗りにしてある。
 - (4) 脚註、引用参考文献は各章の末に一括してある。

目 次

序 例言

本

I	調査に至る経過	2
II	立地と環境	2
	1. 遺跡の位置と地形	2
	2. 遺跡および周辺の地形	4
	3. 周辺の遺跡	4
III	調査・整理の方法	10
	1. 野外調査	10
	2. 室内整理	11
IV	遺構と遺物	13
	1. 縄文時代の遺構と遺物	13
	(1) 住居跡	13
	(2) 墓 墳	84
	(3) 土 墳	90
	(4) 集石・配石	96
	(5) 炉 跡	100
	(6) 骨角器	100
	2. 弥生時代の遺構と遺物	102
	3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	135
V	遺構外の遺物	167
	1. 縄文時代の土器	167
	2. 弥生時代の土器	179
	3. 石 器	195
	4. 土製品・石製品	228
	5. 奈良・平安時代の遺物	235
VI	考察とまとめ	241
	1 縄文時代	241
	(1) 住居跡	241

文

(2) 複式炉	242
(3) 土器	243
(4) 埋設土器と人骨群	246
(5) ヒスイ大珠	249
2 弥生時代	252
(1) 住居跡	252
(2) 土 器	253
(3) 石 器	254
(4) 玉 類	260
3 奈良・平安時代	263
VII 鑑 定・分析結果	269
動物遺存体について	269
上村貝塚出土黒曜石遺物の石材産地分析	278
岩手県宮古市上村貝塚出土の縄文時代人骨	282

図 版

第1図 遺跡位置図	1	第32図 A-5号住居跡遺物(14)	44
第2図 地形分類図	3	第33図 A-5号住居跡遺物(15)	45
第3図 遺跡周辺の地形図	5	第34図 A-5号住居跡遺物(16)	46
第4図 周辺の遺跡位置図	8	第35図 A-5号住居跡遺物(17)	48
第5図 遺構配置図	12	第36図 A-5号住居跡遺物(18)	49
第6図 A-1号住居跡	15	第37図 A-5号住居跡遺物(19)	50
第7図 A-1号住居跡遺物(1)	16	第38図 A-5号住居跡遺物(20)	51
第8図 A-1号住居跡遺物(2)	17	第39図 A-5号住居跡遺物(21)	52
第9図 A-1号住居跡遺物(3)	18	第40図 A-5号住居跡遺物(22)	53
第10図 A-1号住居跡遺物(4)	19	第41図 A-5号住居跡遺物(23)	54
第11図 A-2号住居跡・A-6号住居跡	20	第42図 A-6号住居跡遺物(1)	56
第12図 A-2号住居跡遺物	21	第43図 A-6号住居跡遺物(2)	57
第13図 A-3号住居跡	23	第44図 A-7号住居跡	58
第14図 A-3号住居跡遺物(1)	24	第45図 A-7号住居跡遺物	59
第15図 A-3号住居跡遺物(2)	25	第46図 A-8号住居跡	62
第16図 A-3号住居跡遺物(3)	26	第47図 A-8号住居跡遺物(1)	63
第17図 A-5号住居跡(1)	28	第48図 A-8号住居跡遺物(2)	64
第18図 A-5号住居跡(2)	29	第49図 A-8号住居跡遺物(3)	65
第19図 A-5号住居跡遺物(1)	31	第50図 A-8号住居跡遺物(4)	66
第20図 A-5号住居跡遺物(2)	32	第51図 A-8号住居跡遺物(5)	67
第21図 A-5号住居跡遺物(3)	33	第52図 A-8号住居跡遺物(6)	68
第22図 A-5号住居跡遺物(4)	34	第53図 B-1号住居跡	70
第23図 A-5号住居跡遺物(5)	35	第54図 B-1号住居跡遺物(1)	71
第24図 A-5号住居跡遺物(6)	36	第55図 B-1号住居跡遺物(2)	72
第25図 A-5号住居跡遺物(7)	37	第56図 B-2号住居跡	74
第26図 A-5号住居跡遺物(8)	38	第57図 B-2号住居跡遺物(1)	75
第27図 A-5号住居跡遺物(9)	39	第58図 B-2号住居跡遺物(2)	76
第28図 A-5号住居跡遺物(10)	40	第59図 B-2号住居跡遺物(3)	77
第29図 A-5号住居跡遺物(11)	41	第60図 F-3号・N-3号住居跡、V-1号炉跡	79
第30図 A-5号住居跡遺物(12)	42	第61図 F-3号住居跡遺物(1)	80
第31図 A-5号住居跡遺物(13)	43		

第62図	F-3号住居跡遺物(2)81	第94図	G-3号住居跡遺物(3)121
第63図	F-3号住居跡遺物(3)82	第95図	G-3号住居跡遺物(4)122
第64図	N-3号住居跡遺物83	第96図	K-1号住居跡124
第65図	A-1号埋壘・土壇85	第97図	K-1号住居跡遺物(1)125
第66図	人骨群出土状況86	第98図	K-1号住居跡遺物(2)126
第67図	1号人骨検出状況図87	第99図	K-1号住居跡遺物(3)127
第68図	2~4号人骨検出状況図88	第100図	K-1号住居跡遺物(4)128
第69図	人骨群に伴う遺物89	第101図	K-1号住居跡遺物(5)129
第70図	K-1号土壇91	第102図	L-2号住居跡・遺物(1)131
第71図	K-1号土壇遺物(1)92	第103図	L-2号住居跡遺物(2)132
第72図	K-1号土壇遺物(2)93	第104図	L-2号住居跡遺物(3)133
第73図	K-1号土壇遺物(3)94	第105図	A-4号住居跡(1)135
第74図	K-1号土壇遺物(4)95	第106図	A-4号住居跡(2)136
第75図	K-1号集石夾測図・出土遺物(1)97	第107図	A-4号住居跡遺物137
第76図	K-1号集石遺物(2)98	第108図	F-1号住居跡138
第77図	H-1・M-1号配石99	第109図	F-1号住居跡遺物139
第78図	骨角器、貝分布図101	第110図	G-1号住居跡141
第79図	F-2号住居跡103	第111図	G-1号住居跡遺物142
第80図	F-2号住居跡遺物(1)104	第112図	G-2号住居跡遺物143
第81図	F-2号住居跡遺物(2)105	第113図	G-2号住居跡144
第82図	F-2号住居跡遺物(3)106	第114図	H-1・2号住居跡146
第83図	F-2号住居跡遺物(4)107	第115図	H-2号住居跡遺物147
第84図	F-2号住居跡遺物(5)108	第116図	I-1号住居跡149
第85図	F-4号住居跡111	第117図	I-2号住居跡150
第86図	F-4号住居跡遺物(1)112	第118図	I-2号住居跡遺物151
第87図	F-4号住居跡遺物(2)113	第119図	J-1・2号住居跡・遺物153
第88図	F-4号住居跡遺物(3)114	第120図	M-1号住居跡154
第89図	F-4号住居跡遺物(4)115	第121図	M-1号住居跡遺物155
第90図	F-4号住居跡遺物(5)116	第122図	M-2号住居跡156
第91図	G-3号住居跡118	第123図	N-1号住居跡・遺物158
第92図	G-3号住居跡遺物(1)119	第124図	N-2号住居跡(1)159
第93図	G-3号住居跡遺物(2)120	第125図	N-2号住居跡(2)160
			第126図	N-2号住居跡遺物161

第127图	O-1号住居跡・遺物	·····162	第160图	遺構外遺物：石器(4)	·····200
第128图	O-2号住居跡・遺物	·····164	第161图	遺構外遺物：石器(5)	·····201
第129图	K-1号土坑・遺物	·····165	第162图	遺構外遺物：石器(6)	·····202
第130图	N-1号土坑・遺物	·····165	第163图	遺構外遺物：石器(7)	·····203
第131图	M-1号土坑・遺物	·····166	第164图	遺構外遺物：石器(8)	·····204
第132图	O-1号土坑	·····166	第165图	遺構外遺物：石器(9)	·····205
第133图	N-1号溝跡	·····166	第166图	遺構外遺物：石器(10)	·····206
第134图	遺構外遺物：縄文土器(1)	··169	第167图	遺構外遺物：石器(11)	·····207
第135图	遺構外遺物：縄文土器(2)	··170	第168图	遺構外遺物：石器(12)	·····208
第136图	遺構外遺物：縄文土器(3)	··171	第169图	遺構外遺物：石器(13)	·····209
第137图	遺構外遺物：縄文土器(4)	··172	第170图	遺構外遺物：石器(14)	·····210
第138图	遺構外遺物：縄文土器(5)	··173	第171图	遺構外遺物：石器(15)	·····211
第139图	遺構外遺物：縄文土器(6)	··174	第172图	遺構外遺物：石器(16)	·····212
第140图	遺構外遺物：縄文土器(7)	··175	第173图	遺構外遺物：石器(17)	·····215
第141图	遺構外遺物：縄文土器(8)	··176	第174图	遺構外遺物：石器(18)	·····216
第142图	遺構外遺物：縄文土器(9)	··177	第175图	遺構外遺物：石器(19)	·····217
第143图	遺構外遺物：縄文土器(10)	··178	第176图	遺構外遺物：石器(20)	·····218
第144图	遺構外遺物：弥生土器(1)	··182	第177图	遺構外遺物：石器(21)	·····219
第145图	遺構外遺物：弥生土器(2)	··183	第178图	遺構外遺物：石器(22)	·····220
第146图	遺構外遺物：弥生土器(3)	··184	第179图	遺構外遺物：石器(23)	·····221
第147图	遺構外遺物：弥生土器(4)	··185	第180图	遺構外遺物：石器(24)	·····222
第148图	遺構外遺物：弥生土器(5)	··186	第181图	遺構外遺物：石器(25)	·····223
第149图	遺構外遺物：弥生土器(6)	··187	第182图	遺構外遺物：石器(26)	·····224
第150图	遺構外遺物：弥生土器(7)	··188	第183图	遺構外遺物：石器(27)	·····225
第151图	遺構外遺物：弥生土器(8)	··189	第184图	遺構外遺物：石器(28)	·····226
第152图	遺構外遺物：弥生土器(9)	··190	第185图	遺構外遺物：石器(29)	·····227
第153图	遺構外遺物：弥生土器(10)	··191	第186图	遺構外遺物：土製品(1)	·····228
第154图	遺構外遺物：弥生土器(11)	··192	第187图	遺構外遺物：土製品(2)	·····229
第155图	遺構外遺物：弥生土器(12)	··193	第188图	遺構外遺物：石製品(1)	·····231
第156图	遺構外遺物：弥生土器(13)	··194	第189图	遺構外遺物：石製品(2)	·····232
第157图	遺構外遺物：石器(1)	·····197	第190图	遺構外遺物：石製品(3)	·····233
第158图	遺構外遺物：石器(2)	·····198	第191图	遺構外遺物：石製品(4)	·····234
第159图	遺構外遺物：石器(3)	·····199	第192图	遺構外遺物：土師器(1)	·····236

第193图	遺構外遺物：土師器(2)・須惠器(1)237
第194图	遺構外遺物：須惠器(2)238

第195图	遺構外遺物：鉄製品239
第196图	遺構外遺物：土製品・石製品	240

写真図版

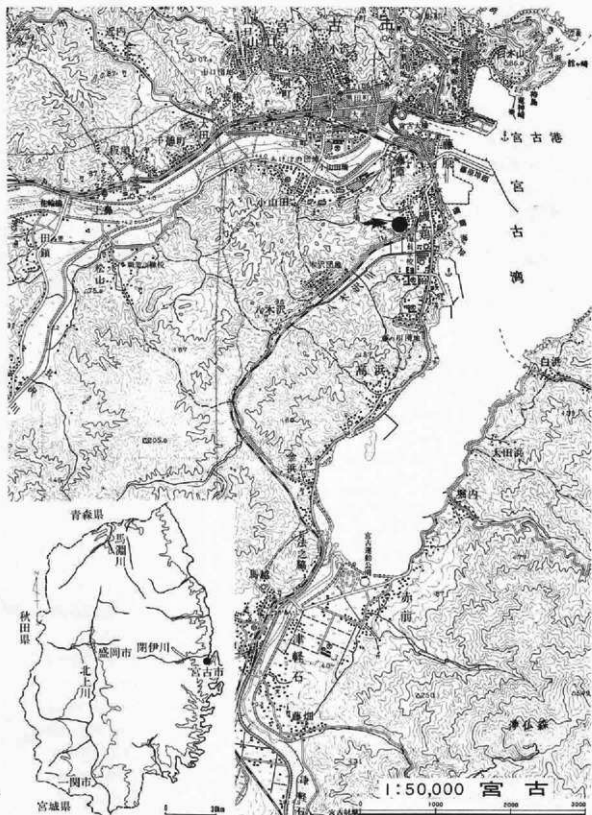
写真図版1	遺跡全景(1)293
写真図版2	遺跡全景(2)294
写真図版3	A-1・A-2号住居跡295
写真図版4	A-3号住居跡296
写真図版5	A-5号住居跡(1)297
写真図版6	A-5号住居跡(2)298
写真図版7	A-5号住居跡(3)299
写真図版8	A-6号住居跡300
写真図版9	A-7号住居跡301
写真図版10	A-8号住居跡302
写真図版11	B-1号住居跡(1)303
写真図版12	B-1号住居跡(2)304
写真図版13	B-2号住居跡305
写真図版14	F-3号住居跡306
写真図版15	N-3号住居跡、V-1号炉、H-1・ M-1配石307
写真図版16	A-1号埋甕検出状況308
写真図版17	A-1号埋甕309
写真図版18	人骨群検出状況310
写真図版19	人骨群内出土土器311
写真図版20	人骨割出状況312
写真図版21	K-1号土壇、K-1号集石313
写真図版22	A-1号住居跡土器314
写真図版23	A-1号住居跡石器315
写真図版24	A-2号住居跡土器316
写真図版25	A-3号住居跡土器317
写真図版26	A-2・A-3号住居跡石器318
写真図版27	A-5号住居跡土器(1)319

写真図版28	A-5号住居跡土器(2)320
写真図版29	A-5号住居跡土器(3)321
写真図版30	A-5号住居跡土器(4)322
写真図版31	A-5号住居跡土器(5)323
写真図版32	A-5号住居跡土器(6)324
写真図版33	A-5号住居跡土器(7)325
写真図版34	A-5号住居跡土器(8)326
写真図版35	A-5号住居跡土器(9)327
写真図版36	A-5号住居跡土器00328
写真図版37	A-5号住居跡土器01329
写真図版38	A-5号住居跡石器(1)330
写真図版39	A-5号住居跡石器(2)331
写真図版40	A-5号住居跡石器(3)332
写真図版41	A-5号住居跡石器(4)333
写真図版42	A-5号住居跡石・土製品334
写真図版43	A-6号住居跡土器335
写真図版44	A-7・A6号住居跡遺物336
写真図版45	A-8号住居跡土器(1)337
写真図版46	A-8号住居跡土器(2)338
写真図版47	A-8号住居跡石器339
写真図版48	B-1号住居跡土器(1)340
写真図版49	B-2号住居跡土器(2)341
写真図版50	B-1・B-2号住居跡石器342
写真図版51	F-3号住居跡土器343
写真図版52	F-3・N-3号住居跡遺物344
写真図版53	K-1号土壇土器(1)345
写真図版54	K-1号土壇土器(2)346
写真図版55	K-1号土壇遺物347

写真図版56	K-1号集石遺物	348
写真図版57	骨角器	349
写真図版58	F-2号住居跡	350
写真図版59	F-4号住居跡	351
写真図版60	G-3号住居跡	352
写真図版61	K-1・L-2号住居跡	353
写真図版62	F-2号住居跡土器(1)	354
写真図版63	F-2号住居跡土器(2)	355
写真図版64	F-2号住居跡石器	356
写真図版65	F-4号住居跡土器(1)	357
写真図版66	F-4号住居跡土器(2)	358
写真図版67	F-4号住居跡石器	359
写真図版68	G-3号住居跡土器(1)	360
写真図版69	G-3号住居跡土器(2)	361
写真図版70	G-3号住居跡石器	362
写真図版71	K-1号住居跡土器(1)	363
写真図版72	K-1号住居跡土器(2)	364
写真図版73	K-1号住居跡石器	365
写真図版74	L-2号住居跡土器	366
写真図版75	L-2号住居跡石器	367
写真図版76	A-4号住居跡(1)	368
写真図版77	A-4号住居跡(2)	369
写真図版78	F-1号住居跡	370
写真図版79	G-1号住居跡	371
写真図版80	G-2号住居跡	372
写真図版81	H-1号住居跡	373
写真図版82	H-2号住居跡	374
写真図版83	I-1号住居跡	375
写真図版84	I-2号住居跡	376
写真図版85	J-1・J-2・M-1号住居跡	377
写真図版86	M-2号住居跡	378
写真図版87	N-1号住居跡	379
写真図版88	N-2号住居跡	380

写真図版89	O-1・O-2号住居跡	381
写真図版90	土坑・溝跡	382
写真図版91	A-4・F-1号住居跡遺物	383
写真図版92	G-1・G-2・H-2号住居跡遺物	384
写真図版93	I-2・J-1・M1・N-1・2・O-1・2号住居跡遺物	385
写真図版94	K-1・M-1・N-1号土坑遺物	386
写真図版95	遺構外遺物：土師器	387
写真図版96	遺構外遺物：須恵器	388
写真図版97	遺構外遺物：土製品・石製品	389
写真図版98	遺構外遺物：縄文土器(1)	390
写真図版99	遺構外遺物：縄文土器(2)	391
写真図版100	遺構外遺物：縄文土器(3)	392
写真図版101	遺構外遺物：縄文土器(4)	393
写真図版102	遺構外遺物：縄文土器(5)	394
写真図版103	遺構外遺物：縄文土器(6)	395
写真図版104	遺構外遺物：縄文土器(7)	396
写真図版105	遺構外遺物：縄文土器(8)	397
写真図版106	遺構外遺物：縄文土器(9)	398
写真図版107	遺構外遺物：縄文土器(10)	399
写真図版108	遺構外遺物：弥生土器(1)	400
写真図版109	遺構外遺物：弥生土器(2)	401
写真図版110	遺構外遺物：弥生土器(3)	402
写真図版111	遺構外遺物：弥生土器(4)	403
写真図版112	遺構外遺物：弥生土器(5)	404
写真図版113	遺構外遺物：弥生土器(6)	405
写真図版114	遺構外遺物：弥生土器(7)	406
写真図版115	遺構外遺物：弥生土器(8)	407
写真図版116	遺構外遺物：弥生土器(9)	408
写真図版117	遺構外遺物：弥生土器(10)	409

写真図版118	遺構外遺物：石器(1)	410
写真図版119	遺構外遺物：石器(2)	411
写真図版120	遺構外遺物：石器(3)	412
写真図版121	遺構外遺物：石器(4)	413
写真図版122	遺構外遺物：石器(5)	414
写真図版123	遺構外遺物：石器(6)	415
写真図版124	遺構外遺物：石器(7)	416
写真図版125	遺構外遺物：石器(8)	417
写真図版126	遺構外遺物：石器(9)	418
写真図版127	遺構外遺物：石器00	419
写真図版128	遺構外遺物：石器00・石製品	420
写真図版129	遺構外遺物：石製品	421
写真図版130	遺構外遺物：石製品・有角石斧	422
写真図版131	遺構外遺物：土製品	423
写真図版132	自然遺物	424



第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

宮古市における都市計画事業は市街化区域の拡大に伴って健全な市街地の造成をはかり、公共の福祉の増進に資することを目的に実施している事業である。

これにかかわる埋蔵文化財蔵地の取り扱いについては宮古市において協議され、数遺跡の発掘調査については宮古市教育委員会と岩手県教育委員会との間で協議がなされた。その間の経過は以下のとおりである。

昭和62年1月8日付け 都第146号 宮古市都市計画課長から岩手県教育長あて
近内地区土地区画整理事業区内に所在する近内館跡(1,625 m²)、近
内中村遺跡(4,900 m²)、菅ノ沢遺跡(2,125 m²)の調査依頼

昭和62年2月2日付け 都第176号 宮古市都市計画課長から岩手県教育長あて
近内地区土地区画整理事業区内の3遺跡を磯鶏地区土地区画整理事
業区内の上村貝塚とする調査遺跡変更の依頼

昭和62年2月6日付け 教文第547号 岩手県教育長から宮古市教育長あて
調査遺跡変更了承の回答

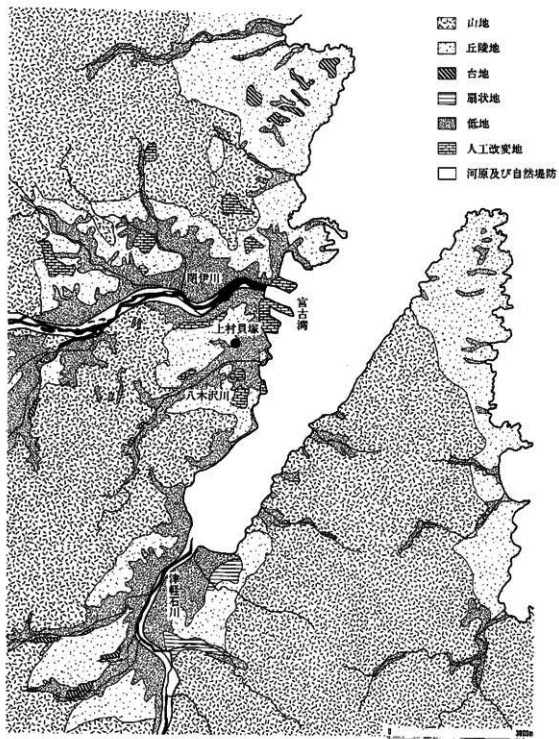
これにより、岩手県教育委員会は上村貝塚の調査を昭和63年度における岩手県文化振興事業団の委託事業とし、当埋蔵文化財センターは昭和62年6月1日付け委託契約により調査に着手することとなったものである。

II 立地と環境

1. 遺跡の位置と地形(第1、2図)

上村貝塚は岩手県宮古市磯鶏第3地割字上村186にあり、東日本旅客鉄道山田線駅の西南500m、国道45号の西側に沿った丘陵に立地する。

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、東側は太平洋をのみ、西側には^{〇〇〇}早池峰山を最高峰とする北上山地の山々が連なる。三陸海岸は宮古市を境にして南部と北部では様相を異にする。宮古市より南は湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸で、北は海岸段丘の発達した隆起海岸で比較的単純な海岸線となる。ところによっては海蝕作用により100mを越える海蝕崖の続く海岸線もある。三陸海岸一帯は山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域の狭い範囲に限定される傾向にある。宮古市の主要な河川は市の中心街である沖積地平野を形成する^{〇〇〇}閉伊川と、宮古湾奥に注ぐ津軽石川である。ほかには上村貝塚の近くを流れる八木沢川、



第2図 地形分類図

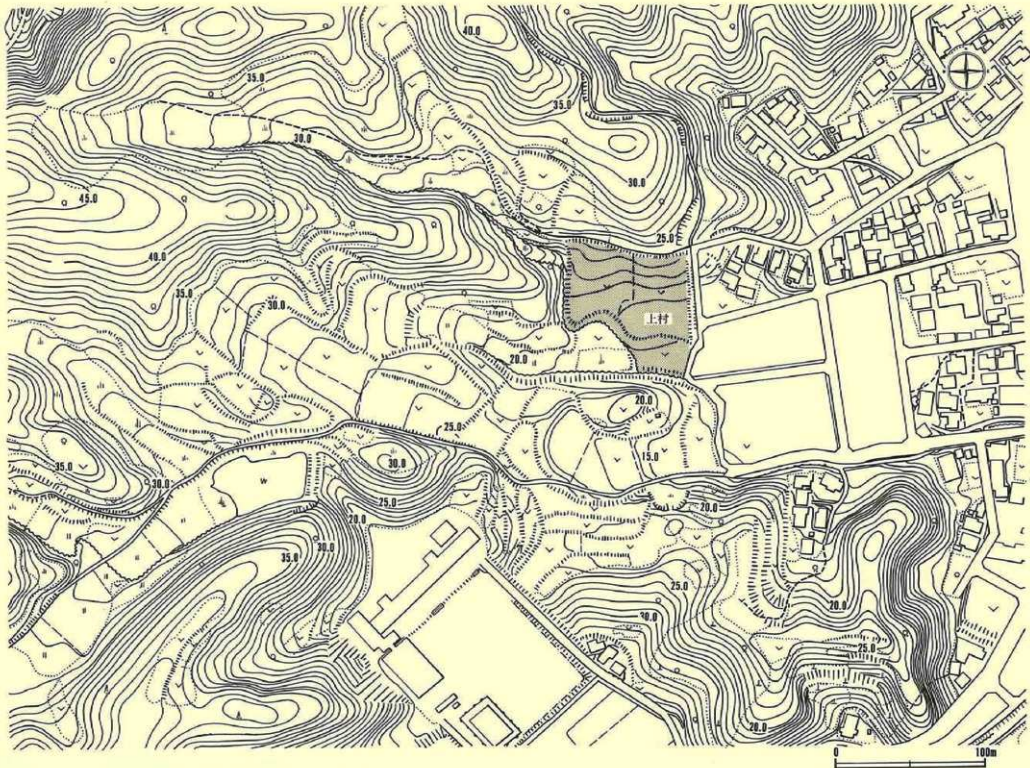
閉伊川の支流長沢川、近内川などがある。市内の低地はこれらの河川の流域に沿って狭く帯状に広がる。津軽石川周辺には氾濫平野が一部広がる。丘陵地は低地の周辺や海岸に沿ってみられ、上村貝塚のある閉伊川南側では長沢川との合流付近や磯鶏地区の西側の低地と山地の間に分布する。海岸沿いでは山地に挟まれて南北に帯状にのびる。山地は丘陵地の後背に広がり、起伏量の少ない小起伏あるいは中起伏となって広がる。標高100～200mの定高性の良好な山地はニュータウンとして人工的に改変されつつある。

2. 遺跡および周辺の地形（第3図）

上村貝塚は宮古湾の西側、磯鶏海岸に注ぐ八木沢川の北側にある小丘陵に立地する。遺跡の南側約500mを八木沢川が東流し低地となっているが、周辺は宅地化が進んでいる。この低地より一段高い所に八木沢面が広がり、低地および海岸をのぞむ緩斜面となっている。調査区内の標高は18～24mである。調査区域は北側と西側からのびる丘陵の先端近くにある。舌状にさらに東側約10mのびていたとおもわれるが、宅地造成により削平されている。南側には小さな沢が東流しており遺跡の境界となっている。現状は畑地であったが北側部分は土地取り作業により、東側は宅地造成の際に攪乱を受けており、本来の地形面が若干改変されている。上村貝塚の範囲は調査区外の西側および北側の斜面を含んでおり、未調査地域の方が原形をよくとどめている。

3. 周辺の遺跡（第4図）

宮古市内では400箇所を越す遺跡が確認されており、その概要は宮古市教育委員会から詳細に報告されている（宮古市教委1983～1986）。上村貝塚からは縄文時代中期、弥生時代、奈良・平安時代の集落が確認されたので、同時代の遺跡を中心に記述する。第4図の遺跡分布図は宮古市教委の刊行物を基に該期の代表的な遺跡を抽出した。当遺跡は貝塚として登録されているが、今回の調査区内では貝層はごく一部で検出されたのみで貝塚の本体からははずれていた。市内の貝塚としては崎山、大付、小沢田、館山、磯鶏蝦夷森、金浜などが知られていたが金浜貝塚は消滅し、現時点では上村も含め6箇所が確認されている。このうち大付を除く貝塚には縄文中期の遺物が出土している。崎山、（鯉ヶ崎）館山貝塚は古くから学界に知られ岸上鎌吉、中嶋吉兵衛らによって各種の遺物が紹介されている。が、いずれも部分的な調査で全様は不明である。磯鶏蝦夷森貝塚からは中期の、大付遺跡（小田野・熊谷1979）からは晩期の人骨が出土している。中期に属する竪穴住居やその他の遺構が検出された遺跡としては上記の貝塚以外ではトロノ木IV（宮古市教委1987）、トロノ木I（武田・高橋1989）、白石（高橋1988）、金浜館（武田1985）などがある。



第3図 遺跡周辺の地形図

弥生時代の遺構が検出されているのは当遺跡のみであるが、遺物が発見されている遺跡として小山根、青猿Ⅰ、長根Ⅰ、早坂、荷竹米山Ⅰ遺跡など10箇所近くが知られている。時期は弥生時代全般にわたっており、立地の共通性は特段見い出せない。遺構について全く不明なため個々の遺跡の性格は明らかにできない。

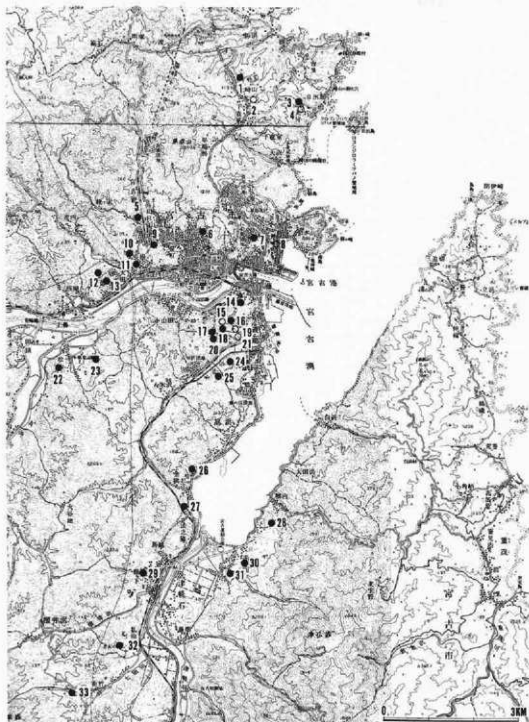
奈良・平安時代は竪穴式住居跡、古墳群、製鉄跡などが検出されている遺跡を主に収録した。閉伊川、津軽石川に沿う後背の丘陵地に立地する遺跡が多く、縄文時代とは分布に変化が認められる。奈良時代の遺構が検出されているのは長根Ⅰ(玉川1989)の8~9世紀の群集墳、竪穴住居跡が検出された泉町狐崎Ⅱ(1981年調査)、藤原上町、酒里遺跡などがある。奈良時代の遺構は現在のところ少ないが分布調査によると当該時期の土師器が多く発見されている。ことに当センターの調査により長根Ⅰ遺跡から28基もの群集墳が発見され、奈良時代の閉伊地方を知る上で貴重な資料がもたらされた。河川の流域には相当数の遺跡が眠っているものとおもわれる。平安時代の遺構が検出されている遺跡は赤前(武田1984)、金浜館(武田1985)、島田Ⅲ・Ⅳ(上野1986)、青猿Ⅰ(鎌田1988)、磯鷗館山(1984~5年調査)などがあり、竪穴住居、製鉄跡、多数の鉄製品などが出土している。時期は不確定であるが鉄滓、フイゴ羽口を出土する遺跡だけでも20数箇所及んでいる。奈良・平安時代の遺跡は平・低地では発見例が少なく、丘陵地で特に狭い尾根筋に古墳、集落が営まれるなど、他地域にみられない特徴を示している。

註1：中嶋吉兵衛が収集した骨角器、自然遺物の一部は岸上鎌吉「Prehistoric Fishing in Japan」東京帝国農科大学紀要2(1909~1911)―小田野哲憲・川村和子：岸上鎌吉「日本先史時代の漁撈」岩手県立博物館研究報告2~3―に収録されている。中嶋自身も「先史遺物帖」(1911)を編集したが未刊のままである。

2：1967年7月、草間俊一元岩手大学教授により緊急調査が実施された。新聞報道によれば、縄文中期(大木8b式)の遺物とともに屈葬人骨が検出された。現在寄生木記念館で保管してある。

引用参考文献

- | | | | |
|------------|-----------|--------------------|------------------|
| 上野 猛 | 1986 | 「中谷地・島田遺跡報告書」 | 宮古市教育委員会 |
| 小田野哲憲・熊谷常正 | 1979 | 「宮古市大付遺跡発掘調査報告書」 | 宮古市教育委員会 |
| 鎌田 祐二 | 1988 | 「青猿Ⅰ遺跡」 | 宮古市埋蔵文化財調査報告書 14 |
| 高橋憲太郎 | 1988 | 「白石遺跡」「崎山遺跡群Ⅱ」 | 15 |
| 〃 | 1989 | 「トロノ木Ⅰ遺跡」 | 17 |
| 武田 将男 | 1984 | 「赤前遺跡群」 | 5 |
| 〃 | 1985 | 「金浜館」 | 7 |
| 宮古市教委 | 1987 | 「崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告」 | 11 |
| 〃 | 1983~1986 | 「遺跡分布調査報告書 1~4」 | 3、4、6、8 |
| 〃 | 1986 | 「宮古市遺跡分布図」 | 9 |



第 4 図 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代・遺構・遺物	所在地
1	トロノ木Ⅰ	縄文時代中期竪穴住居、近世雑物	嶋山第3地割トロノ木
2	嶋山貝塚	縄文時代早・前・中期、貝層	嶋山第1地割千束長根、第2地割道ノ下
3	わたのは	縄文時代前期・後期土器、石剣	崎嶮ヶ崎第16地割塩次
4	大付	縄文時代前期・後期・晩期、人骨	崎嶮ヶ崎第15地割大付
5	山口駒込Ⅰ	縄文時代早期末～後期、土師器・須恵器	山口第9地割駒込
6	小沢	縄文時代中期・後期土器、土偶、土師器・須恵器	小沢二丁目
7	小山根	縄文時代土器、弥生時代土器、土師器	中屋団地、愛宕一丁目
8	嶋山貝塚	縄文時代早・前・中・後期、自然遺物堆積層	鎌ヶ崎下町2-33
9	泉町狐崎Ⅱ	奈良・平安時代土器、鉄器	山口第6地割狐崎、泉町
10	青猿Ⅱ	弥生式土器、土師器、竪穴住居跡	千徳第3地割青猿
11	長根Ⅰ	群集墳	千徳第2地割長根、第3地割青猿
12	西ヶ岡地区	竪穴住居	西ヶ岡
13	千徳城遺跡群	城館遺跡(千徳城・堀合館)、土師器	千徳第18地割神田沢
14	藤原上町Ⅱ	奈良時代末～平安時代初頭住居跡	藤原上町
15	小沢田	縄文時代中期、土師器・須恵器	磯崎第3地割上村
16	早坂	縄文時代早期、弥生、土師器・須恵器	//
17	上村Ⅲ	縄文時代中期土器、土師器	//
18	上村Ⅱ	縄文時代中期土器、土師器	//
19	上村貝塚	縄文時代中期、弥生時代、住居跡、貝層	//
20	上村Ⅳ	縄文時代中期土器、土師器	//
21	磯崎細夷森貝塚	縄文時代中期、土師器・須恵器	磯崎第3地割上村、第6地割竹洞
22	松山館	城館遺跡、須恵器、煎手刀	田銀5地割殿内、松山13地割大久保沢
23	松山大地田沢	竪穴住居跡、土師器	松山第7地割大地田沢
24	磯崎館山	平安集落、城館	磯崎第11地割岸ノ前
25	島田	平安時代集落	八木沢第4地割島田
26	高浜Ⅵ地神	縄文時代中期土器	高浜第6地割下地神、地神
27	金浜Ⅲ	縄文時代土器、土師器	金浜第4地割鶴ヶ崎
28	小堀内Ⅰ	縄文前～晩期、弥生、奈良時代	赤前第14地割小堀内
29	沼里	縄文時代後期土器、奈良時代住居跡	津軽石第4地割大森、第6地割沼里
30	赤前Ⅷ八枚田	縄文早・中期、平安時代住居跡、羽口	赤前第11地割八枚田
31	赤前Ⅲ	縄文早・中期、平安時代住居跡、鉄滓	赤前第7地割御蔵、10山崎、11八枚田
32	弘川Ⅰ	縄文時代前・中・晩期、土師器	津軽石第14地割弘川
33	荷竹米山Ⅰ	縄文時代中・後期、弥生、土師器・須恵器	津軽石第16地割荷竹日向、米山

III 調査・整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査対象区は南北 55 m、東西 50 m のほぼ正方形であるので 10 m 単位の大グリットを組み、必要に応じてその中を 4 分割し小グリットを設けた。グリットの名称は西から東に向かって A から始め Y まで 25 グリットとした。グリットの設定、杭打ちは調査以前に宮古市都市計画課の職員によってなされていた。A グリット●地点と E グリット●地点の成果値は次のとおりである。

A グリット X=-840.003 Y=690.004

E グリット X=-840.003 Y=740.004

A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

グリット配置図

発見された遺構は住居跡、土塙、溝などであり、種別名

は略号化せずグリット名を頭に A-1 号住、B-1 号土塙のように命名し、同一グリットで複数の遺構がある場合は数字を大きくした。複数のグリットにかかる遺構はアルファベットの若い方を用いた。F・G グリットにかかる住居を頭初は FG-1 号住としたが、後に F-4 号住と改名した。

(2) 掘掘り・遺構検出

北側部分は表土がほとんど削平されていたので、全て人手で掘り下げ遺構検出を行った。中段より南側は各グリットごとに 2 m 幅のトレンチを入れ状況把握につとめた。その結果、南側は 1 m 以上の黒色土無遺物層を確認し、この部分は重機で撤去した。遺構検出は北側の高い所で地山がすでに出ており、表土クリーニングの段階で検出できた。中段より南では黒色土の中に遺構の掘込みのあるものも多く、炉を検出してから遺構の輪郭を把握せざるを得なかった。その結果、埋土土層断面をとれなかった遺構もある。検出された遺構は原則として住居跡の場合は 4 分法、土塙類は 2 分法、溝跡は適宜土層観察用の土層ベルトを残して埋土を除去した。

(3) 実測・写真撮影

平面実測はグリット軸に合わせた 1 m メッシュを基本とした。住居跡の場合は $\frac{1}{6}$ 、土塙類や炉は適宜 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{3}$ の縮尺を用いた。写真撮影は 35 mm モノクロとカラースライド各 1 台、6×7 cm モノクロ 1 台を使用。実際の撮影は、各種の埋土堆積状況や断面、遺物の出土状態、完掘全景などについて行ない、調査がほぼ終了する段階でセスナ機による空中写真を撮影した。

2. 室内整理

野外調査で得られた実測図・写真・遺物などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理、整理し報告書作成の基礎にするとともに、資料化を行った。

各実測図は遺構ごとに分類し、原図点検の上、必要なものについては第二原図を作成しトレースを行った。撮影されたフィルムは、ネガアルバムにベタ焼写真と一組にして収納した。カラスライドはスライドファイルに、撮影順に収納した。遺物は現地および当所整理室で水洗いをした後出土地点等を注記した。その後、各出土地点、層位毎に仕分けを行い復元作業に入った。遺物実測図は実大で実測し、トレースは弥生土器・石器は実大で、縄文土器は縮小して図化した。人骨、自然遺物、石材の分析については外部の専門家に鑑定を依頼した。

報告書は以上の作業を得て編集した。各遺構・遺物図面の体裁や細部については例言に記してある。



第5図 遺構配置図

1/400

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡 (第5図)

A-1号住居跡 (第6図、写真図版3)

〈検出状況〉遺跡の西側AグリットのII層褐色土中でプランを検出した。北側でA-8号住、東側でA-2号住と重複している。A-1住はA-2号住よりは床面レベルが下であり、A-2号住よりは古い。A-1住とA-8住との新旧関係は不明である。

〈形状・規模〉傾斜地のため南側の壁は検出できなかったが、径3.8m前後の円形プランと推定される。当遺跡では小型の部類に属する。

〈埋土〉8層に分類される。床面と推定した部分より炉石のレベルが10cmほど高く、あるいは5-6層が床面であった可能性もあるが、粘土質ではなく真砂土質で炭化物も含んでおり、貼床とする根拠には乏しい。自然堆積と考えられる。この住居周辺では黒色土は見られない。

〈壁・床面〉傾斜地のため西南と南側の壁は検出できなかった。検出できた部分はゆるやかな傾斜で外反する。床は北側部分で粘土を踏み堅めた面が認められたが、南側では確認できなかった。流失した可能性が高い。

〈柱穴〉7本検出された。主柱穴は $P_1 \sim P_4$ と推定され台形状となる。東壁際の $P_{6,7}$ は入口部分に関する柱穴の可能性がある。

〈炉〉ほぼ中央とおもわれる個所に径50cmの円形石囲炉が検出された。東南部分の石は検出されなかったが、土層断面から判断すると2~3個の礫があったものと推定される。1個を除いて風化した花崗岩で構成されている。炉内には焼土層はなく、炭化物・焼土粒が多くみられた。

遺物 (第7~10図、写真図版22・23)

〈出土状況〉埋土・床面・炉・床下から出土している。床下とした遺物は炉のレベルより下の4~7層からのものを指す。

〈土器〉1~3床面出土。1、2は小形の鉢で1は細い沈線、2は太い沈線で渦巻文。3は口唇部がやや肥厚する深鉢。4、5は炉内から出土した小形鉢で4は多軸捺糸文で口縁部を磨いている。6~27は床面より下層とおもわれる層から出土した土器である。6は太い沈線による渦巻を中心に三角形を描き、沈線間に刺突を巡らす。刺突文は6のほかに7の先端が丸い工具を斜めに、9・13は半載竹管で前者は沈線もそれによっている。21は貼付帯に刻みが入る。原体は11の複数段あるいは12の口唇部押圧文や、結節をもつ縄文、縦及び横の羽状縄文、木目状捺糸文、網目状捺糸文などがある(10、12~21)。口縁部は平縁、小波状、山形などがある。28~45は埋

土出土。29・31～34 は胎土に繊維を含む。29 は不整撚糸文、31・33・34 は撚糸文、32 は不整の綾結文か。35・36 は頸部から上に波状・刻目状・直線による沈線文様が構成される。38 は口縁部にハ字状の刺突、39 は円形の刺突を6段に巡らす。40 以下は粗製の深鉢で体部は撚糸文、結節縄文、縄文である。47 の底部は網代痕の上を磨いたもの。

〈石器〉石鏃、尖頭器、石斧、不定形石器などである。48～51 は石鏃で4点とも無茎、50・51 は浅い抉り入り。52～54 は尖頭器として扱った。槍先と断定するには形がやや小さいが、刺突具としての機能をもつ一群である。55～60 は剝片及びその一部に刃部をもつ不定形の石器。61 は磨石、62 は下辺の両端に刃部がつくもの。63 は石核であるが規則的な剝離は認められない。64～67 はつまみのある石匙で縦形・横形各2点づつで、65 はつまみ欠損。68～72 は縦長の剝片先端部の片面、両面あるいは一部に刃をもつ一群で、削器としての機能をもつもの。73 は両側を調整し先端を三角状に鋭く造り出している。74～77 は剝片の一部分に刃をもつもの。78 は小形の片刃石斧で、偏平な蹠の片面に自然面を残すのを特徴とする。形状は楕円形に近く背面の一部に調整剝離がある。79 はバチ形に開く両面加工の石ペラで、削器状に背が厚い造りとなっている。

〈時期〉埋土及び床下からは前期・中期に属する土器が出土しているが、床面及び炉の土器は大木8b式期におさまるものであり、縄文時代中期の堅穴である。

A-2号住居跡（第11図、写真図版3）

〈検出状況〉A-1号住居検出の際に西側の壁の一部を確認した。北側はA-5号、東側はA-6号住と重複しており、南側は斜面のため流失している。A-6号住との新旧関係は不明であるが、A-1号住よりは床面レベルが上であり、A-5号住の床を載ってつくられており、これらの中では最も新しい時期である。

〈形状・規模〉一辺3.5m前後の隅丸方形形状のプランと推定される。

〈埋土〉北側の壁付近のみで堆積土が残されていた。4層に分類。2層は上からの流れ込みで、多くの土器片及び粘土ブロックを含む。自然堆積である。

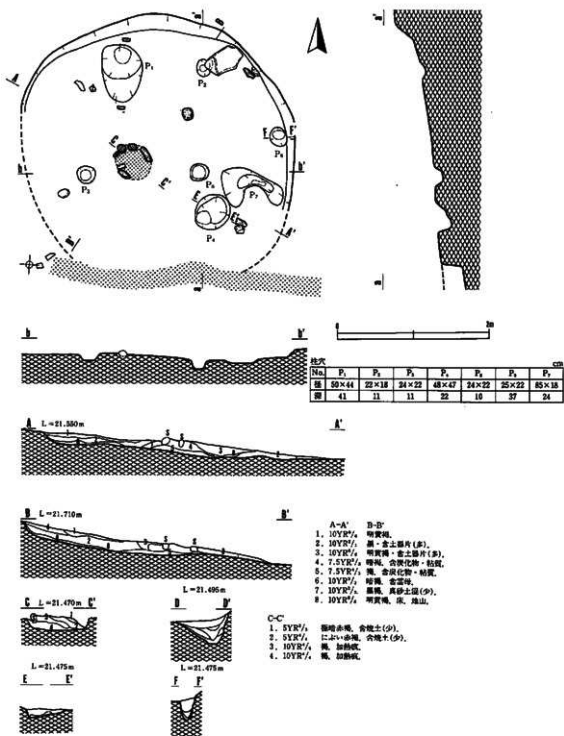
〈壁・床面〉壁は北側の一辺を検出したのみである。ゆるやかに外傾する。床は黒褐色土を堅く踏み込んでいる。

〈柱穴〉長径25cm、深さ18cmの1個のみ検出された。

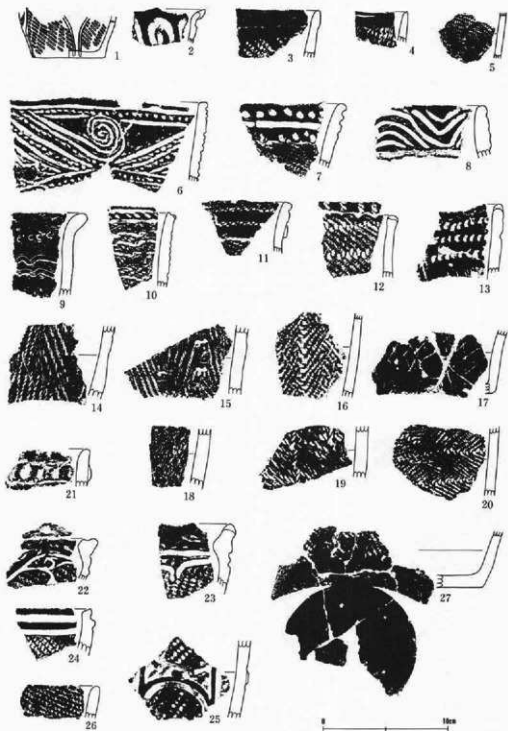
〈炉〉不明。中央と推定される部分に炭化物の混る、周辺に凹凸のある面がある。おそらく炉のあった痕跡と推定される。

遺物（第12図、写真図版24・26）

〈出土状況〉床及び埋土から出土している。

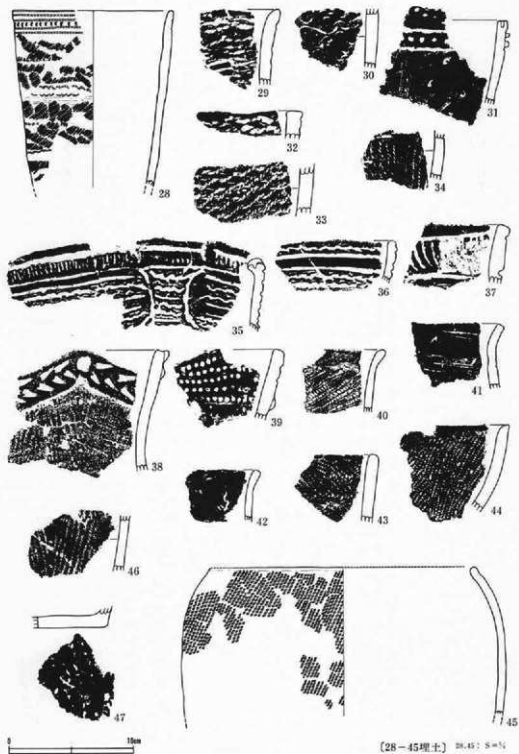


第6图 A-1号住居跡

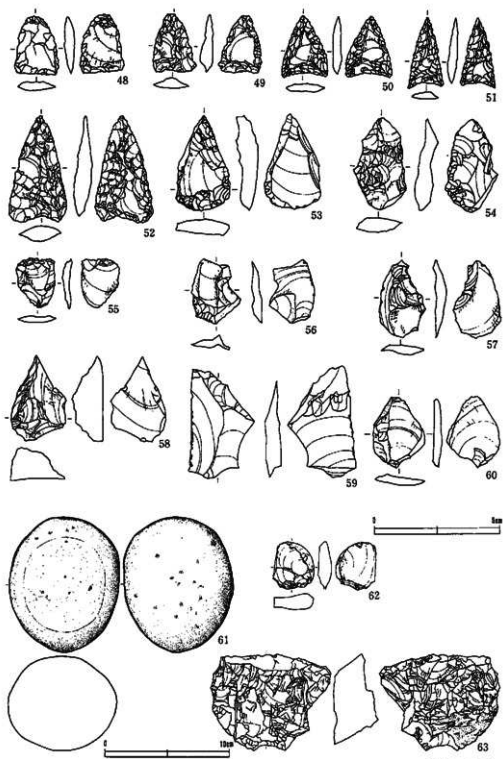


(1-3床 4-5房 6-27床下)

第7图 A-1号住居跡遺物(1)

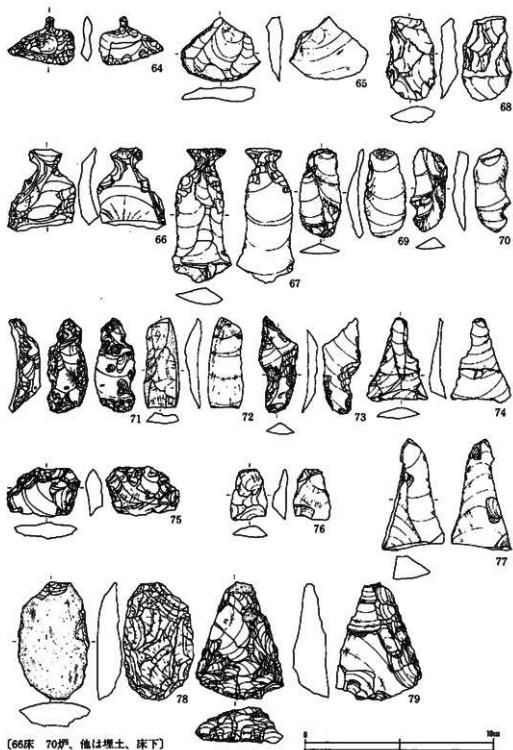


第8图 A-1号住居跡遺物(2)

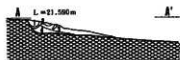
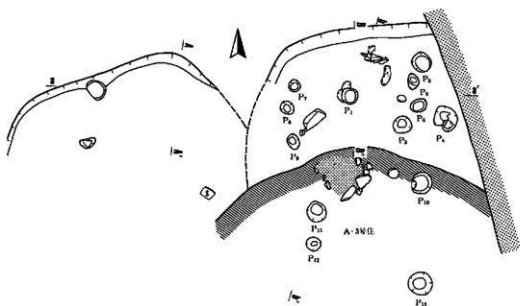


第9图 A-1号住居跡遺物(3)

〔埋土、床下〕



第10図 A-1号住居跡遺物(4)



A-A'

1. 10YR²/, 黄褐, 金属化物(多)
2. 10YR²/, 黄
3. 10YR²/, 暗褐, 粘土ブロック層
4. 10YR²/, 黄

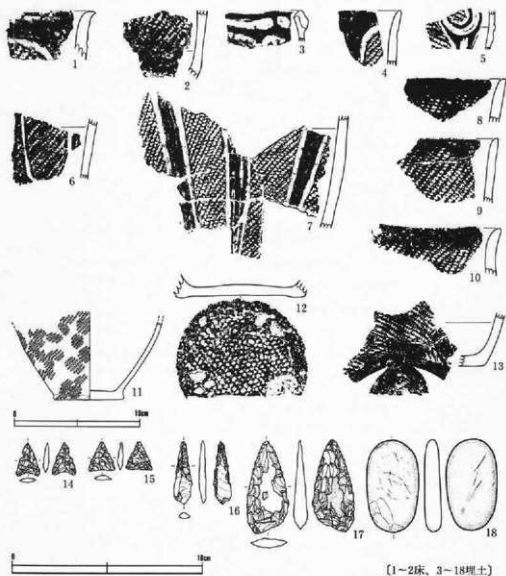
B-B'

1. 10YR²/, 黄, 粘土ブロック層
2. 10YR²/, 暗褐, 金属化物
3. 10YR²/, 黄, 真砂土層
4. 10YR²/, 黄, 真砂土層

柱穴

柱穴	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径	25×24	31×29	30×29	37×29	23×18	28×20	19×19	24×20	25×19	33×32	32×32	23×22	30×36
深	44	43	18	14	16	10	7	15	8	7	10	18	19

第11図 A-2号住居跡(左)・A-6号住居跡(右)



第12图 A-2号住居遺物

〈土器〉床面からは2片が出土。1は深鉢の口縁部で、太い沈線による∩字状もしくは楕円状の文様をもつ。2は深鉢下半部で1と同一個体の可能性が高い。埋土出土の土器もすべて深鉢の破片で、太い沈線による渦巻文、楕円形文、懸垂文で、粗製土器は口縁部ミガキで頸部から下は単節縄文(LR、RL)である。3と5は隆縁。

〈石器〉5点出土。14、15は小形の無茎石鏃、16は断面三角形の鏃で先端部は摩耗している。17は尖頭器で長さ4.7cm、断面は偏平となり基部は片翼状である。18は偏平な楕円形石製品で、表裏にごく細く鋭い擦痕があり両側面は磨かれている。石材は細砂質凝灰岩。

〈時期〉床面出土の土器の特徴は大木9式であり、縄文時代中期に属する。

A-3号住居跡(第13図、写真図版4)

〈検出状況〉表土を削いだ段階で石囲炉を検出した。北側壁にかかる炉石はA-5号住の炉であり、A-3号住の壁中にA-5号住の粘土層が見えている。北側はA-5、A-6号住と重複し、東側は土取りのため削平され、南側は斜面で流出している。A-3住はA-5住の床を載ってつくられ、かつ、A-6住を載ってつくられており、3棟の中では最も新しい時期に属する。

〈形状・規模〉ほぼ円形を呈するものと考えられる。径は推定で約5.5m。

〈埋土〉南側は粗掘りの段階で削平し図化できなかった。2層に多くの土器を含んでいる。北側からの自然堆積。北側壁部分にA-5号住の炉石がある。この炉は土圧を受けて斜めにかしんでいる。A-6号住とA-3号住では後者が新しく、A-6号住はA-5号住の上に構築されており、炉近くのA-5号住の堆積土をA-3号住の壁が載っており、A-3号住が最も新しい住居となる。A-5号住の炉は壁際に壊されずに残ったものであろう。

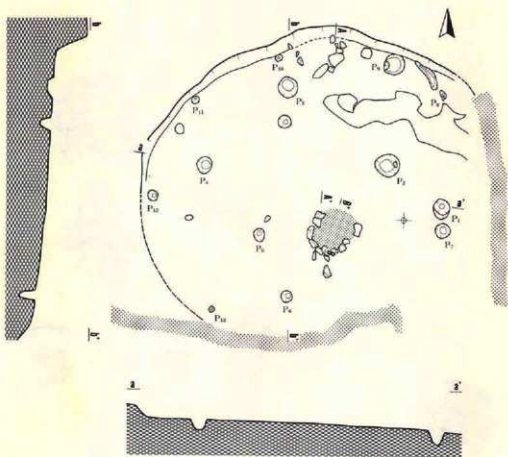
〈壁・床面〉壁は北側部分にのみ残存し、やや外傾しており深い箇所50cmをはかる。床は北東部分と両側の一部分に最厚層10cmの貼床が認められた。粘土は黄褐色と灰白色の2種類を用いている。炉より南側は床未検出。

〈柱穴〉13個検出された。支柱穴は炉の周辺にあるP₁~P₆で、4あるいは6本の構成であったと考えられる。東南部分は不明であるが、存在したものと推定される。P₈~P₁₃はほぼ等間隔にある壁柱穴。

〈炉〉ほぼ中央とおもわれる位置に径70cmの石囲炉を検出した。北側の石は確認できなかったが、周辺に10~20cmの礫が散在しており、これらも炉の構成と推定される。掘り方はほぼ垂直であり一部に粘土が認められた(炉断面5層)。焼土はそれほど発達していないが、炭化物・灰は2層に多く見られた。

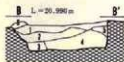
遺物(第14、15、16図、写真図版25、26)

〈出土状況〉床面、炉内及び埋土から出土している。



A-A'

- 1. 10YR^{2/6} におい黄緑, 器具・骨小片, 5. 10YR^{2/6}, 明黄緑,
- 2. 10YR^{2/6} におい黄緑, 器具・骨小片, 6. 2.5YR^{7/1}, 暗赤褐, 焼土,
- 3. 10YR^{2/6} におい黄緑, 4. 10YR^{2/6}, 暗褐, 粘性, 7. 10YR^{2/6}, 明黄緑・紅灰(粘土ブロック),



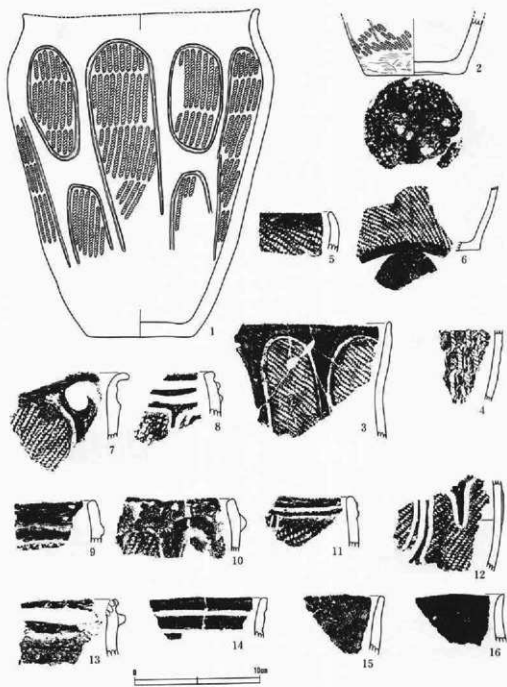
B-B'

- 1. 2.5YR^{7/1}, 暗赤褐, 焼土,
- 2. 5YR^{7/1}, 暗赤褐, 焼土粒,
- 3. 10YR^{2/6}, 暗褐,
- 4. 10YR^{2/6}, 暗褐,
- 5. 10YR^{2/6}, 灰, 粘土ブロック状,



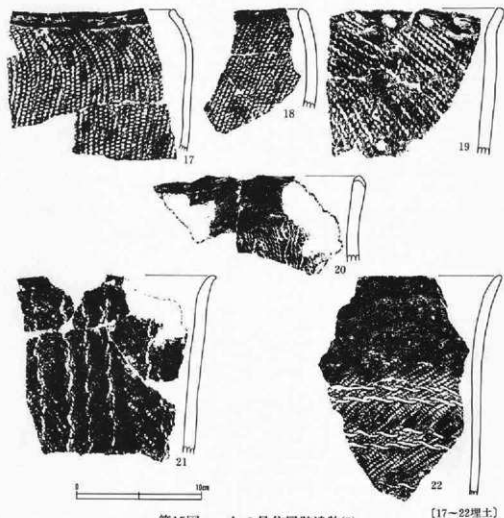
柱穴														cm
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径	34×27	38×37	34×31	28×25	22×20	18×18	24×22	16×8	16×9	13×10	13×12	18×18	18×9	
深	25	19	11	17	22	28	22	12	18	5	10	9	14	

第13図 A-3号住居跡



[1-4床、5-6炉、7-16埋土]

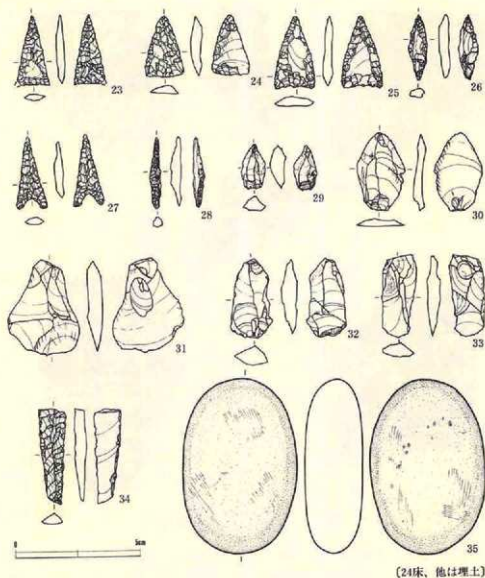
第14图 A-3号住居跡遺物(1)



第15図 A-3号住居跡遺物(2)

[17~22埋土]

〈土器〉床面からは1~4が出土。1は炉の北側で押しつぶされた形で出土。底部から胴部にかけて欠損、太い沈線と楕円形文と卍字状文のくり返し、外はすり消している。丁寧なつくりで熱は受けていない。2・3も同様の器形、モチーフと推定される。4は縦走する燃糸文で混入の可能性ある。炉の埋土上層より6の小型鉢と5の粗製鉢の口縁部が出土したが、2点とも過熱痕はない。7~22は埋土出土。7~10、22が下部からの出土。精製土器は14の平行沈線文を除いて隆線で施文されている。7は渦巻文又は蔽手状文が口縁部に上っており地文は複節。10は卍字の頂部を強く盛り上げ肉彫状としている。9・13は頸部に太い隆線をめぐらす。大形深鉢には平縁で内傾する17・18、外傾する21・22、波状を呈する19・20の3種がある。17は複節、19は波状の部分を表と裏から指で押圧して断面も波状につくっている。20は口縁部を削



(24床、他は埋土)

第16図 A-3号住居跡遺物(3)

り取っただけの波状口縁で、頸部無文、体部燃糸文。21は口縁部小さく外反し、体部は縦位の結節回転文で結節間の一部を磨いている。22は頸部を磨き体部は横位の結節回転文。21を除いて内面はよく磨かれている。

〈石器〉13点出土。23～27は石鏃で26は有茎で左右非対象、27は深い抉りが入る。他は無茎、28の石鏃は先端部が光沢あり使用痕が明瞭である。29～33は剝片で、一部に微細な調整剝

離がみられるものと、調整がないものがある。34は断面三角形で裏面の一方に微細な剝離があり、先端部は嘴状に湾曲し、上部は折断されている。使用度は不明であるが、鏝のような機能と考えられる。35は両面に擦痕の走る擦石。

〈時期〉床面、炉出土の土器は大木9式で縄文時代中期に属する。

A-5号住居跡（第17、18図、写真図版5～7）

〈検出状況〉調査区北側A-4号住の精査中に検出された。北西部分でA-4住に載られ、東側でB-2住の一部が上に乗っており、南側はA-2住に、西側はB-2住に載られている。3号炉がA-3住の壁にかかっており、A-5住の上にA-6住が築かれている。これらの住居の中ではA-5号住が最も古い時期に属する。

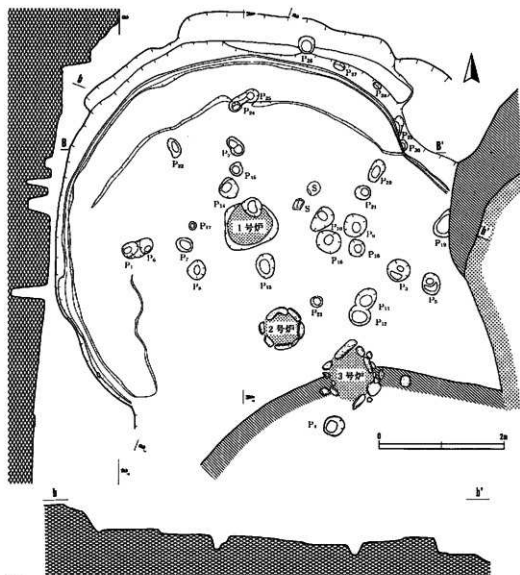
〈形状・規模〉建替えの可能性が強い。床面で一部途切れてはいはいるが数cmのレベル差でテラス状の段差がついている。この部分はおそらく建替前の周溝と考えられる。これを壁の周溝と見なすと3.7m前後の円形プランとなる。一段高いテラス状の部分を拡張とみなすと円形もしくは楕円形プランとなり、壁の上場で短径7m、下場で6mをはかる。北側の壁の中段に幅20cm前後の平場と柱穴(P26～P30)が残っている。壁には周溝がめぐる。地表が崩壊しやすい風化した花崗岩のため、このような施設がつけられたものと推定される。

〈埋土〉各住居跡中最も厚く、かつ良好な状態で観察できた。最も深い所で90cmをはかる。各層から多くの遺物が出土しているが、より北側の壁に近い3、8、9、11は無遺物層である。北側が高く、南側が低いので間欠的に土砂が流れ込み互層となった状況を示している。無遺物層、遺物の少ない層は自然堆積であるが、遺物の多い層、特に2、4、13、14層は多量の土器、石器類、焼土が廃棄されている。4層の石棒と櫛の廃棄は注目される。床面に近い16、17層からの遺物は少ない。

〈壁・床〉南側は重複のため不明。北側での壁高は検出面から95cm、西と東側は50cmと深く、ゆるやかに外傾している。北側の壁の中段に平直面及び柱穴が数本ある。床は全面貼床であったとおもわれるが、東側の一部で消失している。テラス状の面も一段低い面も同一粘土で貼られている。

〈柱穴〉大小30個が検出された。建替前の主柱穴はP₁～P₄と推定される。建替後はP₁～P₆、P₂₅あたりと推定される。P₁とP₄、P₂₄とP₂₅は載り合っており、これらが建替に関連する柱穴とおもわれる。北側壁のP₂₆～P₃₀は壁を支えるための柱であろう。50cm以上の深さのもの数個あるが配列は一定していない。

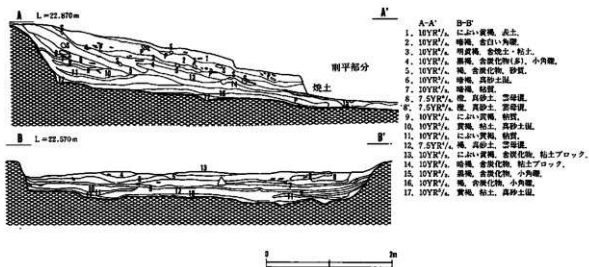
〈炉〉3基検出された。1号炉は地床炉で、掘り方は確認できたが石があったかどうかは炉壁が脆く確認できなかった。径90cm×50cm。最も古い炉とおもわれ、拡張前の床のほぼ中央に



柱穴															
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径	26×30	34×20	36×36	29×28	33×30	34×28	28×24	36×27	37×36	44×29	35×32	25×32	38×30	29×28	22×18
深	21	22	59	10	31	56	39	61	50	45	35	14	11	32	42
No.	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀
径	36×37	18×10	26×25	(48×32)	38×29	24×23	22×17	18×16	25×18	25×24	27×27	18×13	14×10	30×15	18×10
深	17	4	16	27	24	18	14	24	20	39	27	16	10	33	15

第17図 A-5号住居跡(1)

位置する。北側にある小ピットは後述する埋壺の墳であり、炉との関連はない。2号炉は1号炉の南側にあり、7個の石で円形に構築されている。径75cm×70cm。焼土は南側部分に厚く堆積し、北側は焼土に炭化物が多く混じる。3号炉は2号炉の東南に位置する。6号住を埋めてつくったためか、6号住の壁より南側にある石が沈下しており、北端と南端の石では26cmのレベ



第18図 A-5号住居跡(2)

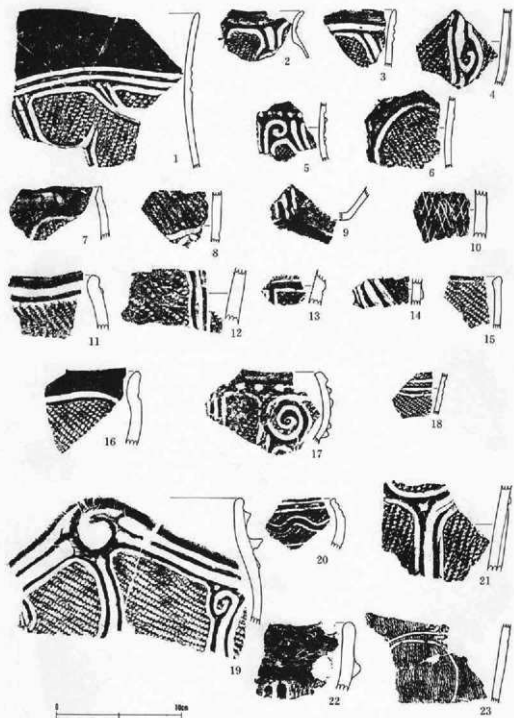
ル差がある。それによって炉内の焼土も両側に傾斜している。径90cm×80cm。2号炉と3号炉の新旧関係は不明であるが両者とも拡張後とおもわれる。位置的には2号炉が楕円形プランのほぼ中央に位置する。ほかに、1号炉の北西と2号炉の西南にあたる部分に50×70cmの範囲で焼土ブロックの踏み固められた面が検出された。

遺物(第19~41図、写真図版27~42)

〈出土状況〉床、柱穴内及び無置物層を除く各埋土層から多量に出土した。土器・石器のほかに土・石製品も多い。

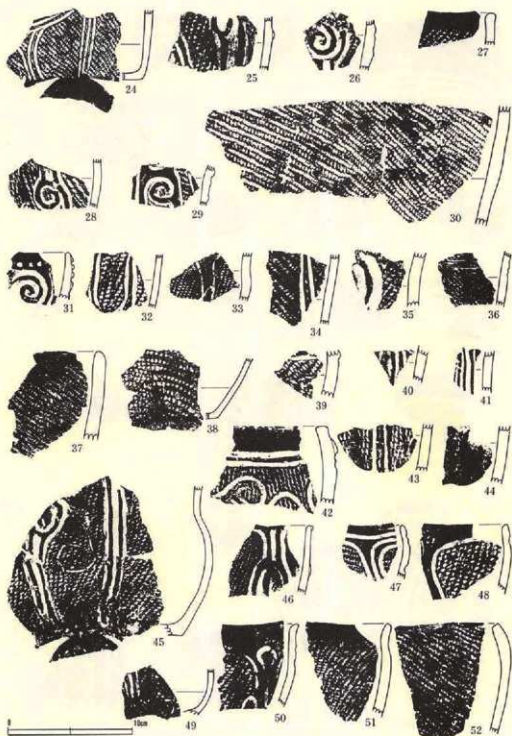
〈土器〉1~10、53が床面出土。1と53は大きな波状口縁で外反し器壁は薄い。1は沈線、53は隆線による施文で縄文は複節。2~5、9は隆線による施文。6~7は沈線による。10は網目状撚糸文の粗製深鉢。床面からの完形品は無い。11~15は柱穴内出土。16・17は17層出土。16は太い沈線で、17は隆線による渦巻文で口縁部に刺突文がめぐる。18は16層出土で、地文の上から施文した小型鉢。19~30は12層出土。23を除いて隆線で施文されている。20は小さなキャリバー形、22はゆるやかな波状口縁で頸部に太い隆線がめぐり地文は撚糸文。27は小型の、30は大形の粗製深鉢。31~36、55は10層出土。55は小型鉢、31は渦巻文と刺突文、32はΠ字文、隆線、沈線の両者を含む。37、38は11層出土の粗製深鉢の口縁部と胴下半部。39~44は9~7層のいずれも深鉢で44は綾絡文がかすかに残る。45~52は5層出土。45は隆線の文様間に細い沈線による渦巻(蕨手状)文が補助的に入る。あるいは施文のためのデッサンの段階のモチーフがそのまま残ったものか。46は口唇部から直接隆線による施文。49は器形・文様と

も45を小形にしたもの。粗製深鉢には51の外傾するものと52の内傾するものがある。56~148は13層出土の土器で本住居で最も多量な遺物が出土した層である。器種はすべて大小の差はあるが深鉢である。56や62のように胴下半に最大径のあるものや、57、60のように口縁部が内径するもの、61のように外傾するもの、59のように橋状の突起をもつものなど各種がある。56は右巻と左巻の渦巻で、右巻のものは一段と盛り上がっており正面を意識したような施文である。59は地文のない小形の鉢で4個の橋状突起がつくと推定されるが、図正面の橋状は縦に貫通、左側は横に貫通している。60は頸部に二段の刺突列がめぐる。61は頸部文様帯が楕円形から円形に変化し、間に馬蹄形の沈線文が付される。63は無節の縄文。72~76はキャリパー形と推定されるもので76の内面は丹塗り。79は頸部が内傾して反る大形の深鉢。83は渦巻文が横に展開。88・90~92は器壁の厚い大形の深鉢で92は燃糸文。93は隆線の上下からスリットを入れ交互刺突状となる。94~97は口縁及び直下に刺突をめぐらす例で、97は縦のスリット状となる。94は内外面とも丹塗り。108~111はやや小形の鉢で沈線も細く、110、111は地文を欠く。65~70、112~143は粗製深鉢。口縁部がゆるやかに外反するもの、68や115のように短く外反するもの、直立気味のもの、内傾するものなどがある。地文は単節・複節縄文、綾絡文、条痕文、無文があり燃糸文は少ない。133は条が横走する。底部はミガキが多いが71は笹葉状の痕跡がある。145は網代痕の上からミガキ。149~160は14・15層出土。149は横に太い隆線と渦巻文、150は山形口縁に蕨手状文、151は平縁で \cap 字状文の繰り返し。152も同様とおもわれる。154は大波状口縁の深鉢で縄文を密に施文する。155~157は小形鉢の底部。160は網代痕の上からミガキ。161~164は14層内の焼土内出土。161、162は隆線による施文。163、164は小形鉢。165~210は4層出土。165~172は \cap 字文または \cap 字状文をモチーフとする一群。165は蕨手状文を口縁頂部に付し、167、170、172は楕円文を、169は楕円、 \cap 字文をさらに \cap 字文が覆う。171はU字と \cap 字の組み合わせ。口縁部は167を除いて4個の波状口縁。地文は単節・複節の縄文で充填縄文はみられず磨消手法を用いている。173・174は小形鉢で前者は荒い条痕文、後者は複節縄文。176は木葉痕の底部。177~189、192は隆線施文の一群。178は無節、183は瘤状突起、189は橋状突起で内外面丹塗り。192は蕨手状文のみ隆線。190~201は沈線施文の一群。191は \cap 字あるいは楕円文の中に太い縦二列の刺突文、194は蕨手状文の末端が165などのように伸びずに短くなっている。192、195は極めて細い沈線による施文。縄文はおそらく充填縄文とおもわれる。203~210は粗製土器。203は波状口縁の小形、204は折返口縁で付加条をもつ原体、205は隆線直下に焼成前の穿孔、無文。211~225は3層下部の石棒・礫群付近から出土した一群。211~214、225は円形文、 \cap 字状文の一群であるが、すべて太い沈線によっており蕨手状文は無いようである。218の底部は網代痕をみがいており内面は丹塗り。粗製土器は口縁部、肩が内傾するものが多い。底部はいずれもヘラミガキ。220は2個の



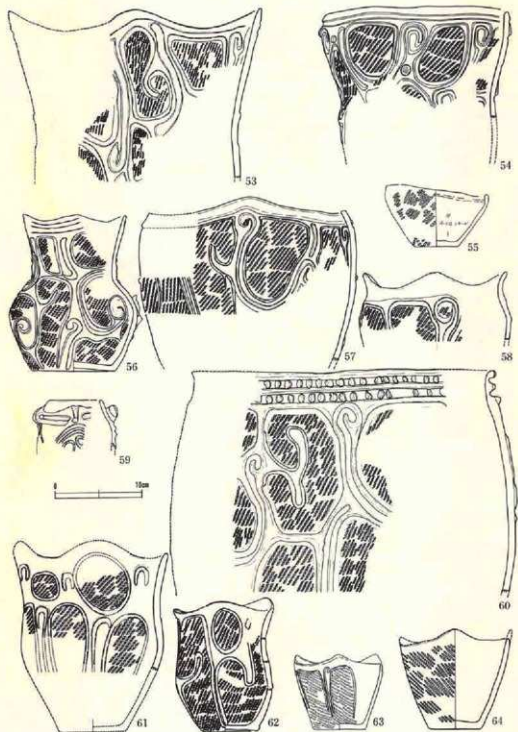
[1~10床、11~15柱穴、16~17·17層、18·16層、19~23·12層]

第19图 A-5号住居跡遺物(1)



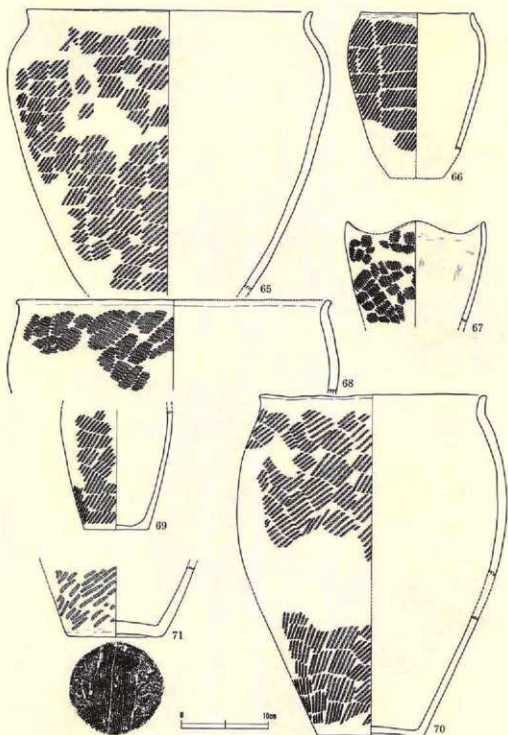
[24-30·12層 31-36·10層 37-38·11層 39-44·9-7層 45-52·5層]

第20圖 A-5号住居跡遺物(2)



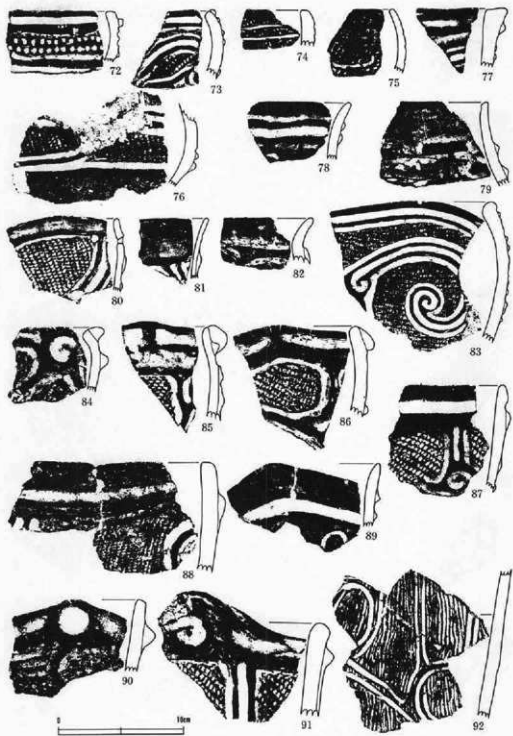
[53床、54·12層、55·10層、56-64·13層]

第21图 A-5号住居跡遺物(3)



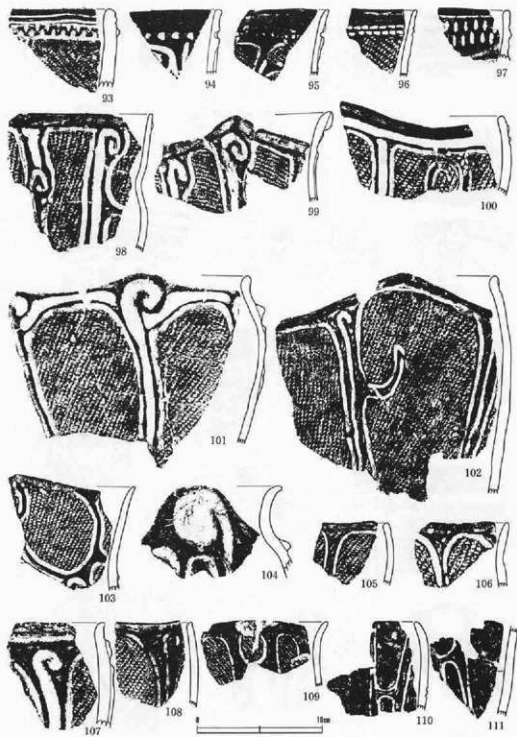
第22図 A-5号住居跡遺物(4)

[65-71・13層]



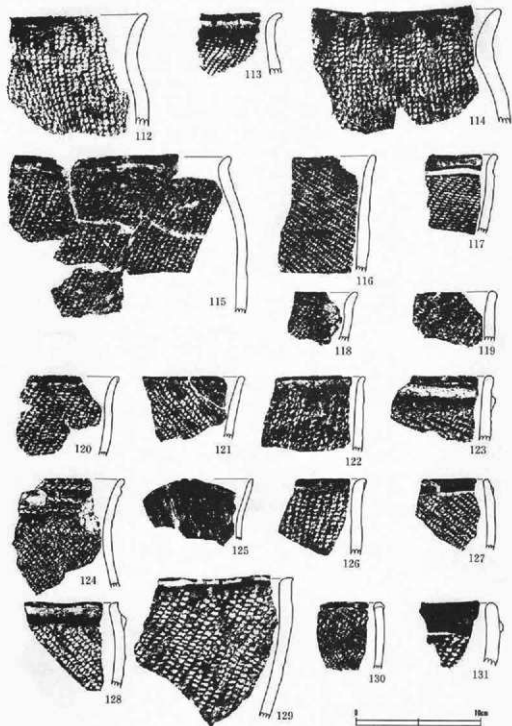
[72-92·13層]

第23圖 A-5号住居跡遺物(5)



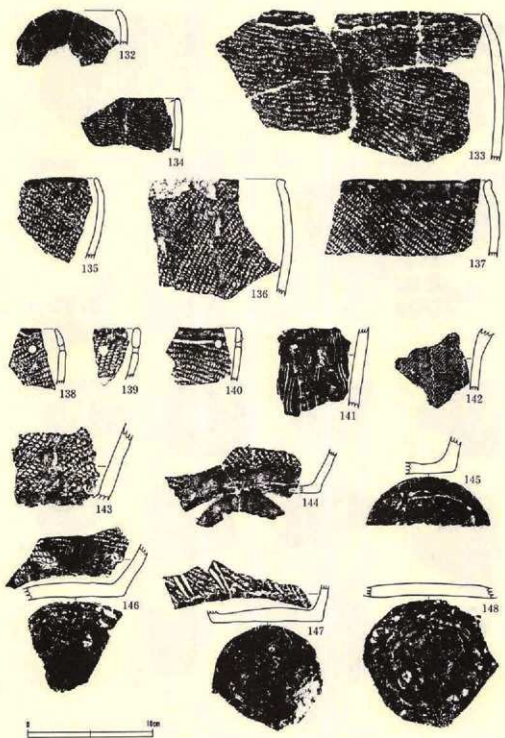
[93-111·13層]

第24図 A-5号住居跡遺物(6)



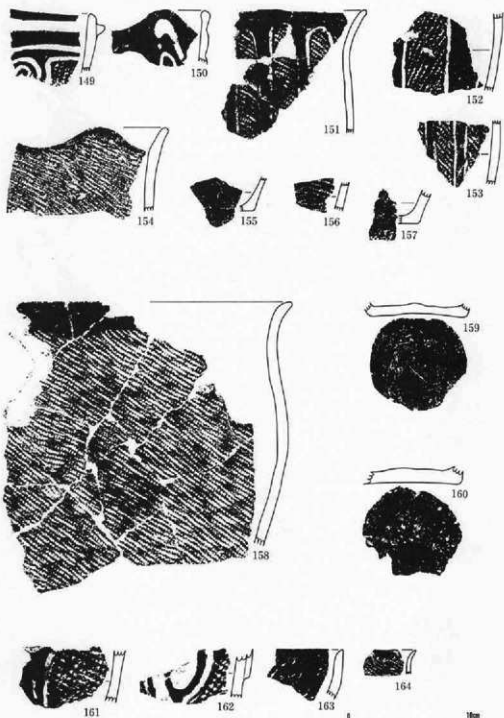
[112~131·13層]

第25圖 A-5号住居跡遺物(7)



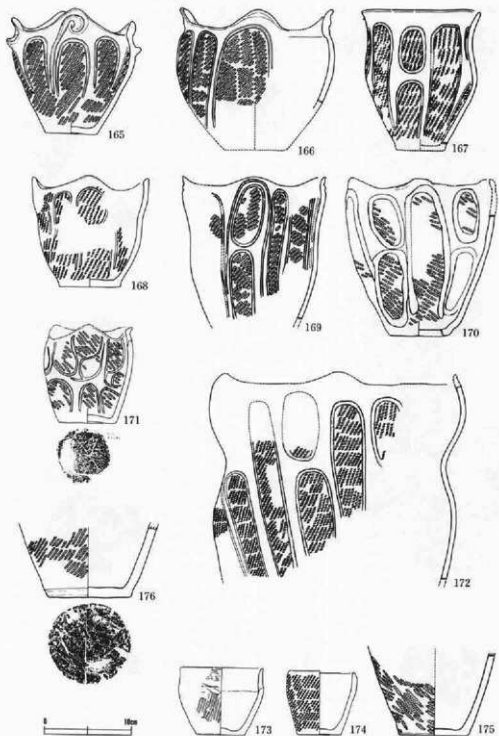
[132~148·13層]

第26図 A-5号住居跡遺物(8)



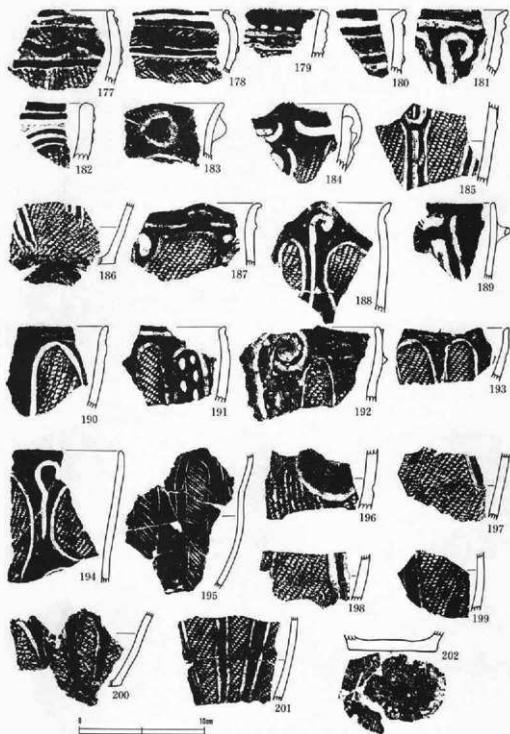
[149~160·14~15層、161~164·14層焼土内]

第27图 A-5号住居跡遺物(9)



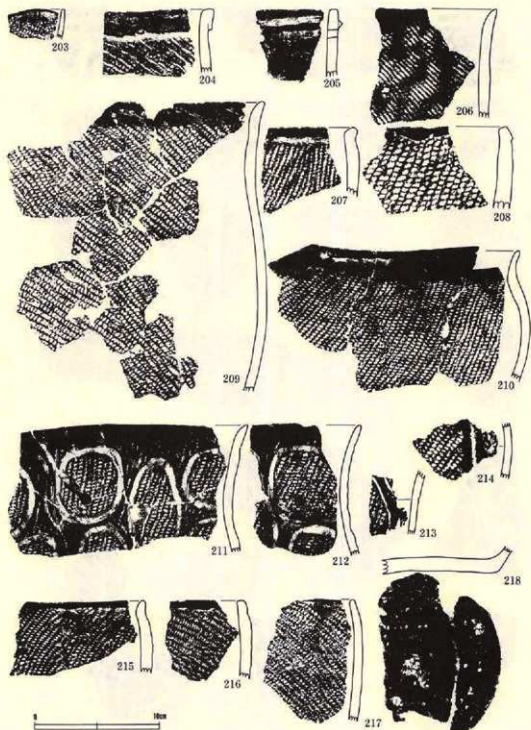
[165~176-4層]

第28図 A-5号住居跡遺物(00)



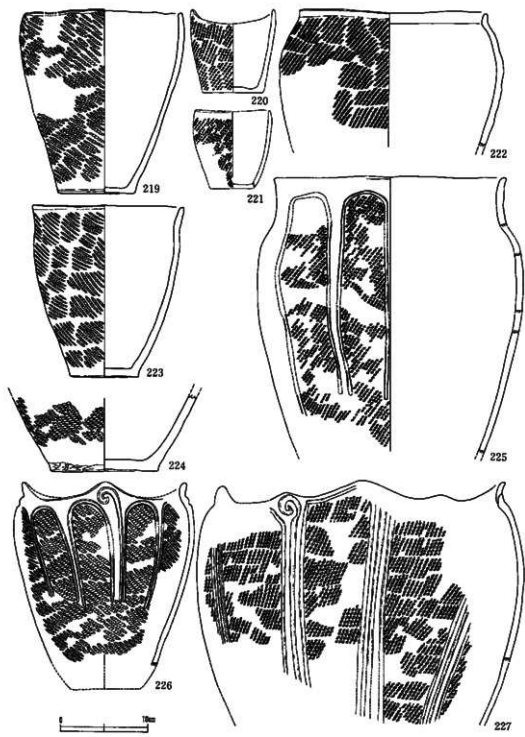
[177~202·4層]

第29圖 A-5号住居跡遺物(II)



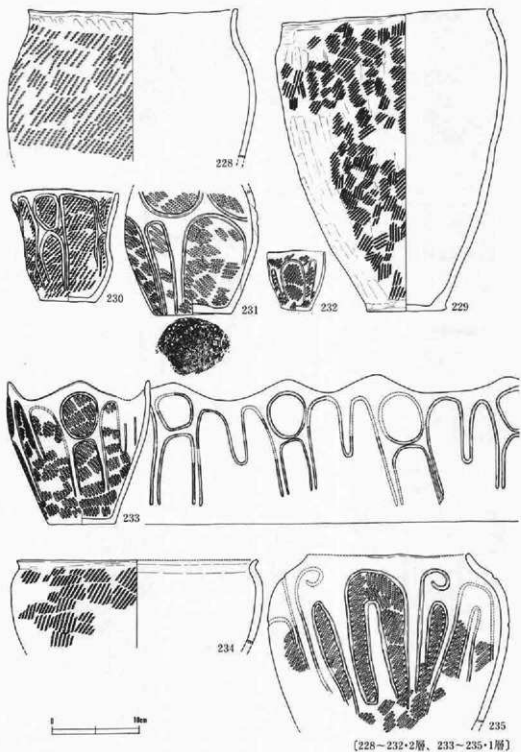
[203~210·4層、211~218·3層]

第30圖 A-5号住居跡遺物(2)

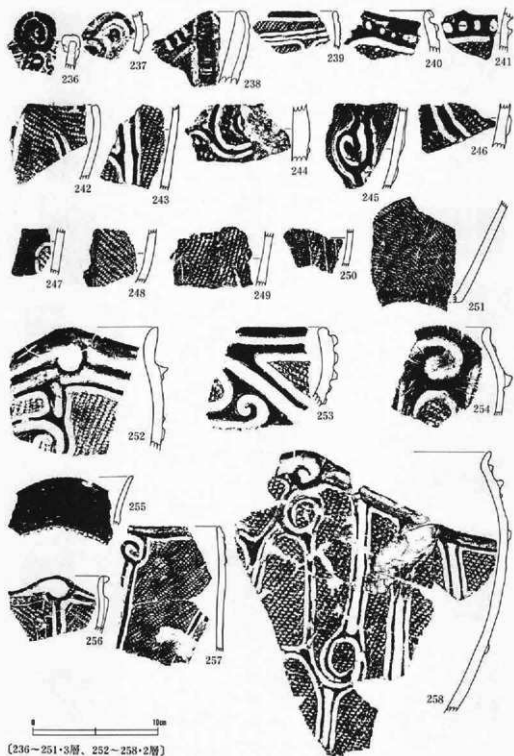


[219~227・3層]

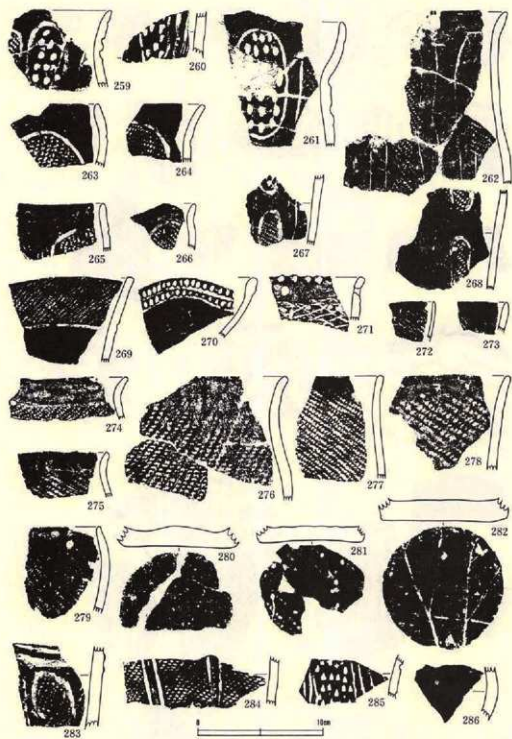
第31図 A-5号住居跡遺物03



第32図 A-5号住居跡遺物04



第33图 A-5号住居跡遺物(9)

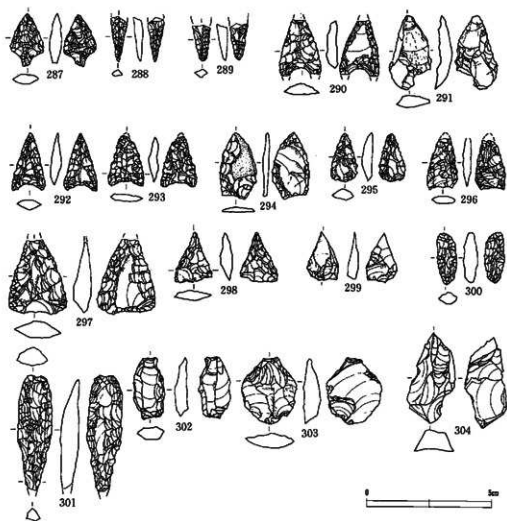


[259-282·2層、283-286·1層]

第34図 A-5号住居跡遺物06

波状突起をもつ小形鉢。226、227、236～251は3層出土。226～227は蕨手状文、原体の違いはあるが器形・文様ともよく似る。236～238はやや異質で236は口縁突起頂部に隆線による渦巻文、237は突起周辺に隆線施文、238は縦の粘土紐貼付の横の刻みと口唇部に縦の刻み。大木6～7a式の混入とおもわれる。ほかは中期の破片。228～232、252～282は2層出土。252～258(255を除く)の隆線による施文や259～261の外反する口縁をもち区画の中に刺突文をもつものや、細かい沈線のU字状文及び269～271、274、275のように縄文時代後期に含まれる一群も出土している。233～235、283～286は1層出土。233はU字状文が2個連続してM字状となり、235では細長い馬蹄形状となる。286は235の破片。

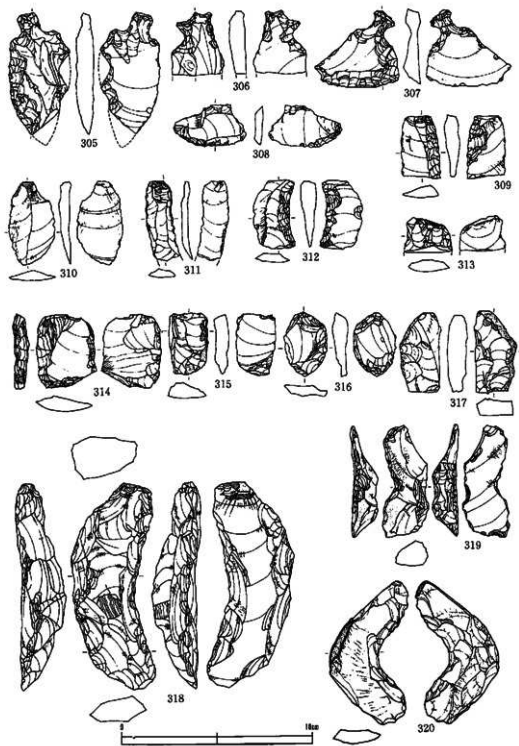
〈石器〉1層から床面まで万遍なく出土している。破損品、破片を除く59点を図示した。287～300は石鏃。287～289は有茎、290～299は無茎鏃であるが295は基部がまるく、298は三角形を呈する。300は棒状に近く先端部を欠く。301は鏃あるいは尖頭器で先端部を欠き、基部は薄く偏平となる。302～304は不定形石器で302は両側に調整痕をもつ。後2点は縁辺の一部に調整剝離がある。305～308は石匙で308はつまみ欠損。309～317は縁辺の一部に刃部をもつ不定形石器であるが、側面に調整剝離のあるものが多い。318～320は湾曲する部分に刃をもつ石器で、いずれも粘板岩製。318は縦長の厚い剝片を利用し背の部分に厚みのある平坦な面をつくり出し、刃部は両面から剝離を加え湾曲させている。先端部(図下方)は削器状となり擦られてややまるみをおびている。319は片面より剝離を加えて湾曲させており、背は幅広く馬背状につくり出している。320は両面からの剝離で背の厚みは少なく断面は偏平となる。適当な名称は見当たらないが、削器的な機能が考えられる一群である。321～324は石斧。321は小形定形石斧で刃部欠損、修復痕はない。323は乳棒状で刃部、基部ともよくみがかれていて擦痕や敲打痕はみられない。324は片面に自然面を残す石斧。凝灰質硬砂岩製で背面の $\frac{2}{3}$ はみがかれている。325～328は軽石製品。円形、三角形、方形等各種あり、いずれも人工的に手を加えている。325、326には両面に加工時の工具痕がみられる。軽石特有の孔が一定方向に走っているので、噴出したままの状態ではなくある程度地層中に堆積した転石であったことを示している。用途は不明であるが4点とほぼ同じであるので、何等かの意図をもったサイズであろう。329、330は敲石で前者は楕円形の礫を両面から打ち欠き刃をつけたもので、両側面を擦っている。後者は右側面を平らに面取りし擦石として使用するとともに、先端を打ち欠き敲石としても利用している。一部欠損。331は台石、332は断面方形に面取りされた角礫で加熱痕がある。333～339は擦石。楕円形の自然礫の一部を擦っている一群で、細かい擦痕が観察できる。339は周辺を部分的かつ連続して擦っており、擦り面が多面的になっている。340、342は軽石製品であるが他の軽石と異なり、色調は黒く比重が大きい。前者は方形に、後者は円形あるいは楕円状となり側面に凹みがある。用途は不明。341は脚付石皿とおもわれる破片で凝灰質砂岩製。343は石刀



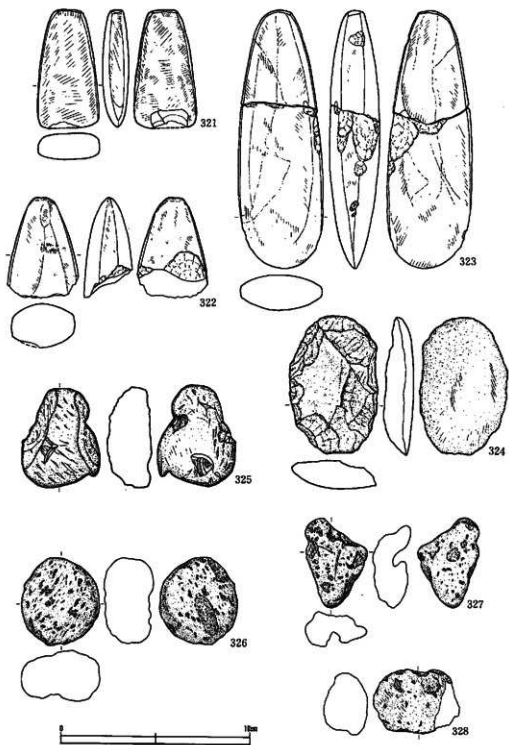
第35図 A-5号住居跡遺物(17)

あるいは石剣の破片で粘板岩製。344、345は極粗粒砂岩製の石棒で前者は方形に面取りし、正面と裏面の中央が凹み、さらに中心を一本の細い溝が縦に走る。両側面は平坦にみがあるが隅丸となる部分は敲いて整形している。全体に加熱の痕が残っており、半身は失われている。3層の下部の出土。346、347は同じく極粗粒砂岩製の砥石で前者は4面とも凹んでいる。凹みはゆるやかで、石斧等の刃の大きな石器用と考えられる。後者は表面と側面に溝があり、溝は狭くかつ深いことから、刃の鋭く薄い石器用と考えられる。

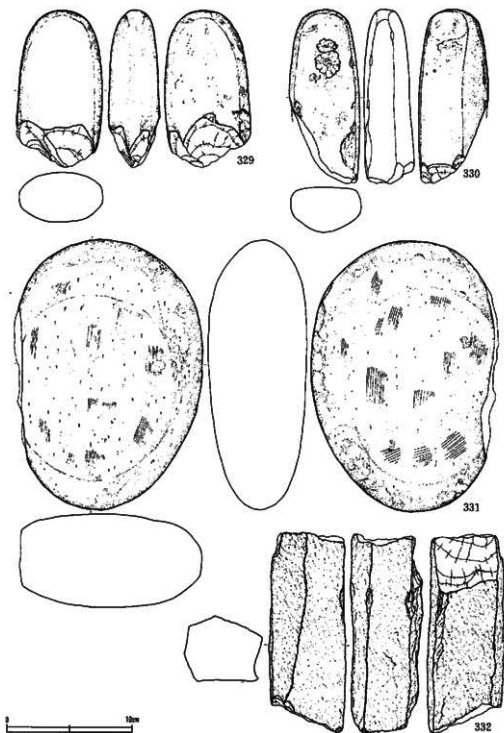
〈土・石製品〉有孔石製品3点、土製円盤9点がいずれも埋土中から出土した。348、349は



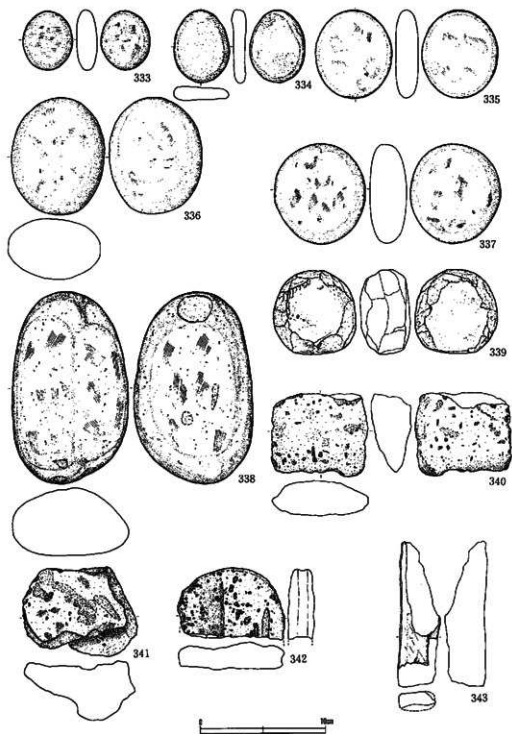
第36图 A-5号住居跡遺物(8)



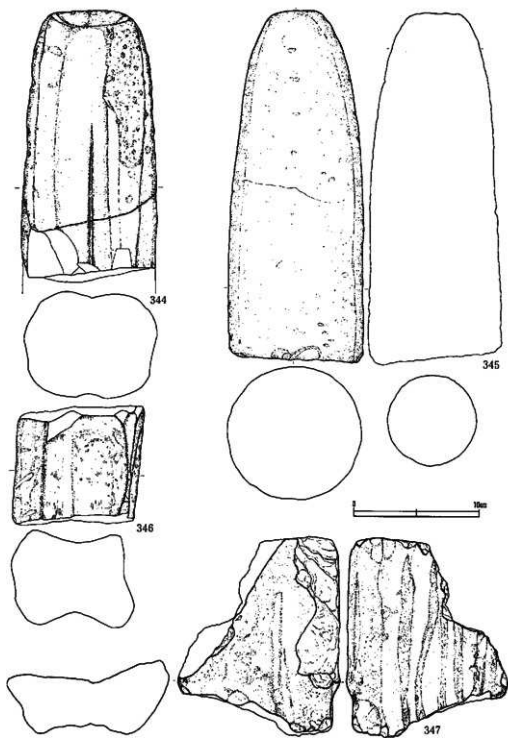
第37图 A-5号住居跡遺物(9)



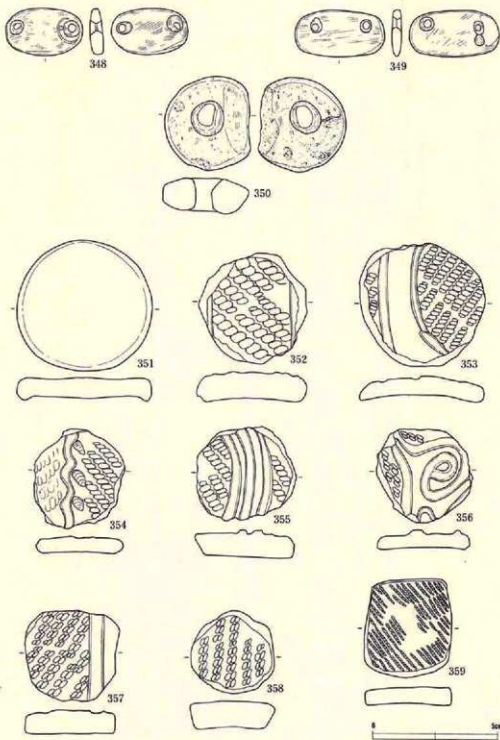
第38图 A-5号住居跡遺物(2)



第39图 A-5号住居跡遺物(1)



第40图 A-5号住居跡遺物②



第41图 A-5号住居跡遺物23

両端に2孔をもつ。2点とも粘板岩製で孔は両側から穿っている。349は一度穿ちかけた部分を中止して直上に穿け直している。数個でもって両端の孔を繋いで腕輪などとして用いた可能性もある。孔の中は工具の回転痕がよく残っている。348の左図の右の孔の左半分に細く半月状の溝が残っている。穿孔孔本体を差し込んでいるソケット（具体的には不明であるが）自体も回転してまるく溝をつけた可能性がある。350は軽石に孔を穿ったもので、本来は円形であったとおもわれる。おそらく破損した部分のみがきなおして使用したものであろう。一方向からの穿孔。351～359は土製円盤で359は方形。いずれも土器片の再利用で351は小形土器の底部。351、359は周辺を丁寧にすり上げているが、他は打ち欠いたままである。

〈時期〉埋土中からは大木6・7・8・9式期の土器が出土しているが、床面および床直上の層から出土する土器は大木8b式であり、縄文時代中期に属する。

A-6号住居跡（第11図、写真図版8）

〈検出状況〉東側の重機で土取りされている部分の斜面に壁と床面を検出した。北側はA-5住と、西側はA-2住と南側はA-3住と重複しており、一部分が残っているにすぎない。A-5住とB-2住よりは上面につくられており、A-3住に載られている。

〈形状・規模〉北側の壁が検出できたのみである。西側で鈍角にカーブするが、その先は擾乱されており不明である。敢て推定すると隅丸（長）方形に近い。

〈埋土〉4層に分けられる。自然堆積で1層にはA-5号住の貼床であったとおもわれる粘土ブロックが含まれる。2層は炭化物が多い。

〈壁・床面〉北側部分一部を検出したのみで、ゆるやかに立ち上る。床は地山と褐色土が混ざり合った状態で、堅くしまっている。貼床の痕跡は認められない。

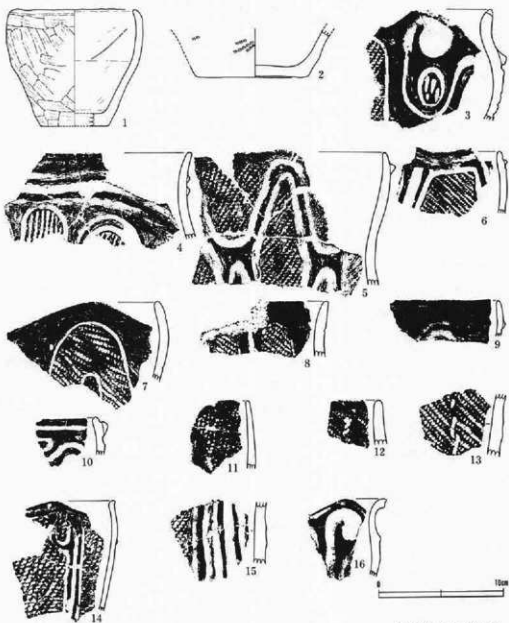
〈柱穴〉A-6号住に伴うと推定されるのは13個であるが、重複のため支柱の配列は不明である。深さからするとP₁・P₂・P₁₁～P₁₃などに可能性がある。

〈炉〉不明。斜線部分の石囲炉は床面より20cm下面にありA-5号住に伴う炉である。当住居の炉はA-3号住構築の際、除去されたものとおもわれる。

遺物（第42・43図、写真図版43・44）

〈出土状況〉床面および埋土各層から出土したが数量は多くない。床面の土器は主として東側で集中して検出された。

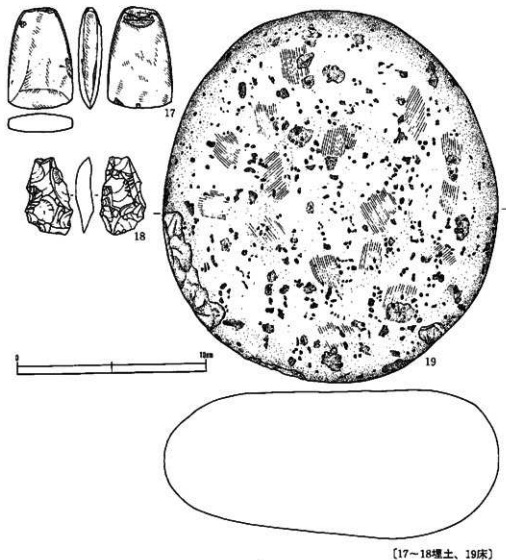
〈土器〉床面からは6点出土。1は無文粗製鉢で整形は荒いへら削りのみである。3は口縁部の渦巻文が円形に近くなり、直下の楕円文内に刺突が入る。原体は複節で充填縄文かどうかは不明。4は頸部に2本の隆線貼付、文様は沈線、原体は捺糸文で磨り消し。5・6は隆線による施文であるが5の隆線はより盛り上がり文様自体も横へと運動している。最大径は胴



[1~6床、7~16埋土]

第42図 A-6号住居跡遺物(1)

上半部にある。6は床面より少し浮いた状態で出土。埋土中の土器もすべて深鉢で、口縁部内傾するものと外傾するもの、平縁・波状の両者がある。7の文様は横にひろがる可能性がある。12、13は縦位の結節風文。



第43図 A-6号住居跡遺物(2)

〈石器〉3点出土。17は定形石斧で頂部には打ち欠きによる調整痕がある。刃部には斜めと横の使用痕が走り一部に刃にこぼれがある。18は不定形の剥片で下部に細かい刺離がある。19は床面出土で表裏面に擦痕がある。台石か。

〈時期〉床面出土の土器文様（刺突文、文様単位横にひろがる、など）は大木9式土器の特徴を示しており、縄文時代中期に属する。

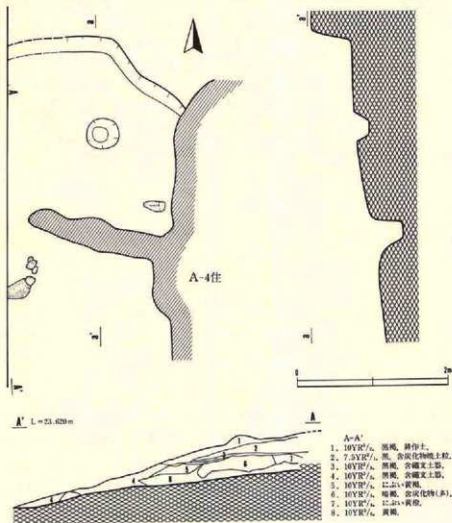
A-7号住居跡 (第44図、写真図版9)

〈検出状況〉調査区西側でA-4号住居精査中に確認された。西側は調査区外に、東側はA-4号住に載られ、南側は傾斜しA-8号住と重複し載られている。

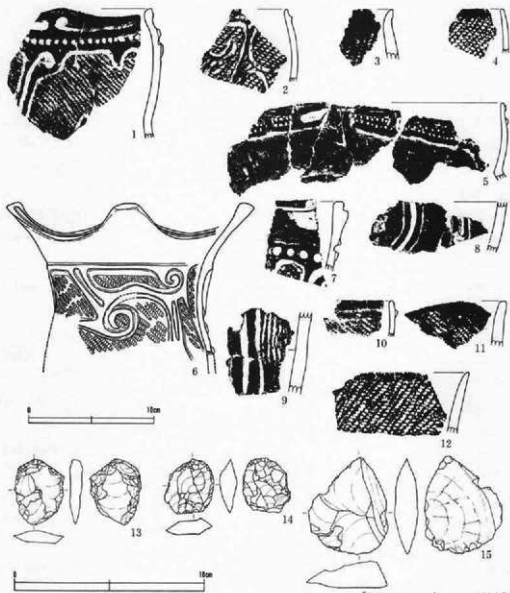
〈形状・規模〉北東の一部の壁と床が検出されているのみで不明。

〈埋土〉8層に区別される。図化した土層断面の北側は壁付近が攪乱されている。3~4層は土器を多く含み、6層は炭化物を多く含む。4層を除く北側部分は人工的に埋められた状況を示している。

〈壁・床〉外傾する壁であるが真砂土質のため崩れやすい状態である。本来は直立していた可能性もある。床と推定される面には厚さ2cm前後の粘土が貼られている。北側は面として捉えられたがA-4号住煙道付近から部分的になり、傾斜する両側では検出できなかった。



第44図 A-7号住居跡



[1-4・13-15床、5-12埋土]

第45図 A-7号住居跡遺物

〈柱〉北東で径45cm、深さ21cmの1本を検出したのみである。A-4号住の中にも存在するものと推定されるが、全体のプランが不明のため配置を捉える材料に乏しい。

〈炉〉不明。A-4号住の床とほぼ同一レベルで径60cm前後の石囲炉が検出されている。A-7号住に伴うとすればプランはかなり大型となるが、当住居の床とは20cmのレベル差があり、別の住居の炉と考えられる。

遺物（第45図、写真図版44）

〈検出状況〉床面と埋土から出土している。土師器の竪穴に載られており量は少ない。床面

の遺物は北側ではほとんど出土せず、A-4号住煙道の南側の大きな礫とともに出土した。

〈土器〉床面から4片出土した。1は頸部に列点文、体部は渦巻状文と棘状（三角形）の隆線文。2はおそらくゆるやかな蕨手状のモチーフとおもわれる。沈線で複節。3、4は小形鉢で4は複節。5は口縁部粘土貼付による細い文様帯をつくり、その中に2段の刺突がめぐる。口縁部は内湾し胴部はやや丸みをおびるようであり、頸部は無文帯となる。6も頸部無文となり胴部の渦巻状文は横位置に施文され、横を意識した文様単位の構成となっている。7は頸部に棒状の刺突、8は胴部渦巻文。10～12は粗製鉢で11、12は口縁部外反する。12は複節。

〈石器〉床面から3点出土。13は両面加工の側面に刃部をもつ削器的な石器で下半部を折損している。14はメノウ製の材質で両端に刻彫のあるピエス・エスキュー。15は縁辺部に小さな刻彫が見られる剥片。

〈時期〉床面出土の土器は大木8b式土器の特徴を示しており、縄文時代中期に属する。

A-8号住居跡（第46図、写真図版10）

〈検出状況〉調査区西側の土層確認中に断面で確認された。西側は調査区外で不明。北側はA-7、A-4住と重複し東側はA-5住と、南側はA-1住と重複している。A-7住はA-8住より古く、A-8住はA-7住より新しくA-5住よりは古い。模式化するとA7→A8 $\begin{matrix} \nearrow A5 \rightarrow A2 \\ \searrow A1 \end{matrix}$ 、A4（土師）となる。

〈形状・規模〉北側の一部壁のみの検出で不明。壁がほぼ直線であるので、敢て推定すれば楕円形もしくは隅丸長方形となろう。炉の形状からすると規模は当遺跡でも最大クラスであったとおもわれる。

〈埋土〉北から南側へと自然堆積した埋土である。南側は検出の段階で削除され図示できなかった。6層に区別される。4層は粘土ブロックが面として拡がっており、この上面から多くの遺跡が出土した。炉の北側に段がついているが、これは貼床状の粘土が盛り上がっているためである。

〈壁・床〉北側でゆるやかに外傾する壁を確認、深いところで40cmをはかる。床は真砂土混じりであるが踏み堅められている。炉の北側部分に炉と平行して130×60cmの貼床状の粘土面が検出された。厚さは5～10cmで床面より盛り上がっている。

〈柱穴〉当住居に伴うとおもわれる柱穴は13個である。P₁～P₃はほぼ等間隔で深さも似ており壁柱穴とおもわれる。主柱穴は断定はできないがP₄～P₇の深さが25～30cm内外でいずれかが相当すると考えられる。

〈炉〉長径120×短径80cmの長方形の石囲炉に径20cmの円形の石囲いが組み合わさった形状である。炉が複数という意味では複式炉である。構成礫の大部分は風化した花崗岩である

が、数個角礫が用いられている。両者とも掘り方は垂直であるが方形部が 30 cm、円形部が 25 cm と差があり、間仕切石は偏平な石を直立させている。焼土は方形部に厚く約 13 cm あるが、円形部のそれはほとんどなく炭化材や灰などが少量混ざる。円形部の中央には偏平な石が蓋状にあり、炉としてよりは火種置場的な機能が考えられる。方形炉から大形土器片（第 47 図）が出土しているが埋設されたものではない。石囲炉の東側に続く溝は炉とは何等かの関連があるものとおもわれる。

〈付属施設〉 炉の北側に炉と平行して貼床状の粘土面が検出された。この面の下から人骨が出土しており、墓墳に伴う施設とおもわれる（第 66 図）。また、炉の東南部に炉からはみ出した石 1 個と P₁₂ はをさんで 4 個の石が弧状にある。内側に焼土等はなく、石は床面にタテに埋めである。性格、用途は不明。

遺物（第 47～52 図、写真図版 45～47）

〈出土状況〉 床面、炉、埋土から出土している。炉内の土器は炉上から出土したものである。南側は埋土浅く、主として北側から出土した。床下と記した遺物は、南側で床が不明かつ床よりレベルの低い面から出土したものであり、厳密にはこの窪穴の床下の包含層のものである。

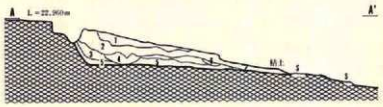
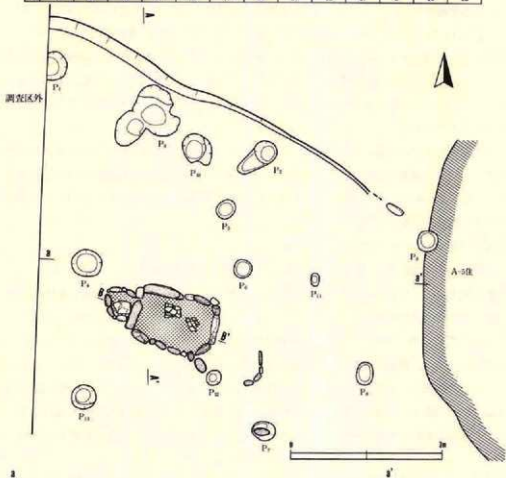
〈土器〉 炉内より 3 点出土。1 は大形深鉢の胴部で炉の上面に内側を上に向け貼りついたような形で出土した。熱を受けている。床面出土の 4 と胎土・焼成が似ており同一個体とおもわれる。2・3 は隆線による施文をもつ深鉢片である。4 は炉の北側で出土。5 は口唇部に縦の刻み、体部は無節の縄文。6 は肩の張る浅鉢で文様は不明。胴部はミガキ。埋土出土のものはいずれも小形で 7 は口縁部を欠く。精製土器の 14 は橋状把手となる。15 は全く異質で胴部に太い粘土紐

の貼付けで、原体はおそらく R $\begin{cases} L \\ R \\ R \\ R \end{cases}$ または L $\begin{cases} R \\ R \\ R \\ R \end{cases}$ であろう。大木 7a 式とおもわれる。

21 は沈線の精製深鉢。粗製土器はいずれも深鉢で口縁直下あるいは頸部に二本隆線をめぐらすものが多い。複節の原体は少ない。以上が 3～5 層出土。28～38 が 1～2 層出土。頸部に渦巻文貼付けで刻目をもつもの、木目状捻糸文や条痕文のあるもの、口縁部に 1～数条の原体側面圧痕のあるものなど多様である。36 は頸部付近に透しがある。39～55 は床面が消滅している南側、レベル的には床より下位で出土した土器である。時期的にも幅があり 39、41、44 のように横の隆線に刻目のあるものや、40、43 のように口唇部や口縁部に刺突文のあるもの、原体も木目状捻糸文、結節羽状縄文、綾絡文などがある。49 は綾絡間の一部を擦り消している。

〈石器〉 床面および床消失面を含めて 25 点が出土。56～60 は石鏃ですべて無茎。57 の三角状を除く浅い塊りが入る。61 は尖頭器の基部とおもわれるもの。62～70 は剝片を利用した不定形石器。縁辺の一部あるいは片側に刃部をもつもので、62 は左側のみに調整剝離があり右側

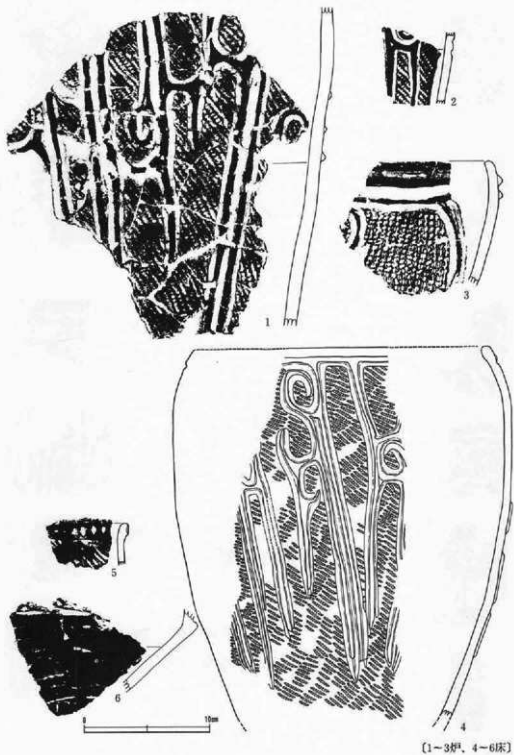
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	cm
径	38×(32)	30×28	27×25	40×34	26×23	24×23	29×26	29×20	37×(42)	38×30	16×10	20×19	32×32	
厚	25	38	18	27	23	27	30	25	12	17	8	10	13	



- A-A'
1. 10YR²/₁ 黒褐、真砂土、雲母混。
 2. 10YR²/₁ にふく黄褐、細い砂礫混。
 3. 10YR²/₁ 黒。
 4. 10YR²/₁ 黄褐、粘土ブロック状に入る。
 5. 10YR²/₁ 明黄褐。
 6. 10YR²/₁ 黄褐、粘土ブロック。

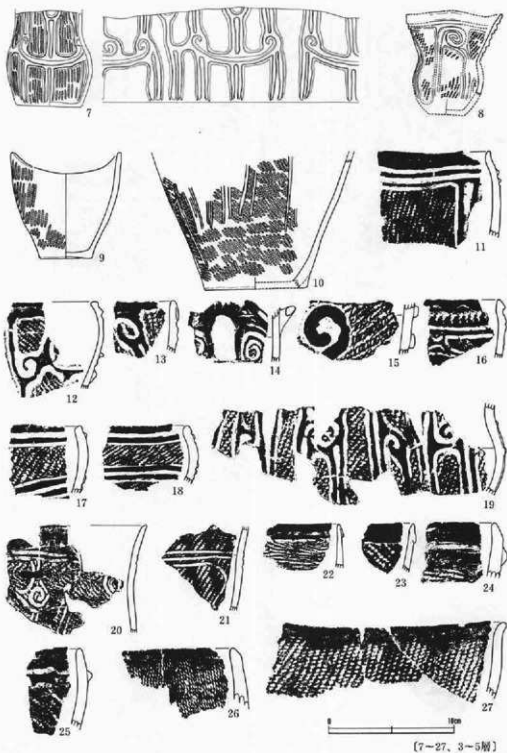
- B-B'
1. 7.5YR²/₁ 黒褐、埴土。
 2. 7.5YR²/₁ 黒褐、埴土。
 3. 5YR²/₁ にふく赤褐、埴土、炭灰化物。
 4. 5YR²/₁ にふく赤褐、埴土、炭灰化物。
 5. 5YR²/₁ 明赤褐、埴土、炭灰化物。
 6. 10YR²/₁ にふく黄褐。
 7. 10YR²/₁ にふく黄褐。

第46図 A-8号住居跡



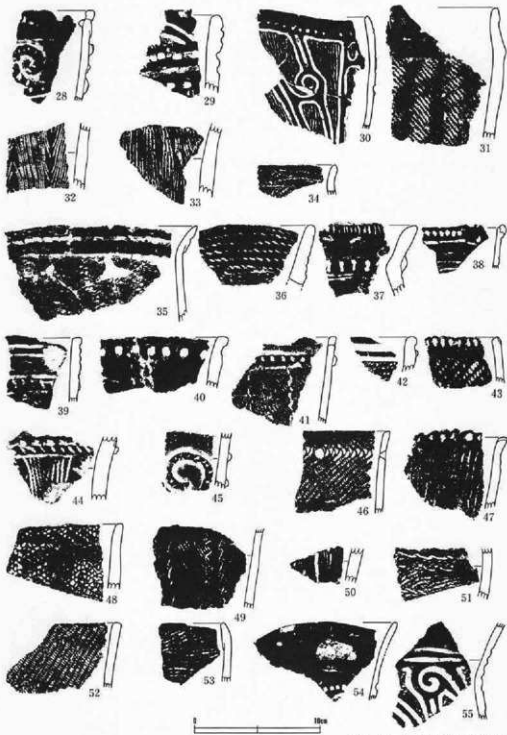
[1-3柄、4-6床]

第47图 A-8号住居跡遺物(1)



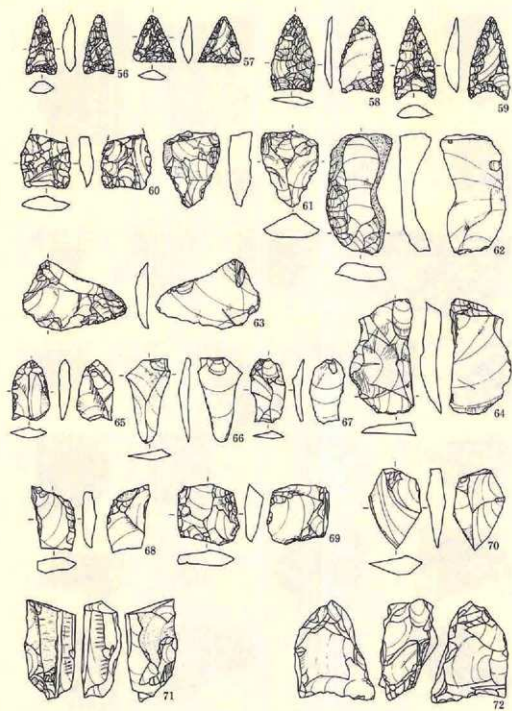
[7-27、3-5解]

第48图 A-8号住居跡遺物(2)

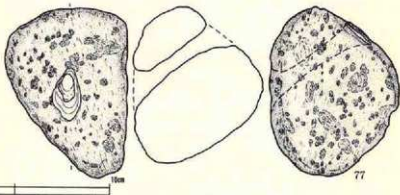
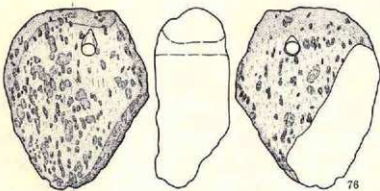
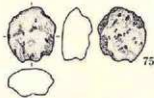
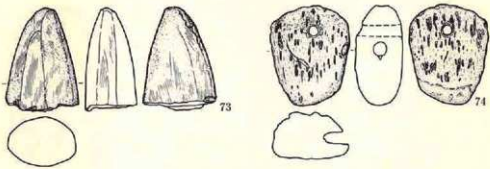


[28~38, 1~2层, 39~55床下]

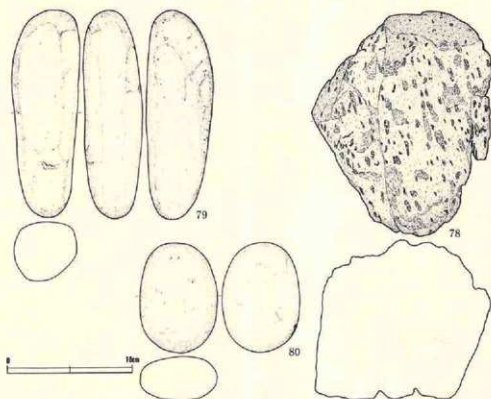
第49图 A-8号住居跡遺物(3)



第50图 A-8号住居跡遺物(4)



第51图 A-8号住居跡遺物(5)



第52図 A-8号住居跡遺物(6)

は自然面を残す。63は右下面を調整している。71、72は石核状の石であるが規則的な剝離痕や調整は認められない。73は磨製石斧の基部で基部部に敲打された痕跡がある。74～78は軽石製品。74は上部に貫通する一孔が、側面には未貫通の深さ1.5cmの孔がある。全面を整形しているが特に下端は丁寧に磨いている。75は破片であるが一部に磨きがある。76は左上と右下が欠損しており孔は本来中央にあったとおもわれる。頂部はよく磨かれている。77は頂部を平にすると孔は斜めに走る。三角溝状を呈するが孔の無い面はまっすぐに面取りされている。74と76の孔は一方向から、77は両側からの穿孔、78は4片が接合したもので、部分的に平らな面をつくり出している個所もあり、未製品の可能性が高い。79、80は擦り石で前者は側面が平坦となりよく擦られている。後者は表裏とも擦られており、光沢が部分的に認められる。

〈時期〉埋土および床消失面からは大木7a式や円筒上層式が出土しているが、炉、床面出土の土器は大木8b式の特徴を示しており、縄文時代中期に属する。

B-1号住居跡(第53図、写真図版11・12)

〈検出状況〉当遺跡では最も高所に位置しており、調査前に貝殻の散布が最も多く認められた個所である。貝層の存在が予想されたので掘り下げたところ炉石を検出し、住居跡と確認した。表土は農道および畑地となっており極めて浅く、良好な貝層とはならなかった。A-5号住居の上面につくられ、B-2号住居に載られている。

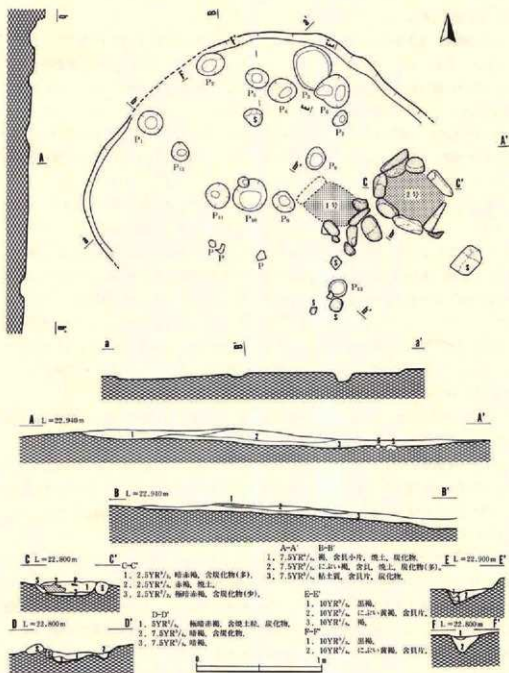
〈形状・規模〉堆積層が薄く北側では数cmの壁が検出できたが、東南部は削平されており、南側では確認できなかった。径2.6m前後の隅丸方形、あるいは炉の位置からして隅丸長方形のプランが推定できる。

〈埋土・貝層〉貝を含む層が確認された唯一の住居跡である。最も厚い個所で床面まで12cmにすぎない。3層に区分できる。1層は炭化物、焼土類を含み貝は小破片が混在しているのみである。耕作等により攪乱されている。2層は最も多く貝を含み焼土、炭化物が混じる。3層は粘土質で炭化物、貝の小片を含んでいる。2層の貝はある程度密な状態で圧縮されており、この場に廃棄された状況を示している。この層は貝層として捉えられるが、純貝層ではなく焼土、炭化物、土が混じっている。特にイガイの周辺には炭化物が多いようである。焼土、炭化物、土は散在しておりまとまった分布とはなっていない。貝類はカキがある程度まとまった状態が出土しているが、他の貝はブロックではなく混在する傾向を示している。貝類、自然遺物については別稿(P269)でまとめて記述する。

〈壁・床〉北側と西側に数cmの外傾する壁を検出した。床面は真砂土混じりの地山を踏み固めているが、粘性に乏しくバサバサしている。

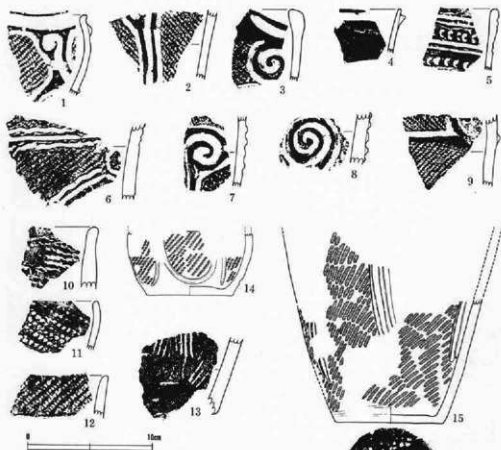
〈柱穴〉13個検出されたうち12個が西側に集中している。いずれも浅く3~18cmの深さである。P₁・P₂は入口部分とも推定できるが、他の柱穴は南側と東側が未検出であるので配置関係は不明である。西側部分はP₁とP₂にそれぞれ平行となるような配列も見られる。(P₁・P₁₂・P₁₁とP₂・P₃・P₄・P₇など)

〈炉〉2基検出された。1号炉はこの住居に伴う炉であるが、2号炉は別の遺構の可能性がある。ただし、2号炉に伴う壁や床は不明であり、土層断面の観察でも確認はできなかった。1号炉は東側の石が残り他は失われているが、西側に長さ55cmの石の抜取痕がある。焼土の範囲は35×30cmである。東南側に散乱している石はいずれも加熱されており1号炉を構成していた礫と考えられる。2号炉は径65×60cmで焼土が発達している。1号炉と2号炉のレベルは2号炉の方が2~3cm高い。一般的な状況からすると1号炉よりは2号炉の方が新しい。2号炉が当住居跡のものとする壁際がありすぎ、他の遺構に伴うものとせざるを得ないが、この周辺は東側と南側が削平されているので、関連する遺構は検出できなかった。2号炉を他の遺構に伴う炉とすれば、西側に重複してある柱穴の一部も当然2号炉に伴うものとなり、数の多さ



坑穴	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径	30×18	23×18	18×15	23×19	36×30	29×25	14×18	18×15	18×15	27×27	21×19	15×14	14×14		
深	4	14	14	5	3	18	9	17	10	3	10	5	4		

第53図 B-1号住居跡



[1~2床、3~13・3層、14~15・2層]

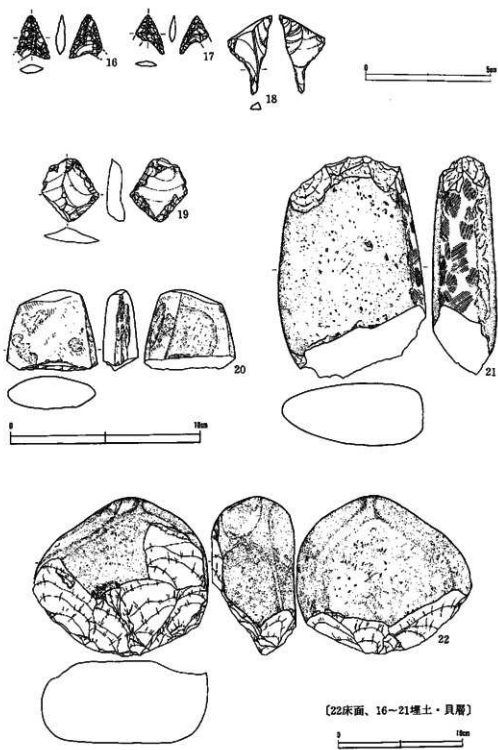
第54図 B-1号住居跡遺物(1)

も是認できる。

遺物 (第54・55図、写真図版48・50)

〈出土状況〉床面、貝・炭化物層および表土から出土しており、炉内からの出土はない。埋土が浅く遺物は極めて少ない。

〈土器〉1、2は床面出土。2点とも隆線貼付による施文、中形の深鉢となる。3~13は3層の貝・炭化物中からまんべんなく出土した。3、7、8は隆線の渦巻文、4は頸部まで無文ミガキによる小形の鉢、5は半截竹管の刺突列、6は1本の沈線の両側に円形(?)を支点として小波状



第55図 B-1号住居跡遺物(2)

沈線が走るモチーフ。10～13は粗製鉢で10、13は捺糸文、12は頸部に浅い沈線が入る。14、15は2層出土。14は小形鉢で複節、底部はヘラ整形。15は隆線で単節、底部は網代痕の上をヘラ整形。

〈石器〉7点出土。16、17は挟り入り石鏃で17は円脚状となる。18は上部を欠いた錐で先端部は使用のためか黒ずんでいる。19は両面に調整痕のある不定形石器。20は上半部だけの磨製石斧で破損した部分を更に磨いた痕跡があり、稜がななめになっている。基部部はまるみをおびた斜形を呈する。21は敲石の一種で先端部を両側から剝離調整し、刃部には敲いた痕跡がある。右側面は平坦に磨いており、左側面には敲打痕が残る。石材は凝灰質硬砂岩で石斧類に多い材質である。22は礫器で自然石の両面から荒い打ち欠きをしたもの。剝離された上の自然面には手擦れによるものか色調が異なる光沢面が残っている。

〈時期〉床面出土の土器は大木8b式の特徴を示しており、縄文時代中期に属する。

〈その他〉第2層から出土した骨角器については遺構外の例とともに、(6)骨角器(100ページ)で触れる。

B-2号住居跡(第56図、写真図版13)

〈検出状況〉調査区北側Bグリッドで検出された。B-1号住を載ってその下面に構築されている。西側はB-5号住と重複し、B-5号住を載ってつくられている。東側と南側は土取りによって破壊されている。

〈形状・規模〉2棟が重複しているようにも見えるが、掘り込みが深くテラス状の一段高い面をもつ構造と考えられる。その面が残る北側部分の地山は真砂土質で崩れやすい土質であることが、このような構造となったとおもわれる。プランは短辺約3m以上を測る隅丸長方形と推定される。

〈埋土〉12層に区別される。3層は薄くかつ堅い面であり、貼床等の遺構であった可能性もあるが検出面積が少なく、確定できなかった。各層とも土器片、炭化物を含むが10層の焼土・炭化物層と11層の境目でシカの角座、イノシシ(?)の肋骨が良好な状態で検出された。周辺には貝はほとんど見られなかった。

〈壁・床〉やや外傾して立ち上がる壁で、テラス部分はそれほど堅くないが低い面は厚さ数cmの粘土が貼られている。テラス部分は床に向かって傾斜しており、床面とのレベルは約30cmである。貼床面から検出面までの高さは110cmである。

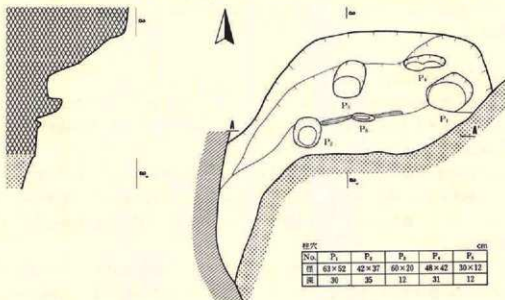
〈柱〉テラス部分に2個、粘土貼面に2個検出された。P₁とP₂の間には周溝があり中ほどに楕円形の小穴がある。全体に巡るかどうかは不明。テラス部分の柱穴は土砂崩壊を防ぐためのものと考えられる。

〈炉〉 削平のため未検出。

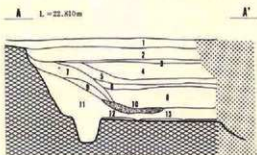
遺物（第57～59図、写真図版49・50）

〈出土状況〉 床面出土は1点のみである。11、8、4層は比較的多く、9、5層は無遺物層で、3～1層は少量出土。

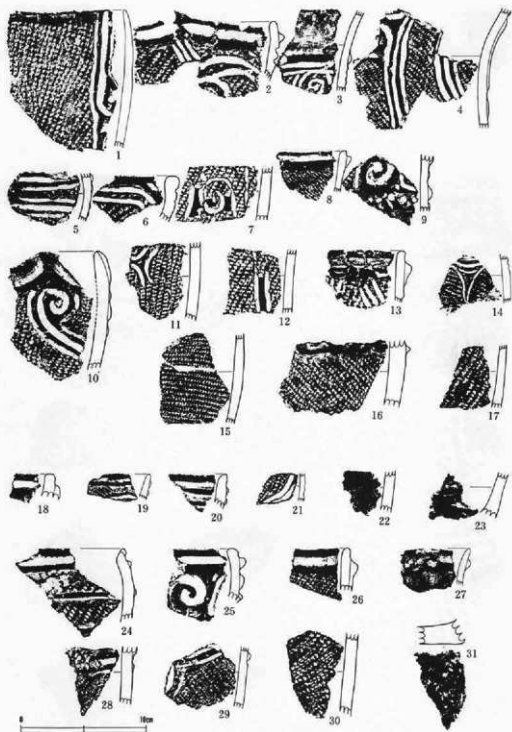
〈土器〉 1は床面出土。口縁部ミガキで隆線による縦の施文。2～9は11層出土。隆線で施文するものが多い。2は10層出土の13と同一固体。この土器のみ灰白色で表裏ともに細かいクラックが入る。二次的に何らかの作用を受けた可能性がある。7は原体上の隆線が剥落したものの、9は渦巻文の下に刺突列。10～17は10層出土。14のみ沈線施文。18～23は7層出土でいずれも小破片のため文様単位を知り得るものはない。24～31は8層出土。精製土器は口縁部直下、頸部に隆線を巡らすものが多い。31は網代痕の上からへら整形。32～36は6層出土で、33は棘状突起が見られる。34は深い櫛歯状の条痕、35は燃糸文、36は複節細文。37～48は4層



- A-A'
1. 10YR7/。 土に近い黄緑、砂質。
 2. 10YR7/。 土に近い黄緑、黄砂土混。
 3. 10YR7/。 粗、含遺物、炭化物、互層となる。
 4. 10YR7/。 土に近い黄緑、含遺物、炭化物、互層となる。
 5. 10YR7/。 粗、含遺物、炭化物、互層となる。
 6. 10YR7/。 土に近い黄緑、含遺物、炭化物、互層となる。
 7. 10YR7/。 暗褐色、含遺物、炭化物、互層となる。
 8. 10YR7/。 粗、含遺物、炭化物、互層となる。
 9. 10YR7/。 明黄緑、含粘土ブロック、遺物なし。
 10. 10YR7/。 粗、含粘土・炭化物。
 11. 10YR7/。 土に近い黄緑、含砂土、雲母混。
 12. 10YR7/。 明褐色、粘土質、炭灰。

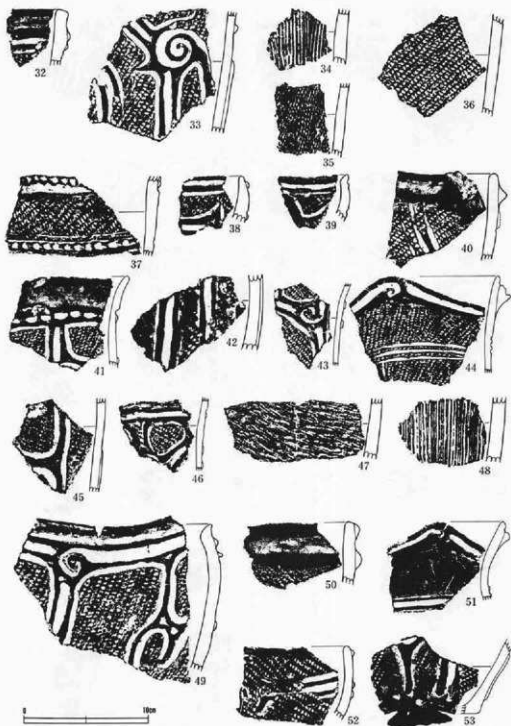


第56図 B-2号住居跡



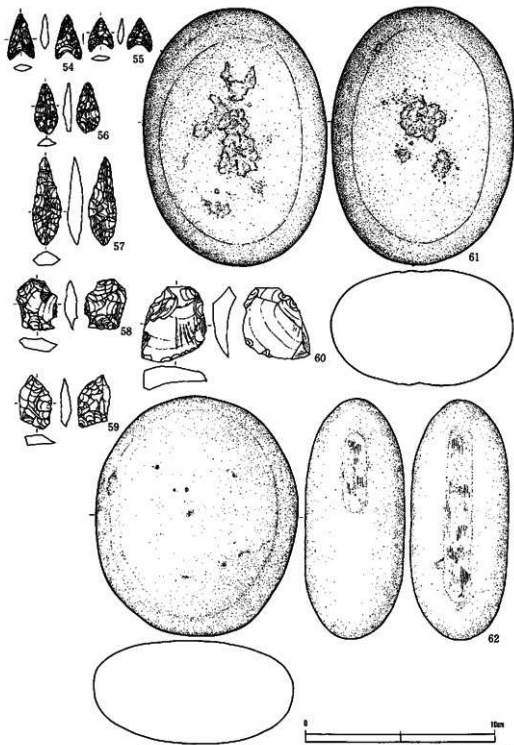
[1床面, 2-9·11層, 10-17·10層, 18-23·7層, 24-31·8層]

第57圖 B-2号住居跡遺物(1)



[32~36·6層, 37~48·4層, 49~53·1~3層]

第58图 B-2号住居跡遺物(2)



[54~55・1~3層、60~61・8層、62・6層]

第59図 B-2号住居跡遺物(3)

出土。37は上の隆線および下方に刺突(刻み)が巡る。39は沈線文、40は地文の上の傾めの隆線文2本剥落、41は頸部に押し引き状の刺突列、44は山形口縁頂部渦巻文で体部は沈線文、47は付加縄文、48の条痕文は34と同一個体の可能性がある。49~53は1~3層出土。51は44と同一器形であるが地文はなく、隆線による施文が異なる。

〈石器〉9点出土。54、55は挟りがやや深い石鏃、56は茎の先端部を欠くが基部には黒いターール状の付着物がある。57は尖頭器。58は両端に調整のあるピエス・エスキュー。59、60は縁辺の一部に刃部のある不定形石器。61は凹石、凹みは両面にあるが極めて浅く凹みの周辺はよく磨かれており、光沢がある。62は両面および両側面に擦痕のある擦石。

〈時期〉埋土中の土器には大木9式も含まれるが、床面および床に近い11層の土器は大木8b式であり、縄文時代中期に属する。

F-3号住居跡(第63図、写真図版14)

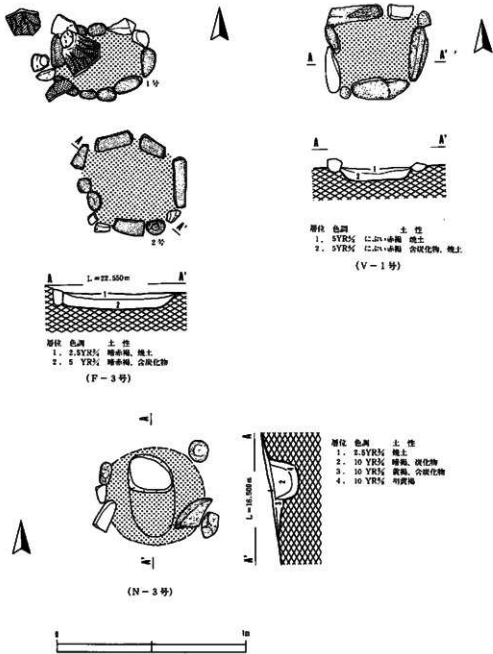
〈検出状況〉F-1号住、F-2号住精査中に炉跡2基を検出した。炉の周辺は堅く踏み固められ一部には粘土が貼ってあり床面の状況を示しているが、柱穴や壁などの遺構は検出できなかった。炉2基ともレベル差はほとんど無い。1号炉の上面および周辺から完形に近い深鉢形土器や多数の遺物が出土しているため、住居跡として扱った。規模・形状等は一切不明。1号炉は55×40cmで隅丸方形、2号炉は58×55cmのほぼ円形である。

遺物(第60~63図、写真図版51・52)

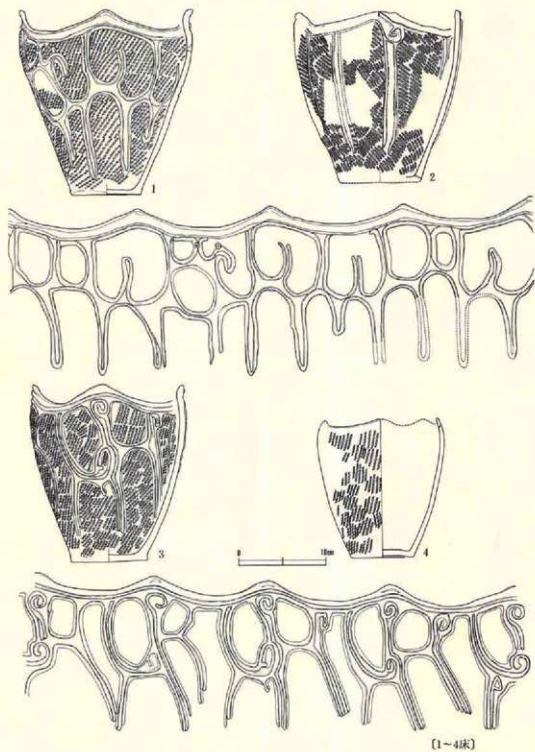
〈出土状況〉床面および埋土から出土しているが、炉以外の遺構を検出できなかったため、埋土出土としたものは少ない。床面の遺物は炉の周辺、主として北側からまとまって出土した。

〈土器〉1~13、17、18が床面出土。1は4個の波状口縁で上段の文様はそれぞれ独立しているが、下段は不規則にM字状文が繋がったり切れたりしている。頸部のみ隆線で他は沈線、補修用ともおもわれる焼成後の孔が2個あり、底部はヘラ整形。2も波状口縁で隆線施文、煎手状文を上につけ2本隆線が縦に走るが一部に棘状突起がつく。3も波状口縁で器形は2とほぼ同じ。波状頂部に煎手状文を配するが、U字状文と同じく直線ではなく曲線的に下垂する。隆線による規則的な文様配置であるが個々の文様は不揃いである。底部はヘラ整形。4は波頂部が5~6個あると推定される粗製深鉢で底部はヘラ整形。5、6は小形鉢、5は3個の頂部の波状口縁と推定され、その下にU字とU字状を組み合わせた文様が見える。7~10、12は隆線による施文。11は把厚した口縁直下に太い刺突が巡る大形の鉢で擦糸文。14~16は埋土出土。14、15は口縁部が外反する器形で幾何学的な文様を、16は円形文をもつ小鉢鉢。

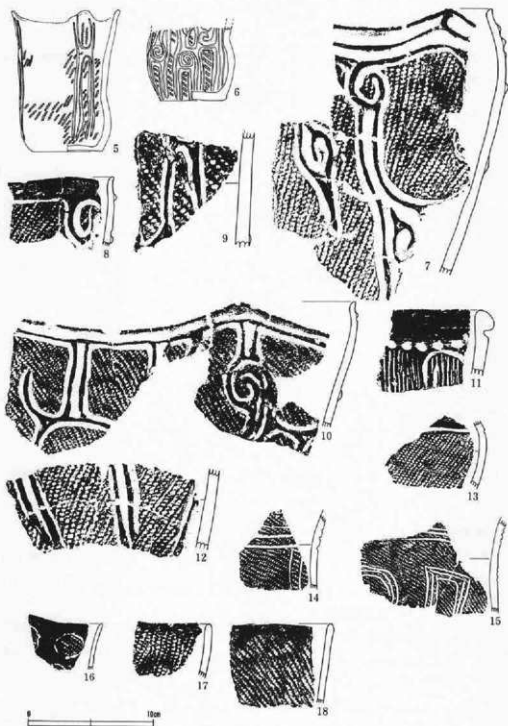
〈石器〉床面から2点出土した。19は磨製石斧、本来刃部も磨製であったとおもわれるが破損のためか両端から荒く打ち欠いて刃部を再生している。茎部には両面とも着柄の際に生じた



第60图 F-3号·N-3号住居跡、V-1号炉跡



第61图 F-3号住居跡遺物(1)

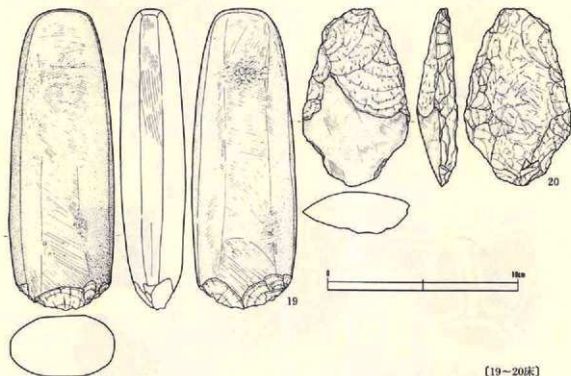


[5-13、17-18床、14-16埋土]

第62图 F-3号住居跡遺物(2)

とおもわれる凹凸がある。20 は片側に自然面を残す石斧、おそらく刃と柄が直交する手斧的な機能をもつものと推定される。

〈時期〉床面出土の土器は大木9式と大木8b式の特徴をそなえており、縄文時代中期に属する。両者の共伴については別項で触れる。



第63図 F-3号住居跡遺物(3)

【19~20末】

N-3号住居跡 (第60図、写真図版15)

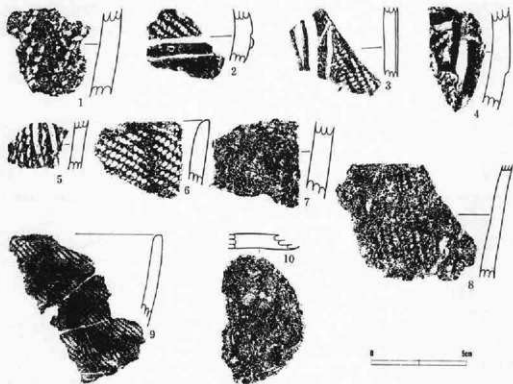
〈検出状況〉平安時代の住居を精査中に検出された。N グリットは調査の東端に近く縄文時代の遺構はこの住居跡のみで、他はすべて平安時代の遺構が占めている。表土が浅くかつ平安時代の遺構に截られており、炉だけの検出で柱穴や壁などは不明である。炉は焼土・炭化物の拡がりから判断すると、径60cm前後の円形石囲炉であると推定される。西側の石は原位置を留めているが、東側の石は移動している。焼土は少なく2層と4層に炭化物が含まれている程度である。中央に掘り込みがあり埋設土器が在ったような形状を示しているが確認はない。

遺物 (第64図、写真図版52)

〈出土状況〉床面と推定される炉の周辺から出土しているが、平安時代の竪穴住居によって原位置は留めていないものと考えられる。

〈土器〉 いずれも小破片で全体を知り得るものはない。2、3は隆線貼付文で、他は粗製鉢のみである。

〈時期〉 文様の特徴は大木8b式であり、縄文時代中期に属する。



第64図 N-3号住居跡遺物

(2) 墓 墳

A-1号埋壘 (第65図、写真図版16・17)

〈検出状況〉A-5号住1号炉の焼土除去中に土器底部が検出された。炉に伴う土器とも考えられたが、掘り下げたところ大形の深鉢となり埋壘であることを確認した。1号炉は明らかにこの埋壘の上に形成されており、墓墳がA-5号住より古いことは確実である。検出した埋壘は底部と胴下半部の一部が欠損している。この種の埋壘は完形品が通常であるので、あるいはこの炉を構築する際に一部を破損した可能性がある。

〈形状・規模〉土器を埋めてある地層は風化した花崗岩（真砂土）を含む地山であり、埋土も全く同じ土質であり、明確な掘り方の形状を把握できなかった。図示したプランは推定によるものである。

〈土器〉口径37.5、高さ51.0（推定）、最大径43.2cmの大形深鉢である。底部はおそらく穿孔されていたものと考えられる。倒立した状態で埋設されていた。煤や火熱痕などは全く認められない。口縁部は丁寧なミガキで頸部には刺突文が巡り、体部は渦巻文を主文様に展開する。基本的には縦に展開するが枝葉が横にのびて全体としてはタテとヨコが連なる構成となる。図示した中央部分の文様が特に大きく、土器の正面を意識しているようである。この面を北に向けて埋設している。

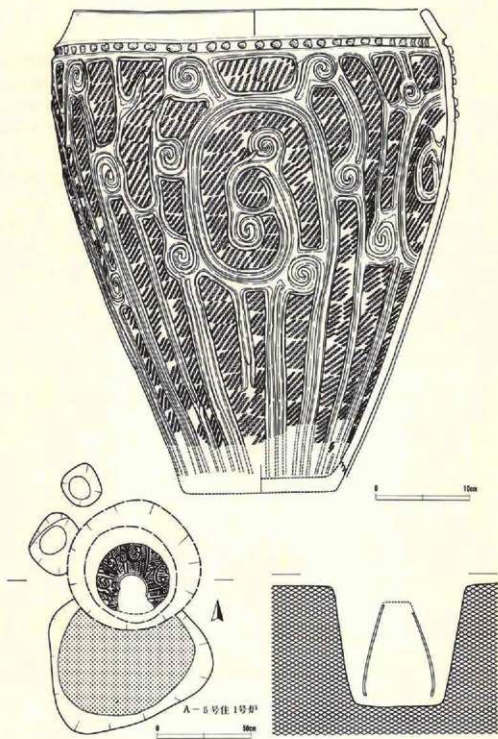
〈その他〉土器の内部からは全く遺物はなく、掘り方と思われる部分も無遺物である。

〈時期〉大木8b式であり、縄文時代中期に属する。

人骨群 (第66～68図、写真図版18・19・20)

〈検出状況〉A-8号住精査中に、炉に接した北側部分にやや盛り上がった黄褐色粘土の貼床状の箇所(130×55cm、66図参照)を検出した。A-8号住の炉の掘り方および貼床とおもわれる部分を掘り下げたところ人骨とおもわれる骨片が散乱していた。さらに周辺を精査したところ底部穿孔し倒立した土器を検出し、墓と確認した。

〈形状・模様〉A-1号埋壘と同様、真砂土混じりの地山を掘り下げ埋土も同様であるので、土壌の輪郭の確認はわずかしく、北西、北東、南側に浅い掘り込みを検出できたのみである。推定では東西135cm、南北115cmの楕円形状を呈する。A-8号住の貼床状粘土は南側の掘り込み部分で一部が一致する。おそらくこの粘土は人骨埋葬後に土壌全体を覆っていたものと推定される。人骨を取り除いた土壌の底面と壁とおもわれる部分には粘土貼付の痕跡は認められなかった。土壌の東側、3号人骨の南側に直径約40cmの卵形の掘り込みが見られたが少量の骨片が出土したのみである。出土した人骨はA-8号住の床面より低いが、穿孔土器の底部は、床面より上にあり、A-8号住炉石の上面と倒立土器の底部がほぼ同じレベルである。A-8号住

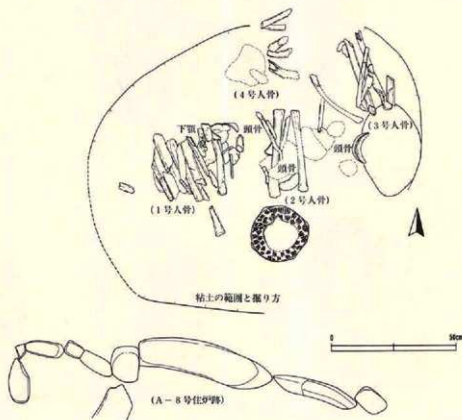


第65图 A-1号·埋葬·土填

の床面を掘り込んで埋葬したものと考えられる。

遺物 (第67～69図、写真図版19・20)

〈人骨〉図示したように死者を直葬したものではなく、複数人の骨が一緒に埋葬されている。検出時は頭蓋骨、大腿骨、上腕骨が複数認められたため、それぞれ1号～4号までの番号を付した。1号骨とした範囲からは下顎、下顎枝、頭蓋骨の一部、乳様突起、橈骨、上腕骨、大腿骨が、2号骨では頭蓋骨、大腿骨などが、3号骨では大腿骨、上腕骨などが、4号骨では腕、足の部分および部位不明の骨片を検出した。基本的には頭蓋骨、顎骨の上に長い骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨などの四肢骨をほぼ南北方向に並べるような形となっており、明らかに改葬あるいは再葬の形態である。骨そのものは貝層も含まず非常に脆く、薬品で固めて取り上げを試みたがそれでも脆弱で、やむなく骨を含む土ごと切り取り現場の作業を終了した。所内に搬入後、バインダー処理をした後大きな部位は割出できたが、細かい骨、脆弱な骨は不可能でありその状態のままで分析・鑑定を札幌医科大学に依頼した。その結果については別途報告するが、ここでは埋葬の状態について記述する。



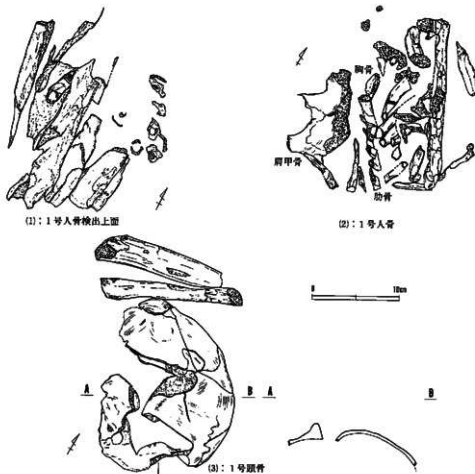
第66図 人骨群出土状況

1号人骨：検出時にみえた大腿骨等の下に頭蓋骨が左側を下に、眼窩を南に向けてあり、頭蓋骨の左側とほぼ同じレベルで北、北東側に椎骨、胸骨、肩甲骨などが検出された。(写真図版 20) ただし脆いため明瞭な形では検出できなかった。

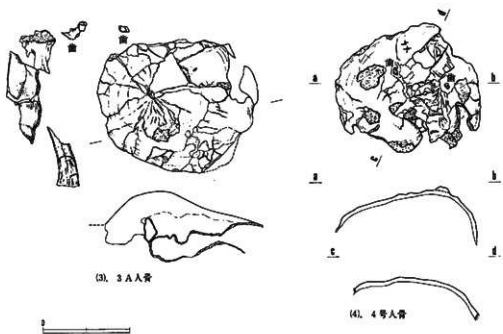
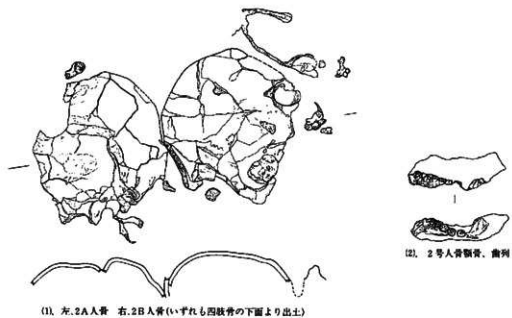
2号人骨：1号人骨と同じく長さのある四肢骨が並べてあり、その下に2個の頭蓋骨を削出した。(写真図版 20) 右の前面が眼窩とおもわれ、2体並べて安置した様子である。2-B 骨の右側には4個の歯が、上には歯の一部が残っている下顎骨が削出された。第 68 図上の顎骨と歯は 2号人骨の下から削出したものの実測図である。

3号人骨：同じく四肢骨の下から頭蓋骨を削出。おそらく2体分と推定される。3-A 骨は図ではやや省略しているが、頭蓋底が逆さの状態にあり、周辺には歯が数点散在していた。3-B 骨は頭頂あるいは側頭部分とおもわれるが破損が甚だしく不明。1体の可能性もある。

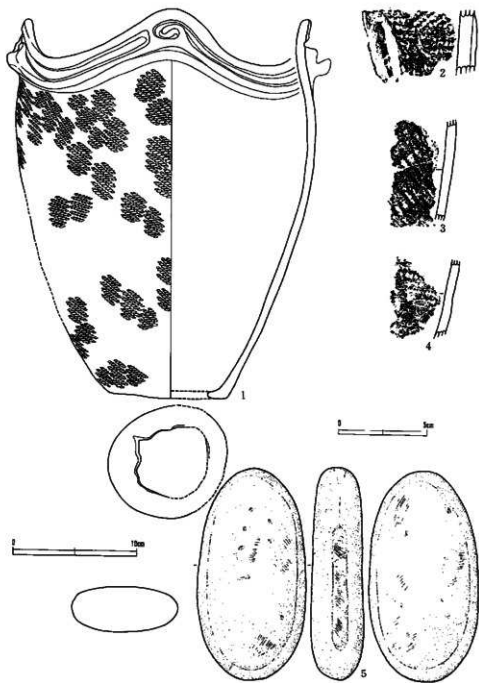
4号人骨：検出時最も保存の悪い部分で、上面の四肢骨を明瞭に検出しえなかった。その下頭



第67図 1号人骨検出状況図



第68図 2~4号人骨検出状況図



第69図 人骨群に伴う遺物

蓋骨の部分(頭頂部?)を削出。削出する際、四肢骨と頭蓋骨の間から数本の、頭蓋の直上(4号人骨図の太い部分)からも2本の歯が見られた。

以上、頭蓋骨を中心に記述したが、この周辺には小さく破損あるいは風化した骨が無数に検出された。少なくとも検出の段階では5~6体分の頭蓋骨が認められた。「頭」はかなり意識された状態で安置されているが、顎骨、歯はその周辺にはあるがやや離れて削出されるものが多かった。頭蓋骨の数に比較して四肢骨を除く他の骨は少ない。仮に腐食によって消失したとしても、椎骨、肋骨、骨盤、指骨などは少なく、主要な部分のみを改葬した可能性が高い。また、骨の配置、向きなどから判断すると、時間を経て追葬したものではなく、一時的にこの場所に埋葬されたものである。頭位については残存状態が悪く、傾向については分析できなかった。

〈土器・石器〉倒立土器のほかには人骨検出面および検出に至る間のA-8号住床面下から2~4の土器を、1号骨の近くで5の擦石が出土したが、副葬品かどうかは不明、混入した可能性の方が高い。1は口径23.7cm、高さ31.2cm、最大径27.2cmで、口縁部は4個の突起をもち、その下の頸部に右巻きの渦文が横に展開する。頸部より下はRL横回転の縄文、底部は焼成後の打ち欠きで、外から内へと割っている。内面はミガキであるが器壁はやや脆い。煤、炭化物等の付着はない。写真図版18では底部が欠けているが、掘り下げ中に胴下半部が崩れ落ちたためである。

〈時期〉縄文時代中期に属する。倒立土器および2の破片は大木8b式土器の特徴を示しており、

(3) 土 壇

K-1号土壇(第70図、写真図版21)

〈検出状況〉Kグリット掘り下げ中に土器片および焼土粒が集中する地点を確認。掘り下げたところ不定形の土壇を検出した。

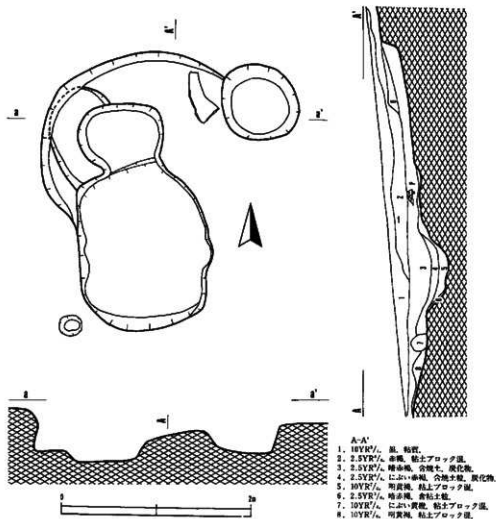
〈形状・規模〉規則性をもった掘り方ではなく、各底面とも堅められた痕跡もなく、単に掘ったままの状況である。最も深い個所で検出面から60cmを測る。

〈埋土〉1、2層には焼土ブロックが混入しており、2層では特に著しい。4、5層、7、8層は粘土塊が投げ棄てられた状態で混じる。各層から土器片も数多く出土している。凹地に土器片、焼土、炭化物、粘土を廃棄した状態を示している。

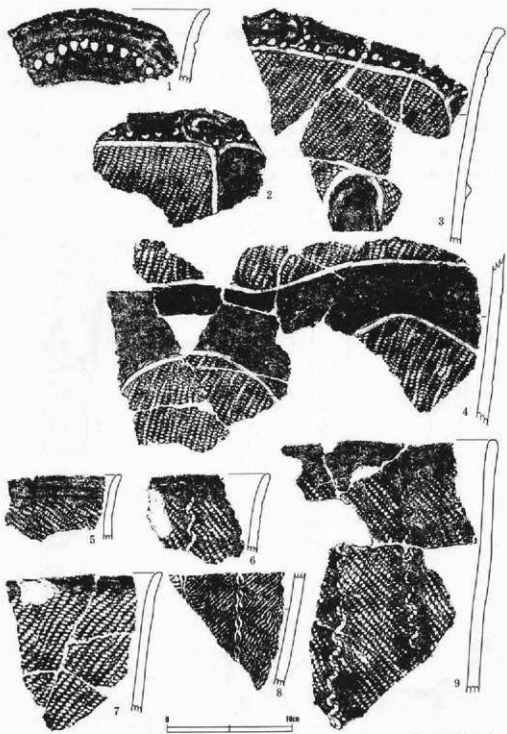
遺物(第71~74図、写真図版53~55)

〈出土状況〉埋土中からまんべんなく出土している。掲載したうちの1/3は東側の、ほぼ円形に近い土壇の掘り込みからの出土。層位毎による土器の新旧はみられないが、1~9が埋土下層、10~25が中層、26~30が上層に分けられる。

〈土器〉1はゆるやかな波状口縁が外反する深鉢、頸部は弧状に竹管が通る。2~4は同一個体で、口縁部には三日月状、馬蹄状の突起が、体部にも馬蹄状の突帯(起)がつく。6、9は縄文の綾絡文、8は担糸文の綾絡文。10は複合口縁の上に人形状の、刻みをもつ粘土貼付文、胎土・焼成はK-1集石出土の1によく似る。11~13はタテの綾絡文をもつ深鉢、12の底部は木葉痕。13は口縁下に沈線が入りその上は無文。15は底部網代痕で胴上半部を失っているが、破損部分を擦って平らにし再利用した深鉢。16は原体圧痕による施文で大木7b式。17は充填縄文手法による施文で、大木9式。20は頸部に2段の刺突列、21、22は後期の土器で前者は壺の頸部、後者は体部。23は弥生時代初期の壺体部。26は文様中央に刺突をもつ小形鉢。28はゆるや

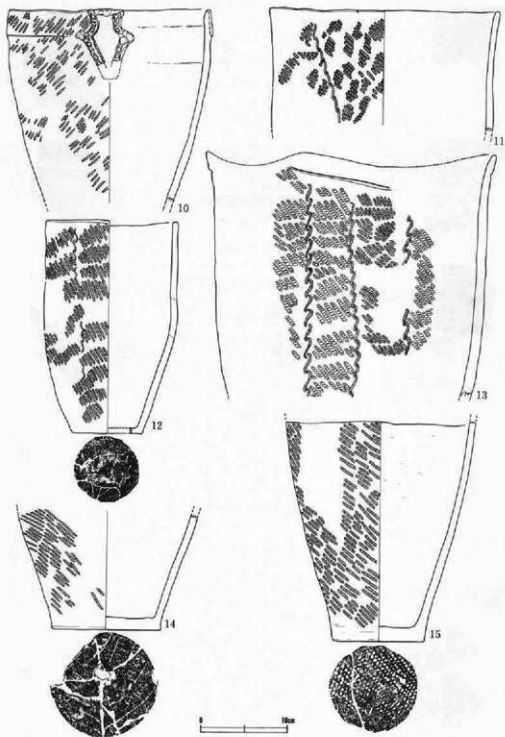


第70図 K-1号土墳



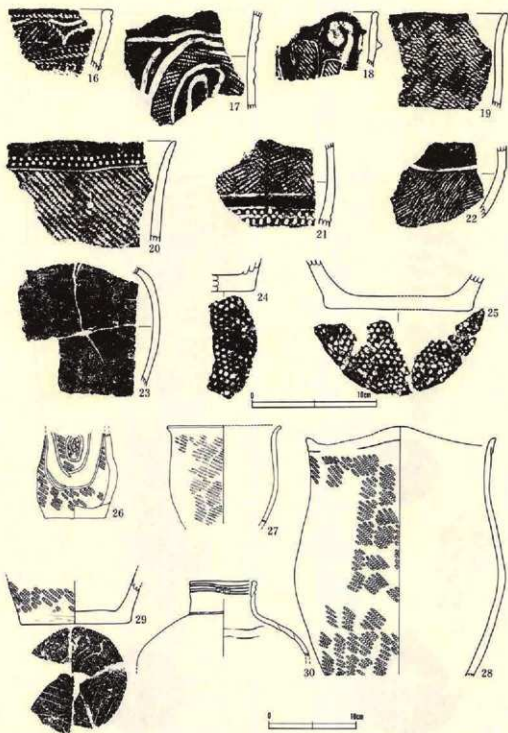
[1-9·埋土下層]

第71圖 K-1号土壙遺物(1)



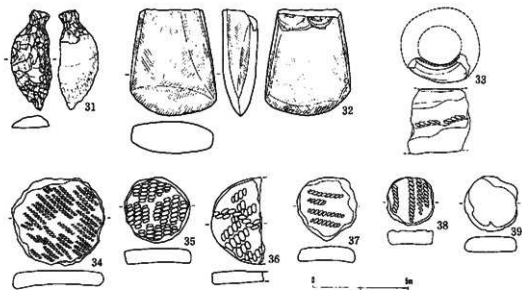
(10~15・埋土中層)

第72図 K-1号土壙遺物(2)



[16~25・埋土中層、26~30・埋土上層]

第73图 K-1号土壙遺物(3)



[31-39・北側掘込]

第74図 K-1号土壌遺物(4)

かな複合(折り返し)口縁をもつ深鉢。30は23と同時期で、口縁部に2個一對の貼瘤をもつ甕。

〈石器〉2点出土。31は縦形の石匙でつまみ部分のみ両面加工。32は定角石斧で中央部から折損、刃部には微細な刃こぼれがある。

〈土製品〉33は推定径4cm、幅3.4cmのプレスレット状に環状をなす土製品。中央横方向に摺糸の原体圧痕がある。腕輪としては内径が小さく、雑な作りではあるが耳飾りの可能性もある。34～39は土製円盤ですべて土器片を利用している。39は底部、36の右半分は欠損、34と37は周辺を打ち欠いただけであるが、他は打ち欠き後擦り上げて整形している。

〈時期・性格〉底面から出土する土器は大木10式が多く、この時期の土壌とおもわれる。土壌のプランには規則性がなく、底面のレベルも一定しておらず、地山が粘性のある土であることなどから判断すると、粘土探掘した跡と考えるのが妥当とおもわれる。

(4) 集石・配石

K-1号集石 (第75図、写真図版21)

〈検出状況〉K-1号土壇の南側2mの地点で礫の集りとともに、周辺に焼土が散乱する状況を確認した。

〈形状・規模〉一辺約90cm前後の方形に近く、周囲は大きな長方形の風化した花崗岩をめぐらし、中には小さな花崗岩および数個の川原石が含まれている。石の間からは数個の縄文土器片が出土した。石の下には土壇等は検出されなかったが、焼土、灰、微細な土器片がブロック状に3~5cmの厚さで堆積しており、かすかにマウンド状を呈する。焼土は集石の周辺にブロック的に分布しており、その下は黄褐色粘土層である。

遺物 (第75・76図、写真図版56)

〈出土状況〉石の間、石の上面、焼土中、焼土周辺から出土するが、状況に統一性がないのでまとめて図示した。1、5~8、13、14が焼土部分、2~4、9~12、18が石の部分からの出土で、それぞれ各期の土器が混在している。

〈土器〉1は半月状および蛇行するような隆線を貼り付けた後に平行沈線をひき、一部には半截竹管の刺突がみられる大木7b式。胎土は多量の石英・長石を含む。2は太い沈線。3は複合口縁の深鉢。9は波状口縁で3本沈線による施文で晩期。10、11は磨消縄文をもつ後期の壺。12は晩期末葉または弥生初頭の甕。15は晩期の注口土器。14の胎土、焼成は1に近い。

〈石器〉4点出土。16は両面剝離調整してあるおそらく石匙。17、18は磨製石斧で17は刃部を欠き、全面に斜行する擦痕が走る。18は基端部に着柄のための凹凸、擦痕がある。19は正面と右側面に擦痕のある擦石。

〈時期〉集石の性格を知り得る資料は出土しなかった。出土した土器も中、後、晩期にわたっており、限定はできない。

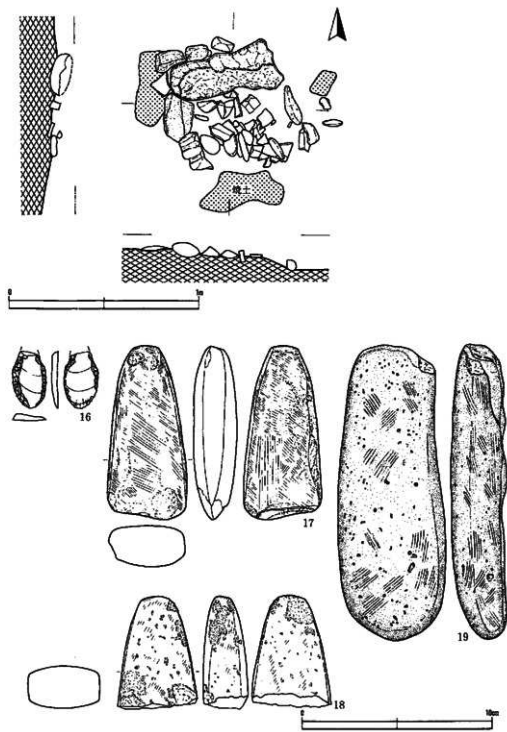
H-1、M-1配石 (第77図、写真図版15)

〈検出状況〉H・Mグリットにまたがり表土直下で検出された。西側にG-2号住、東側にI-1、I-2号住、南側にM-1号住といずれも平安時代の竪穴住居跡がある。

〈形状・規模〉本来同一の配石遺構の可能性もあるが、構成礫に違いが認められたので2基として扱った。H-1は礫が比較的大きく、M-1は小さな礫で構成されている。両者とも表土直下であるので礫は移動しているとおもわれるが、H-1は半円状を、M-1はS字状を呈する。礫は風化した花崗岩と川原石で構成され、前者の数が多し。

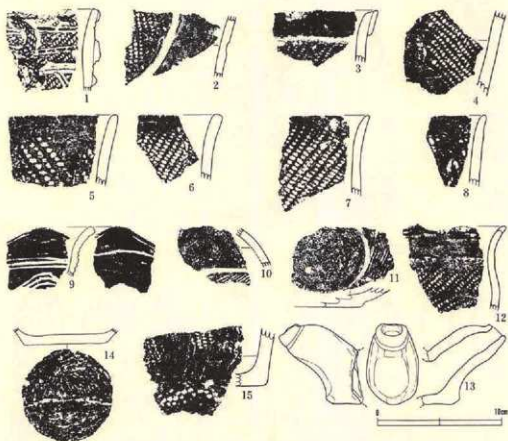
〈埋土〉礫を含む層には微細な炭化物片と土器細片が混り、その下層はやや砂質土で1層の土が小ブロック状に混る。掘り込み遺物等は検出されなかった。

〈遺物〉なし

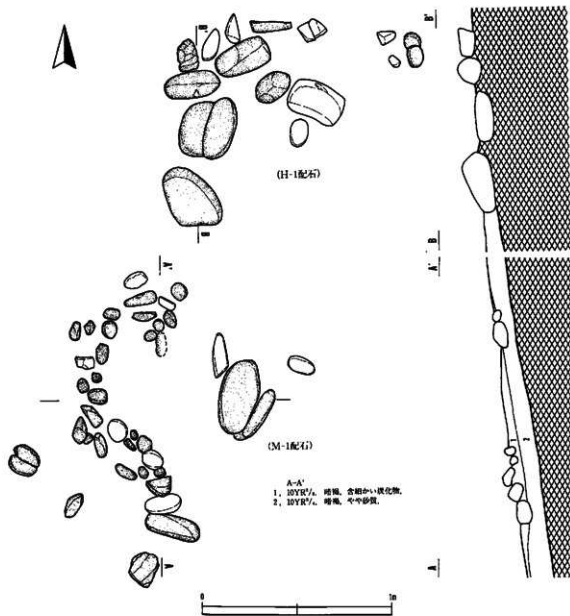


第75图 K-1号集石实测图・出土遗物(1)

〈時期〉 遺物がなく決定材料に乏しいが、縄文時代の可能性の方が高い。



第76図 K-1号集石遺物(2)



第77図 H-1・M-1号配石

(5) 炉 跡

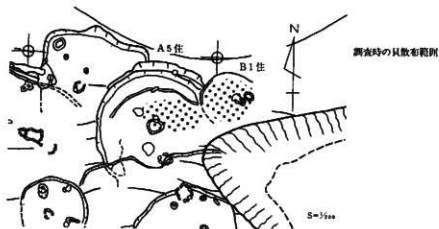
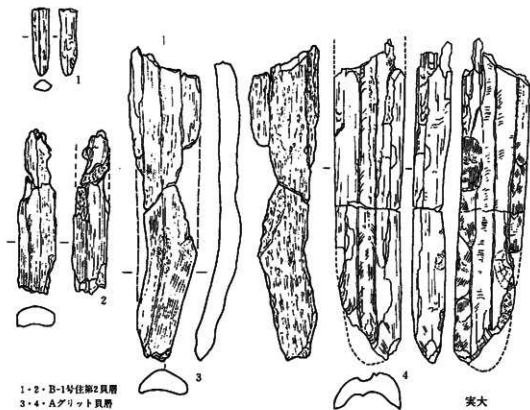
V-1号炉 (第60図、写真図版15)

調査区南端を東流する沢に面するVグリットの最下層で検出された。55×50cmの方形石囲炉である。炉内からの遺物はなく、焼土もあまり発達しておらず、2層に炭化物、焼土の小ブロックが混る程度である。竪穴住居となるべき柱穴、壁は検出されず、周辺からは遺物もほとんど出土していない。したがって時期は不明。

(6) 骨角器 (第78図、写真図版57)

4点が出土している。1と2はB-1号住居跡第2貝層の出土で、3と4はAグリットに極めて薄く存在した貝層中からの出土でB-1号住に近い箇所からの出土である。骨角器とおもわれる遺物は以上の4点のみで、釣針や鈎などの出土はなかった。調査区内の貝分布範囲は78図下段に示してある。

1は鹿角の一部を利用した骨針状の先端部である。磨きの痕跡が残っている。断面は菱形を呈する。2、3、4は鹿の中足骨あるいは中手骨を縦に分割した骨ペラである。断面から観察すると二分割にしたものである。打割の方法は保存状態が悪く、擦り切り痕などは観察できない状態にある。また、遠位端、近位端のどちら側を用いたかも不明である。三陸海岸の縄文中期の骨ペラは縦割で二分割の資料が多い、と指摘されているが(熊谷1987)本貝塚の3例もそれに該当している。



第78図 骨角器、貝分布図

2. 弥生時代の遺構と遺物

F-2 号住居跡 (第 79 図、写真図版 58)

〈検出状況〉F-1 号住 (奈良時代) の精査中に検出された。南側は黒褐色土中に壁と床が在ったとおもわれるが、傾斜しているため検出できなかった。東側の壁、床とも黒褐色土中にあり、かすかな土色の差で判断したが、壁自体非常に浅く疑問は残る。北側で F-1、F-3 号住と重複している。F-1 号住の掘り込みは当住居の上面で止っている。

〈形状・規模〉北側に張り出しをもつ不整形のプランである。東西の一辺は 5.3 m で、南北もこの数値に近いものとおもわれる。東側の壁は上述したように確定されたものではない。

〈埋土〉北から南への自然堆積である。周辺は縄文土器が多く、かつ縄文包含層を床面としているため 3~4 層は弥生、縄文両時代の土器が多い。東と南側は検出面がほぼ床面であったため図化できなかった。

〈壁・床〉ゆるやかに外傾する壁であるが東側は浅い。床は黒褐色土の面につくられており、堅く踏みしめられている。東西はほぼ水平であるが、南~東側は傾斜しながら不明瞭となり検出できなかった。

〈柱穴〉18 個を検出した。P₁~P₃ が径・深さとも同じような規模で主柱穴と推定されるが、西南部分にあるとおもわれた 1 本は検出できなかった。深さ 25 cm 以上の柱穴も他に数本あり、あるいは建替があった可能性もある。P₁₂~P₁₈ は壁柱穴であろう。

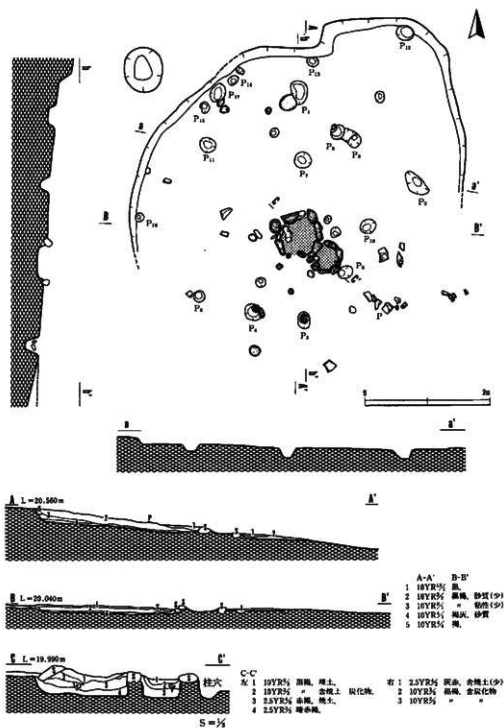
〈炉〉ほぼ中央とおもわれる地点で円形の石囲炉 2 基が連結した状態で検出された。ひょうたん状をしており、くびれ部の石は共有している。径はそれぞれ 75 cm、55 cm である。大部分は風化した花崗岩で露出した部分は崩れて平らになっている。両方とも一時に掘り込んでいるが、大きい方は炉石を深く埋めているのに対し、小さい方は浅く埋めている。前者には厚さ 10 cm に近い焼土があるが、後者の焼土は小ブロック状に混るのみで他は炭化物和灰が多い。強い火力を用いた痕跡に乏しく、前者の炉と同様の使用法ではなかったことを示している。

遺物 (第 80~84 図、写真図版 62~64)

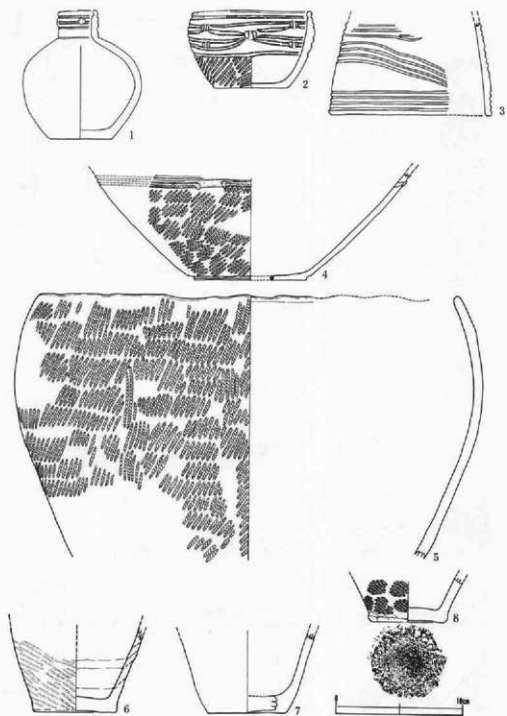
〈出土状況〉埋土黒色土、床面からまんべんなく出土しているが、炉内の出土はない。縄文時代の包含層に築かれているので、床の上下から中期の土器が出土する。

〈土器〉床面出土は 1、3、4、6、8、16、21、25、26 で、炉東南の礫の集まった個所から 2、13 が、7、8、18 が柱穴内から出土した。他は埋土出土。1、9~11 は甕。1、9 は細口の直立す

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	cm
径	36×26	33×25	19×17	30×20	35×31	25×24	22×15	22×15	22×15	22×(20)	
深	30	31	20	25	18	17	54	27	11		
No.	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	
径	17×14	10×7	19×18	15×14	19×17	15×14	18×17	18×15	16×15	16×15	
深	12	5	26	24	34	7	14	15	32		

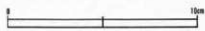
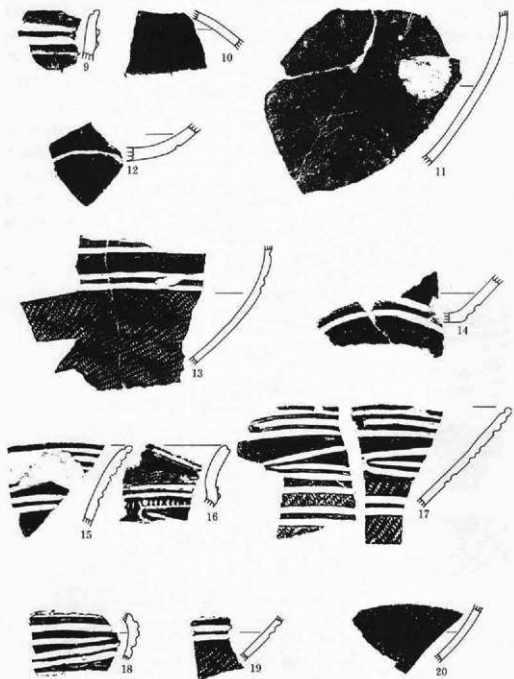


第79图 F-2号住居跡



〔1・3・4・6・8・床、7・8・柱穴、5埋土〕

第80图 F-2号住居跡遺物(1)

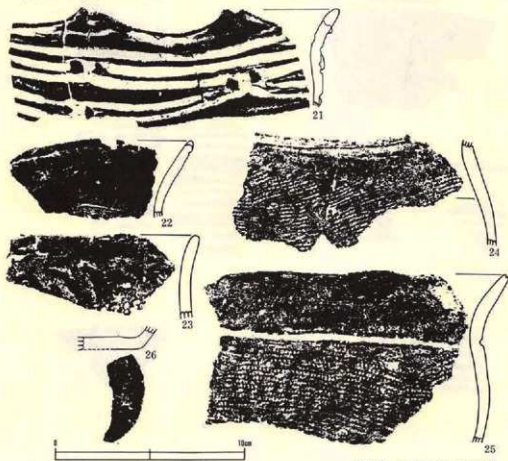


[16床, 18柱穴、他は埋土]

第81图 F-2号住居跡遺物(2)

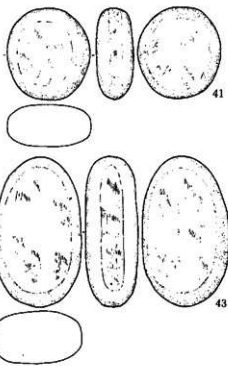
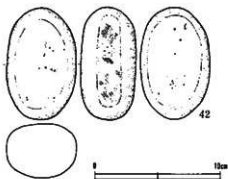
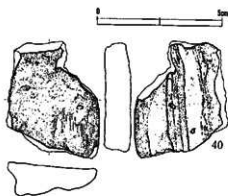
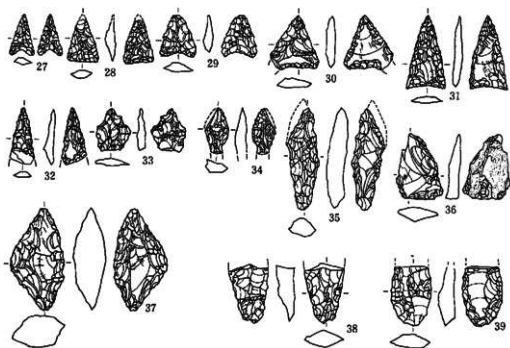
る頸部をもつ、両者とも全面ミガキ。1は黒色。9～11は赤褐色で胎土に金雲母を含む。2は2個一対の貼瘤をもつ小形鉢で縄文施文部以外は丁寧なミガキ。3は高坏脚で丹塗りの痕跡がある。15、19、20、も高坏脚の一部とおもわれるもの。19は丹塗り。4、13、14、16～18は一部高坏の可能性もあるが、浅鉢。12は晩期の可能性もある。いずれも縄文以外の部分は内外底面ともミガキで、丹塗りはない。16は肩部に刻目をもち山形口縁。5～8、21～26は甕あるいは鉢。5はゆるやかな波状口縁で、口縁部は内傾する。6は胎土、原体から判断して縄文中期とおもわれる。7、8は小形鉢でヘラミガキによる成形、8は底部付近をしぼり込んでいる、底部は縄代の上からヘラ成形。21は文様帯をもつ甕で山形口縁の頂部に刻みがあり、モチーフは2に同じ。内面に煤状の付着物がある。22～25は口縁が外反する甕で、22はゆるやかな波状で頂部に刻み、24、25は頸部に沈線がめぐり、縄文は横あるいはゆるやかに斜走する。21の胎土は密で精製されているが他は荒い砂粒子を含む。

〈石器〉埋土～床面で26点が出土したが、埋土の中には縄文時代のものが混在している可能



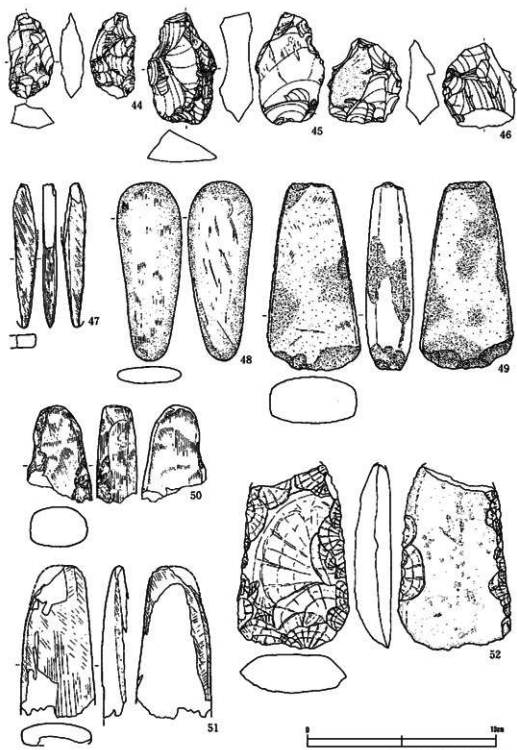
(21・25～26床、22～24埋土)

第82図 F-2号住居跡遺物(3)



[34·41·43床、37炉、29柱穴]

第83图 F-2号住居跡遺物(4)



第84図 F-2号住居跡遺物(5)

性が高い。27～34は石鏝。27～31は無茎で浅い袢り入りの入るものが多い。32は身が細く鋭利で多分有茎とおもわれる。縄文の竅穴内では類例は少ない。33は不明瞭な茎をもつ。34は床面出土で、刃部は丸みをおびるようである。茎の先端は欠けているが全体に太く、石材はチャート質。35～39は尖頭器類で、35は先端を欠くが推定4.5cmで断面は菱形状、基部は磨滅している。36は偏平で大半を欠損。37は左側が三角に張る菱形状の槍で厚さ1.2cm。38、39は基部のみであるが、全体は柳葉状を呈するものとおもわれる。40の図左側は石皿状でよく擦られており、右側は太い2本の凹帯が走り砥石として使用されている。石皿破壊後に砥石に転用したものであろう。41～43は両面および側面も擦っている擦石で41、43は床面出土。44～46は不定形石器。44、45とも肉厚の剥片先端を両側から調整して刃部としている。46も同様とおもわれるが下半分折損。47は断面が長方形と推定される石製品であるが小片のため形態は不明。48は極めて薄く、先端部をすった痕跡があり両面に細い擦痕が走る。49～52は石斧。49は刃部欠損後、両側から打欠き二次的に刃部整形したものであるが、刃はかなり鈍くあるいは敲石に転用したものかもしれない。50は上端部のみ。51は下半部および裏面が縦に割れ欠損している。52は片側に自然面を残す石斧で、自然面の両側を小さく剥離して調整している。通常この種の石斧は自然面の側がふくらんで湾曲するが、52は逆に剥離面が湾曲している。柱穴内からの出土で床面下層の縄文時代に属する可能性が高い。

〈時期〉床面出土の土器は本県の弥生式土器の最も古い時期の様相を示している。弥生時代初頭。

F-4号住居跡（第85図、写真図版59）

〈検出状況〉黒色土中に構築されているので上面では明瞭なプランを把握できなかった。炉の検出、遺物の出方に頼ったため、壁、埋土上部をある程度削った可能性が高い。南側でL-2号住と載り合っているが、F-4号住の床は明らかにL-2住の床・壁面より上にあり、むしろ上下で重複している。

〈形状・規模〉5.2×4.7mの隅丸方形状である。

〈埋土〉遺構検出面が深かったため3層を確認したのみである。いずれの層にも真砂土が含まれている。1層中には焼土の投げ捨てがみられる。遺物はいずれの層からも出土している。

〈壁・床〉地形の傾斜に沿って北側で20cmと高く、南側で10cmの壁を確認した。地山面までの掘り込みはなく、一部不確実な箇所もあるが外傾する。床は黒色土を踏み固めている。北と南では25cmのレベル差がある。

〈柱穴〉床面と東側の壁に沿って計18個を検出した。主柱穴はP₁～P₇のいずれかと推定され、P₁～P₄、P₁～P₃・P₅などの組合せが考えられるが、いずれも正・長方形とはなり得ない。

東南隅に2個一対の小柱穴はあるいは出入口遺構との関連が考えられる。

〈炉〉床面やや北寄りに石囲炉をもつ。8個の礫で構成され5個は風化した花崗岩、他は角礫である。60×70 cmのほぼ円形で掘り方が認められた。炭化物と焼土の層はそれぞれ5 cmほどの厚さである

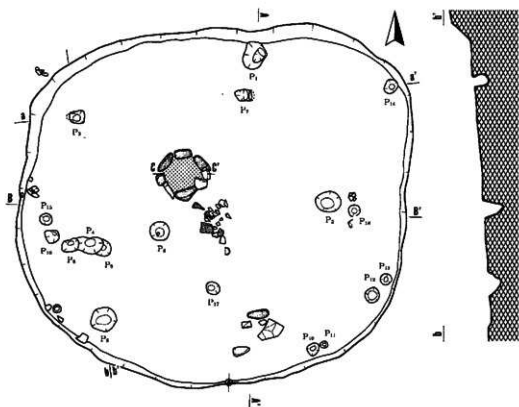
遺物（第86～90図、写真図版65～67）

〈出土状況〉床面、埋土から出土。炉内は無し。炉の周辺、特に南側からは復元可能な壺、甕類が出土している。

〈土器〉1～2は床面出土の壺。1は中形で口縁部が外反し細い平行沈線が巡り、口唇部には小突起がつき、体部は縄文が横走る。2は1をやや小形化した器形で細かい縄文が横走る。底部はヘラ成形。1、2とも肩はなだらかで最大径は胴中央部にある。3～6は床面出土の甕。3は大形甕で縄文は胴下部で斜行する。4は頸部ほぼ直立、5、6は外反し、いずれも口縁～頸部は横ナデで縄文は横走る。胎土は砂粒子を多く含む焼成は堅調である。3を除いて加熱痕がある。7～15は鉢、浅鉢あるいは高坏片で13は床面、11は柱穴内の出土。変形工字文をもつ12、14、15は凹みのある波状口縁をもち丁寧に磨かれている。14は沈線に丹塗り。16～18は高坏脚部で16、17は三本沈線の波状文で、18は太い平行沈線のみ。16には丹塗痕。19、20は無文の小形鉢。21～30は甕。ただし27は器壁が薄く丹塗りがあり壺の体部となる。21は頸部に地文の上から三本の沈線をまわし、口縁にはB突起がつく。22は比較的頸部が長く、中段がやや膨む。23の3片は同一個体で底部は網代痕、口縁部は押し付けによる小波状文で頸部にも縄文を付す。24は波状口縁で頸部を強くナデ、縄文との区別を明確に意識している。26は原体斜行し縄文土器的であるが胎土は明らかに他の甕と同質である。26と31を除いて縄文は横走る。底部は網代、木葉、ナデの三者がある。

〈石器〉9点出土。33は無茎抉り入石鏃、34は基部が丸みをおびる円基鏃。35、36は尖頭器として扱うが鏃の可能性もある。35は茎が三角形で、身が長い形態となる。先端部は欠損している。36は断面菱形を呈し、先端部はやや黒ずんでいる。37は石錐で先端部欠損。38は凝灰質砂岩製の紡垂車で推定径6.2 cm、残存重量は44 g。全重量は推定で90 gとなり、紡垂車としては重い部類に入る。下面は平らで上面が盛り上がり台形状を呈する。周縁は厚さ5 mmできれいに磨かれている。上面の孔の周辺は小さな剥離が連なり凹んでいる。孔の径は上下ともほぼ同じであり、穿孔の際に軸が回転してついた横に走る凹みがついている。竪穴南側の黒色土から出土。39は基端部が細い磨製石斧で乳棒状に長く太い形になるものと推定される。40は軽石で全体に角張っており面取りされた可能性もあるが、小片のため詳細は不明。41は両面に擦痕をもち側面に敲打痕をもつ。

〈時期〉床面出土の土器は弥生時代初頭の特徴を示す。



C L = 10.600m C'

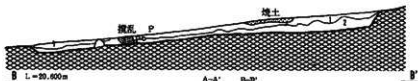
- C-C'
1. 10YR^{6/2}/s. 面,
 2. 5YR^{7/5}/s. 灰褐, 含炭化物(多),
 3. 5YR^{7/5}/s. 灰褐-赤褐, 烧土,
 4. 10YR^{6/2}/s. 暗褐.



A L = 20.600m



A'



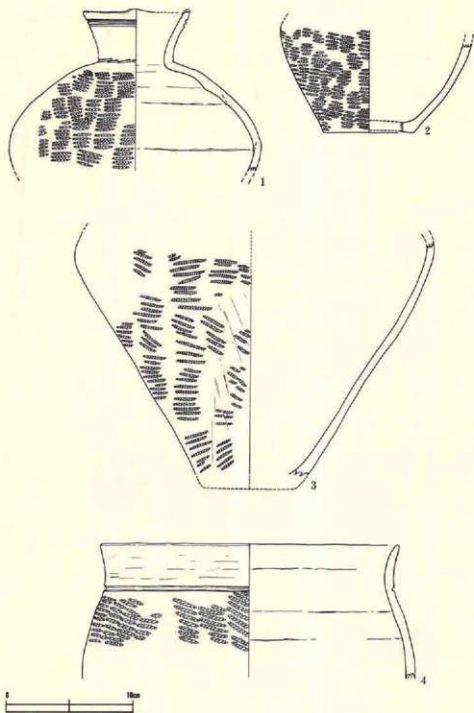
B L = 20.600m

- A-A' B-B'
1. 10YR^{6/2}/s. 灰, 灰,
 2. 10YR^{6/2}/s. 灰, 含炭化物, 土砾,
 3. 10YR^{6/2}/s. 灰, 黄土层.



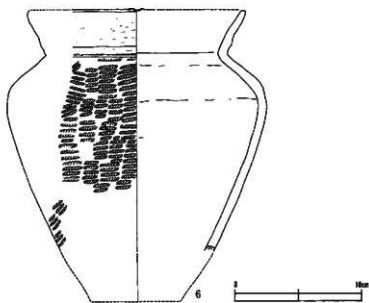
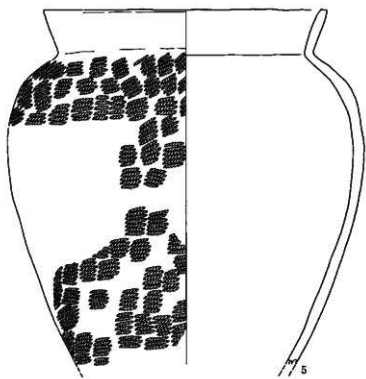
CM										
10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110
10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110
12	24	36	48	60	72	84	96	108	120	132
14	28	42	56	70	84	98	112	126	140	154
16	32	48	64	80	96	112	128	144	160	176
18	36	54	72	90	108	126	144	162	180	198
20	40	60	80	100	120	140	160	180	200	220
22	44	66	88	110	132	154	176	198	220	242
24	48	72	96	120	144	168	192	216	240	264
26	52	78	104	128	156	180	204	228	252	276
28	56	84	112	136	168	192	216	240	264	288
30	60	90	120	144	180	204	228	252	276	300
32	64	96	128	152	192	216	240	264	288	312
34	68	102	136	160	204	228	252	276	300	324
36	72	108	144	168	216	240	264	288	312	336
38	76	114	152	176	228	252	276	300	324	348
40	80	120	160	184	240	264	288	312	336	360
42	84	126	168	192	252	276	300	324	348	372
44	88	132	176	200	264	288	312	336	360	384
46	92	138	184	208	276	300	324	348	372	396
48	96	144	192	216	288	312	336	360	384	408
50	100	150	200	224	300	324	348	372	396	420
52	104	156	208	232	312	336	360	384	408	432
54	108	162	216	240	324	348	372	396	420	444
56	112	168	224	248	336	360	384	408	432	456
58	116	174	232	256	348	372	396	420	444	468
60	120	180	240	264	360	384	408	432	456	480
62	124	186	248	272	372	396	420	444	468	492
64	128	192	256	280	384	408	432	456	480	504
66	132	198	264	288	396	420	444	468	492	516
68	136	204	272	296	408	432	456	480	504	528
70	140	210	280	304	420	444	468	492	516	540
72	144	216	288	312	432	456	480	504	528	552
74	148	222	296	320	444	468	492	516	540	564
76	152	228	304	328	456	480	504	528	552	576
78	156	234	312	336	468	492	516	540	564	588
80	160	240	320	344	480	504	528	552	576	600
82	164	246	328	352	492	516	540	564	588	612
84	168	252	336	360	504	528	552	576	600	624
86	172	258	344	368	516	540	564	588	612	636
88	176	264	352	376	528	552	576	600	624	648
90	180	270	360	384	540	564	588	612	636	660
92	184	276	368	392	552	576	600	624	648	672
94	188	282	376	400	564	588	612	636	660	684
96	192	288	384	408	576	600	624	648	672	696
98	196	294	392	416	588	612	636	660	684	708
100	200	300	400	424	600	624	648	672	696	720

第85图 F-4号住居跡



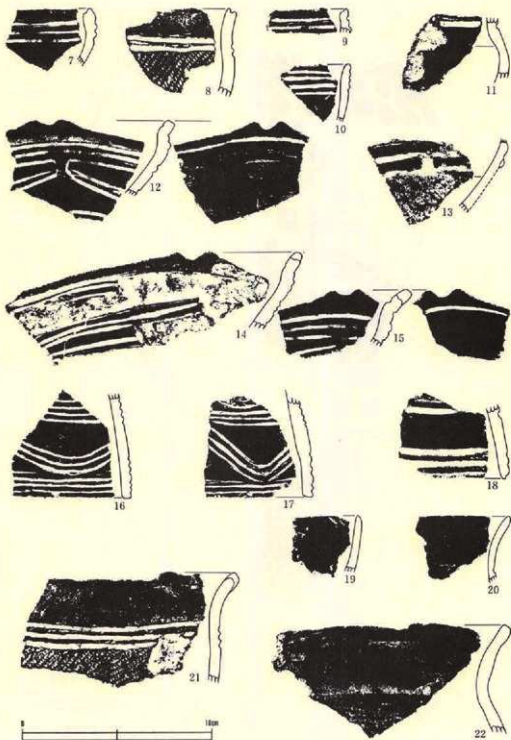
【1~4枚】

第86図 F-4号住居跡遺物(1)



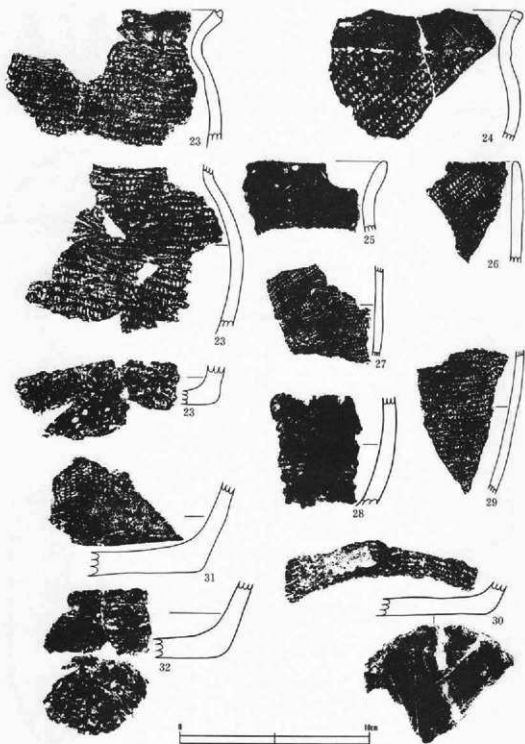
[5-6cm]

第87図 F-4号住居跡遺物(2)



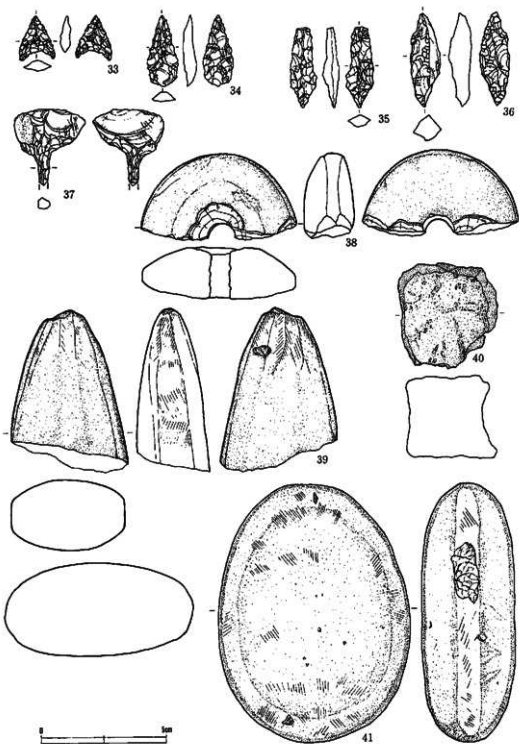
[13・17・20床、11柱穴、他は埋土]

第88図 F-4号住居跡遺物(3)



[29~30床、他は埋土]

第89図 F-4号住居跡遺物(4)



第90図 F-4号住居跡遺物(5)

[33-37床面 他は埋土]

G-3号住居跡（第91図、写真図版60）

〈検出状況〉Gグリット付近一体は土取りによって削平されており上部はすでになく、黒色土中から炉石が検出され住居と判明した。北側は深く削り取られており、南側も大部分が削平されておりプランは把握できなかった。東側は炉をはさんで平安時代のG-1号住と重複している。

〈形状・規模〉径5.5mほどの円形に近いプランと推定される。

〈埋土〉上部が削平されているため詳細は不明。床面直上には炭化物、土器片を含む黒色土が堆積していた。

〈壁・床面〉北、南、東側は載られており、西側にて外傾する最大深27cmの壁を検出できたのみである。床面は地山面までは掘り下げておらず、黒褐色土を堅く踏みしめている。

〈柱穴〉10個検出したが、深さ、配置から判断してP₁~P₄が主柱穴と推定される。ただしP₁は土師器を伴うG-1号住の柱穴と重複している可能性がある。主柱穴の位置が正しいとすれば、かなり壁際に寄った配置となる。

〈炉〉やや東側と推定される位置にある。90×60cmの楕円形状を呈する。西側と東側には厚さ7~8cmの偏平な石を配置し、南北は細長い石を立てて囲んでいる。西側の偏平石にかかって壺形土器の破片が出土している。焼土層と炭化物・焼土粒を含む層はそれぞれ5cm前後である。

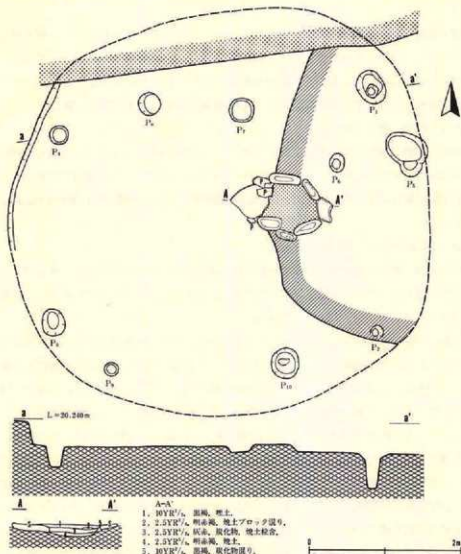
遺物（第92~95図、写真図版68~70）

〈検出状況〉埋土上部が削平されていたため床面出土の遺物の方が多いが、擾乱があるのですべて原位置を保っているかどうかは不明である。偏平炉石の上から5の壺が出土。床面以外の土器は17、20、28、31、33の5点である。

〈土器〉1、7~12は壺。1は炉内出土で全面ミガキ、外面に加熱痕がある。7、8は同様の文様、器形であるが7は細頸、8は太く筒形状となる。9は肩の部分にやや太い沈線による変形工字文、12は胴中央とおもわれる部分の平行沈線間に波状（山形）文がめぐる。頸部の沈線は弧状の可能性もある。色調は赤褐色で他の土器とは異なる。内面にかすかに輪痕があり、これを水平におくと文様は90度横、即ち平行沈線はタテに、弧文は円形（同心円）状となる。とすれば類例のない文様となるので、図のように示した。2~4、13~19は浅鉢あるいは高環の坏部の破片。ただし高環脚部の出土はない。2は底部が小さく胴に段をもつが、2個一対の貼瘤はもたない。内外面とも丁寧なミガキで胎土には金雲母を含む。3は極めて雑につくられた鉢で、沈線、文様の区画も雑で器壁も厚い。沈線部分に円塗りの痕跡があり、内外面は細かいハケ状の工具で整形している。4は貼瘤のある浅鉢であるが器面にはタール状の炭化物が付着しており加熱されている。22は壺の可能性もある。23の鉢は貼瘤の間を深く挟っている。5、24~33は

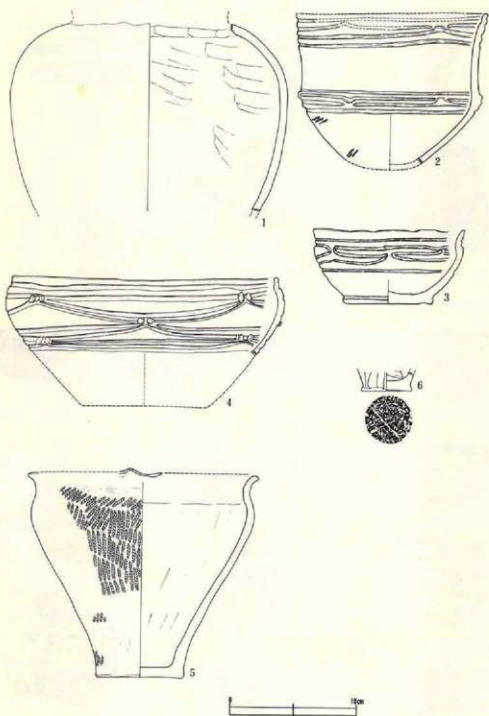
5は胴下部が細くなるあまり類例のない器形で、26、28と同様、頭部の無文帯を地文の上から強く削り出すようにして製作している。24を除いて斜行する縄文が多いが、30は中途から横走する。34は小形壺の底部、35はおそらく浅鉢の底部。

〈石器〉出土した6点とも床面検出。36、37は縦形の石匙で、36は三日月状でチャート質。37はつまみ部分欠損。38は小形磨製石斧で基部に敲打痕がある。斧としてよりはクサビ的な機能が考えられる形態である。39、40はいずれも幅広い石斧であるが、始刃ほどの厚みはない。刃部には刃がこぼれがありよく使いこんでいる。擦痕はななめに走る。39は稜線も磨耗してい



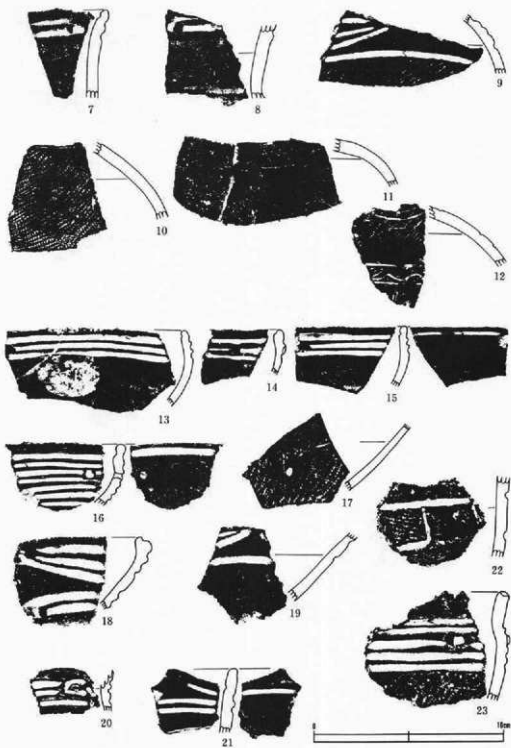
柱穴	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径	45×36	20×18	36×30	34×24	28×(28)	24×18	32×30	30×30	18×18	46×37
深	47	35	35	29	26	6	9	17	46	15

第91図 G-3号住居跡

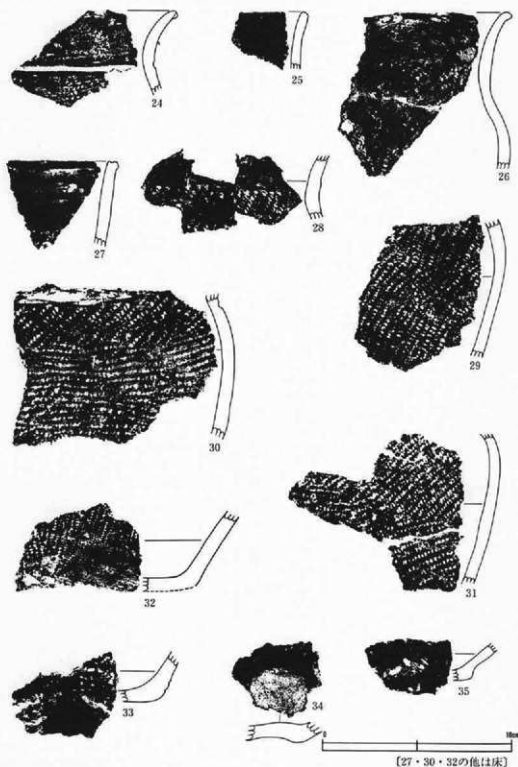


[1は¹, 2~6は²]

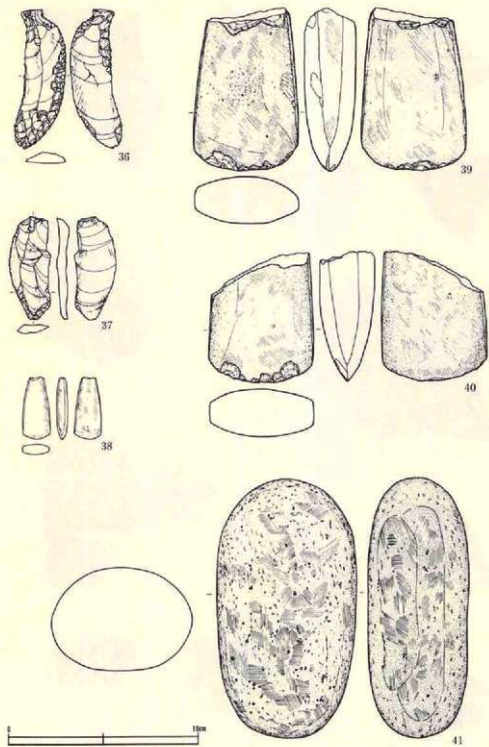
第92図 G-3号住居跡遺物(1)



第93図 G-3号住居跡遺物(2)



第94図 G-3号住居跡遺物(3)



第95图 G-3号住居跡遺物(4)

[36~41(床)]

る。2点とも、凝灰質砂岩製。41は両面と側面に擦痕のある擦石で、特に側面は光沢がある。

〈時期〉12の土器には若干の問題は残るが、他の土器は弥生時代初頭の諸特徴を示している。

K-1号住居跡（第96図、写真図版61）

〈検出状況〉Kグリット黒色土掘り下げ中に炉石を検出した。壁、床面とも黒色土中に入ったため当初遺構とは気づかず、土層断面図は作図できなかつた。北側でL-2号住と重複するが、L-2号住を載っている。

〈形状・規模〉北西部の壁を検出したのみであるが、炉が中心にあると仮定すれば径5.8m×5.0m前後の隅丸形状のプランが考えられる。

〈埋土〉図化できなかつたが肉眼の観察によれば略F-2号、L-2号住と同様である。

〈壁・床面〉北西部の壁はゆるやかに外傾するが他の部分は流失、載り合いにより不明である。床は炉より北側では黒褐色土を堅く踏み込んでおり明瞭であるが、それより南側は傾斜しており不明。床面としていた黒褐色土は検出できず、おそらく流失したものと考えられる。

〈柱穴〉住居内と推定した範囲から10個、周辺も含めると13個を検出した。主柱穴は深さ30cm以上のP₁~P₄とおもわれる。住居外と想定したP₁₁~P₁₃もあるいは住居内のものとなる可能性もあるが、そう仮定すると炉の位置は北側に寄ることになる。

〈炉〉やや北側と推定される個所に径60cmの石囲炉を検出。本来8個の礫で構成されていたものと思われるが2箇所で礫が失われている。掘り方をもち深さ11cmを測る。花崗岩の炉石は上部が崩れ床と同一レベルとなっている。焼土は2層に5~6cm堆積している。

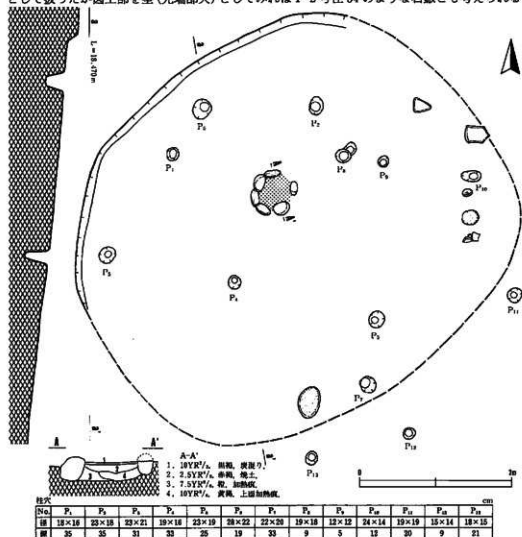
遺物（第97~101図、写真図版71~73）

〈出土状況〉床面と埋土から出土し、炉内からはない。南側の面は床が把握できず、埋土出土として扱った。

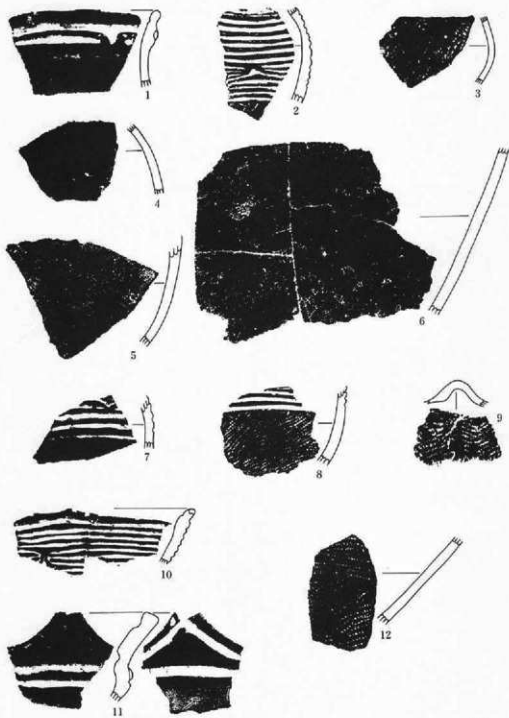
〈土器〉1~12、14~16、18が床面出土。1~6は壺。1はやや広口の口縁、2、3は小形壺あるいは肩の張る鉢。2の上部、平行沈線が工字文となるかは不明。5、6は中形の壺胴部で両者とも煤の付着が認められる。7、8は鉢。10~12は浅鉢あるいは高杯。9は土製品もしくは土器の突起または把手と考えられるもの。断面は山形で左右の部分は剝離した痕跡がある。大木9式の鬘状把手の可能性もある。14~16は甕。14は底部網代痕、15は6~7個の山形突起をもち上部は貼瘤をもつ変形工文字。煮沸に用いているが文様帯および内面は丁寧に磨かれている。16はやや挟りの深い波状口縁で胴部の膨みの少ない底部が小さい器形となる。18は床面出土であるがH・K・Lグリット出土の破片と接合している。縄文最上部は原体押圧し、その上からナデしている。縄文は斜行、補修孔がある。13、17、19、21~35は埋土出土。21~23は壺、21は貼瘤

をもつ小形、22 は体部縄文のみ、23 は無文、と三者三様である。24~27 は鉢、13、28~31 は高坏とおもわれる破片。高坏はいずれも平縁で文様に貼瘤をもたず、丹塗りの痕跡もなく、脚部の出土もない。17~20、32~34 は甕。17 は7個のB突起が巡り、縄文は肩がやや斜行、胴部は横走する。19 は上底で網代痕、胎土に大粒の金雲母を含む。胎土、焼成は32と同様であり、同片が19の口縁部となる可能性がある。33 は小波状口縁で頸部がやや膨らみ、その下に沈線が一本巡る類例の少ない資料。35 は無文で、大型壺の底部の可能性はある。

〈石器〉床面、埋土から13点が出土。36 は柳葉状の石鎌で両面調整の丁寧なつくり。37 は縦長剥片の相対する二辺を調整して菱形にし、上下を鋭利につくり出しているもの。石鎌として扱ったが穿孔具の可能性もある。38 は浅い抉りのある無茎鎌。39 は削器の要素の強い石器として扱ったが図上部を茎(先端部欠)としてみればF-2号住34のような石鎌とも考えられる

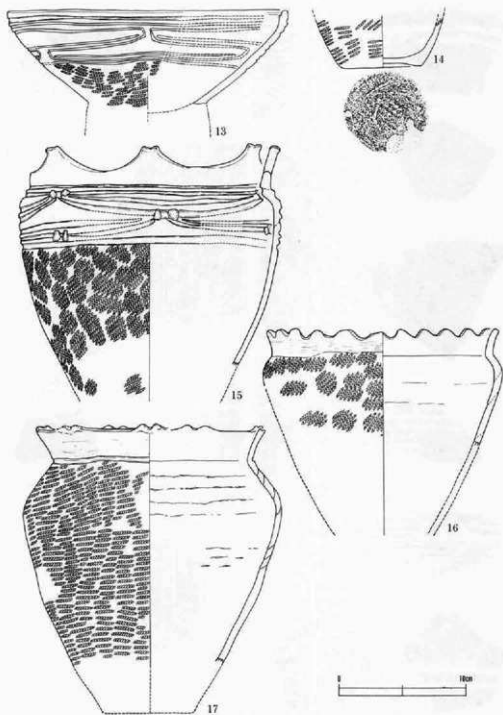


第96図 K-1号住居跡



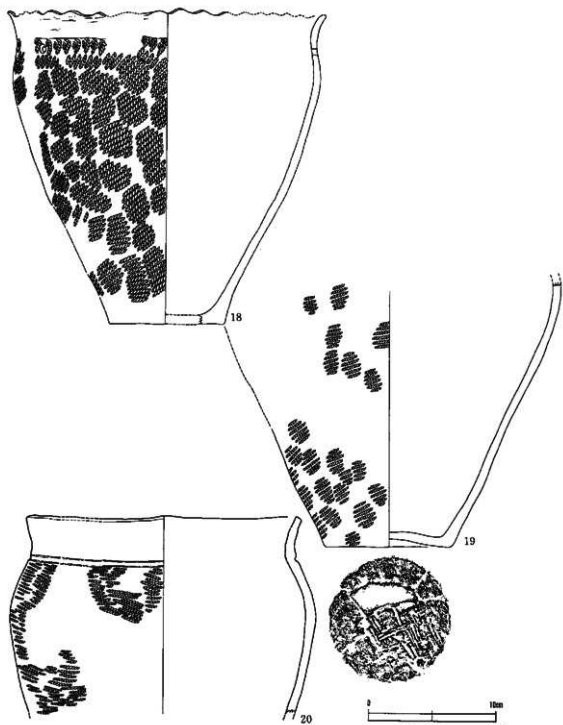
第97图 K-1号住居跡遺物(1)

[1-12床面]

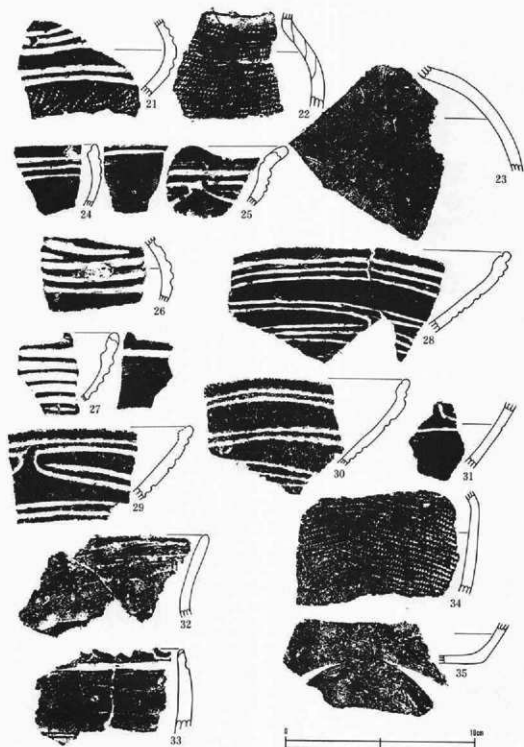


[14~16床、13・17埋土]

第98图 K-1号住居跡遺物(2)

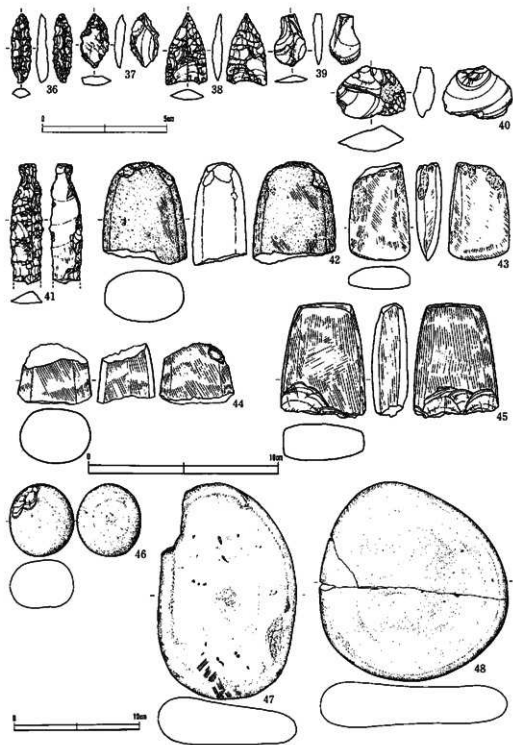


第99图 K-1号住居跡遺物(3) [18床、19・20埋土]



第100図 K-1号住居跡遺物(4)

[21~35埋土]



[38・40-42・47・48床 他(±埋土)]

第101图 K-1号住居跡遺物(5)

が、身が極めて薄い点が異なる。40 は黒曜石製の不定形石器で、縁辺の一部に調整痕を残している。41 は縦長の石匙で先端部折損。42～45 は石斧で 42 は基部に敲打痕をもつ。43 はやや小形で扁平、刃は一方に片寄っており刃部にはタテに擦痕がある。44 は基部に近い箇所。45 は折損した部分を両側から荒く打ち欠き再利用した例であるが、基部はきれいに磨かれており敲打痕や剝落部分はない。46～48 は磨石で、46 は両面とも平坦に磨かれている。47 は片面がやや凹んでおりタテ・ヨコに擦痕が走る。48 は両面とも中央がやや凹む。加熱痕があり、おそらく熱によって割れたものであろう、床面出土。

〈時期〉床面出土の土器は他の住居と同様、弥生時代初頭の特徴を示している。

L-2号住居跡（第102図、写真図版61）

〈検出状況〉Lグリット掘り下げ中に炉石を検出。黒褐色土を掘り込み、壁・埋土ともに同色上であったため炉検出時まで気付かず、土層断面図は作図に致らなかった。西側はK-1号住と、北側はF-4号住とわずかに重複している。周辺の土色から判断するとL-2号住が最も古くF-4号住の下に構築されており、K-1号住に覆られている。

〈形状・規模〉西側と南側は截合いと流失により壁を検出できなかったが、径3.7m前後の隅丸方形プランと推定される。

〈埋土〉図化できなかったが基本的には北側に在るF-4号住と同様である。埋土は黒色土で床面は黒褐色土である。この周辺になると縄文土器は減少する傾向にある。

〈壁・床面〉黒褐色土を掘り込んだ壁でゆるやかに外傾する。南側は不明。床面は地山直上で、粘性のある黒褐色土が堅く踏みしめられている。

〈柱穴〉5個検出されたがP₅はK-1号住に伴う可能性がある。西側に未検出の柱穴があるものと推定されるが、方形とはなり得ない配置である。

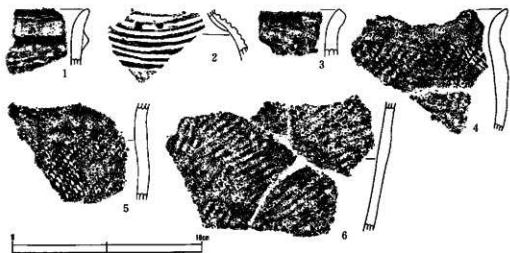
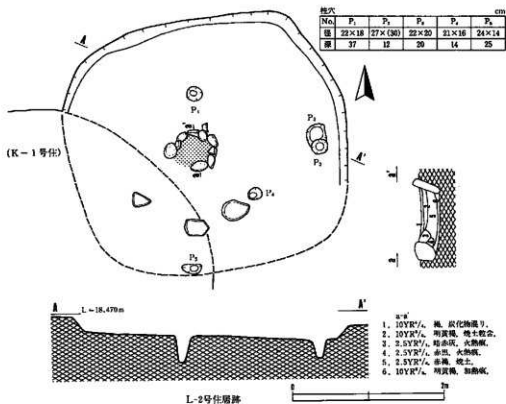
〈炉〉ほぼ中央に径60cmの円形石囲炉が検出された。掘り方は明瞭で垂直に立ち上る。南西の石は失われている。川原石と花崗岩を使用しているが、後者は風化して上面が崩れている。焼土は発達しており5層の厚さは約8cmである。

〈その他〉南側の床面に3個の扁平な角礫がある。床面よりは少し浮いており、床に係わる石ではなく加工の痕跡も認められない。屋根石の可能性もあろう。

遺物（第102～104図、写真図版74・75）

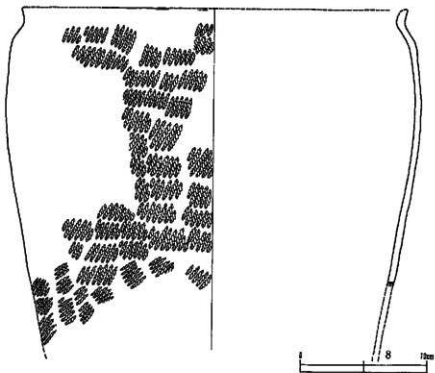
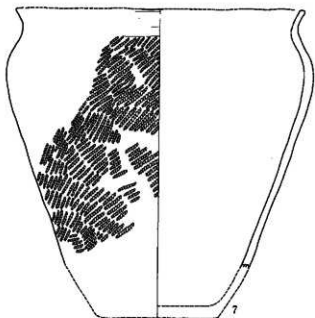
〈検出状況〉床面と埋土黒色土から出土。

〈土器〉1～3、7が床面出土。1は細口壺の口縁部で、口縁直下の隆帯は断面山形の粘土紐貼付。2は小形壺で内面に頸部補強のためか粘土帯がめぐる。変形工字文となるのか単に沈線間に貼瘤を付したものか不明、沈線に丹塗り。3は鉢の口縁。7は壺で頸部は縄文の上をナデてい



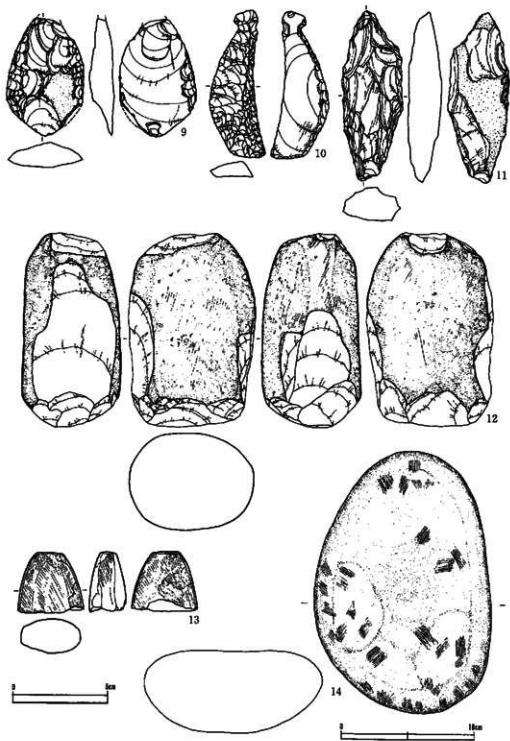
[1~3床、4~6埋土]

第102图 L-2号住居跡・遺物(1)



〔7床面、8埋土〕

第103図 L-2号住居跡遺物(2)



[9-13床、他は埋土]

第104図 L-2号住居跡遺物(3)

る。4～6は同一個体で8と共に埋土からの出土。前者は口縁部がゆるやかに外反し、後者は頸部が短く口縁部は小さく外反する。縄文はいずれも斜行する。

〈石器〉6点出土。9、13は床直上、他は黒色土出土。9はチャート質で上端を欠くが、表面の両側面および裏面の片側に調整剥離をもつ石器で、削器的な機能が考えられる。13は石斧基部で敲打痕をもつ。10は両面加工の石匙。11は柳葉状に調整した槍先状石器で粘板岩製、自然面を一部に残す。12は敲打器で、頂部および両側縁は打欠いた後で擦られている。敲打面は四方から荒く打欠いて造り出しているが、中央部分は使用によりかなり摩耗している。14は中央部が擦られて凹面を呈する石皿状の石器。

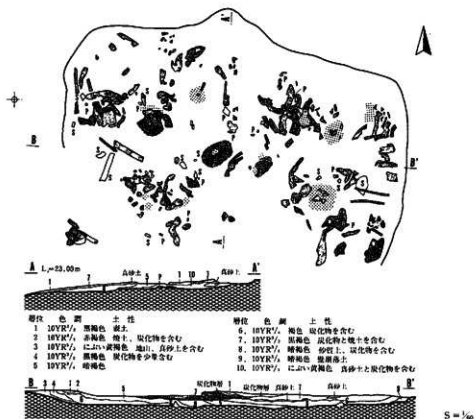
〈時期〉床面出土の土器は他の住居と同様、弥生時代初頭の特徴を示している。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

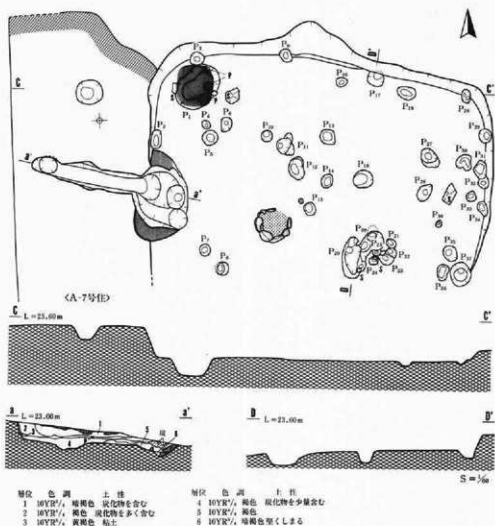
A-4号住居跡 (第105・106図、写真図版76・77)

〈検出状況〉調査区西側のAグリッドで、炭化物を多く含んだ黒褐色土の広がりによって検出した。東側は縄文時代のA-5号住居跡、西側はA-7号住居跡、南側はA-8号住居跡と重複している。〈形状・規模〉遺構の南側半分は削平され、平面形・規模の詳細が不明である。北辺は5.2m、遺存する東辺は3.5m、西辺は2.8mを測り、コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉褐色～暗褐色土を主体とする10層で構成され、上位は炭化物と焼土粒が多く含まれ、壁際にIV層起源の真砂土がブロック状に堆積している。〈壁・床面〉壁高は北壁25cm、東壁40cm、西壁20cm前後を測り、床面から急傾斜で立ち上がっている。床面はほぼ平坦で堅く締まっている。床面上位5～8cmには、炭化物、焼土、炭化材が多量に散在することから本遺構は焼失家屋と判断される。炭化材は板状と棒状のものがあり、壁際に多く堆積している。上屋構造を知るだけの量は出土していない。〈柱穴〉小穴P₁～P₂₉を検出しているが、重複する縄文時代の住居跡に伴うものが多く、主柱穴は確認できない。〈土坑〉P₁が北西隅に検出された。平面



第105図 A-4号住居跡(1)



第106図 A-4号住居跡(2)

P ₃₃	P ₃₂	P ₃₁	P ₃₀	P ₂₉	P ₂₈	P ₂₇	P ₂₆	P ₂₅	P ₂₄	P ₂₃	P ₂₂	P ₂₁	P ₂₀	P ₁₉	P ₁₈	P ₁₇	P ₁₆	P ₁₅	P ₁₄	P ₁₃	P ₁₂	P ₁₁	P ₁₀	P ₉	P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	
直径 cm	89×56	30×16	22×20	15×12	25×24	23×17	19×17	21×18	22×16	18×18	32×25	34×23	23×23																				
深さ cm	25	11.5	13.5	10	28.5	37	10.5	17	8	17	31	38	27																				
P ₃₃	P ₃₂	P ₃₁	P ₃₀	P ₂₉	P ₂₈	P ₂₇	P ₂₆	P ₂₅	P ₂₄	P ₂₃	P ₂₂	P ₂₁	P ₂₀	P ₁₉	P ₁₈	P ₁₇	P ₁₆	P ₁₅	P ₁₄	P ₁₃	P ₁₂	P ₁₁	P ₁₀	P ₉	P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	
直径 cm	21×18	21×18	19×15	26×20	32×28	31×20	65×27	18×14	17×12	25×17	14×12	13×8	22×14																				
深さ cm	9.5	16	7.5	13	16.5	6	17.5	11	15	15	10.5	27	5.5																				
P ₃₃	P ₃₂	P ₃₁	P ₃₀	P ₂₉	P ₂₈	P ₂₇	P ₂₆	P ₂₅	P ₂₄	P ₂₃	P ₂₂	P ₂₁	P ₂₀	P ₁₉	P ₁₈	P ₁₇	P ₁₆	P ₁₅	P ₁₄	P ₁₃	P ₁₂	P ₁₁	P ₁₀	P ₉	P ₈	P ₇	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	
直径 cm	26×25	32×20	22×20	26×25	24×20	17×16	15×15	25×15	27×22	26×15	39×33	12×9	40×32																				
深さ cm	31.5	10.5	23	7.5	8	3.5	7.5	7	21	10	28	11.5	59																				

形は楕円形で、上部を黄褐色シルトが3cmほど貼ってあった。〈周溝〉検出されなかった。

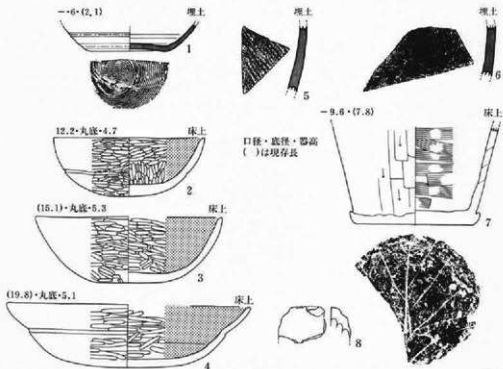
〈カマド〉西壁側に設置されているが、本体部は崩壊し燃焼部と煙道下部が遺存している。本体部の規模は95×65cmほどで、袖部を被覆した粘土は大部分がすでに流出している。燃焼部は一部に最大厚さ8cmの焼土が形成されている。煙道部は長さ1.9mで、本体部から上り勾配気味に煙出し部に続いている。天井部の構造は削平され不明である。

遺物 (第107図1~8、写真図版91)

ロクロ不使用の土師器と須恵器が出土している。1は埋土から出土した須恵器の坏で、底部切り離しが回転糸切りである。2~4は丸底の土師器の坏で、体部外面は緻密なヘラミガキ、内面がヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。2は体部下半に浅い沈線を有し、4は上半に段を形成する。2・3は体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、4の口縁部は外傾する。胎土に径1mm前後の粗砂を多く含んでいる。5・6は須恵器の甕と思われる体部破片で、5はタタキメ調整されている。7は底部が木葉痕の土師器の甕で、体部外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整を施している。3・7は床面上から出土している。

8は埋土から出土したふいごの羽口破片である。

〈時期〉床上出土の遺物から奈良時代に比定される。



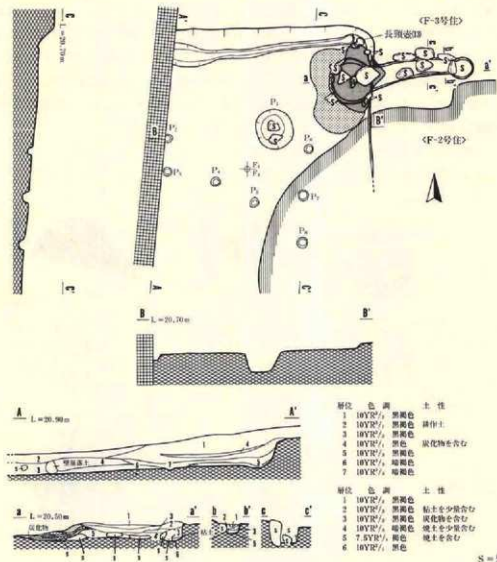
第107図 A-4号住居跡遺物

S=1/2

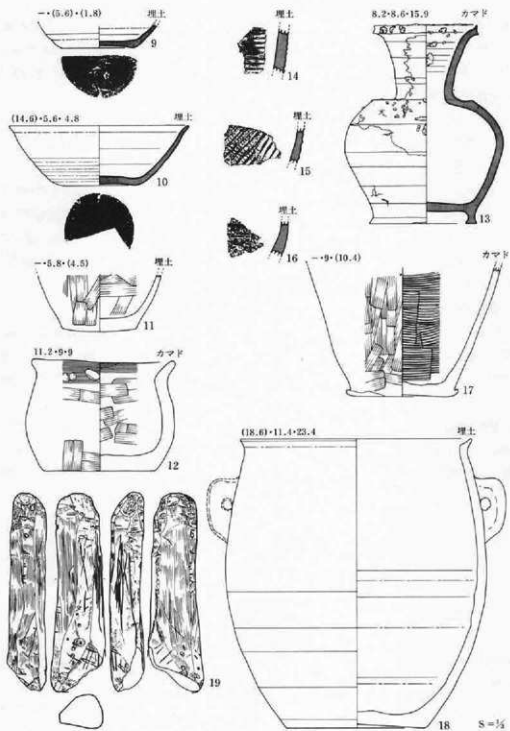
F-1号住居跡 (第108図、写真図版78)

〈検出状況〉 調査区西側の南緩斜面上に黒色土の広がりによって検出した。北側は縄文時代のF-3号住居跡、東側は弥生時代のF-2号住居跡と重複している。〈形状・規模〉 遺構の西側半分は調査区域外に続き、南側の大部分が流出していることから、平面形・規模の詳細は不明である。遺存する北辺は3.1m、東辺は2.3mで、コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉 黒色土と黒褐色土を主体とする7層に大別される。上位は炭化物が少量含まれ、下位はIV層起源の真砂土をブロック状に含む暗褐色土が堆積している。〈壁・床面〉 壁高は東壁8



第108図 F-1号住居跡



第109図 F-1号住居跡遺物

cm、北壁 45 cm を測り、床面から急傾斜に立ち上がる。床面はやや締まり、ほぼ平坦である。

〈柱穴〉小穴 $P_2 \sim P_8$ を検出したものの、位置的に柱穴とはなりえない。〈周溝〉検出されなかった。〈土坑〉 P_1 がカマドの南西寄りに検出された。大きさ 15~20 cm の礫を 2 個堆積しているが用途は不明である。

	P_{50}	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
直径 cm	66×58	13×(8)	15×14	16×14	16×13	16×14	17×15	18×17	
深さ cm	33	10	10	9.5	6	8	10	7	

〈カマド〉東壁の北東コーナー寄りに設置されているが、本体部の大部分は崩壊し遺存していない。燃焼部は径 60 cm の円形状に焼土が形成され、層厚は最大 4 cm を測る。煙道部は長さ 1.6 m で、ほぼ水平に煙出し部へと続いている。煙出し部は径 35 cm の円形土坑を掘り込んでいる。煙道部は削平されているが、側壁に長さ 25~35 cm、幅 10~18 cm 大の壺口礫を埋設した掘り込み式である。天井部も一部に礫を使用したものと推測される。

遺物 (第 109 図 9~19、写真図版 91)

埴土とカマド周辺部から須恵器、土師器を少量と磁石が出土している。土器の器種は坏、甕、長頸壺等である。9・10 は須恵器の坏で、10 の口縁部は外傾し、底部の切り離しは回転糸切りである。11・12・17 はロクロ不使用の土師器の甕である。11・12 は小型のもので、体部内外面はヘラナデ調整を施している。17 は体部下半~底部破片で、体部外面はヘラナデ、内面はハケメ調整を施し、底部が木葉痕である。18 はロクロ成形の土師器の甕で、短小の口縁部は外傾し体部の上位に耳を付している。一方にのみ現存しているが、本来は双耳と思われる。13 は須恵器の長頸壺で、体部上半に最大径を有し、頸部から外反して口縁部に立ち上がる。胎土には径 2~5 mm 大の小石を多く含んでおり、焼成もあまり良くない。

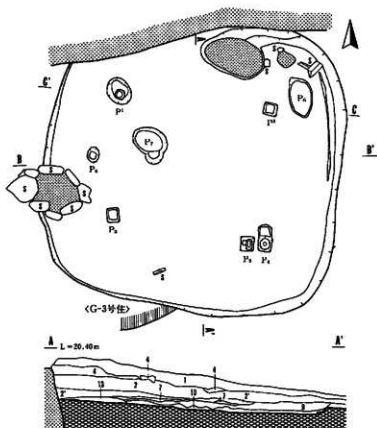
19 は一部欠損した磁石で、6 面を良く使用し、条痕、擦痕、凹痕等が見られる。石材は流紋岩である。

〈時期〉平安時代に比定される

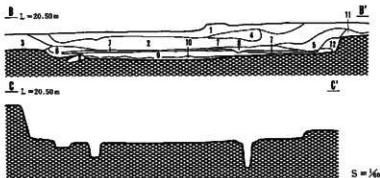
G-1 号住居跡 (第 110 図、写真図版 79)

〈検出状況〉調査区中央部北寄りの G~H グリッドで、黒色土の広がりによって検出した。西側は弥生時代の G-3 号住居跡と重複している。〈形状・規模〉北壁側の一部が土取り等によって削平されているため平面形は不詳であるが、4.8×4.6 m の隅丸方形を呈すると推測される。

〈埋土〉黒色土を主体とする 13 層で構成され、上位は炭化物を、下位は炭化材と炭化物を含んでいる。〈壁・床面〉壁高は東壁 25 cm、西壁 50 cm、南壁 10 cm を測る。東西の壁は床面から垂直気味に立ち上がっている。床面は中央部がやや窪むほかは平坦である。〈柱穴〉小穴 P_1



層位	色調	土性	層位	色調	土性
1	10YR ^{2/6}	暗褐色 新作土	7	10YR ^{2/6}	明黄褐色 粘上でブロック状に堆積
2	10YR ^{2/6}	黒色 下部に炭化物を含む	8	10YR ^{2/6}	黒色 炭化材を多く含む
2'	10YR ^{2/6}	黒色	9	10YR ^{2/6}	黒色 粘上粒と炭化材を含む
3	10YR ^{2/6}	黒褐色	10	10YR ^{2/6}	黒褐色 粘性に富む
4	10YR ^{2/6}	黄褐色 砂質土	11	10YR ^{2/6}	暗褐色
5	10YR ^{2/6}	暗褐色 焼文土器を多く含む	12	10YR ^{2/6}	暗褐色 粘上粒を含む
6	10YR ^{2/6}	黒褐色 下部に炭化物を少量含む	13	10YR ^{2/6}	黄灰褐色 粘上質土



第110図 G-1号住居跡

～P₇を
検出して
いるが、

P _{no}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
直径 cm	46×35	22×20	23×19	43×23	23×21	63×37	58×43	25×18
深さ cm	45	24	13	27	29	23	13	3

遺構に伴う主柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形は方形を基調としている。〈周溝〉検出されなかった。

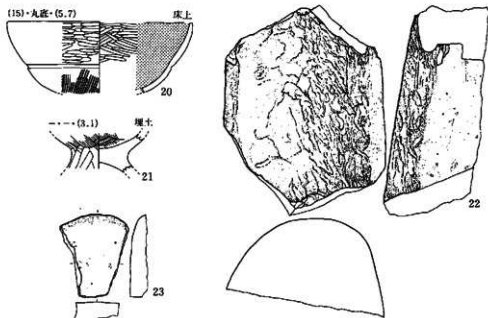
〈カマド〉北壁中央東寄りの床上に径95×55cmの焼土があることから、カマドは削平された北側に設置されていたものと推測される。

遺物（第111図20～23、写真図版92）

土師器が少量と磁石が出土しているものの、土器は破片で占められ図化できたのは2点である。20はロクロ不使用の丸底の坏で、体部下半に段を有している。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はハケメ調整である。21は高坏の破片で、ヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部はハケメ調整である。22・23は欠損しているが、磁石と思われる。1面が良く使用され磨滅している。石材は凝灰質砂岩である。

22・23は欠損しているが、磁石と思われる。1面が良く使用され磨滅している。石材は凝灰質砂岩である。

〈時期〉奈良時代に比定される。



S=1/4

第111図 G-1号住居跡遺物

G-2号住居跡（第113図、写真図版80）

〈検出状況〉調査区中央部の緩斜面で、黒色土の広がりによって検出した。南側で奈良時代のM-2号住居跡と重複し、切られていることから本遺構の方が古い。〈形状・規模〉規模は5×4.3mの隅丸台形を呈している。

〈埋土〉黒色土と褐色土を主体とする8層で構成され、下位に炭化物と焼土粒が多く堆積している。〈壁・床面〉壁高は東壁23cm、西壁12cm、南壁6.5cm、北壁44cmを測る。床面は平坦である。西側の床面上位には、炭化材、焼土が多量に散在することから本遺構は焼失家屋と判断される。〈柱穴〉P₁～P₆が位置的に主柱穴である。平面形は円形を基調としている。

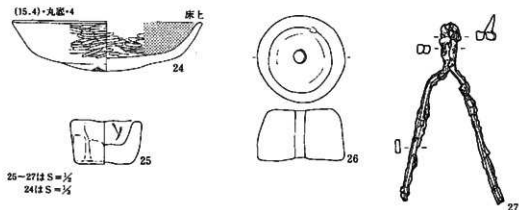
〈土坑〉北壁側にP₇・P₈が検出され、P₈は貯蔵穴と推測される。

P _m	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
直径 cm	20×17	20×18	20×18	19×18	17×15	15×13	25×25	110×60	60×50
深さ cm	42	40	49	36	5	12	25	25	12

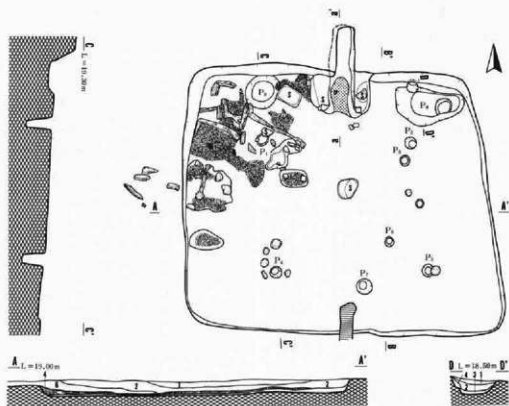
〈カマド〉北壁のほぼ中央部に設置されている。本体部は崩壊しており、芯材や天井部に使用した礫は床上に散在し、上部を被覆したシルトはすでに流出している。燃焼部は径57×28cmの楕円形状に焼土化しており、層厚は最大5cmで堅く締まる。煙道部の構造は削平され不明であるが、長さ70cmを測り、ほぼ水平に煙出し部へと続いている。

遺物（第113図24～27、写真図版92）

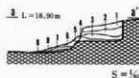
土師器、土製品、鉄製品が出土している。24はロクロ不使用の丸底の坏で、口縁部が外傾している。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理され、底部はハケメ調整が施されている。25はミニチュア土器で、指頭圧痕が認められる。土器は破片のため図化できなかったが、ロクロ不使用の土師器の壺を伴している。外面はヘラミガキ、内面がハケメ調整である。他に小型の壺の底部もある。



第112図 G-2号住居跡遺物



- 解位 色 測 土 性
- 1 10YR^{6/2} 褐色
 - 2 10YR^{6/2} 褐色
 - 3 10YR^{6/2} 褐色
 - 4 10YR^{6/2} 褐色 灰と炭化物を多く含む
 - 5 10YR^{6/2} 褐色
 - 6 10YR^{6/2} 褐色
 - 7 10YR^{6/2} 褐色
 - 8 10YR^{6/2} 褐色



第113图 G-2号住居跡

26は土製の紡錘車で、外面が丁寧にヘラミガキされ、片面に黒斑がみられる。27は鉄製ピンセット様の¹²篋子で、把手部を中心に左右が対象になっている。

〈時期〉奈良時代に比定される。

H-1号住居跡（第114図、写真図版81）

〈検出状況〉調査区中央部の北東寄り緩斜面で、カマドを検出した。南側で平安時代のH-2号住居跡と重複し、切られていることから本遺構の方が古い。〈形状・規模〉削平や重複のためにカマド周辺部が遺存するだけである。遺存する北東辺は2.2m、北西辺は2.7mである。

〈壁・床面〉壁高は北西壁14cmを測る。床面は堅く締まり、ほぼ平坦である。〈柱穴〉小穴P₁～P₂を検出したが柱穴とは確認できない。〈周溝〉検出されなかった。

〈カマド〉北西壁側に設置されているが、削平を受け燃焼部、袖部・煙道部の下端を遺存するのみである。袖部は径10～23cm大の亜角礫を芯材として使用している。一部は倒壊して内側に散在し、上部を被覆したシルトはすでに流出している。燃焼部は径52×43cmの不整形形状に焼土化され、層厚は最大8cmである。煙道部は長さ1.45mで、燃焼部から緩やかな上り勾配で煙出し部へ続いている。天井部の構造は不明である。

遺物 土師器の破片6点が出土している。図化できないロクロ不使用の坏と甕があり、坏は緻密にヘラミガキ調整され、黒色処理されている。

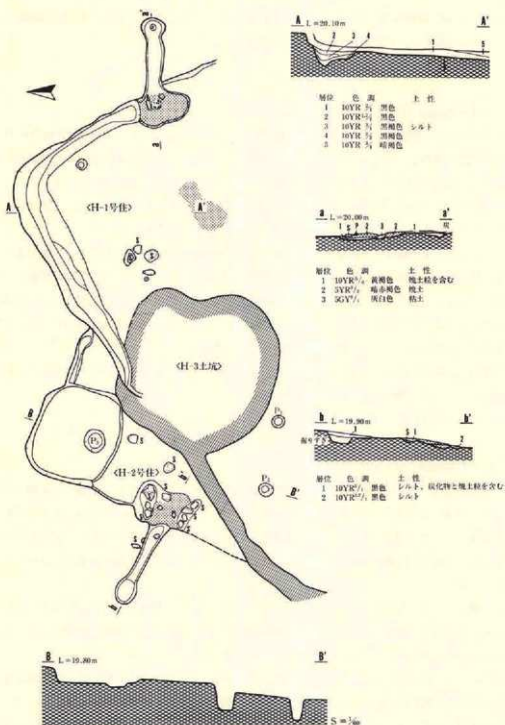
〈時期〉奈良時代に比定される。

H-2号住居跡（第114図、写真図版82）

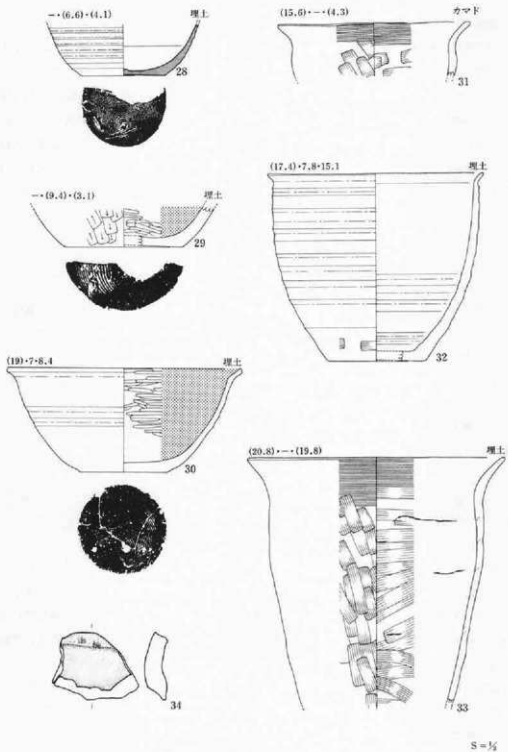
〈検出状況〉H-1号住居跡と同様にカマドの検出によって確認された。北側で奈良時代のH-1号住居跡、時期不祥のH-3号土坑と重複している。新旧関係は、新しい順にH-3号土坑、本遺構、H-1号住居跡である。〈形状・規模〉大部分が削平され、北壁と東壁の一部が遺存するのみで、平面形・規模の詳細は不明である。北辺は3.7m、東辺は3.8mを測り、コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉下位の黒褐色土が一部遺存している。〈壁・床面〉壁高は北壁38cm、東壁5cmを測る。床面は堅く締まり、平坦である。〈柱穴〉検出されなかった。〈周溝〉東壁と北壁に上幅20～45cm、深さ10～24cmで巡っている。大部分は崩落をしている。

〈カマド〉東壁側に設置されている。大部分は削平を受け、燃焼部と煙道部下位を遺存するだけである。燃焼部は径85×50cmの楕円形に焼土が形成されている。層厚は最大5cmで、上位に土器が散在している。煙道部は燃焼部からやや上り勾配で立ち上がり、その後水平に煙出し部へと続いている。煙出し部は径40×35cmの楕円形状の土坑が掘り込まれている。



第114図 H-1・2号住居跡



第115図 H-2号住居跡遺物

遺物（第115図28～34、写真図版92）

須恵器と土師器が少量出土している。28は須恵器の坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。ロクロ使用の土師器は29・30・32で、器形は鉢と甕がある。29・30は鉢で、内面をヘラミガキしたのちに黒色処理を施している。29の体部外面はヘラケズリ調整、底部は回転糸切り後に一部再調整されている。30の口縁部は外反し、胎土に径1～2mm大の粗砂を多く含んでいる。32は甕で、口縁部が短小で外傾し、体部下半の一部と底部は再調整されている。31・33はロクロ不使用の甕で、口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラナデ調整を施している。口縁部は31が短小で、33が頸部から緩やかに外傾する。

34はふいごの羽口と思われるものである。

〈時期〉平安時代に比定される。

I-1号住居跡（第116図、写真図版83）

〈検出状況〉南緩斜面上のIV層中で、黒色土の落ち込みによって検出した。南側で奈良時代のI-2号住居跡と重複し、新旧関係は切られていることから本遺構の方が古い。〈形状・規模〉南西側は削平されているが、規模は3.3×3.2mの隅丸方形を呈している。

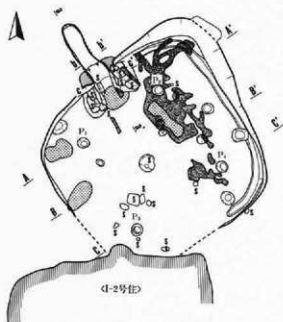
〈埋土〉黒色土と黒褐色土の2層で構成され、IV層起源の真砂土と炭を多く含み、堅く締まっている。〈壁・床面〉壁の大部分は削平を受けており、壁高は東壁24cm、西壁4cm、南壁2cm、北壁16cmを測る。床面は堅く締まり、ほぼ平坦である。遺構中央から東壁側にかけての床面上には焼土、炭、炭化材が多量に散在することから焼失家屋と判断される。〈柱穴〉 P_1 ～ P_4 の4個が主柱穴で、平面形は円形を基調としている。深さは13～39cmである。〈周溝〉東壁と北・南壁の一部を上幅10～15cm、深さ6cmで巡っている。

	P_{no}	P_1	P_2	P_3	P_4
直径 cm	17×16	18×16	19×18	19×17	
深さ cm	39	28	30	13	

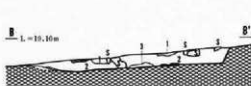
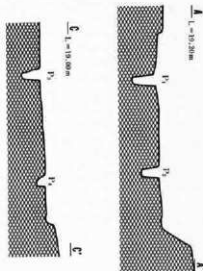
〈カマド〉北壁のほぼ中央部に設置されている。本体部の規模は98×55cmで、袖部の芯材には角礫凝灰岩を3～4個据えている。崩壊しているために上部を被覆した褐色シルトは流出している。燃焼部は径40×35cm、最大厚4cmの楕円形状の焼土が形成されている。煙道部は長さ95cm、幅25cmで緩やかな上り勾配で煙出し部へと続いている。くりぬきか掘り込み構造かは上部が削平されていることから不明である。

遺物 ロクロ不使用の土師器の坏と甕破片が少量出土している。細片で図化できないものの坏は丸底で、内面はヘラケズリ後に黒色処理をしている。甕は体部外面がヘラナデやヘラミガキ、内面がハケメ調整を施している。底部には木葉痕をもつものがある。

〈時期〉奈良時代に比定される。



(D-2号住)



B-B'

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------------------------|---------------------|
| 1 | 10YR ^{2/6} , 黒褐色 | シルト質土、真砂土を2%含む |
| 2 | 10YR ^{1/6} , 黒色 | 附くしまる、真砂土と下部に灰を多く含む |
| 3 | 10YR ^{2/6} , 黒褐色 | 灰を多く、焼土粒を微量に含む |



A-A'



C-C'

A-A'

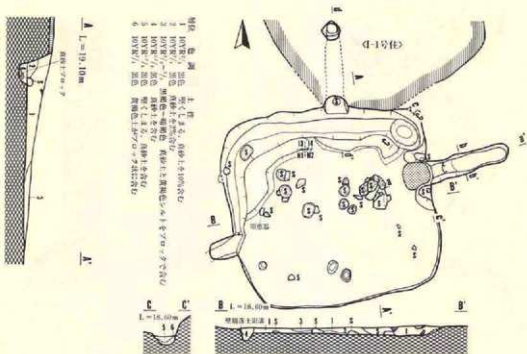
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---|------------|
| 1 | 10YR ^{2/6} , 黒褐色 | 焼土粒と灰を含む |
| 2 | 10YR ^{2/6} , 10YR ^{1/6} , 赤褐色 | シルト |
| 3 | 5YR ^{2/6} -10YR ^{2/6} , 暗赤褐色 | ややしまる |
| 4 | 10YR ^{2/6} , 褐色 | シルト質土 |
| 5 | 5YR ^{2/6} , 暗赤褐色 | 焼土、ややしまる |
| 6 | 10YR ^{2/6} , 黒褐色 | 灰と焼土を含む混合層 |



L = 19.10m

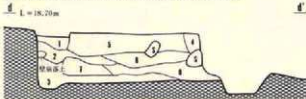
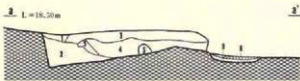
カマド断面 S = 1/6
 平面・断面 S = 1/6

第116図 I-1号住居跡



- 3-c'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|--------------------------------------|------------------|
| 1 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 堅くしまる、頁砂土を1%含む |
| 2 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 黒褐色土を含む |
| 3 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 黒褐色土と頁砂土を1%含む |
| 4 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 褐色土の混合層 |
| 5 | 10YR ² / ₂ 褐色 | シルト質土 |
| 6 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 堅くしまる、頁砂土がアロパで混入 |

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---|------------|
| 7 | 10YR ² / ₂ -7/ 黒-黄褐色 | 硬質粘土 |
| 8 | 5YR ² / ₂ 暗褐色 | 塊上、微塵に塊を含む |
| 9 | 10YR ² / ₂ -7/ 黄褐色 | 暗褐色土の混合層 |
| 10 | 10YR ² / ₂ 黄褐色 | 塊部のシルト |
| 11 | 10YR ² / ₂ に近い黄褐色 | 塊部のシルト |
| 12 | 10YR ² / ₂ -7/ 暗褐色-に近い黄褐色 | 混合土 |



- 4-d'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|--|-------------|
| 1 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 砂質に富む |
| 2 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 暗褐色土と頁砂土を含む |
| 3 | 10YR ² / ₂ -7/ 黒-黄褐色 | しまっている |
| 4 | 10YR ² / ₂ -7/ 黄褐色 | 頁砂土と混ざり含む |
| 5 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 塊土粒と混ざり少量含む |
| 6 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | シルトが少量含む |
| 7 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | 2層に類似 |
| 8 | 10YR ² / ₂ 暗褐色 | シルト質土、硬質粘土 |

カマド断面 S = 1/6
 平面・断面 S = 1/60

第117図 I-2号住居跡

I-2号住居跡 (第117図、写真図版84)

〈検出状況〉IV層中で方形状の黒色土の落ち込みによって検出した。北側で奈良時代のI-1号住居跡と重複し、これを切っていることから本遺構の方が新しい。〈形状・規模〉規模は3.25×3.2mの隅丸方形を呈している。

〈埋土〉黒色土と黒褐色土の2層で構成されている。全体に堅く締まり、IV層起源の真砂土を小ブロック状に含んでいる。〈壁・床面〉壁高は東壁16cm、西壁8cm、南壁3cm、北壁35cmを測る。南・西壁は削平を浮け、遺存が悪い。床面はほぼ平坦で、中央寄りの床上には径10~25cm大の亜円礫が散在している。〈柱穴〉検出されなかった。〈周溝〉北壁と西壁の半分ほどを巡っている。上幅は20~40cm、深さ6~20cmである。周溝の南側は床面よりも多少高まるように盛土されている。

〈カマド〉北壁中央部と東壁中央北寄りの2カ所に設置されている。北カマドは廃棄され、煙道部のみが遺存するだけである。長さは1.4mで、径25cmの円形状にくりぬかれており、やや下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径27×26cm、深さ45cmの方形気味の土坑が掘り込まれている。側壁は良く火熱を受け赤褐色に変化を生じている。

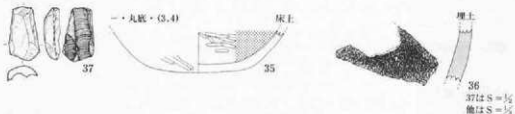
東カマドの本体部は崩壊し、袖部下位と燃焼部が遺存している。規模は1.1m×40cmで、両袖部は芯材に角礫凝灰岩を据え、その上を黄褐色シルトで被覆している。大部分のシルトは流出している。燃焼部は径45cmの円形状に焼土が形成され、厚さは最大2cmを測る。煙道部の上半部は削平され、くりぬきか掘り込み構造かは不明である。長さ1.25mの緩やかな下り勾配で煙出し部に続いている。

遺物 (第118図35~37、写真図版93)

ロクロ不使用の土師器、須恵器が少量と石製品が出土している。土器は破片が大部分を占め、図化できたのは1点である。35は丸底気味の坏で、内面をヘラミガキ調整後に黒色処理している。胎土に径1mm大の粗砂を多く含んでいる。36は須恵器の壺体部破片である。そのほかに床面上から内黒の土師器の鉢と思われる底部や木葉痕のある底部の甕破片が出土している。

37は器種不明の石製品で、中央が穿孔されている。

〈時期〉奈良時代に比定される。



第118図 I-2号住居跡遺物

J-1号住居跡（第119図、写真図版85）

〈検出状況〉道路側の西側切土面に黒色土の落ち込みを検出された。南側でJ-2号住居跡と重複し、これに切られていることから本遺構が古い。〈形状・規模〉規模は道路造成工事の削平と遺構重複のために詳細は不明である。遺存する北辺は2m、西辺は2.2mで、コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉黒色土と黒褐色土を主体とする6層に大別され、径2~5mm大のIV層起源の真砂土を含み堅く締まっている。〈壁・床面〉壁高は北壁65cm、西壁35cmを測り、床面から外反気味に立ち上がる。床面は平坦で、一部に貼り床が施されている。〈柱穴・周溝・カマド〉遺存部分では検出されなかった。

遺物（第119図38・39、写真図版93）

埋土から土師器と須恵器の破片が少量出土している。38は須恵器の坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。39はロクロ不使用の土師器の甕で、口縁部は短くやや直立するように立ち上がっている。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ調整を施している。胎土は径3mm大の粗砂を多く含んでいる。他にロクロ不使用丸底の内黒の坏、底部切り離しが回転糸切りの坏等が共存している。

〈時期〉遺物の様相から平安時代と推測される。

J-2号住居跡（第119図、写真図版85）

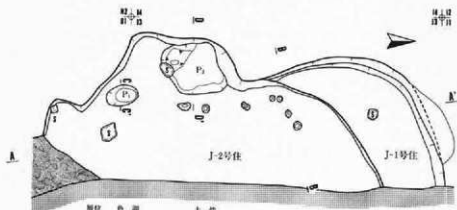
〈検出状況〉J-1号住居跡と同様に道路側の切土面に検出された。J-1号住居跡と重複し、これを切っていることから本遺構が新しい。〈形状・規模〉東側が道路造成工事の際に削平・攪乱されていることから形状・規模の詳細は不明である。遺存する規模は5.5×2.3mで、西側に2.4m×80cmほどの張り出しがある。

〈埋土〉黒色土を主体とする2層で構成され、下位にIV層起源の真砂土ブロック状に堆積している。〈壁・床面〉西壁側で最高29cmを測る。床面はほぼ平坦で、J-1号住居跡とは10cmほどの比高がある。〈土坑〉西壁側に2基検出している。規模はP₁が52×33cm、深さ25cm、P₂が90×83cm、深さ9cmである。平面形はP₁が楕円形、P₂が方形状を呈している。P₂の埋土には微量の炭が含まれている。〈柱穴・周溝・カマド〉検出されなかった。

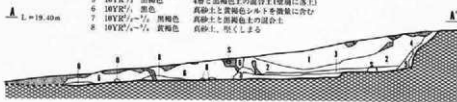
遺物 土師器と縄文土器破片が僅かに出土している。〈時期〉不明である。

M-1号住居跡（第120図、写真図版85）

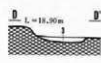
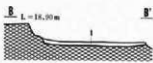
〈検出状況〉Mグリットの南斜面上に黒褐色土の落ち込みによって検出した。東側でN-2号



- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-----------------------------|--------------------|
| 1 | 10YR ⁵ /2 黒色 | 堅くしまる、高砂土を3%含む |
| 2 | 10YR ⁵ /2 黒褐色 | 高砂土を5%含む |
| 3 | 10YR ⁵ /2 赤色 | 黄褐色土高砂土を微量に含む |
| 4 | 10YR ⁵ /2 にぶい黄褐色 | 粘性に富む |
| 5 | 10YR ⁵ /2 黄褐色 | 4層と黄褐色土の混合土(壁面に著す) |
| 6 | 10YR ⁵ /2 赤色 | 高砂土と黄褐色シルトを微量に含む |
| 7 | 10YR ⁵ /2 黄褐色 | 高砂土と黄褐色土の混合土 |
| 8 | 10YR ⁵ /2 黄褐色 | 高砂土、堅くしまる |

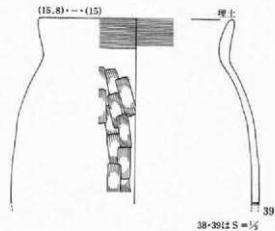
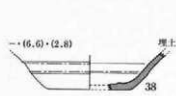


- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-------------------------|-------|
| 2 | 10YR ⁵ /2 褐色 | 砂質に富む |



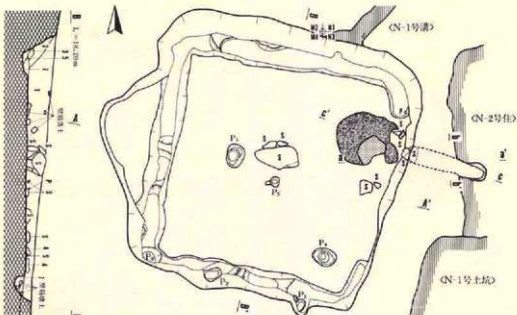
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------------------------------|-------------|
| 1 | 10YR ⁵ /2 にぶい黄褐色-黄褐色 | 混合土、微量の灰を含む |

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|--------------------------|-------------|
| 3 | 10YR ⁵ /2 黄褐色 | シルトをブロックで含む |



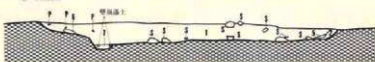
38・39は S = 1/5

第119図 J-1・2号住居跡・遺物



層位	色調	土質
1	10YR ^{7/1} 黒褐色	黄砂土を5%と炭を少量含む
2	10YR ^{8/1} 黒褐色	埴器土
3	10YR ^{8/1} 黒褐色	埴器土
4	7.5YR ^{8/1} 褐色	シルトをブロックで含む
5	10YR ^{7/1} 黒褐色	シルトを少量含む
6	10YR ^{7/1} 黒褐色	堅くしまる
7	10YR ^{7/1} 黒褐色	埴器土との混在層

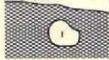
A L=16.20m



a L=17.80m



b L=17.80m



層位	色調	土質
1	10YR ^{7/1} 黒褐色	腐化物と晩土粒を微量に含む
2	10YR ^{7/1} 黒褐色	埴器土の混在層
3	10YR ^{7/1} 黒褐色	晩土と炭を微量に含む
4	10YR ^{7/1} 黒褐色	炭を多く含む
5	5YR ^{7/1} 赤褐色	晩土、土粒に炭を多く含む

c L=17.80m



カマド断面 S = 1/6
 平面・断面 S = 1/60

第120図 M-1号住居跡

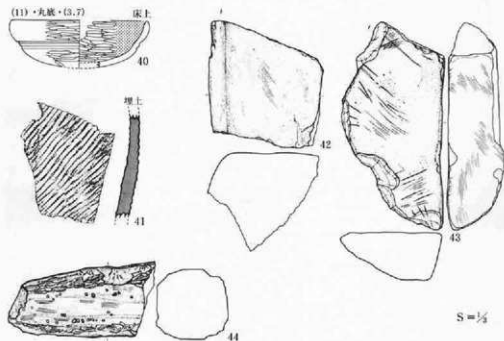
住居跡、北側でN-1号溝跡と重複している。前者に切られ、後者を切っていることから各遺構の新旧関係は新しい順にN-2号住居跡、本遺構、N-1号溝構である。〈形状・規模〉南側は一部削平されているが、規模は4.3×4.2mの隅丸方形を呈している。西側には85cm×2.2mの三角形の貼り出し部がある。緩やかなスロープになっており、出入口と推測される。

〈埋土〉黒褐色土を主体とする5層で構成され、全体に堅く締まり、下位に微量の炭化物と径10~30cm大の円礫と亜角礫を多く堆積している。〈壁・床面〉北壁側の遺存が良く、壁高は12~48cmを測る。床面は多少凹凸があり堅く締まっている。また、中央部の床上には長さ70×36cm、厚さ35cmの石が置かれてあった。〈柱穴〉小穴P₁~P₆を検出しているものの、配置から見て支柱穴とは判断できない。P₁・P₄の埋土には炭と焼土粒が微量に混入している。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
直径 cm	38×29	29×18	19×15	40×28	15×13	31×26
深さ cm	3	10	34	2	5	27

〈周溝〉カマド部分と東壁側の一部を除いて、上幅12~45cm、最深20cmで巡っている。壁は崩壊落によって上幅は一定していない。

〈カマド〉東壁中央部から北東コーナー寄りに設置されているが、本体部の大部分は崩壊し遺存していない。燃焼部は径45~30cmの不整形形状に焼土が形成されており、層厚は最大10cmを測る。周辺部には炭化物が散在する。煙道部は長さ1.2mで、径25×21cmの楕円形気味



第121図 M-1号住居跡遺物

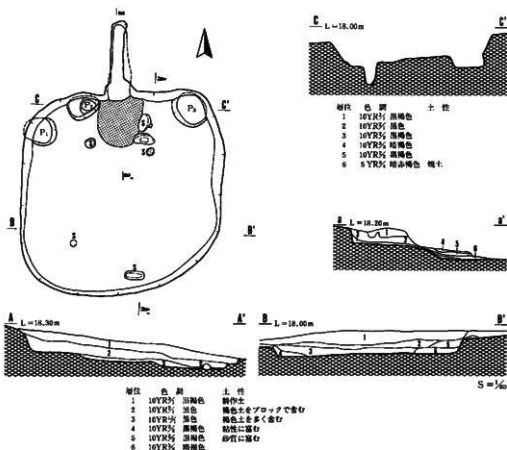
にくりぬかれ、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部はN-2号住居跡の周溝によって攪乱されているが、径25cm前後の土坑を掘り込んでいる。

遺物(第121図40~44、写真図版93)

土師器、須恵器が少量と磁石が出土している。40はロクロ不使用の土師器の坏である。口縁部には浅い沈線が2条巡り、底部が丸底で内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。41は須恵器の大壺の破片で、内外面がタタキメ調整されている。図化しなかったロクロ不使用の土師器の甕も混在する。甕は体部外面がヘラナア、内面はハケメ調整を施している。底部が木葉痕のものもある。

42・43は磁石で、欠損しているが2面を使用している。

〈時期〉奈良時代に比定される。



第122図 M-2号住居跡

M-2号住居跡（第122図、写真図版86）

〈検出状況〉調査区中央部の緩斜面上で、黒色土の広がりによって検出した。北側で奈良時代のG-2号住居跡とカマド煙道部が重複し、これを切っていることから本遺構の方が新しい。〈形状・規模〉規模は3.25×3.2mで、方形を基調とするものの南東コーナーは丸味を呈している。

〈埋土〉黒色土と黒褐色土を主体とする6層で構成され、上位は褐色土をブロック状に含み、壁際にIV層起源の真砂土を堆積している。〈壁・床面〉壁高は東壁25cm、西壁15cm、南壁12cm、北壁32cmを測り、床面からやや急傾斜に立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉検出されなかった。〈土坑〉北壁側にP₁～P₃が検出され、平面形は楕円形を基調としている。P₁・P₂は貯蔵穴かと推測される。〈周溝〉検出されなかった。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃
直径 cm	51×42	50×40	60×50
深さ cm	61	38	16

〈カマド〉北壁のほぼ中央部に設置されている。本体部は崩壊しており、芯材に使用した礫が数個床面上に散在し、袖部を被覆したシルトは流出している。燃焼部は径80×68cmの楕円形気味に焼土が形成され、厚さは最大5cmを測る。煙道部は天井部が削平され構造は不明であるが、長さ1.15mを測り、燃焼部からやや上り勾配で煙出し部へと続いている。

遺物 ロクロ不使用の土師器破片が10点余り出土しているが、図化できるものはない。坏は緻密なヘラミガキ調整が施され、内面は黒色処理されている。

〈時期〉奈良時代に比定されている。

N-1号住居跡（第123図、写真図版87）

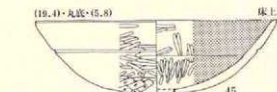
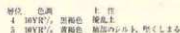
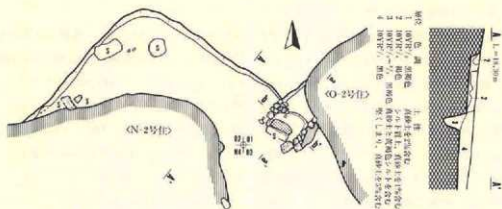
〈検出状況〉O-2号住居跡の西壁精査中にカマドを検出した。南西側でN-2号住居跡、東側でO-2号住居跡と重複し、新旧関係は2遺構に切られていることから本遺構が一番古い。

〈形状・規模〉重複等による削平のため詳細な規模は不明である。遺存する北辺は2.7m、西辺は2.6mで、北西コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉黒褐色土と褐色シルト質土の2層で構成され、下位はIV層の真砂土がブロック状に堆積する混合土である。全体に堅く締まっている。〈壁・床面〉壁高は18cmほどを測り、床面から急傾斜に立ち上がっている。床面はIV層中にあり、平坦で締まっている。N-2号住居跡の床面との比高は12cmである。〈柱穴・周溝〉検出されなかった。

〈カマド〉北壁側に設置されている。袖部下位と燃焼部が遺存するのみで、煙道部は削平されていることから構造は不明である。本体部の規模は80×55cmを測り、両袖部は芯材に凝灰岩を数個据えてシルトで被覆している。シルトの大部分は既に流出し遺存しない。燃焼部は35×14cm、深さ4cmで楕円形状に焼土が形成されている。

遺物（第123図45・46、写真図版93）



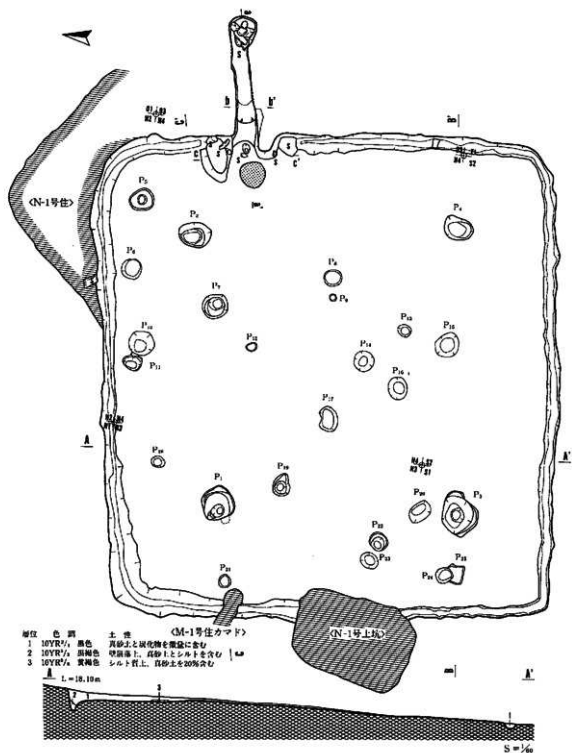
第123図 N-1号住居跡・遺物

床面上から須恵器と土師器が少量出土している。45はロクロ不使用の土師器の坏で、口縁部に1条の沈線が走り、底部は丸底である。体部外面はヘラミガキ調整、内面は黒色処理を施している。46は須恵器の壺破片である。

〈時期〉奈良時代に比定される。

N-2号住居跡 (第124・125図、写真図版88)

〈検出状況〉調査区東側のNグリットにおいて黒色土の広がりによって検出した。北東側でN-1号住居跡、西壁側でN-1号土坑と重複し、前者を切り、後者に切られていることから新旧関係は新しい順にN-1号土坑、本遺構、N-1号住居跡である。〈形状・規模〉西壁と南壁側は削平を受け、僅かに周溝が遺存しているだけである。規模は7.8×7.34mを測り、平面形は隅丸長方形を呈している。



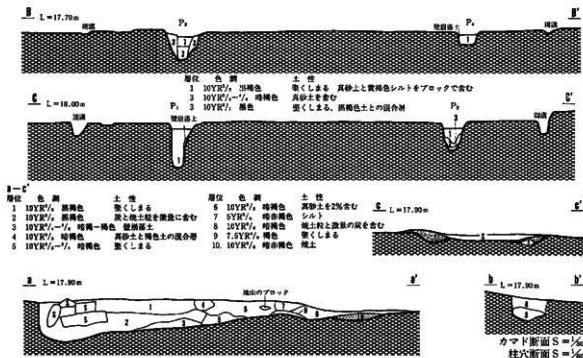
第124図 N-2号住居跡(1)

〈埋土〉 黒色土の単層で構成され、IV層の真砂土と炭化物を含み堅く締まっている。〈壁・床面〉 西壁と南壁の大部分は削平されており、東壁は15 cm、北壁は20 cmである。遺存する壁は床面から外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。〈柱穴〉 小穴P₁~P₂₅を検出しているが、遺構に伴う主柱穴はP₁~P₄の4個である。平面形は楕円形と方形気味であり、深さ24~70 cmを測る。柱痕はP₁・P₃で確認された。〈周溝〉カマド部分を除いて巡っているが、削平や崩落によって上幅は一定していない。

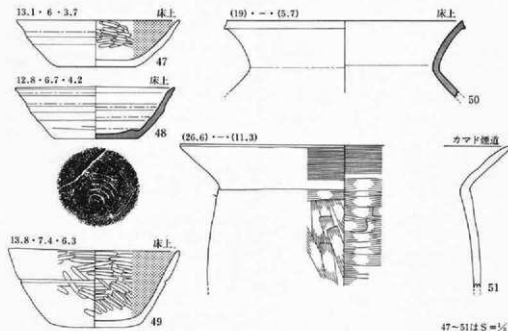
P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
直径 cm	51×50	52×40	57×52	47×35
深さ cm	70	44	46	24

上幅15~50 cm、最深28 cmである。

〈カマド〉 東壁中央部から北東コーナー寄りに設置されている。本体部は削平され、北側袖部下端と燃焼部が遺存するだけで天井部の構造は不明である。本体部の規模は1.25 m×85 cm前後と推測され、袖部は黄褐色シルトで構築している。南側袖部東壁寄りの床面上には長さ32×28 cm、厚さ3 cmの凝灰岩が散在している。燃焼部は径40 cmの円形状に焼土が形成され、層厚5 cmを測る。焼土の東側15 cmには支脚を設置したと思われる径16×11 cm、深さ3 cmの小穴がある。煙道部は長さ1.9 mで、緩やかに煙出し部へと続いている。煙出し部には径



第125図 N-2号住居跡(2)



第126図 N-2号住居跡遺物

15~35 cm 大の円礫と亜角礫が 10 個ほど充填している。くりぬきか掘り込み構造かは上部削平のため不明である。

遺物 (第 126 図 47~51、写真図版 93)

土師器と須恵器がカマド内と床面上から少量出土している。47・49・51 は土師器である。47 はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は回転ヘラ切り後に再調整を施している。49 はロクロ不使用の内面黒色処理を施した坏で、口縁部は外傾し、下位に浅い 1 条の沈線が巡っている。胎土は粗砂と石英砂を多く含む。48 は須恵器の坏で、底部の切り離しは回転糸切り後に一部再調整されている。50 は須恵器の壺の口縁部で、頸部からくの字状に外反している。51 はロクロ不使用の壺で、口縁部はヨコナア、体部内外面はヘラナデ調整を施している。胎土に径 1 mm 大の粗砂と雲母を多く含んでいる。

〈時期〉平安時代に比定される。

O-1 号住居跡 (第 127 図、写真図版 89)

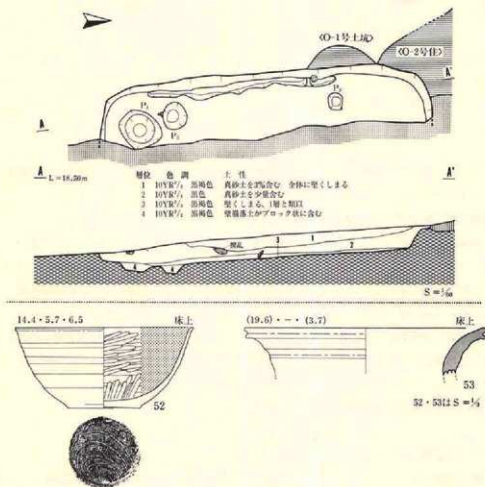
〈検出状況〉O グリットの IV 層上面で黒褐色土の落ち込みによって検出した。北側で O-2 号住居跡、西側で O-1 土坑と重複しており、両者を切っていることから本遺構の方が新しい。

〈形状・規模〉遺構の大部分は道路の造成工事によって削平され、西側の一部が遺存するだけ

で詳細な規模は不明である。西辺は5.1mを測り、コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉黒色土と黒褐色土の3層で構成され、全体に堅く締まっている。〈壁・床面〉西側は床面から直に、南と北側はやや外傾して立ち上がる。壁高は西壁43cm、南壁12cm、北壁34cmである。床面は平坦である。〈柱穴〉検出されなかった。〈周溝〉西壁側に幅10~20cm、深さ3cm、長さ3mほど巡っている。〈土坑〉西壁際にP₁~P₃の3基を検出した。規模はP₁が62×56cm、深さ26cm、P₂が43×40cm、深さ11cm、P₃が28×22cm、深さ1cmである。埋土は黒褐色土の単層である。P₂の埋土下位からは須恵器破片が出土している。P₃は浅い落ち込みである。

〈カマド〉西壁側では検出されなかったが、削平された壁に設置されていたと思われる。



第127図 O-1号住居跡・遺物

遺物 (第 127 図 52・53、写真図版 93)

土師器と須恵器が少量出土している。52 はロクロ成形の土師器の坏で、口縁部は外傾し、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には径 0.5 mm 大の粗砂と雲母を多く含んでいる。53 は土坑 P₂ から出土した須恵器の口縁部破片である。口縁部は外反し、口唇部に浅い沈線が 1 条巡っている。

〈時期〉平安時代に比定される。

O-2 号住居跡 (第 128 図、写真図版 89)

〈検出状況〉道路側の切土面に黒色土の落ち込みによって検出した。西側は N-1 号住居跡、南側は O-1 号住居跡と重複している。各遺構の新旧関係は切り合い等から、新しい順に O-1 号住居跡、本遺構、N-1 号住居跡である。〈形状・規模〉遺構の東側半分以上が道路の造成工事によって削平され、南側が O-1 号住居跡で切られていることから規模の詳細は不明である。遺存する西辺は 3.5 m、北辺は 2.6 m を測り、北西コーナーは隅丸を呈している。

〈埋土〉黒色土と黒褐色土の 2 層に大別され、全体に堅く締まり、IV 層起源の真砂土がブロック状に堆積している。〈壁・床面〉壁は床面から直に立ち上がり、壁高は西壁 14 cm、北壁 40 cm を測る。床面はほぼ平坦で堅く締まっている。〈柱穴〉検出されなかった。〈周溝〉北壁と西壁側の一部に幅 8~15 cm、深さ 4 cm 前後で巡っている。

〈カマド〉北壁側に設置されているが、道路造成時に本体部は削平され遺存していない。床面上には袖部の芯材に据えたと思われる石が数個散在する。煙道部は長さ 1.4 m で、径 25×20 cm の楕円形気味にくりぬかれ、緩やかな上り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径 31×26 cm、深さ 33 cm の楕円形状の土坑が掘り込まれている。

遺物 (第 128 図 54~56、写真図版 93)

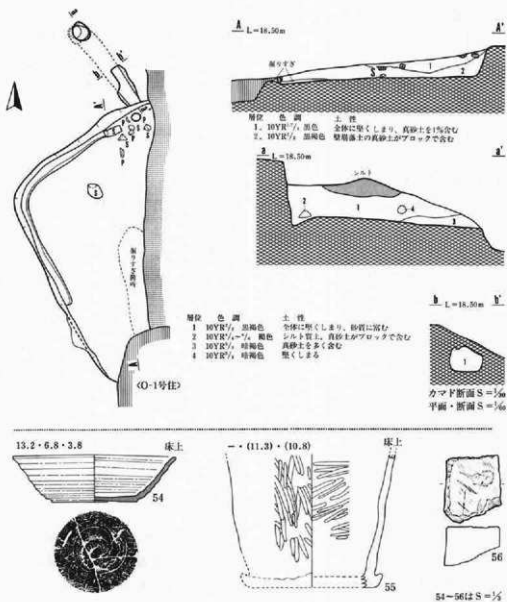
床上から須恵器、土師器、砥石が出土している。54 は須恵器の坏で、多少歪が見られる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には長石、粗砂、雲母を多く含む。55 はカマド付近出土の土師器の甕である。口縁部と底部の一部は欠損している。体部内外面はヘラミガキ調整が施され、緻密なつくりである。

56 は砥石の破片で、3 面が良く使用されている。

〈時期〉平安時代に比定される。

K-1 号土坑 (第 129 図、写真図版 94)

本遺構から縄文土器と共に伴して、奈良時代の土師器の坏と甕が出土している。57 はロクロ不使用のやや平底の坏で、体部下半に段を有している。体部外面は磨滅しているがヘラミガキ、



第128図 O-2号住居跡・遺物

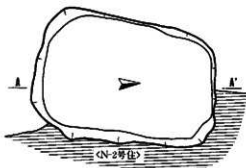
内面はヘラミガキ調整後に黒色処理されている。胎土には径1mm大の粗砂と雲母が含まれ、焼成は良くない。58はロクロ不使用の壁の体部下半～底部にかけての破片で、体部外面は緻密なヘラミガキ調整が施されている。底部は木葉痕である。焼成は堅く、胎土に雲母を多く含んでいる。

N-1号土坑 (第130図、写真図版90・94)

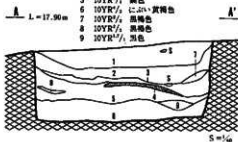
IV層(真砂土)上面において黒褐色土の落ち込みによって検出した。N-2号住居跡と重複しており、これを切っていることから本遺の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は開口部が1.97×1.27m、底部が1.8×1.15mである。壁は底面から垂直に立ち上がり、最深81cmを測る。底面はやや堅く締まり、平坦である。

埋土は黒褐色土～黒色土を主体とする9層に大別され、中位に厚さ4cmの炭化物層と焼土塊が堆積している。中位の3層と下位の6層は地山の黄褐色シルトがブロック状に含む混合土である。埋土の堆積状況は人為的な様相を示している。

遺物は須恵器とロクロ不使用の土師器の壺が出土している。59は壺の体部片で、内外面ともタタキメ調整を施している。60は壺の口頸部片である。土師器は細破片のため図化しないが、底部は木葉痕である。



層位	色	調
1	10YR7/3	黒褐色
2	10YR7/3	黒色
3	10YR7/3	暗褐色
4	10YR7/3	黒色
5	10YR7/3	黒色
6	10YR7/3	に濃い黄褐色
7	10YR7/3	黒褐色
8	10YR7/3	黒褐色
9	10YR7/3	黒色



第130図 N-1号土坑・遺物



57・58はS=1/4

第129図 K-1号土坑遺物



59・60はS=1/4

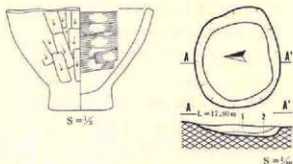
M-1号土坑 (第131図、写真図版90・94)

M-2号住居跡の南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部が1.05m×90cm、

底部が85×70 cm、深さ12 cmを測る。底面は平坦である。

埋土は黒色土と黒褐色土の2層で構成されている。

遺物はロクロ不使用の土師器が少量出土している。61は小型の甕で、底部径が小さく、体部から内湾気味に口縁部にかけて立ち上がる。口唇部はやや角ばり、体部外面はヘラケズリ、内面がハケメ調整を施している。胎土には径1 mm 大の粗砂と雲母を含んでいる。



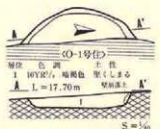
第131図 M-1号土坑・遺物

O-1号土坑 (第132図、写真図版90)

O-1号住居跡の東側で検出した。西側がO-1号住居跡と重複し切られていることから、平面形・規模の詳細は不明である。遺存する開口部は1.24 m×35 cmを測り、壁は底面から外傾して立ち上がっている。深さは14 cmほどである。底面は平坦である。

埋土は暗褐色土の単層である。

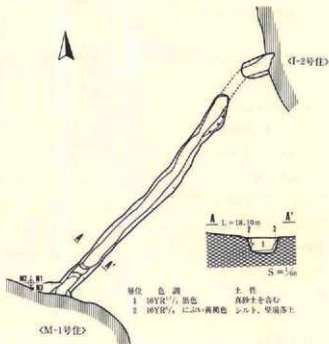
遺物は出土していない。



第132図 O-1号土坑

N-1号溝跡 (第133図)

NグリットのIV層上面で検出した。北西側がI-2号住居跡、南東側がM-1号住居跡と重複し、切られていることから本遺構が新しい。規模は長さ5.7m、上幅25～33cm、深さ14cmを測る。北西から南東方向にのびている。壁は底面から垂直に立ち上がり、底面は平坦である。埋土は黒色土を主体とする2層で構成される。遺物は平安時代の土師器が出土している。



第133図 N-1号溝跡

V 遺構外の遺物

1. 縄文時代の土器 (第134~143図、写真図版98~107)

遺構外からの遺物は量の多寡を別とすれば、ほぼ調査区全域から出土している。縄文土器は、早・前・中・後・晩期に分けられる。出土する地点はそれぞれにある程度のまとまりがあるようである。

〈早・前期〉(第134・135図-1~18 143図-179、写真図版98) 1は格子目状押型文で胎土に少量の繊維を含む。2、3は貝殻条痕文で、3は内面も横走る。2は口縁部がゆるやかな波状を呈する小形の鉢。4、5は貝殻文と粘土貼付文で5は内面にも条痕があり、両者とも胎土に繊維を含む。6~11は内外面に縄文を施文する一群で胎土に微量の繊維を含む。8の口縁部は小波状、11の底部はやや乳首状を呈する。12、16は不整擦糸文で口縁部は平坦に調整している。13、14は単・複節斜縄文で、13は口唇部指頭状圧痕で単節、14は原体圧痕をもつ複節縄文(LRL3段複節か)。15は丸みのある口縁部で胎土に繊維を含み、斜行縄文の上を擦糸文が横走る。17は単軸1の擦糸文。179は網目状擦糸文で口縁直下および胴部の無文帯の上下には原体圧痕が見られる。胎土に繊維を含み、内面の一部に浅い条痕が残る。補修孔は両側から穿孔。18は小波状口縁の下に縦の羽状縄文、頸部押圧縄文で体部も縦と弧状に同様の手法を用いている。

1は蛇王洞2式に、2~5は槻ノ木・野島式期に、6~11は赤御堂式に、12~16は関山・花積下層式併行期に、17、179は大木2a式に、18は円筒下層C式に相当するものと考えられる。以上の土器は2がG-1号住埋土から出土した以外はいずれも包含層の出土で、1~3、6がQ、4がN、5、9がR、7がM、8・10~17がK、18がF、179がB.Gクリット出土で、調査区南半からの出土が多い。

〈中期〉(第135図19~36 第136・137図 第141図、142図-168~171、第143図-180~185 写真図版99~101、105・106)

ほとんどが大木8b・9式で遺構周辺の傾斜地から多量に出土した。縄文時代の遺構の少ない東側・南側では少ない。19は粘土紐による隆帯の上下に押圧縄文、大突起の下は連続S字状隆線と細い沈線の組合せと横に押圧縄文。20は口縁部に小さな山形突起をもち頸部は擦糸原体圧痕。21は頂部に刻みをもち、連続S字状隆線が縦に貼付けられる。以上は24、25を含めて大木7b式と考えられる。22~36はキャリパー状を呈する一群。31は丹塗りで縄文の上に粘土を加え、隆帯を造り出している。37~47は口縁部がやや内傾する深鉢、48~55は外傾する深鉢、151~170の中には151の丹塗りに有孔鐔付土器、154の注口部、161、162の脚部、前者は4~5個の透しが入る、などが含まれる。以上は24、25を除いて大木8b式と考えられる一群であるが、

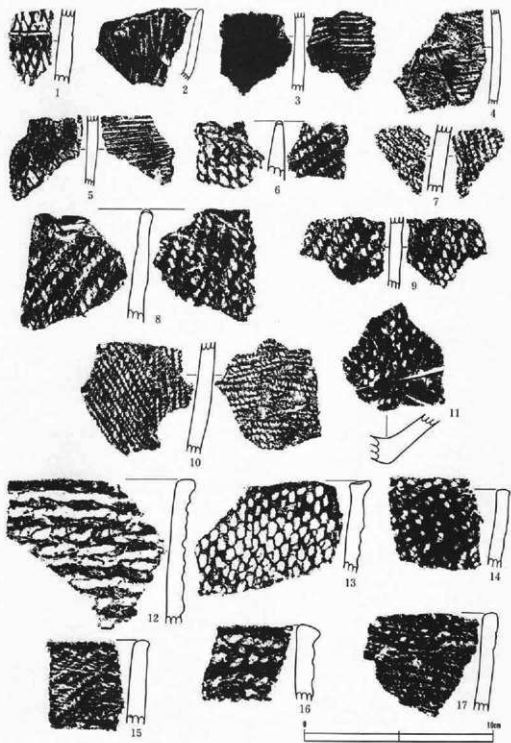
46は大木9式の可能性もある。56~77、168~171は大木9式で、磨消縄文あるいは充填縄文が多用され、クテ・ヨコ位置の槓状把手(62、63、75)や竹管文、刺突文が特徴的となる。また、61、68のような角度のある方形状の文様も出現する。

〈後期〉(第138図78~86、第142図-172 写真図版102) 調査区西南寄りのK・L・P・Qグリット内で出土。78、79は口縁部に刻目文のある土器で、入組文となるかどうかは不明。80~84は磨消縄文をもつ一群で82、84は壺。172は79と同形。85、86の羽状縄文をもつ粗製土器はこれらに伴うものであろう。いずれも後期中葉以降に属する土器で、県内では貝島Ⅲ・Ⅳ群、端山Ⅴ・Ⅵ群と呼ばれている一群に含まれる。

〈晩期〉(第138図-87~101、第142図-173 写真図版102) 出土地点は後期の土器と同様、西南のF・G・K・L・Qグリット内である。特にQグリットに多い。87、88は大洞BおよびB・C式の壺と鉢、89、90、92、93、173は大洞C₂式の浅鉢と台付鉢、91、94~97は大洞A式、100、101は大洞C₂式に伴う深鉢とおもわれる。

〈粗製土器〉(第139図-102~127、第143図-180~185 写真図版103・107) 中期と推定される深鉢の破片である。181~182はおそらく大木9式に伴うのと考えられるが、他は大木8bおよび9式のいずれに伴うかは断定できない。

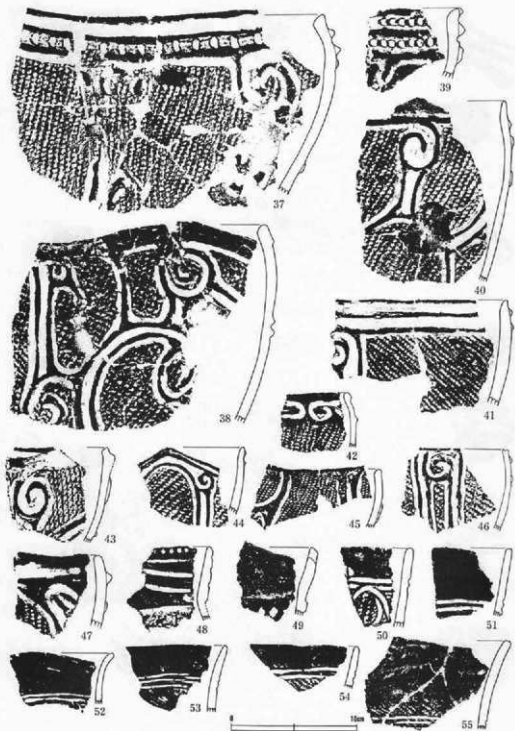
〈底部〉(第140図 写真図版104) 木葉痕、編物痕、ミガキ・ナデ調整の種類がある。図化した土器の中では大木8b式には網代痕は少なく、ミガキあるいはナデが多い傾向が認められる。大木9式には木葉痕が多く見られる。編物痕は坪井(1899)のⅠ型(一本越え一本潜り一本送り)が多く、143、147のようにまれにⅡ型、Ⅲ型(二本越え一本潜り右あるいは左送り)がある。数量処理は行っていないが、ミガキ・ナデ調整が最も多い。この中には編物・木葉痕の上からミガキ・ナデ調整されているものも多く含まれている。



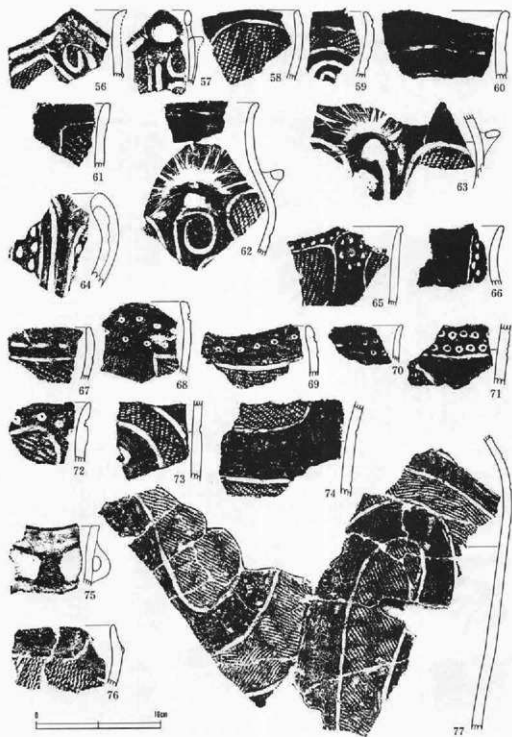
第134图 遺構外遺物：縄文土器(1)



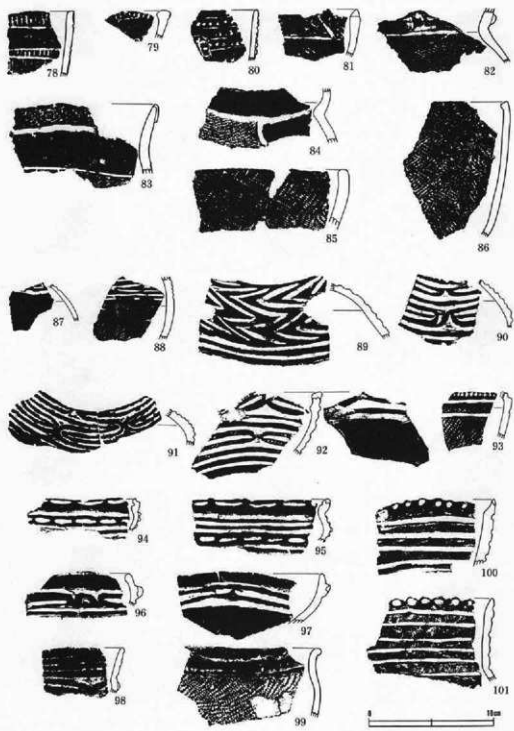
第135图 遗構外遺物：縄文土器(2)



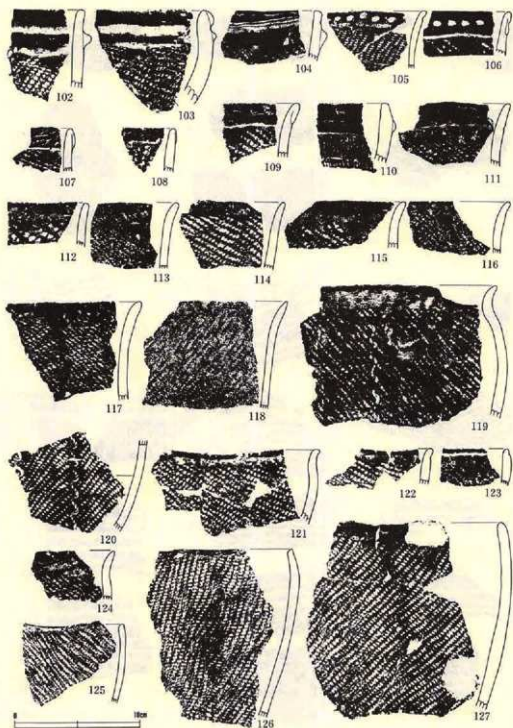
第136图 造柄外造物：縄文土器(3)



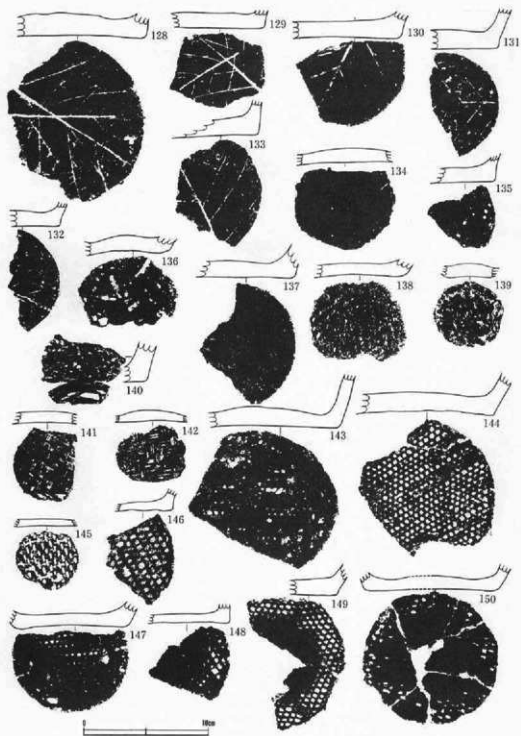
第137図 遺構外遺物：縄文土器(4)



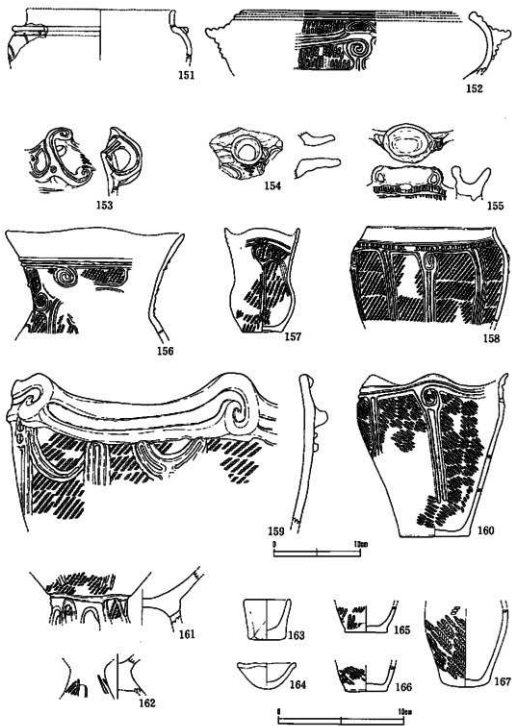
第138圖 遺構外遺物：繩文土器(5)



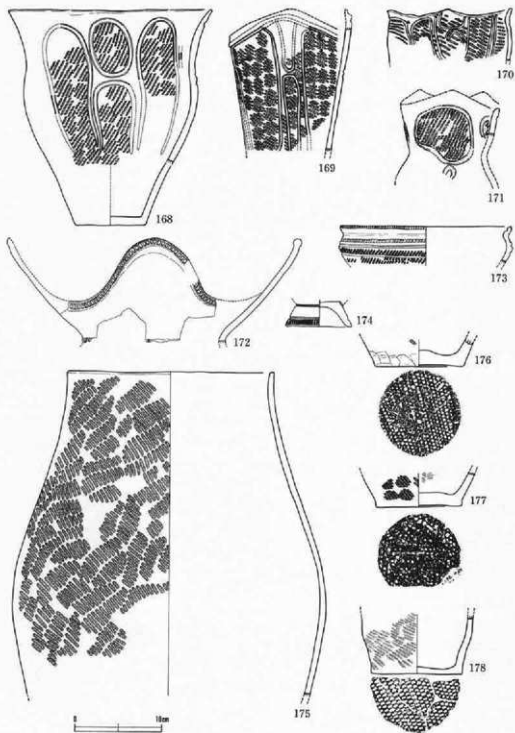
第139圖 遺構外遺物：縄文土器(6)



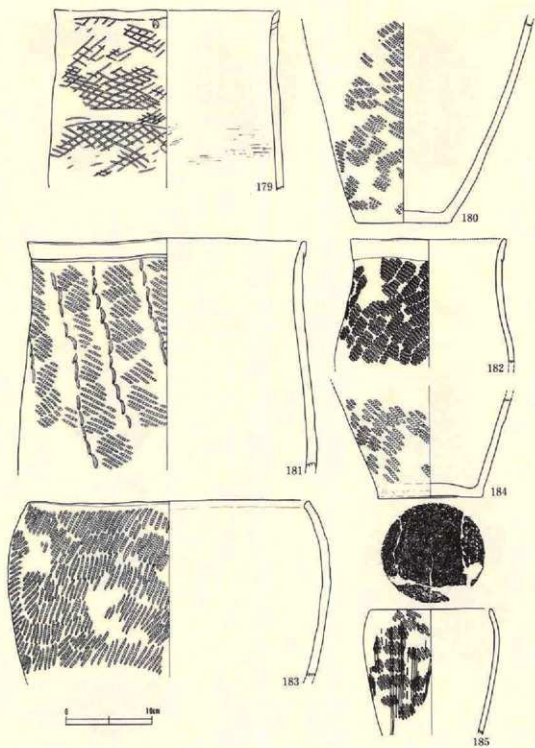
第140図 遺構外遺物：縄文土器(7)



第141圖 遺構外遺物：繩文土器(8)



第142図 遺構外遺物：縄文土器(9)



第143图 造構外遺物：縄文土器00

2. 弥生時代の土器（第144～156図、写真図版108～117）

調査区の西南部分、住居跡のある区画を中心に出土しており、北側及び土師器の出土する東側ではほとんど出土していない。时期的には複数期にわたっているとおもわれるが、本項では壺、鉢、高坏、蓋、甕の器種毎に記述し、時期についてはまとめの項で述べる。

壺（第144図1～6、第145図12～23、写真図版108・109）：1は胴下半部まで変形工字文と平行沈線文がある小型壺、文様の連続点は刺突による抉り出しである。二単位の文様であるため、正面と背面は口縁、肩、胴上半の三部分が縦一列に揃う。2は細口の壺、口縁部は帯状の隆帯に4箇所縦にスリットを入れ、その間に沈線が走る。頸部、体部は丁寧なヘラミガキであるが、内面はほとんど無整形で肩部には指痕が残っている。また、口頸部成形の際器壁が薄くなったためか、内面に幅1.5cmの粘土帯を貼り付けて補強している。3は口縁部筒形で、太い2本の沈線に2個一對の瘤状の造り出しが四単位めぐる。貼瘤ではなく、中央をヘラで抉り取り両側が瘤状になるようにしている。全面ヨコのミガキ。4は口縁部がくの字状に外反し、最大径は胴中央部にある。無文でミガキ、胎土に金雲母を含む。5は最大径が胴下半部にあり2本と3本の平行沈線を単位としている。胎土に金雲母を含み全面丹塗りで充填縄文、無文帯はよく磨かれている。6は球形の胴部をもつ壺とおもわれる。磨消縄文で連弧文あるいは同心円文と推定される。底部はやや上底で胎土は砂を多く含む。内外面とも丹塗りであるが、外面の一部に炭化物が付着している。12、13は口縁部に隆帯がめぐる。14～18は肩の部分で有文。14、15はおそらく変形工字文、16は2個一對の貼瘤をもち、沈線間は連続する刻目文がありよく磨かれている。胴中央部の破片。17、18は同一個体で上下の沈線の連続山形文がめぐる。山形の上半は横走する縄文であるが磨消か充填かは不明。胎土に金雲母を含む。19～23は体部縄文のみの中、小形の破片。21を除いて糸は横走する。20、22は縄文の上を磨いており一部で縄目がつぶれている。21は縄文晩期の可能性もある。23は胴中央部に孔をもつが、一つは貫通し、一つは中途まで。補修孔としては不自然であり、蓋受けの孔としては位置が下にあり、目的は不明。

鉢（第144図7～11、第146図24～41、写真図版108・109）：8～11、24～32は浅鉢、8は口径25.5cmを計る大形で三単位の変形工字文が二段めぐり、貼瘤は縦三段と二段をくり返す。9、30、31は大・中形で器壁は薄い。全面に縄文を施文しているが、その上から磨いており部分的に縄文が消えている個所があったり、不鮮明になったりしている。胎土に細砂を多く含む。31は網代痕。10、11は横走する縄文のみの施文で前者の口縁部は縄文の上から荒いヘラケズリ調整。24、25は変形工字文がめぐるやや直立する鉢で前者には補修孔がある。26はやや頸部の張る器形でゆるやかな波状口縁。27は2本の沈線のみで施文で、胎土は9、30と同様砂を多く含む。28は体部上半に29は下半部に沈線が見られるがモチーフは不明。29の底部は細い沈線がめぐる。32は口縁部が外反し下半部が張るこの時期特有の鉢で頸部に縄文がかすかに残って

いるが磨かれており不鮮明。口縁部の沈線は部分的に粗雑な押し引き状を呈している。7、33～35は小型鉢。7の肩部の沈線は押し引き的な手法で、体部の縄文は磨かれてつぶれている。33は小さな波状口縁で胎土に石英質の粒子を多く含み、縄文は縦走る。34、35は口唇部に刻目をもつ。36は山形口縁で肩が強く張る器形と推定される。頸部内側に太い2本の沈線がめぐり、当遺跡では類例がない。37は連弧文的な磨消縄文。38～41、第155図101～103は細い沈線で施文され、原体は条の間隔があく。文様単位は不明。41の内面には刷毛目状の整形痕が残る。

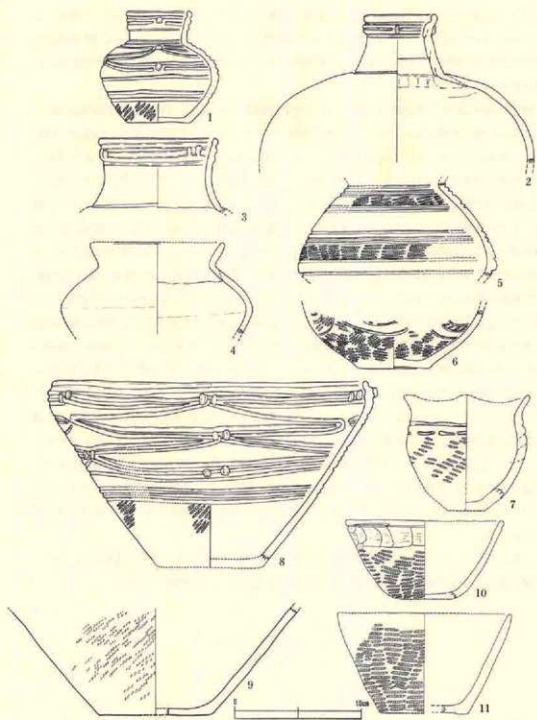
高坏(第147～151図、写真図版110～113)：個体数、破片数とも壺に続いて多い。42～44、68～73は坏部がやや浅く口縁部が直立または少し内傾し、観察する限りでは平縁である。モチーフは73は不明であるが他は変形工字文で、内面は丁寧に磨かれており胎土には金雲母を含む。42は特にミガキが顕著。43は雑な沈線で貼瘤をもつ。坏部下半にかすかに縄文がのこる。69はやや太目の沈線による施文。70、71は太い沈線による貼瘤付の変形工字文を、72、73も同じく太い沈線で施文しているがモチーフは不明。45は同じ平縁であるが口縁部が少し外反し、坏部は深く沈線は細く鋭い。46～48、67、76～80は口縁部が外反し山形を呈する一群。山形は頂部のみのも、小さな凹みのあるもの、大きく抉りのあるものなど各種ある。46、48、67は細い鋭い沈線で丁寧なミガキ、文様、地文、胎土がよく似ている。47は沈線がやや太く、胎土に粒子を含み荒いナデのみで縄文もなく、やや雑なつくりである。49の2点は同一個体ではないが、モチーフが共通するので同一に扱った。脚は壺か鉢の台となる可能性が高い。76、77は鋭い山形で頂部に小さな刻みと体部に貼瘤をもつ。78～80はおそらく同一個体で、山形の頂部はなだらかで口唇部の沈線は頂部手前で切れる。頸部の三本の沈線の下はゆるやかな波状文と推定される。74、75はゆるやかな波状口縁とおもわれ、74は頂部に刻みがあり内外面ともミガキであるが、内面はやや雑である。75は波頂部に向かって沈線も波状となり、沈線部分は丹塗り。坏部で丹塗りの痕跡のあるものはこの1例のみである。50～61、81～86は脚部。61を除くと文様は平行沈線及び波状文に限られる。61は坏底部に円文らしき痕跡があり、縄文時代最終末期の可能性もある。50は平行沈線のみ、51～53は下部に波状文をもつ可能性がある。53は脚と坏との接合面に指痕が残る。54は平行沈線を区切って貼瘤を付けたもの。他は波状であるが56、58のようにゆるやかなもの、59、86のように三角形のもの、60のように連弧状となるもの、57のように波状の上1本が頂部で切れるもの、縄文のあるものないものなど様々である。丹塗りの認められるものは53、60、85の3点で坏部と合計しても4点のみで少ない。胎土には金雲母を含むものが多いが、色調が黄褐色で胎土に石英や荒い砂の粒子を含むものには金雲母が認められない。

蓋(第148図62、151図87、写真図版112・114)：2点のみ出土。62は倒皿状で欠損、三単位の変形工字文が二段めぐると推定される。丹塗りで胎土に金雲母を含むが石英粒も多く、器

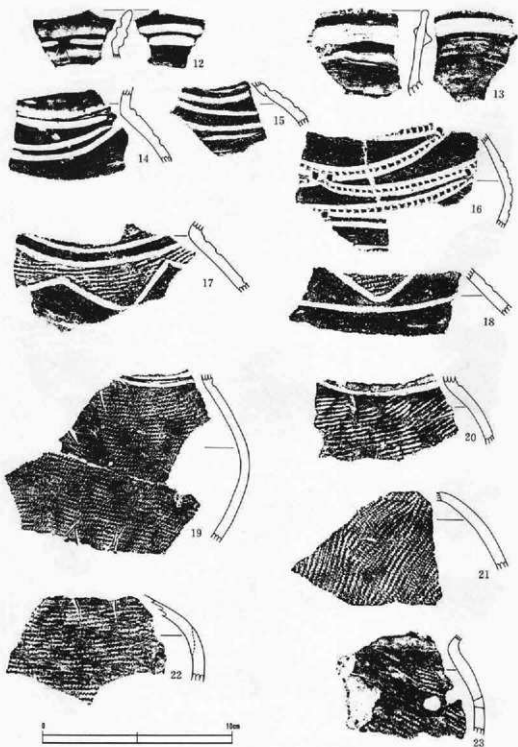
面はザラザラしている。口縁部は不明であるが器形からして2個一對の孔があるのと推定される。径は17cmを計るがこれに対応するような無頸(広口)壺は出土していない。87は倒笠状と推定される口縁部片。太い沈線で袂り階段状を示す。口唇部は小さな破損多いが炭化物の付着は見られない。

壺(第152~156図、写真図版114~116)：出土壺が最も多い器種。口縁部は平縁が最も多く、この外に山形、波状がある。最大径は例外を除いて(92、95など)肩部にあり、口縁部は外反する。頸部はほとんどがヨコナダ整形で、1本の沈線をめぐらすものが多い。88、89は最も大形の部類に属する。89は地文の上を少し磨いており、口縁には小さな山形突起がある。地文はRL単節で横走し、胎土には石英粒を多く含む。90、91は波状口縁で、90は口唇部に1本、頸部に2本の沈線がめぐる。荒いハケ整形の上から縄文を施文している。91はやや頸部が長く沈線は細く鋭い。肩部は縄文の上を磨いており縄目がつおれている。92は頸部がほぼ直立し、地文の上をナデている。93は口唇部平坦で極めてシャープである。頸部は細い半載竹管状の沈線、LR単節の縄文は肩では斜行し、それ以下は横走する。94は完形品であるがいびつな器形で、頸部以下は全面縄文。95は口唇部が原体回転、頸部沈線は半載竹管状の施文具、胴部の原体は付加条の縦回転である。原体を除くと形態、胎土、焼成は他の壺と同様である。96は88と同様の器形。97~100は胴下半部と底部。99は胎土が密で縄文が細かく壺の可能性がある。100は大形の底部で地文は横走、底面は網代痕。104~114は頸部に沈線のない一群で、107は口縁部が短く強く外反する。108は原体の上を強くナデている。112は器面が剝離しているがおそらく頸部は原体側面圧痕。113は肩部に補修孔。114は深鉢で口縁部は小波状で縄文の上からナデている。115~120は頸部に1~2本の沈線がめぐるもので、120のみ2本沈線で山形口縁。121は肩が強く張り内面に条痕がある。胎土、焼成は他の壺と同じ。以上の壺のほとんどに炭化物の付着があり、熱を受けているものが多い。胎土は石英粒などを含み概して荒いが、蛸母を含む例も少数ある。

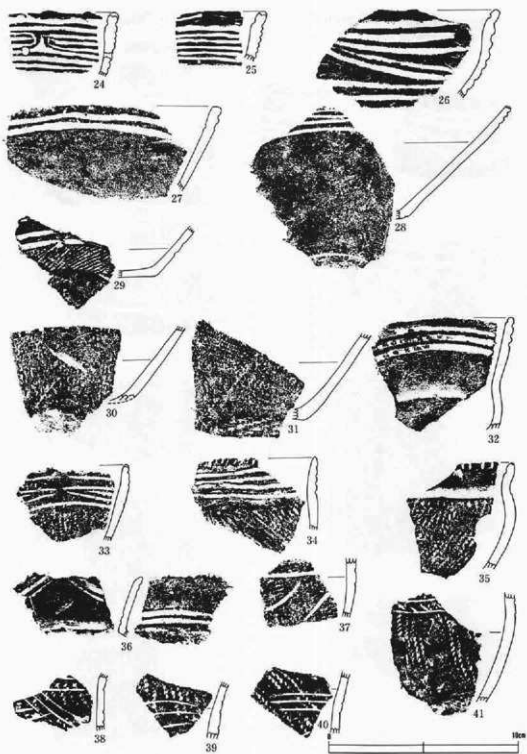
底部(第156図122~126、写真図版117)：123は壺の、他は壺の底部とおもわれる。126は丁寧に磨いているが他は網代痕が残る。底部の残る壺、甕では網代痕は少ない。



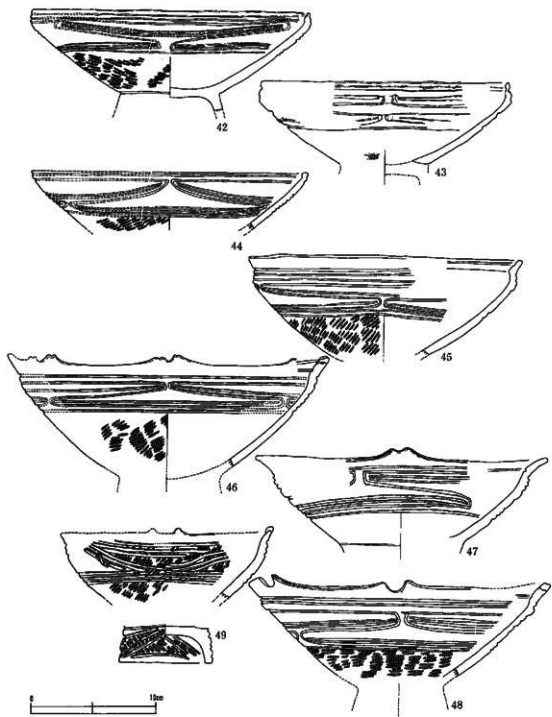
第144图 遺構外遺物：弥生土器(1)



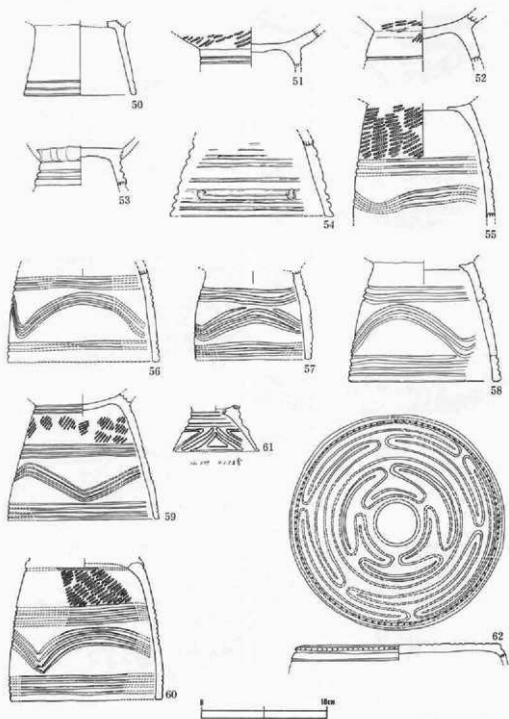
第145图 遗構外遺物：弥生土器(2)



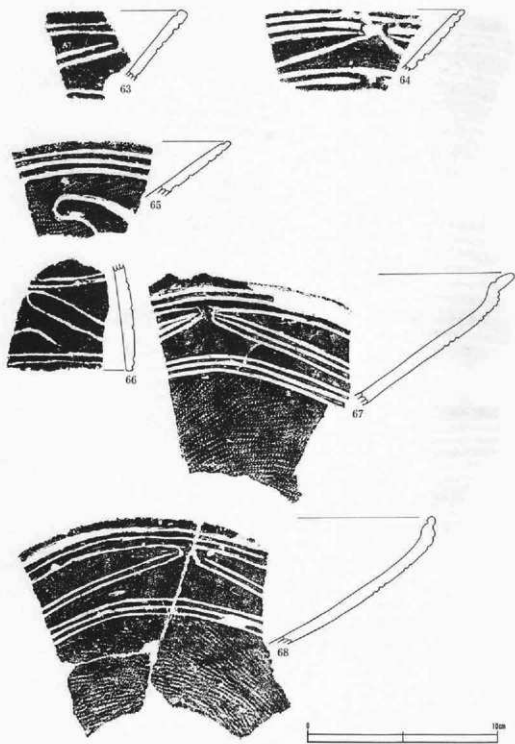
第146图 遗構外遺物：弥生土器(3)



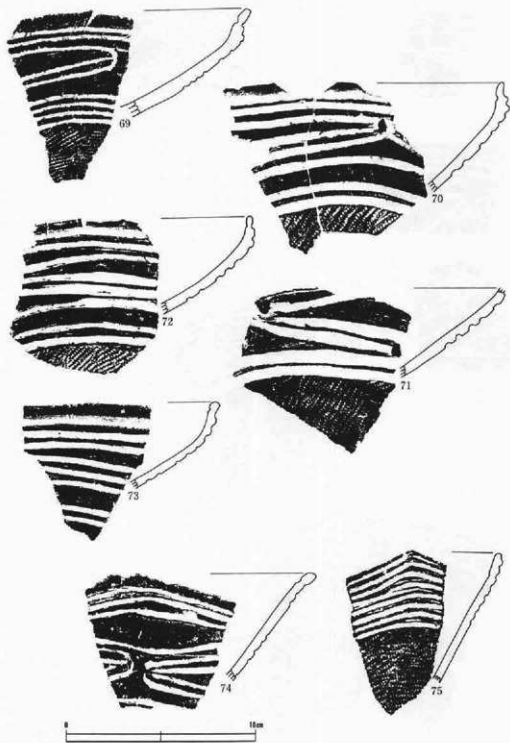
第147图 遺構外遺物：弥生土器(4)



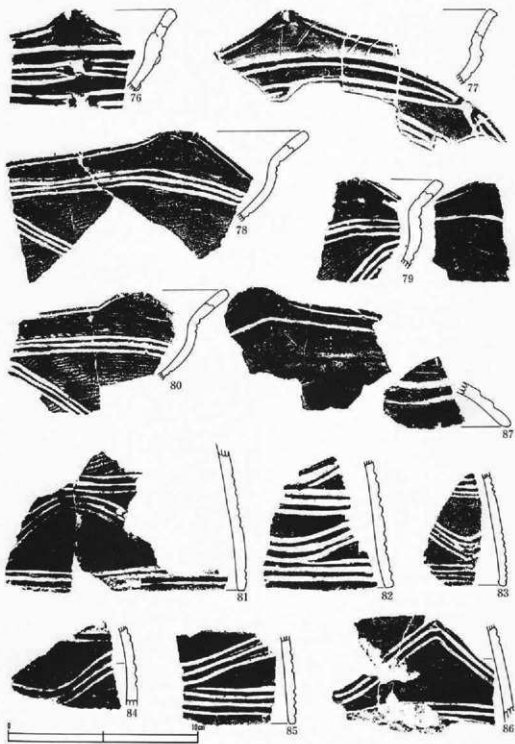
第148图 遺構外遺物：弥生土器(5)



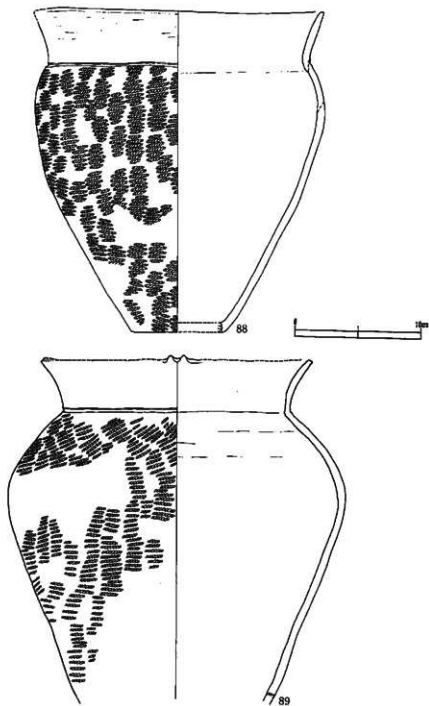
第149图 遺構外遺物：弥生土器(6)



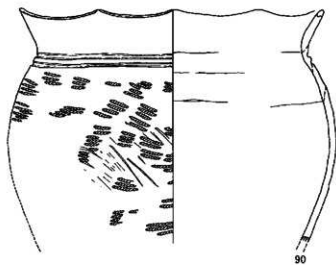
第150圖 遺構外遺物：弥生土器(7)



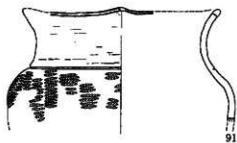
第151圖 遺構外遺物：弥生土器(8)



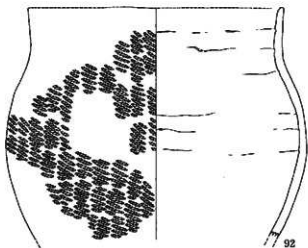
第152図 遺構外遺物：弥生土器(9)



90



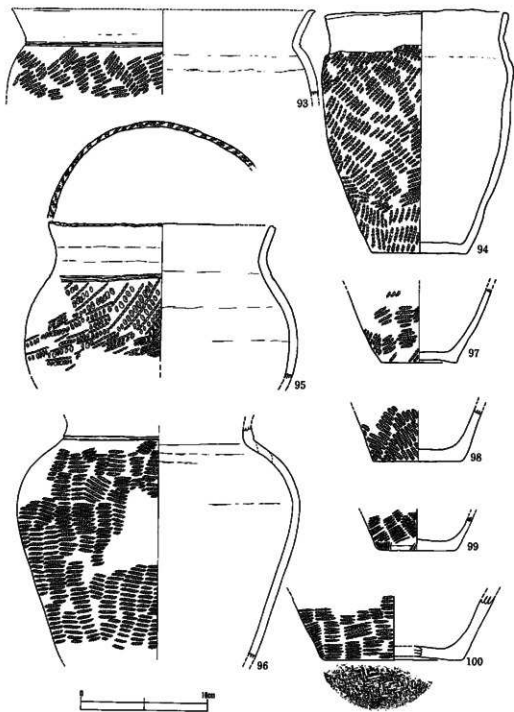
91



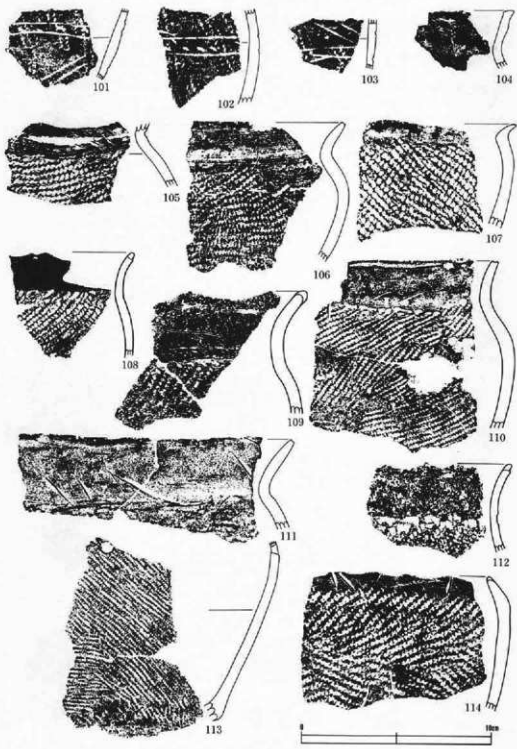
92



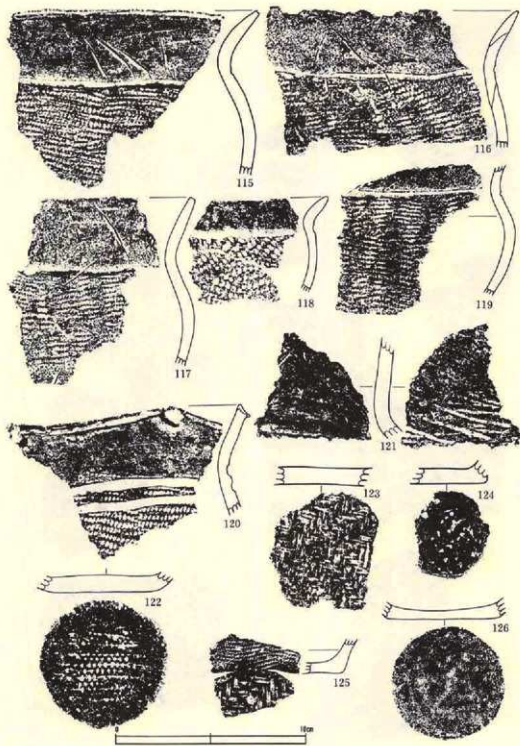
第153図 遺構外遺物：弥生土器00



第154図 遺構外遺物：弥生土器(1)



第155圖 遺構外遺物：弥生土器(1)



第156图 遺構外遺物：弥生土器03

3 石器 (第 157~185 図、写真図版 118~129)

出土した多量の石器のうち、形の判明する定形的な剥片石器類、磨製石器類はすべて図示したが、擦石、不定形石器等は紙数の関係で省略したものもある。以下に記述する各石器はすべてのグリットにわたって出土したもので、当然いずれかの時代・時期に属するものである。が、出土状況からは時代が把握できないので、すべて器種ごと一括して説明する。ただし、奈良・平安時代のものは除いてある。なお、弥生時代に属する可能性の高いものについてはその都度文中で触れてある。

石 鏃 (第 157~161 図 1~139、写真図版 118) : 139 点を大まかに分類すると 1~80 は無茎鏃で、1~39 は挟りが比較的深く細長い二等辺三角形形状を示す。1~3 は特に細身。挟りは三角形状、楕円形、湾曲状など各種がある。40~65 は挟りの浅い一群で、40、41 は幅広。42、43 は剥片の両面または片面の縁辺部を剝離調整した偏平な鏃。66~80 は平基の無茎鏃。正三角形、二等辺三角形を呈するものが多いが、68 は先端が鳥の嘴状に湾曲している。秋田県八木遺跡で出土した嘴状石器と同類であり、1 点のみ出土。石材は珪質泥岩と粘板岩が最も多く、輝緑凝灰岩、チャート質が少量ある。61 は類例の少ない水晶製。基部にアスファルト等の付着物のあるものは皆無。81~95 は基部が丸みをおびる一群で、長大幅が基部にあるものが多く、幅と長さの比は同程度で身は厚い。92~94 は細長い例。98~100 は剥片の側面を調整した菱形を呈する一群。有茎鏃は 101~139 で、101~127 は関をもつ。(破片は推定)。124 以下はやや大形で尖頭器の可能性もある。茎に対して関はほとんどが鈍角で直角または鋭角になるものはない。107、108 は身元に特徴があり、111 は茎と身の長さがほぼ等しい小形の例。128~139 は柳葉形あるいは棒状を呈する一群であるが、133、134 は無茎および円基鏃に含まれるものである。以上の石鏃も無茎鏃と石材はほぼ同じ傾向にあり、茎や身にアスファルト等の付着物も一切見られない。数量的には無茎鏃 81 (58%)、円基鏃 (菱形含む) 21 (15%)、有茎鏃 37 (27%) となる。

尖頭器 (第 161~162 図 140~147、写真図版 119) : 7 点出土。石鏃にくらべて長さ、幅、厚さがあり重量は 5g 以上である。石材は珪質泥岩と粘板岩である。147 は石筥の可能性もある。

石匙・搔削器 (第 163~166 図 148~225、写真図版 120・121) : つまみのある石匙およびつまみはないが形態並びに機能が石匙と同様に考えられるものを一括した。148~179 は縦形石匙と呼ばれる一群である。片面の全周に調整剝離があり、裏面にも調整剝離をもつものが約半数を占める。形態は長方形、三ヶ月形、クツペラ形、不定形などである。先端部は 148~149 のように直線的なもの、150 のように尖るもの、159、169 のようにやや丸みをおびるもの、170 のように内湾するものなどがある。177 は鏃の可能性もある。180~186 は横形で数は少ない。184 のつまみは刃部に対して斜めに付くが他は平行であり、刃部は片面のみを調整剝離している。石材は 90% 以上が珪質泥岩で、外に粘板岩、輝緑凝灰岩が数点あるのみ。つまみ部分および刃部等

に付着物は全く認められない。187～200 は横長で刃部が下にある一群。190、199 などはずまみが欠損した例と思われる。187 の刃部は小剥離を除いた部分が摩耗のためか丸みをおびている。201～225 は縦長で側面あるいは先端に刃部をもつ一群。菱形石匙の上部が欠損した例も含まれていると思われる。刃部は両側面、片面および先端部の三者があり、それぞれに両面、片面の剥離調整がある。203、213 は折れた部分の片面のみ再調整した例。石材は石匙と同様 90% 以上が珪質泥岩で、外に粘板岩製が数点あるのみ。

石 鏟 (第 167 図 226～249、写真図版 119) : 頭部を丁寧につくり鏟部が明瞭な 226～239 の一群と、頭部の調整が少なく三角形の剥片の一部を加工した 240～249 の一群とがある。前者の鏟部は総じて長く、丁寧な調整剥離がなされている。239 のみは鏟部が短く先端は磨減が著しい。235 の頭部の片面にアスファルト状の黒い付着物が斑点状に認められる。後者の鏟部は側面のみ調整が多く、240 を除くと磨減度は少ない。石材は 24 点中珪質泥岩 19、粘板岩 5 である。

ヘラ状石器 (第 168 図 250～261 写真図版 122) : 石篋とも呼ばれる一群で 12 点出土。形態は頭部が狭く刃部が開くものと、柳葉形状のもの、円形状のものなどがある。250 を除いては両面に調整剥離がある。刃部は 261 を除いて両面調整。石材は珪質泥岩、硬質砂岩、粘板岩が用いられている。

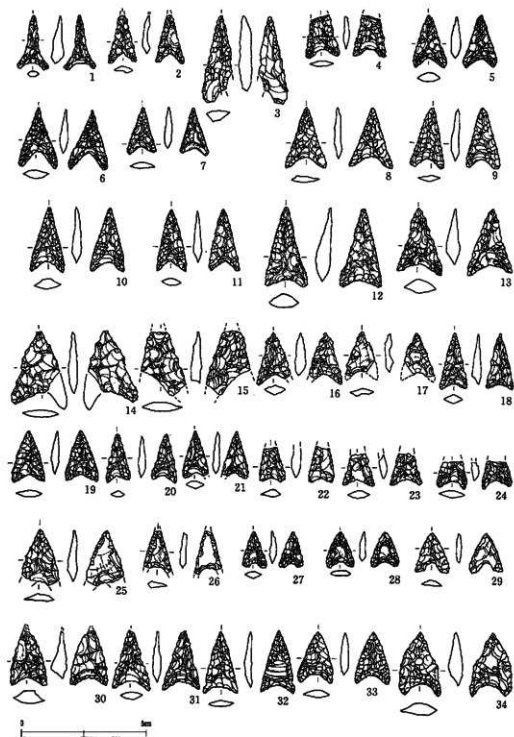
不定形石器 : 剥片を利用して調整剥離を加え刃部をつくり出しているものと、剥片そのものを用いている一群とを一括した。特定の名称を与えられていないので、いくつかに分類して記述する。

I 類 (第 169～171 図 262～331、写真図版 121) : 剥片の周辺部に丁寧な剥離を行い円形、方形あるいは三角形等に整形したもので掘器・削器としての機能を有するもの。剥離調整は両面の全周にあるもの、側面にあるもの、片面の両側面あるいは一方の先端部にあるものなど様々である。量的には先端部に刃部のあるエンドスクレーパー的なものと、側面に刃のあるサイドスクレーパー的なものが多い。277、299～300、306、310～311 は楔形石器、291、292 は挟りの部分を利用したもの。307、308 は幅広い掘器。315 は黒曜石製で剥片の一部を調整したもの。317 は先端部をわずかに加工したもの。

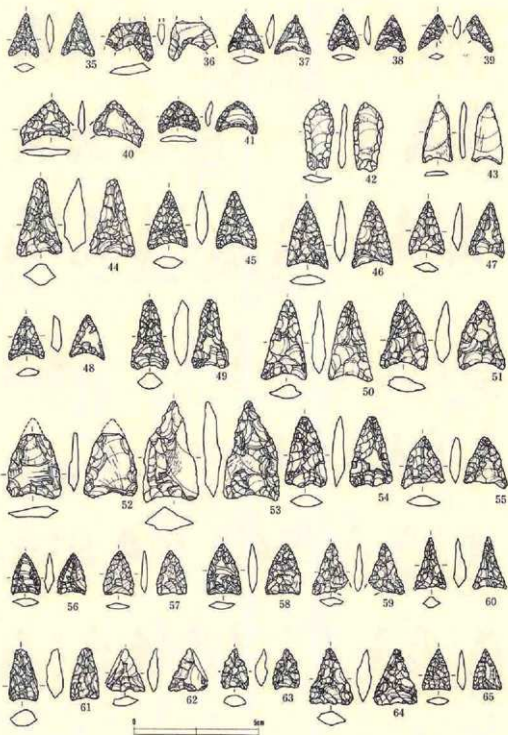
II 類 (第 171 図 332～338、写真図版 121) : 一次剥離の先端部を利用したもので、彫器的あるいは穿孔具としての機能が考えられるもの。336～338 は側面に調整剥離がある。

III 類 (第 171 図 339～344、写真図版 121) : 自然面を残す縦長剥片の先端部を加工したもので、掘器的な機能が考えられる一群。344 は刃が円く敲石的なものである。339～340 は黒曜石製。

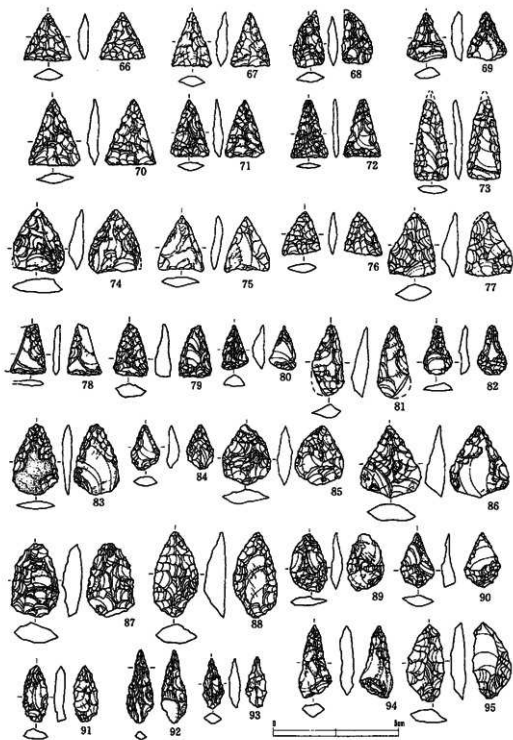
IV 類 (第 172 図 346～353、写真図版 122) : 剥片および石核とおもわれるものを一括した。346～348 と 350、352 は珪質泥岩の大形剥片と石核。349、351 はチャート質の剥片と石核、353 は粘板岩の石核。



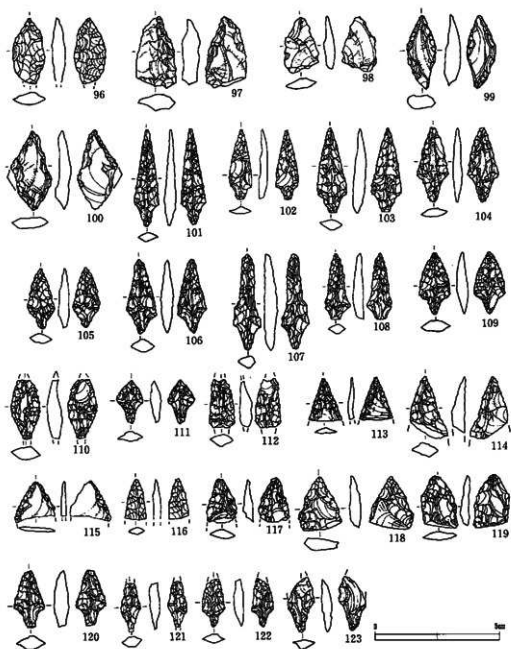
第157图 遺構外遺物：石器(1)



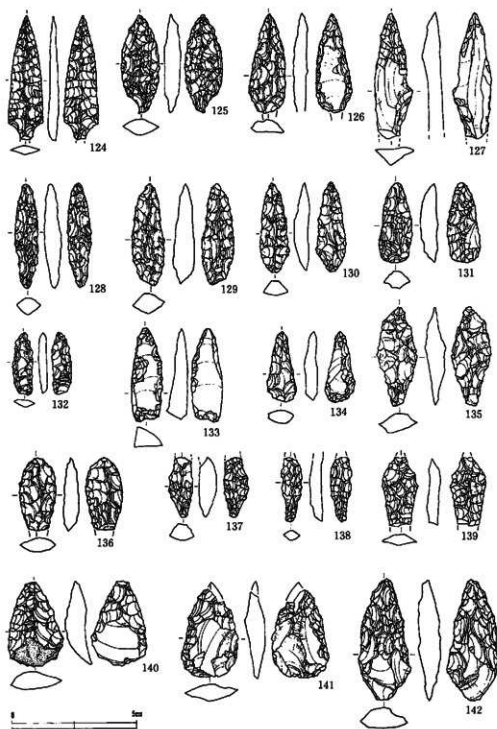
第158图 遺構外遺物：石器(2)



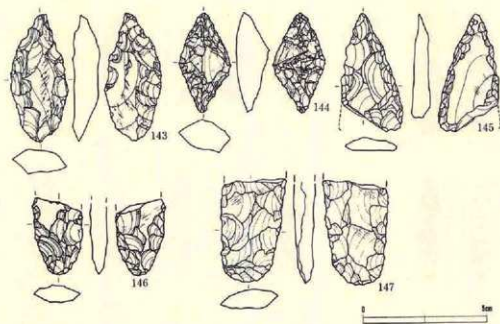
第159图 遺構外遺物：石器(3)



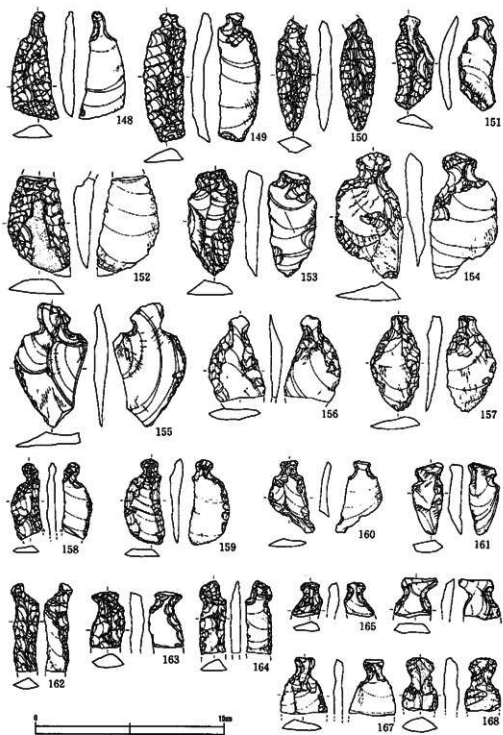
第160 遺構外遺物：石器(4)



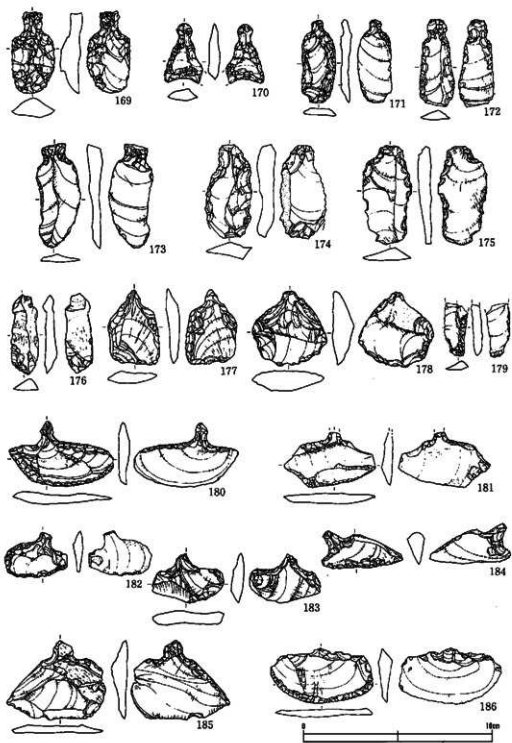
第161図 遺構外遺物：石器(5)



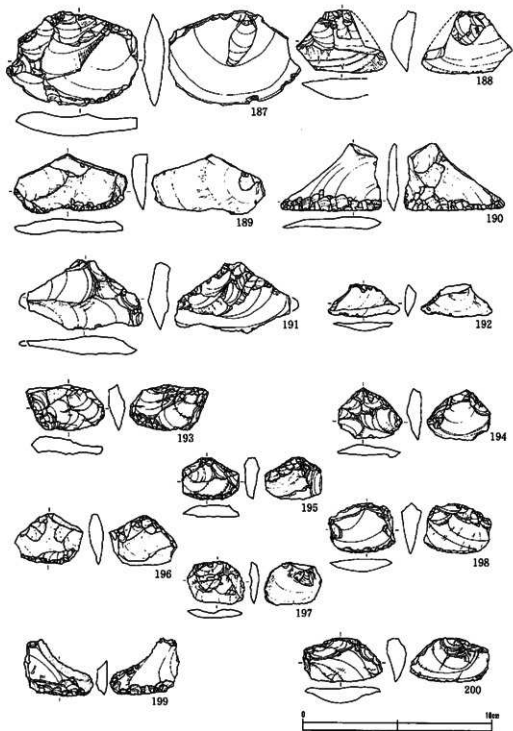
第162図 遺構外遺物：石器(6)



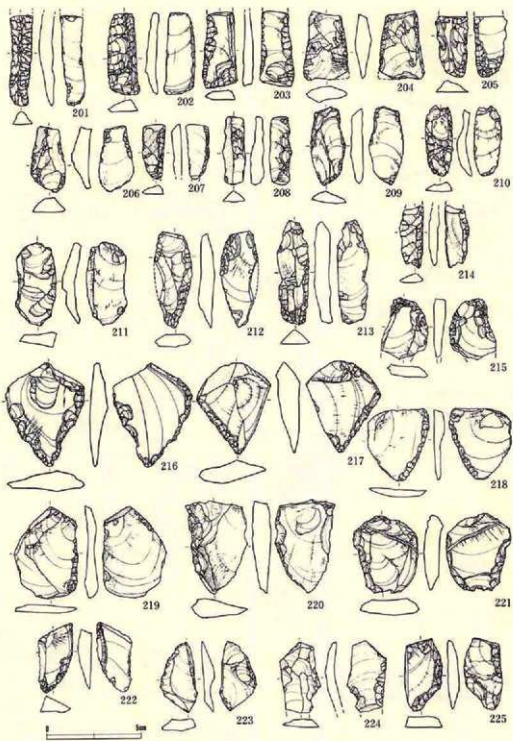
第163図 遺構外遺物：石器(7)



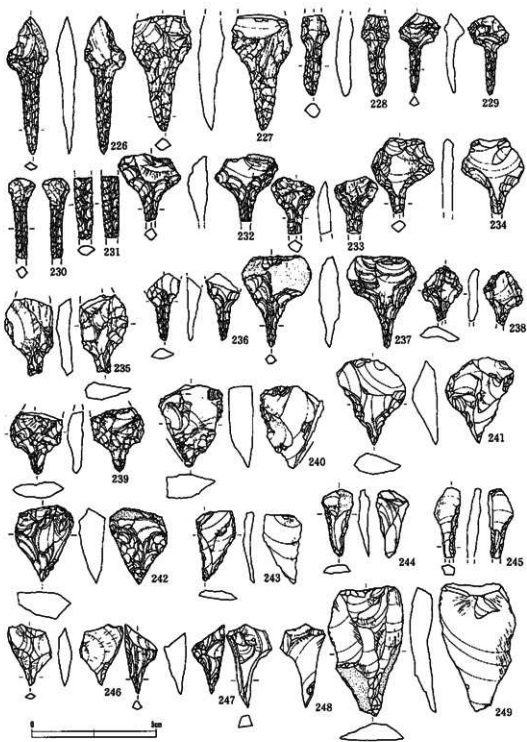
第164圖 遺構外遺物：石器(8)



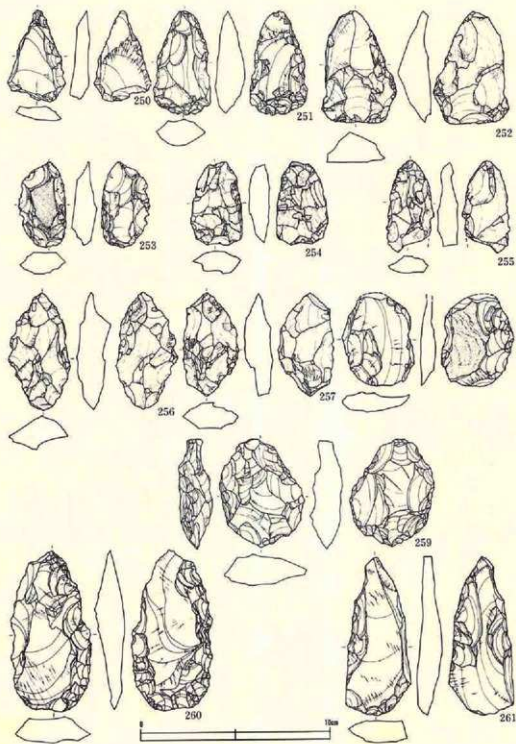
第165图 遺構外遺物：石器(9)



第166図 遺構外遺物：石器00



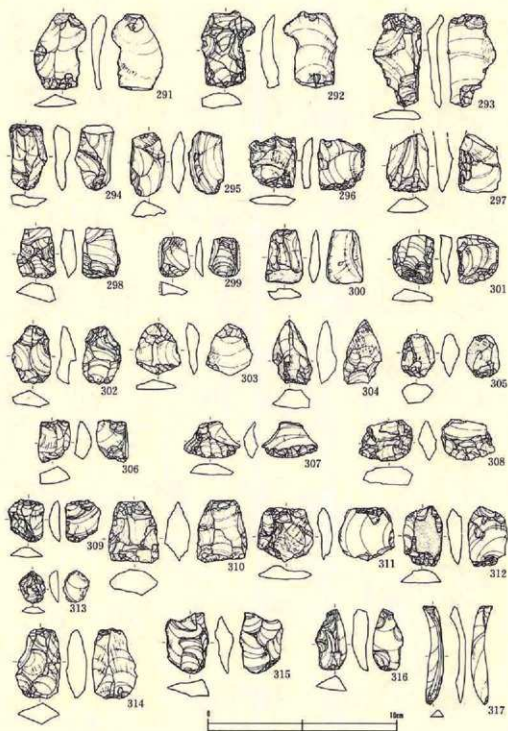
第167図 遺構外遺物：石器(1)



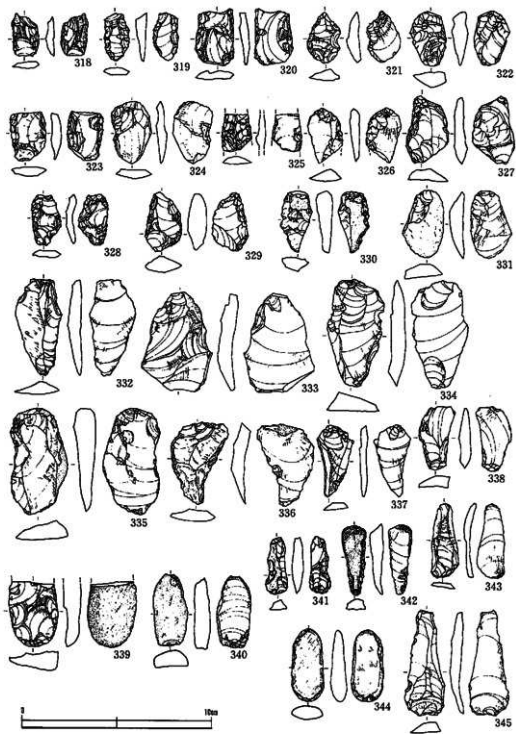
第168図 遺構外遺物：石器(12)



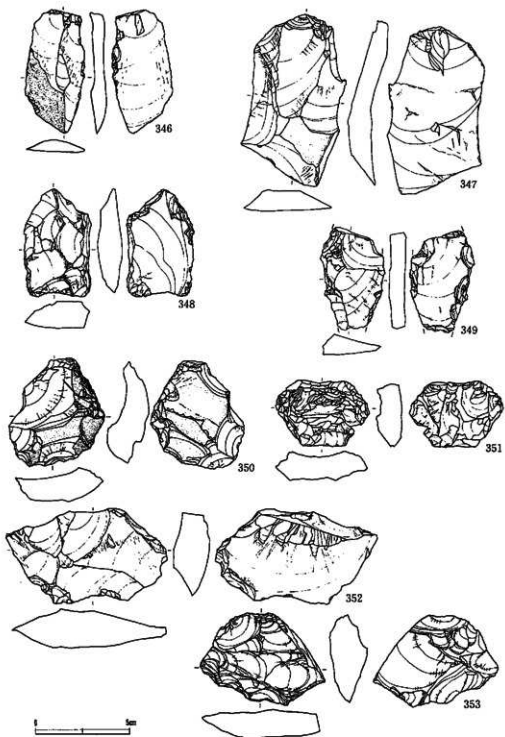
第169図 遺構外遺物：石器⑬



第170図 遺構外遺物：石器00



第171圖 遺構外遺物：石器(15)



第172図 遺構外遺物：石器(16)

石斧（第173～178図354～403、写真図版123・124）：図示した資料は50点であるが、これ以外にも破損、折損品が出土しているが割愛した。磨製と打製に区別して記述する。

〈磨製石斧〉354～359は長さ4cm以下の小形石斧で356を除いて基部に敲打痕が明瞭に残る。截る機能よりは楔的な機能が考えられる。361は細身で偏平、363はバチ形に刃部が開く、364～375は定形的な石斧の一群。365、374、375は折損した部分を両面から剝離して再調整したもの。367は折損した基部を打欠いて再利用している。376、377の基部も同様であるが376は中程から折損したため刃部をつくらず敲石として再利用している。378～380はいずれも刃部を欠くが、基部を山形につくり出す特徴をもつ。378、379は両側から擦り上げているが380は打欠きによってつくり出している。381～388は384を除いて基部に敲打痕をもつ。389は身の両側に凹みがあり、刃は一方からの剝離で片刃となっている。凹みは柄の装着方法と関連するものであろう。390～395は基部が尖り、身に比較して極めて薄いという特徴をもつ。他の石斧に比べて身が厚く断面がやや内湾する傾向が認められる。側面の稜はそれほど明瞭ではなく、すべて刃部を欠いている。いずれも弥生時代の土器を多く出土したグリットからの出土である。

以上の石斧の石材は43点中凝灰質硬砂岩31、粘板岩8、珩岩4となっている。

〈打製石斧〉基的には少なく実測できたのは7点である。397、398は両面加工で丁寧なつくりで刃部は厚い。399～401は片側に自然面を残したまま剝離調整してある片刃の石斧。403は肉厚の原石の両面を打ち欠いただけの石斧。402は茸状に打欠き茎に相当する部分を調整し先端を尖らせている。また、関部分の両側にも調整剝離があり、使用痕も認められる。挟入り石器的な機能が装着して手斧的な穿孔具の機能が考えられる。石材は粘板岩、珩質泥岩、硬砂岩の三種類である。

凹石（第179図404～409、写真図版125）：8点出土したうち6点を図示した。407のみ片面に、他は両面に凹みがある。405の凹みはほぼ円形で最も深い。406は3個と2個の凹み。407の片面は擦石となっている。石材は細砂質凝灰岩、半花崗岩、硬砂岩である。

敲打磨石（第179～180図・410～417、写真図版125・127）：磨かれた礫の側面に敲打痕あるいは剝離痕のあるものを一括した。名称が適切かどうかは問題がある。形態は端部が平坦な小判状のものと半月状のものに分けられる。410～412、417は小判状で両側面に敲打痕がある。412は頂部を斜めに擦っている。417は珩質泥岩製で片面は剝離調整されているが、両側面に剝離・敲打痕がある。413～416は半月状で、413は全周を打欠いている。414～416は直線的な側面のみに剝離・敲打痕がある。416の片面は磨かれていない。断面は三角形、偏平となる。石材は硬砂岩、粘板岩、珩質泥岩などである。

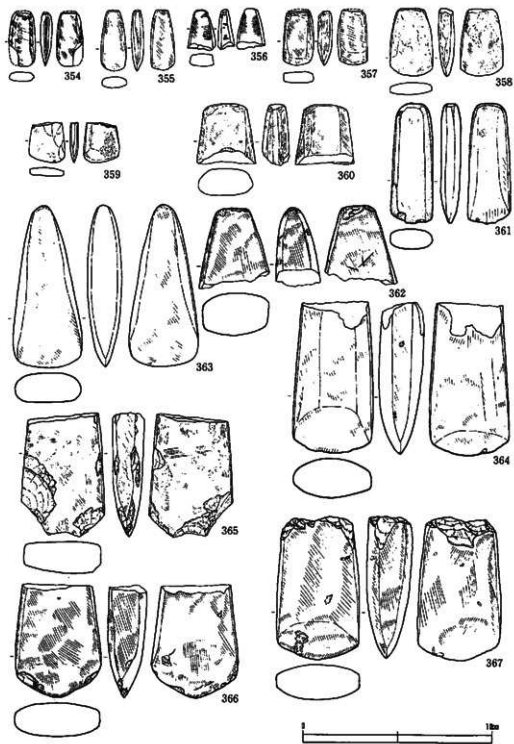
敲石（第181図418～422、写真図版126）：11個出土したうち5個を図示した。最も多いのが、421、422のように円礫の先端を単純に敲いたものである。422は両端を使用している。418、

419 は下端部を敲き前者は片側、後者は両側面を平坦に擦り上げている。420 は大きな楕円磔の中ほどか敲かれかつ擦られており、多面体となって残っている。重量は1.8 kg。石材は細砂質凝灰岩、硬砂岩、半花崗岩、玢岩などである。

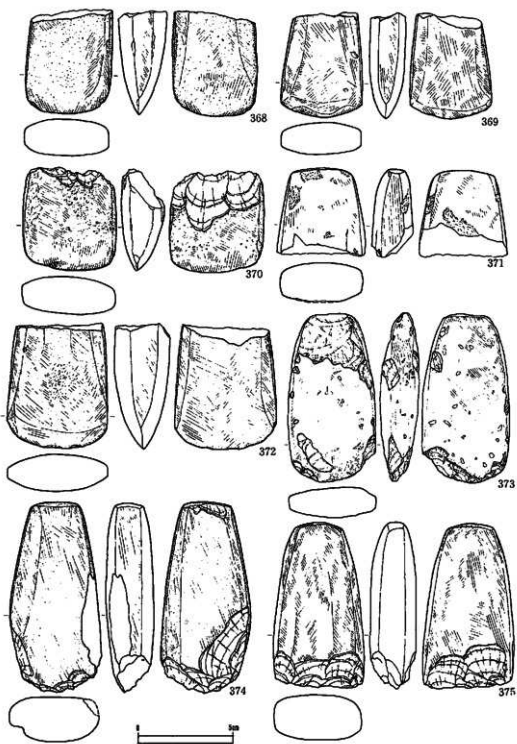
すり岩 (第182・183図 423～441、図版126)：磨石または擦石であるが、当遺物については擦石を充てた方が適当とおもわれる一群の石器である。全出土石器中の最大数を占める。すり石と判定した227点のうち典型的なもの19点を図示した。423～425は磔の周辺を打欠き形を整え、両面を擦っているもの。石材が脆い石英安山岩のため打欠いたとも考えられる。また、423、424は石製円盤の可能性もある。426は長い棒状の両端を擦っている。427、428は円磔の両面を429、430は楕円磔の両面を擦っている。431は湾曲する背に擦り面が、433は両側面と先端部を擦っている。434～448は楕円磔の両面および側面を擦っているもので、側面は平坦になるまで擦り上げている。437はやや半月状で片側のみ特に丁寧に擦っている。440～441は角のある長い磔で側面は擦っていない。石材は細砂質凝灰岩、石英安山岩、硬砂岩、花崗閃緑岩、半花崗岩などである。

石皿 (第184・185図 442～453、写真図版127・128)：12点出土したがすべて破片である。442～447は周辺が高い縁をもつ一群。443と444は同一個体とおもわれ縁と面の間が平に一段低く周溝状となる。442は円形に近い。445、446、楕円状で縁は三角形となり、裏面も丁寧に擦っている。447は脚付。448は数カ所に凹みがあり、石皿が破損した後に凹石として再利用したものと思われる。以上は凝灰質砂岩製で多孔質の石材を使用。449～453は細砂質凝灰岩、流紋岩製で密な石材を使用しているためか縁や支脚はなく、中央部が少し凹むだけの石皿である。

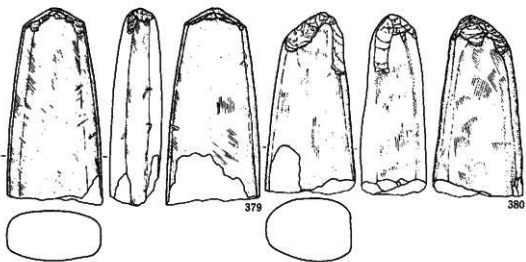
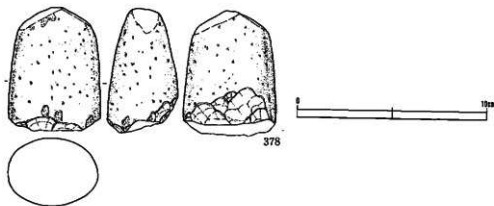
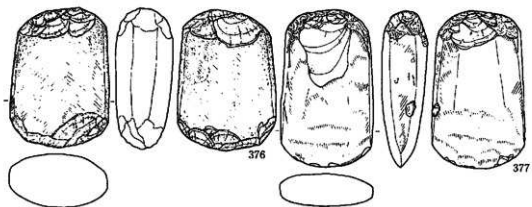
以上、遺構外から出土した石器は、石鏃139、尖頭器7、石匙・搔器類78、石錐24、ヘラ状石器12、不定形石器及び剥片類1224、石斧56、凹石8、敲石11、すり石227、石皿12点である。



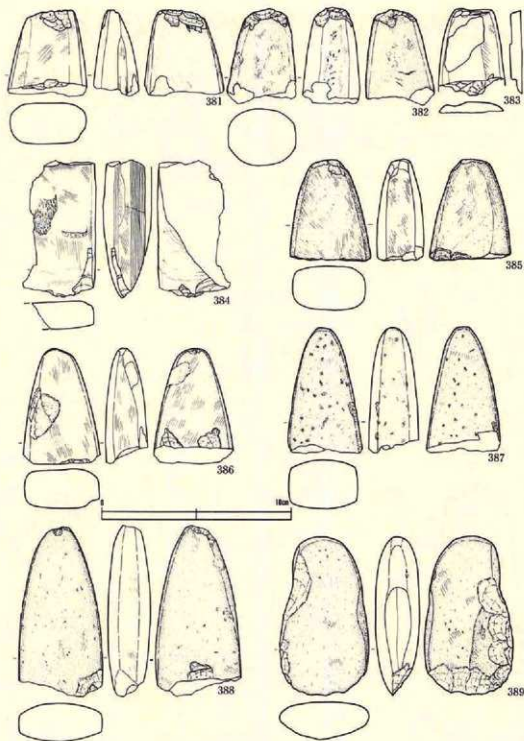
第173図 遺構外遺物：石器(17)



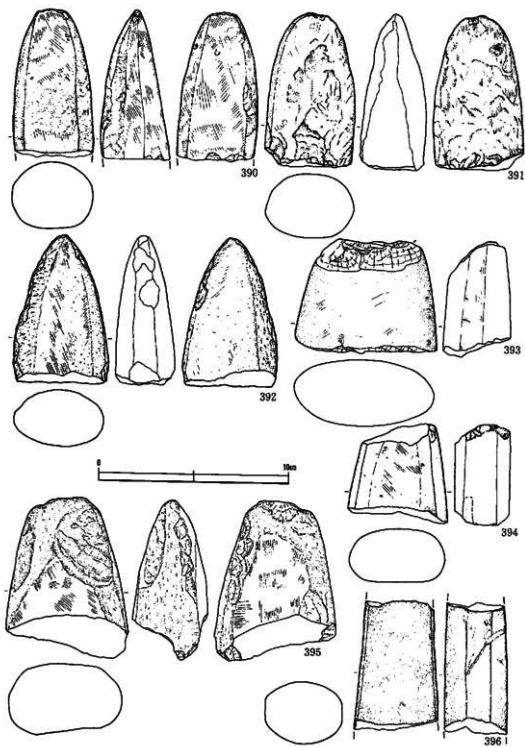
第174図 遺構外遺物：石器(18)



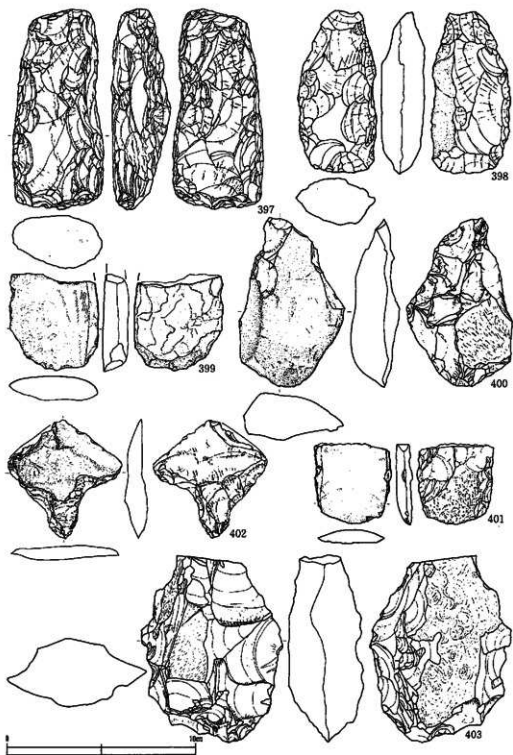
第175図 遺構外遺物：石器(9)



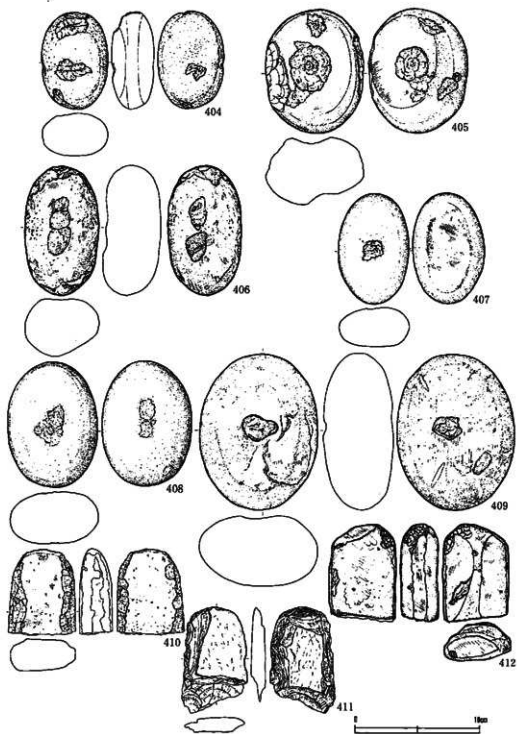
第176图 遺構外遺物：石器②



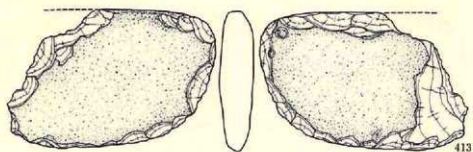
第177图 遗構外遺物：石器(2)



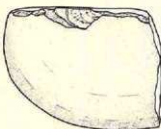
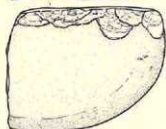
第178圖 遺構外遺物：石器②



第179図 遺構外遺物：石器(3)



413



414

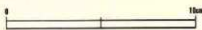
415



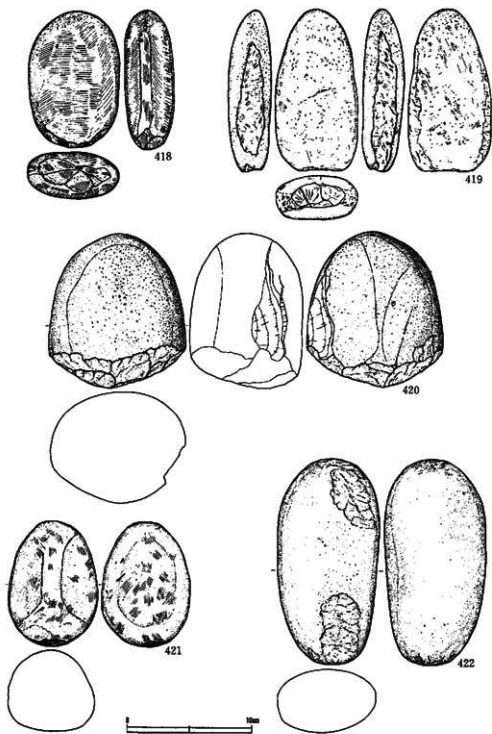
416



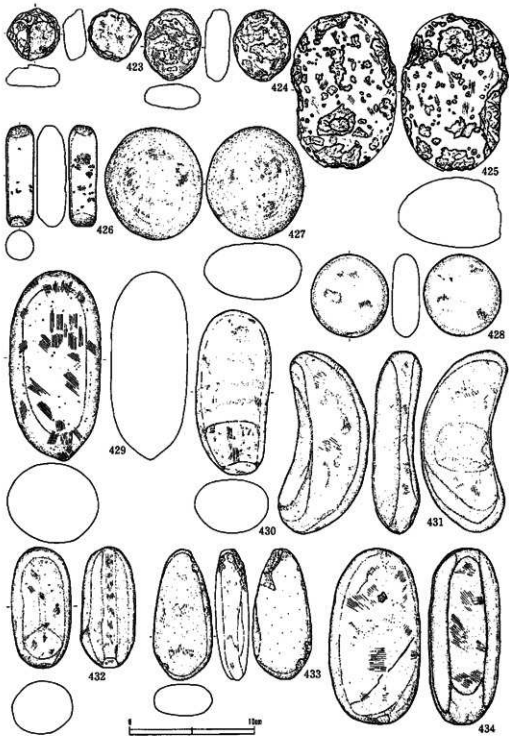
417



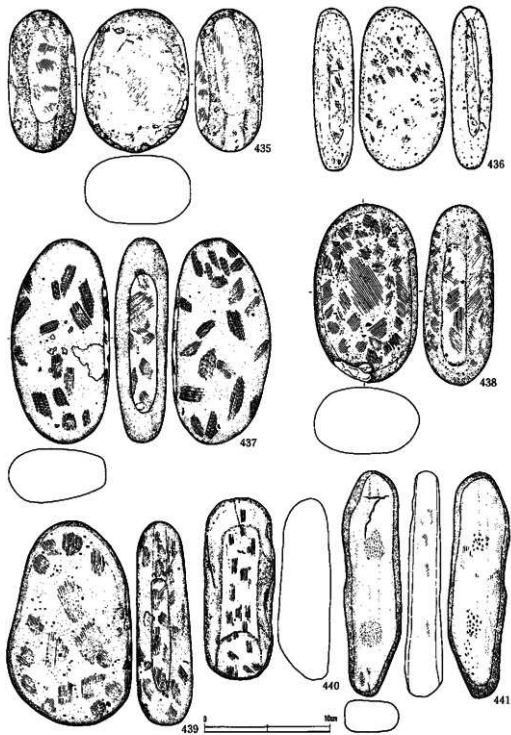
第180図 遺構外遺物：石器00



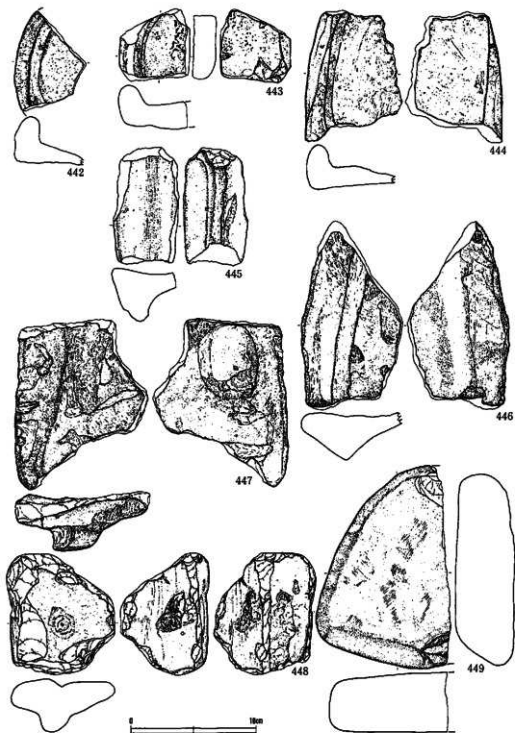
第181图 遗構外遺物：石器(5)



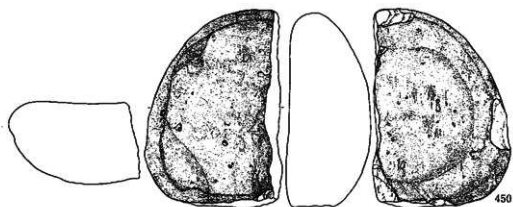
第182図 遺構外遺物：石器00



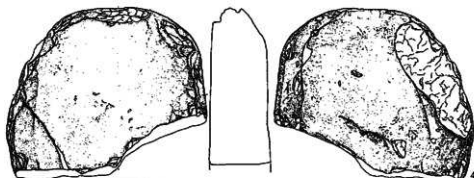
第183图 遺構外遺物：石器切



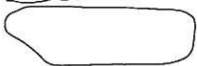
第184図 遺構外遺物：石器②



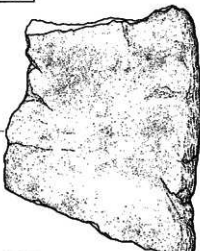
450



451



452



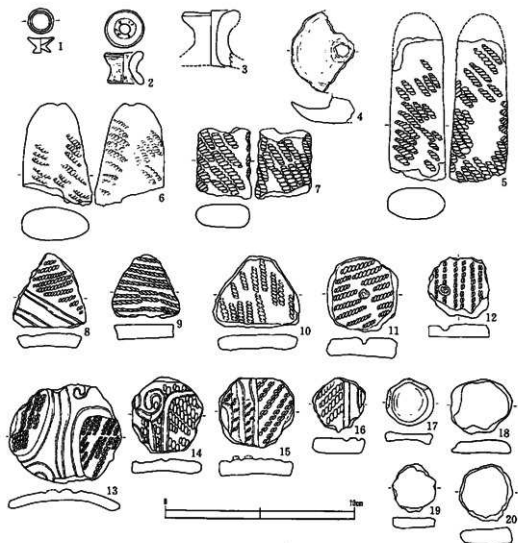
453



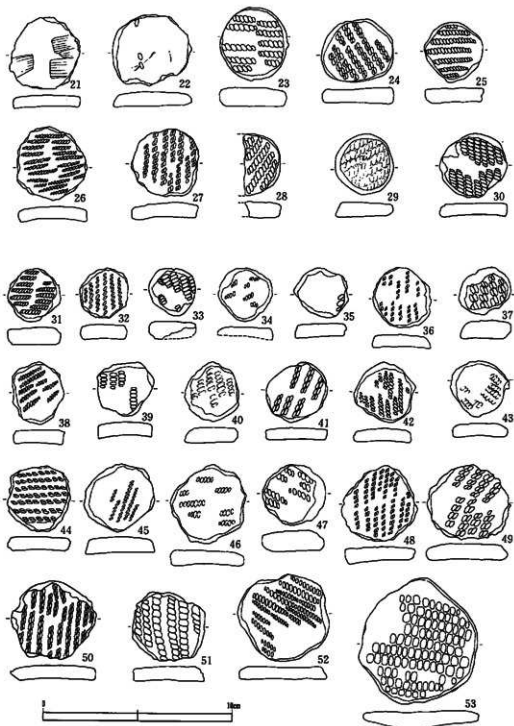
第185図 遺構外遺物：石器Q9

4. 土製品・石製品

土製品 (第 186・187 図 1~53、写真図版 131) : 1~3 は耳飾り。1 は盃状で全面丹塗り。2、3 は糸巻状で太い孔があり無文。4 はキノコ形土製品とおもわれるもの。5~7 は棒状土製品で 3 点とも全面に RL 縦回転の縄文を施す。8~10 は土器片を利用した三角状土製品で、周縁は打欠きだけでそれ以上の調整はしていない。11、12 は小さな凹みのある方形土製品。前者と同様打欠きのみである。11 では中央に、12 では左に寄って径、深さ 5 mm 前後の穴が棒状の工具であけてある。13~53 は土製円盤で 41 点出土。すべて土器片を利用したもので、17 を除くとすべて胴部の破片である。径 2.4cm~6.8cm におさまる。23~25 は円形に近い形に打欠いただけ、28、29 は周辺を丁寧に磨いている。13~16 の文様は大木 8 b 式の特徴を示している。



第186図 遺構外遺物：土製品(1)

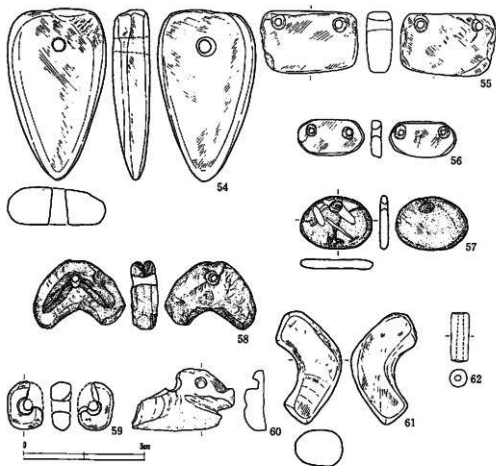


第187図 遺構外遺物：土製品(2)

石製品(第188~191図58~81 巻頭写真・写真図版128~130):54は逆三角形のヒスイ大珠。緑色が基調であるが部分的に白色および退色している箇所がある。穿孔は一方からで貫けた方の孔の周囲は白く退色している。頂部は研磨が不足しており凹凸が残る。重量は82.5g、調査区東側のNグリット出土で縄文土器、遺構の少ない区域で出土した。55、56は上部両端に2孔をもつ扁平な装飾品で孔は両側から穿っている。57は1孔で片面に数本の溝が走る。単なる疵ではなく意図的なものであり、施文中途であったことも考えられる。58は琴柱状を呈し頂部と正面には溝が走る。彫り、研磨とも雑で凹凸があり、製作途中の可能性もある。59は水色を呈する飾玉。60は動物意匠ともおもわれる岩偶状の資料であるが、小破片で裏面は剥落しているため断定はできない。目のような孔は未通で、その左側にある孔は貫通している。61は「く」の字状に曲り各面は丁寧に研磨されているが無文。58と同様の形を意図したものか。62は碧玉製の中形管玉でFグリット黒色土より出土。両側から穿孔されており、弥生時代の管玉の特徴を示している。63は有角石斧とも独鈷石とも受けとれる石器。出土地点はQグリット黒色土で縄文土器は少なく、弥生土器が多く出土した地点である。上端は欠損しており中央部の両端が角状に出る。図左側の中央部はやや平坦でその下が少し溝状に凹み、図右側は帯状に太く盛上っている。刃部は敲打の痕跡があり平面でやや丸みをおび鋭くはない。身の断面は方形に近く、全体の研磨はそれほど顕著ではない。凝灰質硬砂岩製。64は周縁を磨いて楕円形とし凸レンズ状に磨き上げたもので無文、石材は砂質凝灰岩。65は粘板岩製のほぼ64と同様の扁平な形。66は砂岩製の三角形石製品で無文。67は上下を尖頭状に削り出し全体を磨いている。半花崗岩製、擦石の部類に入る可能性もある。68は両端がまるく身が扁平な棒状の石製品で、刃を意図したような痕跡はない。69~71は石刀あるいは石剣の破片でいずれも粘板岩製。72、73は石棒の破片。材質、形状ともA-5号住出土の石棒を全く同じであるが接合はしない。74は菱形に周縁を打欠き表裏に刻みをもつ石製品で、砥石の可能性もある。75は太い溝が中央に、それよりやや細い溝が左側に走り、裏面は平坦に整形している。76は黒っぽい軽石の中央に孔を穿ったもの。環状石斧のような形状を示すともおもわれるが、石材からすると実用的ではない。77も周縁をまるく整形しており同様の資料ともおもわれる。78~81は軽石製品で、周縁を削った痕跡はあるが小片のため形状は不明である。

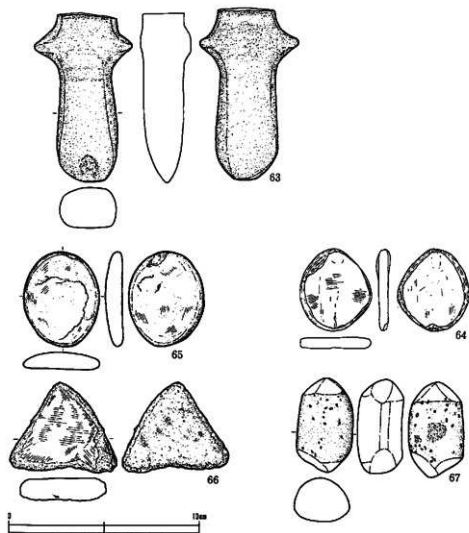
註1:大野憲司氏がかが嘴状石器と命名している(『八木遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書181・1989)

註2:藤村東男氏は石鏃・石槍などの尖頭器類を刺突具に一括し、石鏃類として扱っている。(『遺物名称についての覚書』岩手考古2,1990)一つの見方である。ここでは単に大きさにより分類しただけである

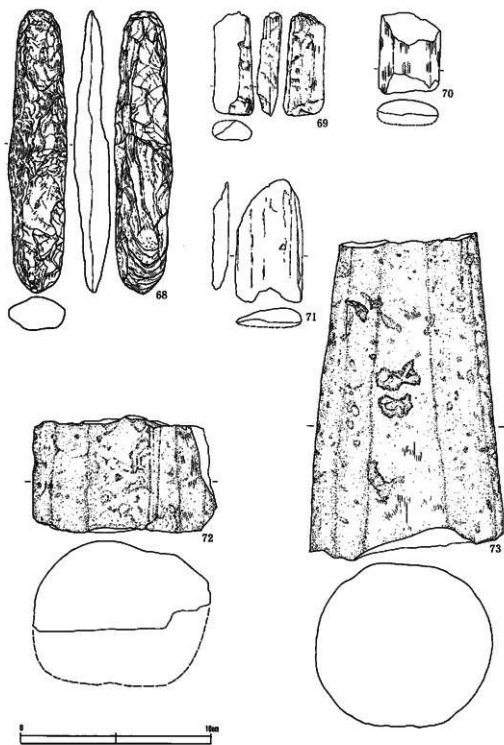


No.	出土地点	長さ 幅 厚さ (mm)	重量(g)	石材名	備考
54	Nグレット	71 × 41 × 15	82.5	ヒスイ	片面より穿孔
55	I #	36 × 40 × 11	29.8	チャート質	両側から穿孔
56	Q #	15 × 27 × 4	3.4	細砂質粘板岩	# #
57	T #	22 × 24 × 3	4.0	細砂質粘板岩	# #
58	F #	20 × 38 × 11	15.1	チャート	# #
59	F #	20 × (14) × 8	(9.0)	緑色凝灰岩	片面より穿孔
60	L #	25 × (40) × 6	(6.5)	細砂質凝灰岩	# #
61	R #	45 × 19 × 15	12.2	細粒凝灰岩	# #
62	F #	21 × 7.0	1.7	細粒凝灰岩	両側から穿孔

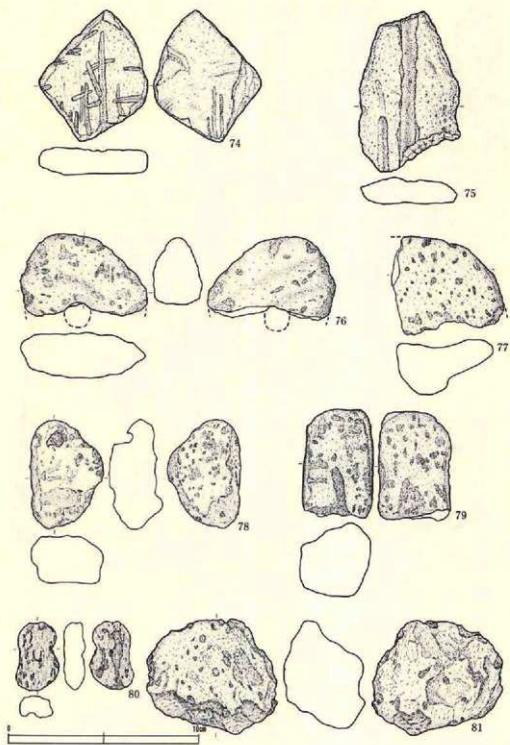
第188図 遺構外遺物：石製品(1)



第189図 遺構外遺物：石製品(2)



第190圖 遺構外遺物：石製品(3)



第191図 遺構外遺物：石製品(4)

5. 奈良・平安時代の遺物

(1) 土師器 (第 192・193 図、写真図版 95)

器種は坏・甕・壺があり、出土量は縄文土器に比較して少量である。ロクロ使用成形と同一不使用成形の2種類がある。

1~4 はロクロ不使用の坏である。1 は3分の2を欠くが丸底で体部外面下半に段を有し、口縁部は外傾する。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理され、底部はハケメ調整を施している。2 は丸底で内面下半に明瞭な段を有し、体部上半には径3mmの補修したと思われる穿孔がある。体部外面は磨滅しているがヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理されている。3 は3分の2を欠くが丸底で、口縁部は体部からやや直立気味に立ち上がっている。体部外面はミガキ調整で一部に黒斑が見られ、内面は磨滅しているものの黒色処理を施している。4 は高坏と思われる破片で、内面は黒色処理されている。1~3の胎土には径1mm前後の粗砂と雲母を含んでいる。

5・6 はロクロ使用の坏で、いずれも口縁部を欠いている。5 は高台坏で内面がヘラミガキ調整後に黒色処理されている。6 は体部外面がヘラナデ、内面が黒色処理され、底部の切り離しは回転糸切りである。

7~15 はロクロ不使用の壺である。7・8 は底部を欠いているが、口縁部は頸部から外反気味に立ち上がっている。8の口唇部には浅い沈線が巡っている。口縁部と体部内外面は緻密なヘラミガキ調整が施され、内面の一部にハケメ調整も見られる。9 は頸部に沈線を有し、口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部に浅い沈線が巡る。口縁部には径3mmの補修孔がある。体部外面はヘラミガキ、下位にヘラナデ、内面は磨滅するものの一部ハケメ調整を施している。10・11 は体部下半を欠いている。10の口縁部は磨滅し下位から頸部にハケメ、ミガキ調整を施している。体部内外面はヘラミガキ調整である。11 は体部上半が丸味を持ち、口縁部は外傾して立ち上がる。体部外面はハケメと一部にヘラナデ調整を施している。12~15 は底部破片で、13 はヘラ状の工具で条痕を付している。

16・17 はロクロ不使用の壺である。同一個体と思われる口縁部破片で、外面に赤彩を施している。

(2) 須恵器 (第 193・194、写真図版 96)

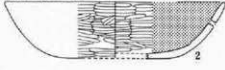
器種は甕・壺・坏があり、出土量は甕が大部分を占めている。図化は細破片を除いた25点である。

18~25 は甕の口縁部である。18・19 は大甕で、18の口縁部は頸部から強く外反し、口唇部に浅い沈線が巡っている。体部外面はタタキ調整されている。19の口縁部は緩やかに外反する。20 はヘラ書きによる波状文が施されている。

(19.8)・丸底・5.1



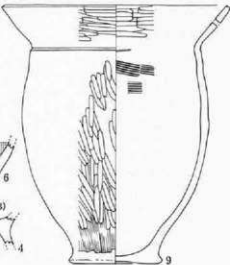
(17.8)・丸底・(4.5)



13.2・丸底・6.9



(18.4)・7.5・20.9



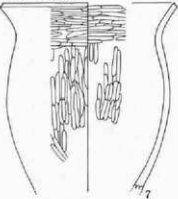
--- 7.8・(3.7)



--- (7.6)・(2.8)



14.2 --- (12.8)



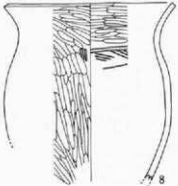
--- (2.3)



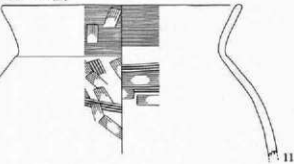
23 --- (9.5)



13.8 --- (14.4)

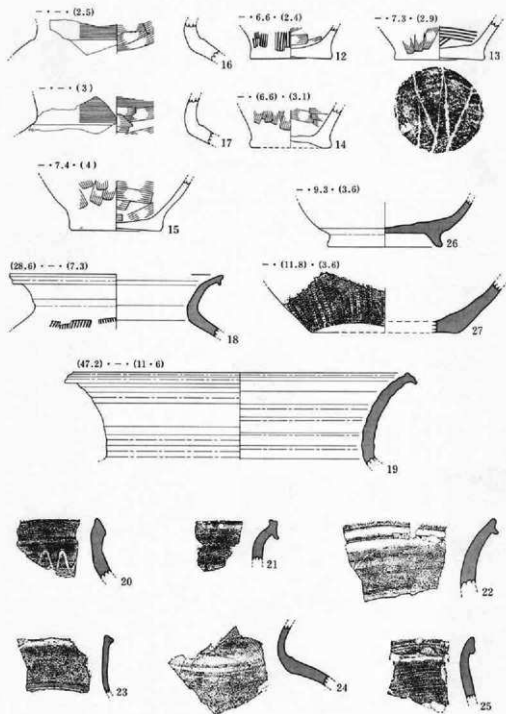


19.4 --- (12)



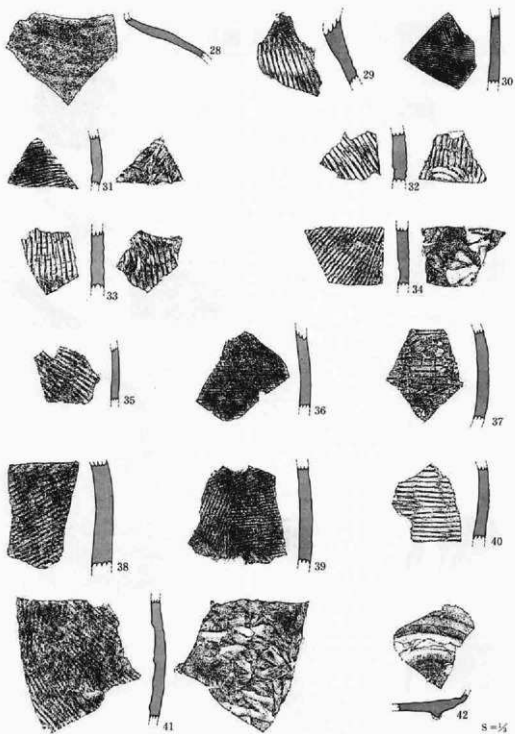
S=1/4

第192図 遺構外遺物：土師器(1)



他は $S = \frac{1}{2}$
 18・19は $S = \frac{1}{4}$

第193図 遺構外遺物：土師器(2)・須恵器(1)



第194図 遺構外遺物：須恵器(2)

28～41は壺の体部である。外面は平行するタタキメ調整が施され、32・33の内面は円形状の当て具痕がある。

27は壺の底部で、外面がタタキメ調整を施している。

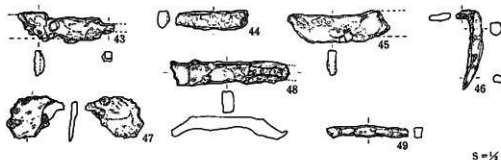
26・42は壺と思われる底部である。

(3) 鉄製品 (第195図)

刀子、釘、鋸等が7点出土している。43～45は刀子と思われる破片である。43は茎から刃部にかけての一部で、現存長5.1cm、最大幅1.6cm、最大厚3mmである。44は茎で、現存長3.8cm、最大幅1.1cm、最大厚5mmである。45は鋒部に近い刃部の一部で、現存長5.4cm、最大幅1.5cm、最大厚4mmで、棟は平らである。

46は長さ4.2cm、径7mm角の釘で、頭部は折れ曲がっている。48は現存長6.3cm、最大幅1.1cm、最大厚7mmの鋸で、両端部は1.2cmほど折れ曲がっている。

47は現存長3.1cm、最大幅2.2cm、最大厚3mmの板状、49は現存長4.3cm、最大幅6mm、最大厚4mmの角状である。いずれも器種は不明である。



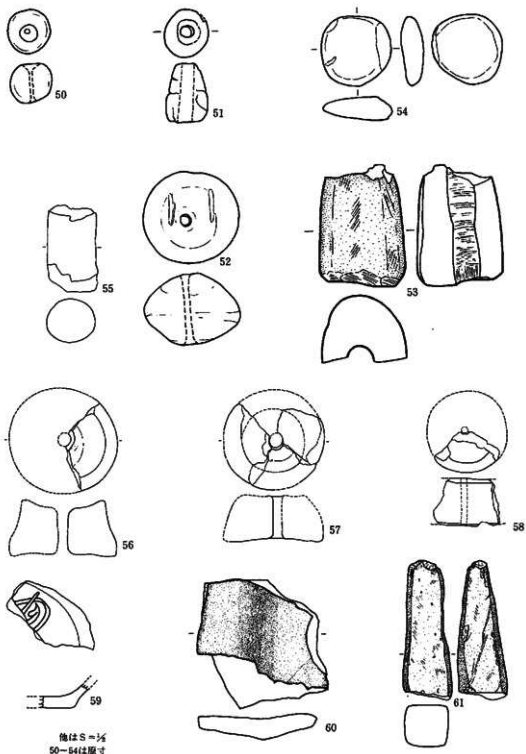
第195図 遺構外遺物：鉄製品

(4) 土製品 (第196図、写真図版97)

土玉、土錘、紡錘車、その他が出土している。50～52は土玉で、50は円形、51は円筒状、52は算盤玉状の形状で、中央が穿孔されている。55は半分ほど欠けているが、円筒状の土錘である。真中に径7mmの穿孔がある。53は両端部を欠損した円筒状のものであるが、用途は不明である。56～58の紡錘車は断面形が台形状で、中央部を穿孔している。56は両端が窪んでいる。

(5) 石製品 (第196図、写真図版97)

54は径1.8cm、最大厚6mmの円盤状のもので、人為的な加工が施してある。石材は粘板岩である。60・61は砥石の破片で、61は4面が良く使用されて磨滅している。



他は $S = \frac{1}{4}$
 50-54は原寸

第196図 遺構外遺物：土製品・石製品

VI 考察とまとめ

1. 縄文時代

(1) 住居跡

床面および床面直上出土の土器から判断すると、本遺跡の縄文時代に属する竪穴住居跡は大木8b式期と大木9式期の2時期に分けられる。大木8b式はA-1、A-5、A-7、A-8、B-1、B-2、N-3号住の7棟、大木9式はA-2、A-3、A-6、F-3号住の4棟である。これら11棟のうちF-3、N-3号住を除く9棟はいずれかの時期の住居と兼ね、あるいは上下関係にあり重複している。そのため明確にプランを把握できたものは少なく、各住居跡ごとの規模、炉等を比較する材料に乏しい。

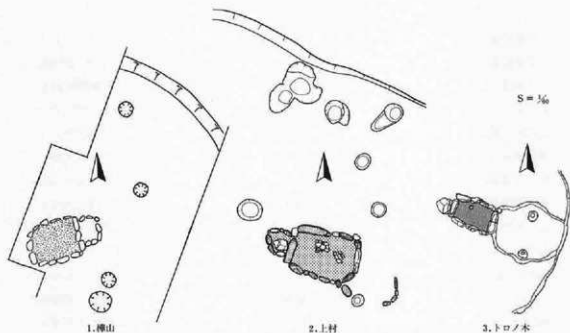
大木8b式期の7棟を兼ねおよび上下関係から新旧の位置付けを試みるとA7→A8[△]A5
→B1→B2の変遷が考えられる。が、この図式からすると同時存在は調査区内においては1棟あるいは2棟と極めて少ない数となる。ただし、本遺跡の貝の分布は調査区の西側及びより北側に多く存在しており、これからすると未調査区を含めれば数棟の同時存在を考慮することが可能である。また、7棟中6棟が重複して存在することは、同一時期の存在はそれほど多くないことを示しているかもしれない。壁の残っている住居跡は推定部分も含めてすべて円形または楕円形に近い形状を示しており、規模はおおよそ径3~6mの範囲である。このなかではA-5号の規模、壁の高さが際立っている。B-2号住はごく一部しか残存していなかったため全貌は不明であるが、A-5号住のように高い壁をもっていた可能性がある。かつA-5号よりはB-2号の方が新しく、両棟が大木8b式期の中心的住居であった可能性がある。

大木9式期の4棟の竪穴住居跡はF-3号を除いた3棟が兼ねっておりA-3がA-2、A-6よりは新しく、A-2とA-6の前後関係は不明である。この3棟の同時存在は不可能であり、最大2棟が可能である。立地的にはより北側の高い面に大木8b式期が集中しており、これに続いて大木9式期の住居が繁かっている。集落はおそらく未調査区の西側にひろがるものと推定される。プランは壁の残りのいいA-3号住がほぼ円形で、A-2、A-6は隅丸方形形状であるが明瞭ではない。F-3号住では同一のレベルに2基の石囲炉が検出されたが前後関係は不明である。B-1号住も同様2基の炉が検出されている。石鳥谷町大地遺跡跡(相原ほか1981)などでは当該時期の住居から複式炉を伴う複数の炉が検出されており、大木8b~9式にかけて複数の炉を持つのが一つの特徴となるかどうか、今後の類例の増加を期待したい。

(2) 複式炉 (挿図1)

A-8号住居で1基の複式炉を検出した。複式炉の定義については様々な意見があるが、ここでは丹羽の「複数の空間によって構成される炉」(丹羽1976)の意を用いる。当該炉は長方形と円形の二つの石囲炉が連結してある形態で、中村良幸によればB類に属し、石組炉+石組炉で他の施設(埋設土器、掘り込み、前庭部)を持たないタイプ(中村1982)。目黒によればF型1類に属し、石組複式炉の中でも副炉付石組炉と呼ばれるものである(目黒1982^(註1))。この形態の最も古い例は北上市禪山遺跡にあり(齊藤ほか1968)、その時期は大木8a式期である。上村の副炉には蓋石が存在する点で違いはあるが、規模・形状ともに近似している。副炉に焼土の少ないこと、竈穴の中央部に位置すると推定されることなども共通している。県内での複式炉の検出例は馬淵川、北上川流域に多く、沿岸部は類例に少ないが上村例との関連で注目されるのは同じ宮古市にあるトロノ木遺跡(高橋ほか1989)の複式炉である。同遺跡からは同一時期(大木8b式)にしかも同時存在したであろうとおもわれる3棟の竈穴が検出されており、うち2棟が複式炉を備えている。報告者はこの炉を複式炉の祖型として捉えている。1号住の炉は(挿図1-3)南東壁のやや中央寄りに位置し、長方形の石囲炉の両側短辺に蓋石をもつ浅い皿状のピットと2個一対の小ピットを伴う掘り込みをもつ。蓋石をもつピット内は炭や焼土粒を少量含んでいる。3号住の炉は南壁の中央やや東寄りにあり、方形の石囲炉(炉石抜ききり)の両側に、壁の一部に土器片を貼付けた焼成を受けていない浅いピットと、2段構築をなす掘り込み部とからなっている。1号炉と上村を比較すると掘り込みの有無、炉の位置では違いがあり、焼土の少ない副炉に蓋石をもつことは共通している。上村・トロノ木の両竈穴とも土器は大木8b式の最終末と言われているものであり、時間差はほとんど見られない。また炉の方位もほぼ同じである。禪山例と上村例の形態はほぼ同じであり、蓋石の有無のみが異なり、上村例とトロノ木例では石囲炉と蓋石は共通するが掘り込みの有無に違いがある。禪山例は大木8a式で最も古く、その系統をひいているのが上村例であり、トロノ木の段階つまり上村とほとんど同時期に掘り込み部(前庭部)が加わり、かつ竈穴の壁際に寄って構築されるようになった、と考えることができる。副炉と呼ばれる小さな石囲いあるいは浅いピットは3例とも燃焼に用いた痕跡はなく、火の一時的保存の場として機能していたと捉える方がより合理的であろう。

註1：挿図1-2で見ると方形炉の隅に礫が1個、やや離れて弧状に4個の礫が並ぶが、これが炉に付随するか否かは不明である。少なくともこれらの礫の内側には掘り込みや焼土、炭化物は認められなかった。石島谷町大地渡遺跡では片袖のみの炉もあり、また、弧状の石の間にある小ピットの存在もトロノ木の2個一対の小ピットと全く関連がない、とは言いきれない。



挿図1 複式炉

(3) 土器

大木8b式と9式土器の関係については、山内清男が型式を設定してから現在にいたるまで多くの研究者が論及しているが、なお万人が認める結論を見い出せていないのが現状である。岩手県内における大木8b式の研究は近年、盛岡市大館町遺跡群（八木ほか1984～1985）や同市柿ノ木平遺跡（高橋1982）などで住居跡一括土器の出土や層位的に良好な資料が得られ、高橋らによって大木8b-1、8b-2、8b-3に細分され、大木9式では大迫町観音堂（中村1986）の資料に基づき、中村により新・旧に細分されている。上村の当該期の土器について、上記の認識のもとに若干の問題提起を試みる。なお、この項を記述するにあたっては高橋憲太郎氏（宮古市教育委員会）から多大な御教示をいただいた。

F-3号住居跡床面出土の土器（挿図2）：6、7は従来から大木9式とよばれているもので、沈線の間を磨消し、渦巻文が退化し区画文のみとなっている。6は沈線、7は隆線。5は器形は8b式的であるが文様は9式的である。ただ、9式にみられるような沈線間を磨消す手法は用いておらず、帰属のむずかしい資料である。1は8b式に特徴的な器面全体に施文される大渦巻文の様々な部分を連結し区画文を描出しており、隆沈線で施文されている事からも8b式であろう。2～4も同じく8bに含まれるものである。1～4の資料は大木8b式の中でも最終末の様相を示す大木8b-3式の特徴を示している。以上を分類すると1～4は大木8b-3式（A）に、5は8bと9の中間に（B）、6～7は大木9式（C）に相当する。本県の過去の調査例からするとAとCは相伴しておらず、石鳥谷町大地渡遺跡では一部にBに近いものを含むがCタイプの土器は含ん

でないようである。宮古市トロノ木遺跡でも A と B はあるが、C は出土していない。このような例に基づく当該住居跡の土器をどのように位置づけられるかであろうか。まず、調査段階における出土状況を確認すると、明らかに床面あるいは炉上と断定できるのは写真図版 14 にあるように完形品として図示した 1、2、6 および 3 の資料である。他の資料も床面の出土ではあるが、当該住居は重複しており壁、柱穴が検出されず、さらに炉が 2 基あるなど確実性やや欠ける点なきにしもあらずである。従って他の土器については流れ込みの可能性が全く無いわけではない。炉に関しては 2 基のレベルは数 cm であり、埋土の浅かったこともあるが両者に時間差を見い出だすことはできなかった。当該期の住居に複数の炉を有する例が他にあるかどうか不明であるが、仮に別々の竈穴に伴う炉であったとしても、ここで問題となる土器が出土したのは一方の炉（1号炉、図版 14）のみである。写真図版にあるように 1号炉を覆う形で 1 と 6 が接しており、やや離れて 2 が直立し、1 と 3 の底部付近に 3 が出土している。これらの土器の出土状態は明らかに一括で残されたか廃棄されたものであることを示しており、時間差があったとは認めにくい状況にある。これらの土器が共存する理由については次のことが考えられよう。

- ・A と C は本来は供伴しないが、たまたま何等かの作用で同一個所、同一レベルで出土した。
- ・A の土器何等かの理由で C 土器と同時期に使用されたが、土器自体には時間差がある。
- ・A～C とも同時に製作され使用され、廃棄された。したがって、形式的には大木 8b 式と 9 式に分けることは可能であるが、現実としては同一タイプの土器として認めざるを得ない。極言すれば、F-3 号住は大木 9 式期のものであり、大木 8b-3 式は 9 式の範疇に含まれる。

大木 8b 式の細分については各研究者の様々な話があるが、県内においては 8b-1 式と 8b-2 式は大筋において了解が得られるものと思われるが、8b-3 式についてははまだ不明な部分も多いと思われる。1～5 (6) の器形、文様、施工方法は従来で言えば大木 8b 式の新しい部分、即ち大木 8b-3 式と呼ばれる一群に相当するが、当該住居跡の出土状況は写真で見ると明らかに同時存在を示している。ただ、この住居は床と炉跡のみの検出で独立した竈穴式住居出土とは言いかねるので、資料的には一抹の不安があることは否定できない。が、出土状況にてらして、床面出土とした土器は同時存在として捉え、時期については縄文時代中期大木 9 式として認識しておきたい。このような状況が県内あるいは大木式土器の分布する地域で存在するかどうかについては未確認であるが、一つの問題提起としておきたい。F-3 号住の土器を大木 9 式の古い段階とすれば、A-2、A-3、A-6 号住の土器はいずれも F-3 号住よりは新しい段階に位置づけられる。

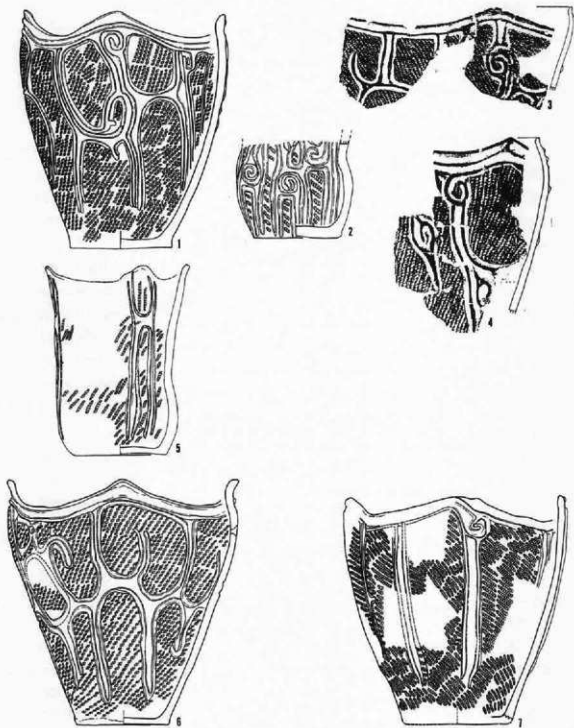


插图 2 F-3号住居跡床面出土土器

(4) 埋設土器と人骨群

埋設土器：縄文時代中期、とりわけ大木8b式期の埋設土器（埋壺）については盛岡市繁^{つば}遺跡（吉田ほか1960）をはじめとして県内ではいくつかの例が知られている。A-5号住居跡1号炉の下から出土した深鉢は、器形、文様、埋設状況が上記の繁例に最も近似するものとおもわれる。ただし本例は底部が未発見であるので穿孔の有無は不明である。この埋設土器がA-5号住居に伴うものであるか、そうでないかは埋設土器の性格を考える上からも重要であるので遺構面や他の遺跡の例も含めて若干の検討を行う。

・縄文時代中～後期の屋外にある大型埋設土器は通常納骨器として考えられており、屋内から検出されるそれは、納骨器あるいは胎盤収納器などと考えられている。床面下にある埋設土器は全国的に多数知られているが、炉と重複するか、あるいは炉の下に埋設（土器埋設炉は除く）された土器はほとんど例がない。

・岩手県内で中期～後期にかけて、納骨器と推定されている埋設土器はほとんどが屋外でありしかも完形品を用いる例が多い。発掘例、偶然の発見例をみても完形もしくは完形に復原可能な土器が圧倒的に多い。本例については底部は不明であり、胴下半の一部分が発掘時から欠損している。これについては土器埋設時は完形であったが、A-5号住居の床面を貼り、炉を構築するために掘り下げた際に埋設土器にあたり、一部を破損したものと解釈するのが合理的とおもわれる。信州地方での屋内埋設土器で胴下半部を欠く例が多いが、これらは入口部分やあらかじめ埋設のための遺構などを伴い、特殊遺物などの出土例もあり、直接的な関連は薄いものとおもわれる。

・当該土器の検出についてはP84で先述したように、埋土が風化した花崗岩で構成されており、かつこの土器自体が短時間で埋められたらしく、掘り方や他の埋土を確認することはできなかった。土器の推定される底面はA-5号住居の床よりも下面にあるが、1号炉の掘り方部分には完全にかかっている（写真図版16）。炉の中心からはずれており、なおかつ炉と重複する部位が破損し欠損していることも、土器と炉が無関係であることを示している。

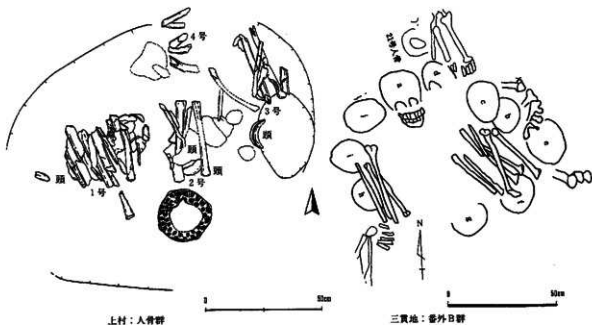
県内では大木8b式期の住居内から出土し例として北上市坊主神遺跡（北上市教委1983）の2号a住居の例がある。器高45cmの深鉢がやや壁に近い土壌の中に倒立状態で埋設されていた。粗製で縄文のみ、底部は焼成後の穿孔で、胴上半部周辺に他の土器片が貼付していたという。深鉢中からの遺物は検出されていない。ほかに中期の例としては都南村瀬沢遺跡（三浦ほか1978）で5棟の竪穴住居から正立の埋設土器が検出されているが、体部上半を失っているものが多い。土器は大木10式でいずれも壁際に近い位置である。福島県三斗馬遺跡（田中ほか1978）では大木9式の竪穴住居2棟の床面で検出されているが、いずれも炉と壁の間付近であり、正立、横位で倒立はない。大木8b～9式期の住居内の倒立埋設土器は極めて例が少なく、

炉と重複している例は皆無とおもわれ、この事も当該土器と住居が無関係であることの傍証にはなり得よう。A-5号住と本埋設土器の間には土器からみて、時間差は認められないが検出時の状況は埋設土器の方が古いことを示している。結果として埋設土器の上に住居を築いたことになるが、埋設土器を意図して住居を構築したのではなく、偶然その位置にあった埋設土器を破損したものであり、全く別の遺構として扱うべきものと考えられる。(A-5号住を利用していた人々が埋設土器の存在・性格を知った上で居住していたかどうかについては問題が別であるので触れない。)

人骨群(押図3)：土質の関係で明確な掘り込みは検出できなかったが、土墳墓であったろうと推定される。結果的には5体以上の人骨が確認された。本県において縄文時代中期に複数の人間を改葬した例は初めてである。複数の人間を同一個所に埋葬した例としては二戸市上屋遺跡(遠藤ほか1983)がある。前期終末に属し、フラスコピットの底面に計7体の人骨が埋葬されていた。同時に死亡した人間を一体づつ合葬したもので再・改葬はされていない。本人骨群は図、写真でみるように頭蓋を中心に配し、その上あるいは周辺に四肢骨などの長い骨を集積しており、明らかに改葬であることを示している。上面で検出した人骨は完全に骨化してから二次埋葬されたように見えるが、1号人骨の下面からは脊骨と胸骨が接合したままの状態で見出されており、埋葬時は軟組織が失なわれ骨が遊離する前の段階、腱または筋肉で繋がった段階であったことを示している。また、3号頭骨の上にある大腿骨、脛骨等はあるいは屈葬した下肢をそのまま埋めた可能性もあるが、寛骨や膝蓋骨などは出土していない。いずれにしても、全骨格は揃ってはならず頭、胴、手足はバラバラの状態で見出されたものとおもわれる。縄文時代中期で同じような埋葬形態をもつ例は暫見する限りで存在しないようである。東北地方の後晩期では宮城県田柄貝塚(阿部1986)、福島県三貫地貝塚(森1988)に類例を求めることができる(押図3)。田柄貝塚第4号土墳墓は後期前葉に属し、4体が合葬されていた。2体は乳児と幼児で、乳児は頭骨のみ、小児は全骨格が自然位で埋葬されている。他の2体は壮年男性で小人骨の下面にあり、一次埋葬ではなく2体分の骨が集積された状態である。頭骨は土墳の北壁際と西壁際の中央部に倒位で置かれていた。体幹骨などの出土状態から軟組織が失なわれる以前の二次埋葬と考えられている。おおよその骨格は揃っているが手根、中手、中足骨の一部や指骨が不足している。報告者は土墳の規模などから、小児埋葬する際に成人骨2体が合葬できる大きさの土墳を掘り、成人骨を土墳底に埋葬し小児骨と幼児骨を合葬したもの、としている。当然のことながら死亡時期は異なると思われる。同じように死亡時期の異なる遺骸を集積し合葬した例として三貫地貝塚の番外A人骨群と番外B人骨群がある。A群は少なくとも17体以上の人骨で構成されており、120×100cmの楕円周上に頭骨が並ぶ。小児3体、成人男性3、成人女性2、他は不明あるいは行方不明である。多個体の集積埋葬で一定の様式は認められず、

他の部分の骨は埋設していたと思われる(昭和27年調査時の所見)。B群は10体の頭骨が80×100cmの楕円に沿って環状に配されており、この環の内側に頭骨以外の各部位を集積し埋葬している。少なくとも男性5体、女性5、子供3の計13体以上の個体によって構成されている。頭骨の上や間に大腿骨、脛骨等を配置する構成は、時期は異なるが(三貫地は時期の特定ができず後・晩期と考えられている)上村例と相通じるところがある。また、一部に膝を最大に屈曲させた状態の大腿骨、脛骨、腓骨が揃って検出されており、軟組織消滅以前の段階で再葬された例も含んでいる。ある程度の時間幅をもって死亡した人々を一個所に集めて再埋葬した例と考えられる。

上村の人骨群は頭骨を中心に一定のまとまりがあるように見受けられ、医学的には証明されていないが、このまとまりを一体分と仮定すれば個体を全く無視して単に骨格のみを集めて埋めたのではなく、ある程度は個体・個人を意識していたとも考えられる。全個体を埋葬する時間的経過についてであるが、上面での5体の頭骨はほぼ同一レベルで検出されており、同時に埋葬されたとおもわれる。これらの下面に埋葬してある頭骨およびその他の部位の骨との関連であるが、一度埋めた土を掘り出して追葬したとは考えにくく同時にすべてを埋葬したものと考えたい。とすれば、胴幹体や寛骨などは下面に、頭骨や四肢骨は意識して上面に埋めたことになる。三貫地例を写真図版でみる限りは、あらゆる部位が平面的に環状の頭骨内に配されているように見える。仮にこれが事実とすれば上村例とはこの点で差異が認められる。平面的な



挿図3 人骨

改葬と立面的な改葬の違いについては、単に土壌の面積・体積によるものか、あるいは当時の人々の死生観、家族、親族関係などの生前における結びつき等によるものなのか、これについては今後の課題にしたい。

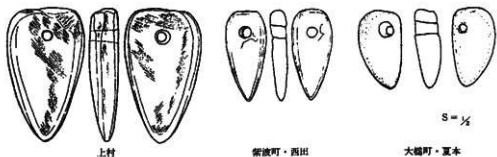
当人骨群は調査区の西端に近く、遺跡の中心はさらに西側にのびそうであり、これ以外に墓墳、人骨がどのように広がるか不明である。したがってこの人骨群が墓域（仮に存在したとして）中でどのような位置を占めるか、三貫地貝塚のように規則性のある墓域を意図しているかどうか、埋葬区の設定、特別の扱いを受けた遺体（林 1977）なのか、など課題は多くあるが、言及する材料に乏しい。ただ、隣接する蝦夷森貝塚では同時期の屈葬人骨が出土しており、果内外の同時期の葬法は屈葬、伸展葬などが圧倒的なことからすると、この葬法はかなり特殊であることは明らかである。最後に、A-5 住内の埋設土器との関連であるが、両者の土器中央部間の距離は 5.8 m でほぼ東西に並ぶが、土器底部面のレベル差は 62 cm あり埋設土器の方が低い。人骨群の副葬土器は文様に乏しく判定に困難はあるが、埋設土器同様大木 8b 式の終末、即 8b-3 式とおもわれる。A-8 号住と A-5 号住では A-8 が古く、人骨群は A-8 住廃棄後に埋葬され、埋設土器は A-5 構築前に埋められている。つまり、A-8 号住廃棄後に人骨群および埋設土器が埋められ、その後 A-5 号住が構築されて順序となる。直接的な証拠には乏しいが、これらの二者は大木 8b 式期のある時期に同時に営まれた墓域の中での埋葬形態として捉えることができよう。

(5) ヒスイ大珠（挿図 4）

逆三角形で長さ 7.1 cm、最大幅 4.05 cm、表側孔径 0.75 cm、裏側 0.5 cm、厚さ孔の右側 1.55 cm、左側 1.40 cm、重量 82.5 g。穿孔は一方からで中は回転痕が残る。裏側の孔の周辺は乳白色に濁っており、貫通させる際に表側から力を加えたために変色したものと推定される。調査区東南の N グリットからの出土。N・R グリット付近は、東側調査区外の住宅地造成の際に包含層を含めて削平、攪乱されており遺物の出土量は少ない。遺構に伴うものかどうかは不明である。周辺から出土する土器はすべて大木 8b 式である。ヒスイ珠あるいは硬玉製玉で縄文時代中期に属する例は紫波町西田遺跡（鈴木 1980）、岩泉町森の越遺跡（報告書未刊、1985 年調査）、大槌町夏本遺跡（酒井 1989）、野田村平清水、同広内遺跡（斉藤 1985）、和賀町本郷遺跡（1989 年調査）などがある。他に個人蔵として新屋村和井内、岩泉町森の越出土の大珠もある。また、過去に報告された事例もあるが不明な点も多々あるので割愛する。出土状況の明確な例として、西田遺跡では墓墳の中から副葬品として、夏本遺跡では住居跡の柱穴から、本郷遺跡でも同様柱穴の中から出土している。森の越遺跡では住居跡付近から出土と伝えられている。時期と玉の形態は上村が大木 8b 式で逆三角形、西田が大木 8a 式で逆三角形、夏本が逆三角形で大木 9 式、森の越が鐺形で大木 8~9 式、本郷が鐺形で大木 8a 式、平清水、広内が緒緒

形でおそらく中期に属する。以上、中期に限定すると基壇、住居跡、包含層の三様が認められる。夏本・本郷の例はこの種の玉が必ずしも個人の所有ではなく、一つの家屋に居住する人々の共有財産であることを示している可能性もあり、その出土状況は貴重である。

形態的には逆三角形（上村、西田、夏本）、鏝形（森の越、和井内、本郷）、縹形（平清水込内）の三つに分類される。鏝形は岩泉町・宮守村・和賀町と北上山地と北上川流域に、縹形は（沿岸）北部に、逆三角形は宮古市・大槌町・紫波町で沿岸中央部と北上川流域で出土している。逆三角形の玉は3例とも上部に孔があり、一方向から穿孔である。上村と西田の孔は頂部の中央にあり、一定の幅の穿孔孔を用いている。これに対して夏本例は孔の位置がずれ、孔径も表と裏では異なっている。穿孔方法に違いがあるものと推定される。夏本例はやや疑問であるが上村と西田例は明らかに三角形を意識したものである。通常大珠と呼ばれている玉は鏝形が主で三角形は含まれていない。硬玉の原産地および製造地が北陸地方にあることはよく知られている。この地域に類例を求めると富山県境 A 遺跡（山本 1990）に硬玉製垂玉として2点の類例がある。1点は長径1.45、幅1.3、厚さ0.56 cm、1点は各々1.87、0.9、0.4 cmで2点とも上部に両側から穿った孔がある。本県例と比較して小形である。新潟県寺地遺跡（寺村 1987）では硬玉と蠟石製のものがあり、前者は長径4.36、幅2.55、厚さ0.79 cmで穿孔直前の未完成品である。採集品のため時期は不明である。境 A 例はやや小形であるが寺地例のサイズは西田遺跡の玉（長径4.8、幅2.2、厚さ0.7 cm）に近似している。形態的には寺地・上村・西田例は同じ系統の上にあるとおもわれる。特に寺地例はサイズにおいては西田例に、頂部が直線的にならずやや凹凸がみられる点は上村例に近似する。これが縄文時代中期（大木 8 a・8 b・9 式）に定形化していたものかどうかは、北陸地方で4 cm以上の製品が少ないこと、硬玉製品を多く出土している青森県に類例が発見されていないこと、からしてむしろ異形に属するものであろう。あるいは鏝形の大珠の欠損したものを、欠損部平坦にし、一端を尖状に加工したとも考えられるが断面が扁平であり、そこまで削り取ったとはおもわれない。むしろ三遺跡で出土している事実を立てば、この逆三角形の玉は当地方の要求に基づいた形態と考えるべきで



挿図4 ヒスイ大珠

あろう。硬玉製品の流通経路については不明であるが太平洋岸および県内北部に片寄っている傾向が見られる。この傾向は青森県においても同様であり、海路の存在をある程度示唆しているようでもある。

岩手県でヒスイ(硬玉)製垂飾りが出現するのは大木8a式期であり、この時期からすでに逆三角形および鐘形(長楕円形)は存在する。縮縮形については細かな時期までは不明であり、いわゆる大珠とよばれる大形品は大木8b式以後に出土する。夏本例は大木9式のうちでも古式に属しており、これより新しい時期の検出例はなさそうである。とすれば、この逆三角形の玉は限られた時期に、限られた地域で使用されたことも十分考えられる。

註：報告書が未刊のため詳細は不明であるが、新聞記事によると住居跡周辺から長径4.7cm、幅1.4cmで上部に孔のある鐘形の硬玉が出土したという。住居の床からは琥珀製の乗飾も出土している。土器は大木8b~9式が多いが、いずれに属するかは不明である。

引用参考文献(50音順、敬称略)

- 相原 康二他 1981 「大地渡遺跡」東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 岩手県教育委員会
- 阿部 恵 1986 「田柄貝塚—埋葬人骨と出土遺物—」宮城県教育委員会
- 北上市教育委員会 1983 「坊主峠遺跡発掘調査報告書」北上市立博物館研究報告4
- 斉藤 尚己他 1968 「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急発掘調査報告」北上市教育委員会
- 斉藤 邦雄 1985 「岩手県九戸郡野田村出土の硬玉製品二例」九戸文化3
- 酒井 宗孝 1989 「夏本遺跡発掘調査報告書—縄文時代の遺構と遺構内出土遺物—」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書134。(以下、岩手県埋文報告)
- 鈴木 優子 1980 「西田遺跡—出土遺物—」東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 岩手県教育委員会
- 高橋憲太郎 1982 「柵ノ木平遺跡—縄文時代の遺物について—」岩手大学考古学研究会ほか
- # 他 1989 「トノ木I遺跡」宮古市埋蔵文化財調査報告書17、宮古市教育委員会
- 田中 正徳他 1978 「三斗蔦遺跡」福島県平田村教育委員会
- 寺村 光晴 1987 「史跡 寺地遺跡—既往出土・採集遺物—」新潟県青柳町
- 中村 良幸 1982 「複式炉について」考古風土記7
- # 1986 「観音堂遺跡」大迫町埋蔵文化財報告11
- 丹羽 茂 1976 「東北地方の複式炉」『東北考古学の諸問題』(本文中のカラーグラビア)
- 林 謙作 1977 「縄文期の葬制、第II部」考古学雑誌63-3
- 目黒 吉明 1982 「住居の炉」『縄文文化の研究8』雄山閣
- 三浦 謙一他 1978 「都南村 湯沢遺跡」岩手埋文報告2
- 森 幸彦 1988 「三貫地貝塚—埋葬人骨—」福島県立博物館
- 八木 光則他 1984~1985 「大館遺跡群—昭和58・59年度発掘調査報告—」盛岡市教育委員会
- 山本 正敏 1990 「境A遺跡」北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編5— 富山県教育委員会
- 吉田 義昭他 1960 「岩手県盛岡市紫遺跡—」奥羽史談28、奥羽史談会

2. 弥生時代

(1) 住居跡

5棟の住居跡はいずれも遺跡の中段面、標高19～21mの比較的狭い範囲に集中している。このうちF-4、K-1、L-2号住の3棟は重複しているが、この中ではL-2号住が最も古い。L-2号住は他の住居よりはやや小さく、炉がほぼ中央に位置しすのに対し、他の4棟はプランには差はあるものの規模（推定も含めて）はほぼ同じで炉の位置も中央よりはいずれがの方向にづれている。L-2号住のみが単独で、他の4棟が一時期に存在していたかどうかは不明であるが、県内の他の遺跡、例えば滝沢村湯舟沢遺跡（桐生ほか1986）、松尾村長者屋敷遺跡（高橋ほか1980）などでは一時期2～4棟程度であり、上村例もこれらの遺跡と同様と推定される。5棟の住居のうち全景を確認できたのはF-4号のみで傾向を把握しづらいが、円形プランは無いものと推定される。F-2号の張り出し部を除けば他は崩れた隅丸形状を呈するようである。柱穴は対称的に位置するものは少なく、支柱穴を特定できるものは少ない。位置は炉と壁の間が多いようであるが、壁際に寄るものもあり一様ではなさそうである。炉は5棟とも石囲炉である。円形を呈するものが3棟（F-4、K-1、L-2）で径60～70cm前後である。F-2号、G-3号も石囲炉であるが前者は複式炉の形状を示す。主炉は方形よりは円形に近く「8」状を呈する。後者は東西の両端に偏平な石を配し、東北側は楕円形の石を縦に埋め込む通常の炉石である。県内で同時期の竪穴住居跡は1988年現在上村を除き39棟で、炉跡は一住居複数炉を含めて41基検出されている（小田野1988）。その内訳は石囲炉12、土器埋設石囲炉9、配石炉4（石囲炉の石が一方あるいは二方で切れているもの）、土器埋設配石炉2、地床炉9、土器埋設地床炉5基となっている。何らかの形で石を伴う炉は27基あるが、F-2号、G-3号炉と同じ形態の炉は例がないようである。大洞A式期や弥生時代中頃の住居にも類例はなく、さらに東北地方北部も同様であり、目下のところは起源、分布について不明の状況である。県内での弥生時代初期の炉は前述したように様々な形態を示している。複数の竪穴住居が検出された遺跡で同一形態の炉をもつのは安代町扇畑遺跡（近藤ほか1982）の土器埋設地床炉3棟（竪穴住居は2棟）と当遺跡の石囲炉のみであり、他の遺跡はすべてタイプの異なる炉から成っている。

5棟の竪穴住居の配置はL-2号を除くと極めて隣接した状況にある。西側が木調査のため全体はうかがい知れないが、地形からすると何棟かの存在が考えられ、数棟の住居が一定期間継続していた可能性が高い。この時期の竪穴住居で明確な円形、楕円形プランを呈するのは軽米町馬場野II遺跡（工藤ほか1986）や湯舟沢遺跡など県北部に多く、規模も径6mを越す大型の住居に多い。他の地域は総じて崩れたプランが多く、柱穴の位置も一定しないものが多い。その意味では当遺跡の住居も県内の一般的な在り方と共通している。

(2) 土器

資料として確実な堅穴住居の土器を中心に検討する。挿図5は各住居ごとに出土した土器を器種別にまとめたものであり、番号は図版と同じであり、縮尺は不同である。

壺：小形壺と中形壺に分類が可能である。小形壺は口縁部に隆帯をもち、体部は無文のもの、体部に変形工字文・入組工字文をもつ二つのタイプがある。前者はF-4号住を除いた他の4棟および遺構外からも多く出土している。後者は数は少なく、特に入組工字文とおもわれるモチーフをもつ壺はK-1、L-2号住のみから出土している。L-2号住2は無頸あるいは短頸の可能性が高い。中形壺は口頸部が直立気味で、口縁部に隆帯文様があり、肩に最大径のあるものと、口頸部が外反し、胴中央部に最大径のある二つのタイプに分類できる。前者は大洞A'式の伝統をひいて体部無文、よく研磨されている。後者は新たな器形であり、体部全面に縄文が施文されている。後者の土器はF-4号住に顕著であり、F-4住は他の壺を含んでいない。

甕：口縁部が内傾し全面縄文のもの(F-2住5)と、口頸部と胴部が分化する器形の二つに分類できる。最大径は両者とも口縁部にはなく肩部にある。後者はさらに頸部を沈線により区画するものと、そうでないものがある。両者とも口縁部は無文で胴部には斜位、横位の縄文が施文される。頸部にはナデ整形の認められるものもある。沈線で区画される甕の口縁部は平縁波状、小突起(B突起)および体部に文様をもつ山形口縁(K-1住15)がある。沈線のない甕は平縁と波状がある。L-2号住の平縁は他と異なり小さく外反する(7、8)。住居跡ごとにみるとK-1号住は文様帯をもつ山形、波状口縁(沈線のあるもの17とないもの16)が集中し、L-2号住では小さく外反する平縁が顕著である。F-2号住5の縄文時代の系統の強い1点を除いて、5棟の住居とも各タイプのものが共存している。したがって各器形ごとに新旧を位置づけることはある程度可能であるが(例えば林1982、佐藤1989などにより)住居内の一括としてみると新旧の土器が共存し、各住居の位置づけには直接引用はできない。

鉢(浅鉢)：平縁でやや肩のふくらむ器形が多いが、G-3号住を除いた4棟には山形口縁で頸部にくびれをもつ器形のものが含まれる。2~3本の平行沈線のみのもは文様帯が口頸部に集中し、体部はミガキ整形が多い。大洞A'式の系統が強い器形である。文様帯の広い鉢には変形工字文、π字状文などがあり、G-3号住2は頸部無文となり文様帯が2段となる。出土例のないL-2号住を除いた4棟には文様帯の狭い鉢と広い鉢が共存している。

高環：口縁部は平縁とゆるやかな山形の両者があり、前者には口縁部がラッパ状に広がるもの(F-2住15、17)とやや内湾し小さな頸部をもつもの(K-1住13、28)とがある。後者も同じようであるが頸部がより強く屈曲する器形が多い(F-4住14、15)。これらは数的にはほぼ均等であり、突出している器形はない。脚部はややふくらみをもつ円筒状のものが圧倒的に多く、短く裾の広がる脚は数が少ない。前者は平行沈線間にゆるやかな波状文をめぐらすことが

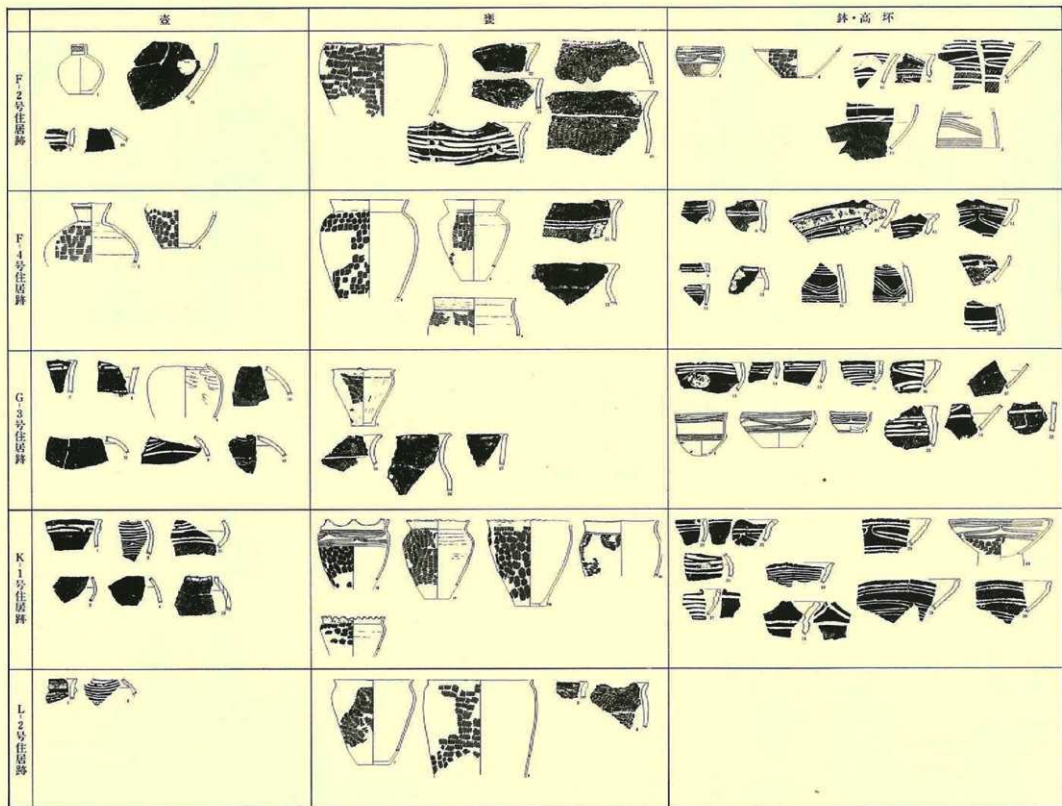
多く、後者には波状文は施文されておらず、より古い様相を示している。遺構外からは磨石縄文を伴う例が出土しているが、住居跡内出土例はない。

住居跡内出土の土器には蓋が欠落しているが、遺構外から2点出土しており、これを含めると基本的な土器組成は成立する。個々の土器の新旧関係、型式としてつきつめることは可能であるが、住居跡内出土の複数の土器をもって住居間の新旧を決定する材料とするには到らなかった。逆に言えば、様々なタイプの土器・縄文時代の系統をひく器形、弥生期に当地方で新たに派生した器形、他地域の影響の強い器形、などが同時存在していたとみるべきであろう。このような土器のあり方は東北地方の弥生文化受容期、つまり最も古い時期に位置づけられるものであろう。

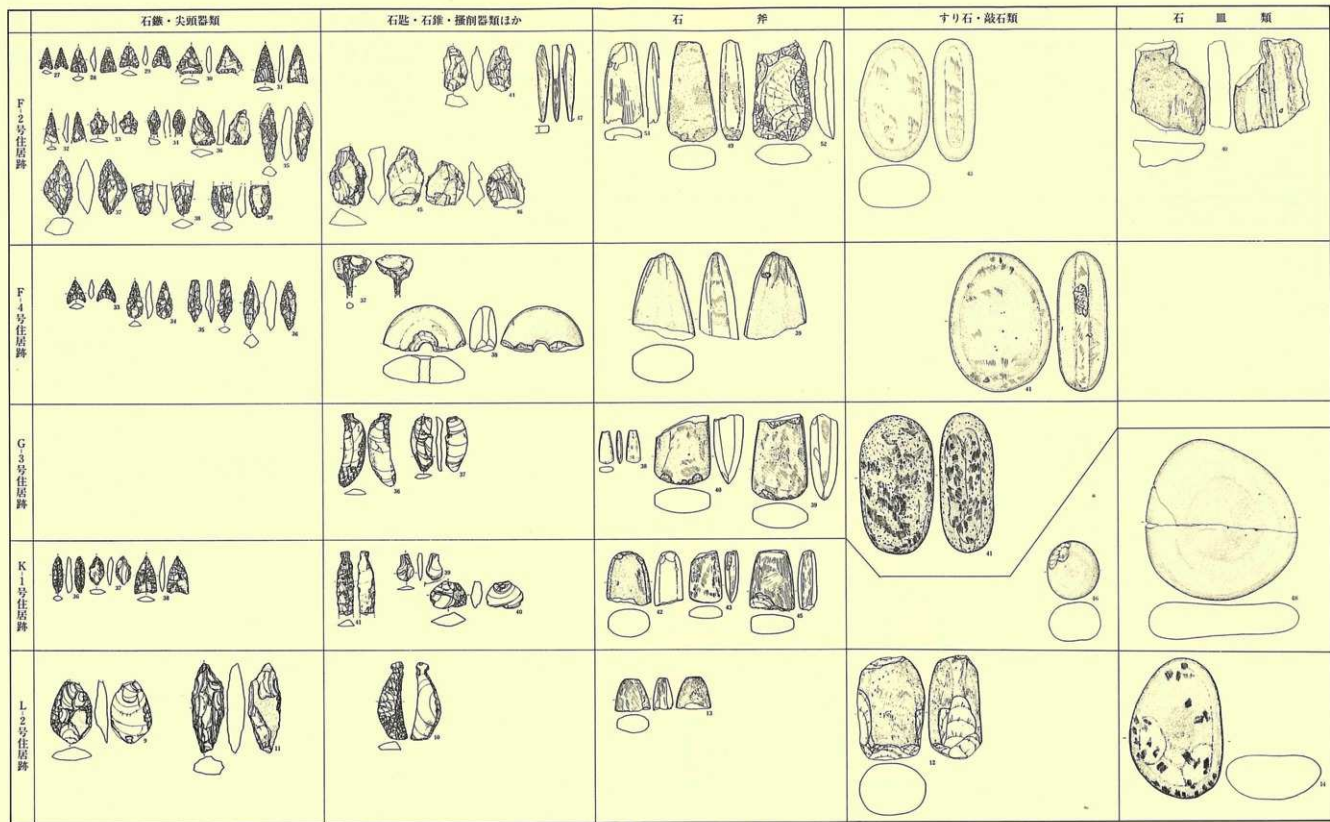
(3) 石器 (挿図6)

県内の弥生時代の石器については相原康二氏の集成がある。それによるとI期(相原1989)即ち上村と同時期に出土している石器には、尖頭器・播器・石匙・不定形石器・楔形石器・石筥・石錐・打製石斧・片刃石器・磨製石斧・太型蛤刃石斧・片刃石斧・擦切石斧・石鋏・石錘・砥石・敲石・磨石・凹石・石皿・台石の22種にのぼるといふ。このうち上村では石筥・尖頭器(槍)・播器・石匙・不定形石器・石錐・打製石斧・磨製石斧・砥石・敲石・磨石・石皿の12種が出土している。同氏が示した特徴的な石器では蛤刃石斧、片刃石斧、楔形石器が欠けており、凹石も出土していない。逆に、集成段階ではなかった石製紡垂車、有角石斧が新たに出土した。紡垂車、有角石斧を除いては、いずれの器種も縄文時代から存続しているものである。器種ごとの特徴は次の通りである。石筥は小形のものが多く明確な茎縁は少ない。無茎の平基あるいは挟り入りのものが多く、F-4住、K-1住では尖基縁がある。F-2住34、35は基部が幅広で先端部は三角状を呈する。この時期に特有のものかどうかは類例が乏しく不明である。尖基縁は県北部の遺跡で出土例がある。尖頭器としてF-2住36(37、38も可能性ある)、L-2住9、11があり形態は三者三様で共通性は少ない。石匙はいずれも縦形で、石錐も縄文時代のそれと全く同じである。不定形石器としたものには播・削器的なものが含まれる。石斧はF-2住52を除いて磨製である。52の片面は自然面がそのまま残っている片刃の石斧である。磨製石斧は定型的な形態で、おそらくすべて両刃になるものと推定される。擦石・敲石は各住居跡から出土している。基本的に楕円状の石の側面を擦っているものが多い。L-2住12の敲石は擦石の側面両端を打ち欠いて転用したものである。石皿類は偏平な自然石の中央部を凹ませたものと、角礫を面取りしたものとがある。F-2住39の裏面は溝状になっており、砥石として利用したものと推定される。

以上の石器は、ほとんどが縄文時代から継続して製作、使用されているものであるが、その



挿図5 弥生時代住居跡の土器



挿図6 弥生時代住居跡の石器

なかで小形の無茎石鏃の多いこと、基部の幅広の鏃があること。定型的な磨製石斧が多いこと、などが敢えて特徴とすればあげられる。次に明らかに弥生時代の特徴としてあげられる石器について検討する。

・有角石斧(第189図63、写真図版130)：形態的には独鈷石にも見えるが、刃部が湾曲せずまっすぐで断面が長方形状となること、先端部が円錐状とならない点で異なっている。有角石斧は主として東日本を中心に分布しているが、現在の北限は宮城県までであり(伊東1950)さらに分布を広げたことになる。新田栄治氏は有角石斧を形態によりⅠ～Ⅷ類に分類しているが(新田1975)それによればⅦ類に近い。中央部に相当する隆起帯と角部が発達し、刃先に向かう広がりや度合いが少ないことからすると武蔵野郷土館蔵資料(出土地不明・東京近郊)に最も近い形態である。表面の隆帯は幅広に盛り上がりそのまま両側の角部につらなるが、裏面の隆帯は明確ではない。刃部は各部の下でやや細くなり、若干の広がりをもって刃先に向う。刃は弧状となり、刃先は敲打痕を若干残し鋭くはなく幅3mmの稜状となる。使用痕はこの部分のみであり、他に肉眼では認められない。左側面は研磨が不足しザラザラしているが、他の部分はよく磨かれている。出土状況は弥生土器片が多く出土した包含層中からで、特段の出土状況は認められなかった。

東北地方の出土例としては宮城県南小泉遺跡、同西小野田例(伊東同上)が知られており、時期の明確なものは南小泉遺跡の柵形罫式期である。この資料は伊東博士が拾得された資料であるが柵形罫式期に伴うものと断定されている。新田氏はⅦ類に最も古い位置を与え、次いで南小泉例のⅠ類の順に編年されている。当遺跡の土器は明らかに柵形罫式以前であり、南小泉例より古いことに関して矛盾はない。ただ、近年の千葉県調査例では宮城孝之氏が発表されているように(宮城1985)宮ノ台式期に属する刃部の表裏に稜をもつ例が多く出土している。このタイプは新田氏がⅦ類と最も新しい時期としたものであり、千葉県内の出土例とは合致しない。本遺跡例のようなタイプは千葉県周辺では類例に乏しく、単純から複雑への変遷を考えるなら本例はより古い時期に位置づけることが可能である。有角石斧の出自は常に問題になるところであるが、かつて大陸の金属器と関連させ(例えば変形鉄剣形石剣)た意見もあったが、上村タイプが刃部に稜や縄をもつタイプと同じ型式とすれば、出現時期は遡ることになり、祖型を大陸系の金属器に求めることは苦しくなる。むしろ縄文時代晩期の中に求めることも一つの方法と思われる。宮城県ミヤギ沼道遺跡では上村より後出する時期であるが、石包丁や初痕が出土する層から独鈷石が出土している(志間1970)。このことは縄文時代の特殊な石器が弥生時代まで引き続き使用されていたことを示すものであり、形態上からも有角石斧(器)と独鈷石の関連について考えるのは全く無意味とはおもわれない。

使用法や着柄については柄部が欠損しているため不明。刃部先端は3mmほどの幅があり切

載するには刃が厚すぎるし、その痕跡も認められない。むしろ敲打した痕跡の方が明瞭で、何かに軽く打ちつけた可能性があり、利器として用いられたという積極的な証拠は乏しい。本例が有角石斧であるかどうか、あるとすれば最も古い時期に属する一つとなる。存在、形態、時期等今後の課題としたい。

・石製紡垂車(第90図、写真図版67)：円盤状で径6.2cm、中央部の厚さ1.8cm、孔の上径1.2cm下径1.0cm、残存重量44.0g。孔は一方からの回転穿孔で、上径の周辺は回転運動の際に力がかかったため薄く剥離しており、その部分のみ研磨されていない。周縁部は幅5mmの厚さがあり丹念に擦上げられている。残存重量44gは完形とした場合約90gとなり、紡垂車としては最大級の重量となる。あるいは環状石斧の刃を擦上げた可能性が全く無いわけではない。

東北地方では宮城県内で出土地不明の一例が知られている(佐原1964)。同氏によれば国内の弥生時代の紡垂車の多くは重量が5~30gの間に集中しており、東日本に重量のあるものが多く、50gを超える例もあるという。最初に紡垂車を使用したであろう九州地方では、福岡県曲田遺跡(中間1984)で径6.4cm、重量50~60gの土・石製紡垂車が、佐賀県菜畑遺跡(中島1982)では縄文時代晩期後半~弥生時代前期にかけて径7~9cmほどの紡垂車が出土している。傾向として晩期が大きく、弥生時代になるとやや小形化するという。土製の方が圧倒的に多く石製は少ない。土製の場合は孔の周辺が盛り上がるものが多いが、石製の場合はほとんどが平偏である。紡垂車の始現地である九州北部に本例の形態が存在しないことからすると、先に記したように環状石斧からの転用とも考えられるが、県内出土の環状石斧は粘板岩製が多いのに対し当該資料は凝灰質砂岩でやや軟質の石材である。また、県内の土製紡垂車の径や厚さ、断面形は重量を除くと近似する数値を示す(小田野1985、工藤1984ほか)。類例の増加を俟つこととしたい。

(4) 玉類

・管玉(第188図、巻頭写真図版)：長さ21.0mm、径7.0mm、孔径1.9~2.0mmで碧玉製、両側からの穿孔である。擦切り痕、押圧剥離痕は残っておらず、丹念に研磨されている。上・下面の縁辺には小さな瑕が残っている。東日本の弥生時代初期の段階に碧玉製管玉が伴うことはよく知られている。多くは墓墳あるいは墓墳の土器中から副葬品として出土するが、本県では墓墳からの出土はなく、本例も弥生土器包含層から出土した。県内での弥生期全般の出土例としては二戸市火行塚遺跡(高橋1981)、岩泉町瓢箪穴(菊地1969)、盛岡市永福寺山遺跡(未発表)、水沢市橋本遺跡(伊東1974)、同常盤遺跡(伊東1954)、一関市大平遺跡(工藤1984)などがある。このうち当該期に属するものは火行塚遺跡、大平遺跡、上村遺跡の計4点で計測

値は右表の通りである。他の遺跡の管玉は時期が新しく、橋本、常盤遺跡では鉄石英製の管玉が加わる。両遺跡の管玉は長さ9~31 mm、径3~6 mmの細形である。火行塚、大平、上村の平均値は長さ30 mm、

遺跡名	長さ	直径	孔径	穿孔	その他 (単位mm)	
火行塚	1	31.2	9.0	3.0	両側	孔やや楕円形
	2	29.5	6.8	3.0	両側	縦に半截、孔内面転磨
大平	42.3	8.5	2.4~2.9	両側	断面、孔ともやや楕円形	
上村	21.0	7.0	2.0	両側		

径7.8 mmで穿孔はすべて両側からである。東北地方で最も多く管玉を出土した青森県宇鉄II遺跡(岩本1979)の14号土壌の356個の碧玉製管玉は最長16.2、最大径3.0 mmで平均値は長さ7~8 mm、径2.2~2.5 mmと細形で短いものが多い。この種の管玉は本県には例がなく宇鉄よりは長くかつ太い。宇鉄II遺跡と上記の三遺跡は時期的に大きな差はないが、管玉に関しては違いが認められる。碧玉製の玉類の製造地については未だ定説はないが、日本海側でより多くの遺跡が発見されており、宇鉄遺跡は日本海の本州北端に位置している。青森県及び東北南半では初期に墓塚に伴って出土する例多いが、本県では後半になってから常盤、永福寺山遺跡で墓塚とおもわれる土壌から出土している。瓢箪洞穴は洞穴そのものが墓塚と考えられる。副葬品として扱う風習がなかったかどうか。また、東北南半では副葬する際に故意に破碎する例も多い。火行塚の1個は縦に割れているが、故意に打撃を加えた痕跡はない。^(註2)東日本では初期には細形が多く、次に太形の管玉に変化する傾向が認められるが、本県のそれは初期には太形で、やがて鉄石英製を含めた細形で長い管玉に変化するようである。なお、勾玉については未だ出土例はなく、玉類の受容に関して他の地域とは異なる様相が存在していたものとおもわれる。

註1: 千葉県(北総)の出土例によると成田市関戸遺跡より本例と良く似た形態の土製紡錘車が出土している(6.2 cm×2.5 cm 重量不明)。また、佐倉市江原台遺跡からは84.1 gの土製紡錘車が出土しているが、いずれも中期~後期に属する資料である。(柿沼1985)

註2: 火行塚遺跡では管玉2点のほかにスプーン状土製品が出土している。同様の例は福島県柏山、同福楽沢遺跡(須藤1972、岡1971)にある。柏山遺跡では土壌の中からスプーン状土製品1、碧玉製勾玉1、碧玉製管玉24点(細・太形を含む)が出土している。岩手と福島では地域差および土器の時間差はあるが、火行塚でも柏山と同様の小壜穴が存在していた可能性があり、副葬品として用いたことも考えられる。

引用参考文献(50音順、敬称略)

- 相原 康二 1989 「岩手県内における弥生時代の石器組成について」岩手県文紀要区
 伊東 信雄 1950 「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3
 伊東 信雄 1954 「岩手県佐倉村発見の弥生式土器」古代学3-2

- 伊東信雄 1974 「水沢市史 1. 弥生時代一」水沢市
- 岩本義雄 1979 「宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書—装身具—」青森県御土館調査報告 6
- 小田野晋憲 1985 「鹿穴洞遺跡発掘調査報告書—出土遺物—」岩手県立博物館調査研報告書 1
- 小田野晋憲 1988 「岩手県における弥生時代の住居」岩手埋文紀要 10
- 柳沼修平 1985 「北総における弥生時代土製紡錘車の評価」史館 18
- 菊池強一 1969 「孤軍穴遺跡」岩泉町文化財調査報告 1
- 朝生正一他 1986 「湯舟沢遺跡」滝沢村文化財報告 2
- 工藤武 1984 「孤潭寺城跡・大平遺跡」一関教育委員会ほか
- 工藤利幸他 1986 「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告 99
- 近藤完光他 1982 「扇畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告 39
- 佐藤嘉広 1989 「東北地方北部における弥生文化受容期の様相」岩手県立博物館研究報告 7
- 佐原真 1964 「紫雲出—土製品—」詫間町文化財保護委員会
- 志間泰治 1971 「鱸沼遺跡」東北電力
- 須藤隆 1971 「福楽沢遺跡発掘調査報告書」郡山市教育委員会
- 須藤隆 1972 「柏山遺跡発掘調査報告書」
- 高橋義介 1981 「火行塚遺跡」〔二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書〕岩手埋文報告 23
- 高橋文夫他 1980 「松尾村長者屋敷遺跡(1)」岩手埋文報告 12
- 中島直幸 1982 「末盧国—菜畑遺跡—」唐津湾周辺遺跡調査会
- 中間研志 1984 「曲り田遺跡Ⅱ—紡錘車—」福岡県教育委員会
- 新田栄治 1975 「有角石斧の再検討」考古学雑誌 60-4
- 林謙作 1982 「杉の堂遺跡」水沢市文化財報告 5
- 宮城孝之 1985 「有角石斧の新例と若干の考察」千葉県文化財センター研究連絡誌 13

3. 奈良・平安時代

本遺跡で検出した奈良・平安時代に属する住居跡と遺物を中心に、項目ごとに分け、補足を加えてまとめとする。

奈良時代の住居跡

〈分布〉検出した9棟の住居跡は、南側緩斜面上に立地している。北端部の1棟を除いた8棟は、調査区の中央部から東側にかけて近接した分布を示している。

〈重複〉重複関係にあるものは7棟である。平安時代の住居跡と3棟、奈良時代の住居跡が部分的に重複する④G-2・⑩M-2号住居跡、⑦I-1・⑧I-2号住居跡の4棟である。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸方形と隅丸台形があり、方形を基調とするものが卓越している。規模は壁の上端で計測した長さ3.3m以下(小型)が⑦I-1・⑧I-2・⑩M-2号住居跡の3棟、4~5m(中型)が③G-1・④G-2・⑩M-1住居跡の3棟、5m以上(大型)が①A-4号住居跡、不明が2棟である。



奈良時代の住居跡

〈壁〉削平や斜面による流出が著しく、壁高は2~50cmの範囲にあり、総じて床面から急傾斜に立ち上がる様相を呈している。

〈柱穴〉柱穴が検出されたのは③G-1・④G-2・⑦I-1号住居跡の3棟である。4本柱を基調とするもので、⑦I-1号住居跡は方形、他の2棟が長方形に近い配置を示している。掘り方の平面形は③G-1号住居跡が方形、他が円形を呈している。

〈周溝〉全周するものはなく、壁際の一部を巡るものが⑦I-1・⑧I-2・⑩M-1号住居跡の3棟から検出されている。上幅の規模は10~40cm、深さ6~20cmである。

〈貯蔵穴〉④G-2・⑩M-2号住居跡の2棟から検出した。カマドが設置された壁側のコーナー寄りに位置している。

〈焼失〉①A-4・④G-2・⑦I-1号住居跡の3棟で、上屋に使用した木材は栗を多用している。

〈カマド〉設置位置は東壁が⑧I-2・⑩M-1号住居跡、西壁が①A-4号住居跡、北壁が③G-1・④G-2・⑦I-1・⑩M-2号住居跡、北東壁が⑨N-1号住居跡、北西壁が⑤H-1号住居跡である。壁の中央部に配置したものが主で、⑧I-2・M-1号住居跡の2棟はコーナー側に片寄っている。造り変えを行っているのは⑧I-2号住居跡で、北壁側を廃棄し東壁側に移動している。

本体部は崩壊や削平を受けており、下端部だけを遺存するものが大部分である。袖部は芯材

に亜角礫や凝灰岩を数個据え、その上をシルトで被覆し構築している。天井部の構造は不明であるが、一部に礫を使用していると思われる。

煙道部は⑧I-2・⑩M-1号住居跡の2棟がくりぬき式で、他の遺構は削平を受けて構造が不明である。上り勾配型5棟、水平型1棟、下り勾配型2棟、削平のため不明1棟である。

平安時代の住居跡

〈分布〉7棟の住居跡は南側緩斜面上から検出した。調査区の東側と西側に分布しているが、東側の4棟は道路によって削平を受けている。

〈重複〉先行する奈良時代の住居跡と重複関係にあるものは⑥H-2・⑭N-2号住居跡の2棟である。平安時代での重複は⑨J-1・⑩J-2号住居跡⑮O-1・⑯O-2号住居跡である。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸長方形が1棟、他の遺構は削平を受けて不明である。規模を確認できたのは⑭N-2号住居跡1棟だけで、一辺が7~8mの超大型である。⑮O-1号住居跡は5m以上(大型)に属すると思われる。

〈壁〉奈良時代の住居跡と同様に削平や斜面の



平安時代の住居跡

奈良時代・平安時代の住居跡一覽表

()は現存、< >は推定

No	遺構名	平面形	規模(m)	壁高(cm)	柱穴数	カマドの位置	煙道	周溝消失	時代
1	A-4号住	不明	(5.2)×(3.5)	20~40	—	西壁	上り勾配	○	奈良
2	F-1号住	不明	(3.1)×(2.3)	8~45	—	東壁北東隅寄り	ほぼ水平		平安
3	G-1号住	隅丸方形	4.8×(4.6)	10~50	4	北壁中央東寄り	不明		奈良
4	G-2号住	隅丸台形	5.0×4.3	6.5~44	4	北壁中央	ほぼ水平	○	奈良
5	H-1号住	不明	(2.7)×(2.2)	最大14	—	北西壁	上り勾配		奈良
6	H-2号住	不明	(3.8)×(3.7)	5~38	—	東壁	上り勾配	○	平安
7	I-1号住	隅丸方形	3.3×3.2	2~24	4	北壁中央	上り勾配	○	奈良
8	I-2号住	隅丸方形	3.25×3.2	3~35	—	北壁中央東隅 東壁中央北寄り	下り勾配	○	奈良
9	J-1号住	不明	(2.2)×(2.0)	35~65	—	不明	—		平安
10	J-2号住	不明	(5.5)×(2.3)	最大29	—	不明	—		平安
11	M-1号住	隅丸方形	4.3×4.2	12~48	—	東壁北東隅寄り	下り勾配	○	奈良
12	M-2号住	隅丸方形	3.25×3.2	12~32	—	北壁中央	上り勾配		奈良
13	N-1号住	不明	(2.7)×(2.6)	最大18	—	北東壁	—		奈良
14	N-2号住	隅丸長方形	7.8×7.34	15~20	4	東壁中央北東隅寄り	下り勾配	○	平安
15	O-1号住	不明	5.1×(1.0)	12~43	—	不明	—	○	平安
16	O-2号住	不明	(3.5)×(2.6)	14~40	—	北壁	上り勾配	○	平安

流出があり、壁高は8～65 cmの範囲にある。

〈柱穴〉柱穴が検出されたのは⑩N-2号住居跡である。4本柱で長方形の配置を示している。掘り方の平面形状は円形ないし楕円形を呈している。

〈周溝〉壁際の一部を巡るものが⑥H-2・⑤O-1・⑥O-2号住居跡の3棟、カマド部分を除いて全周するのが⑩N-2号住居跡である。上幅の規模は一定でなく8～50 cm、深さ3～28 cmほどである。

〈カマド〉検出したのは4棟で、東壁が②F-1・⑥H-2・⑩N-2号住居跡、北壁が⑤O-2号住居跡である。壁の中央部からコーナー側に片寄って設置されるものが主である。

本体部は削平を受け、僅かに下端部を遺存するだけである。袖部は芯材に亜角礫や凝灰岩を使用し、その上をシルトで被覆して構築したと思われる。

煙道部は②F-1号住居が側壁に礫を使用した掘り込み式、⑥O-2号住居跡がくりぬき式で、他の遺構は削平を受け構造が不明である。上り勾配型2棟、水平型1棟、下り勾配型1棟である。煙出し部は円形および楕円形の土坑が掘り込まれているのが3棟である。

この様に奈良・平安時代の住居跡では、規模、カマドの設置位置、柱穴配置等の構造的な変化が見られる。

奈良時代の土器

〈土師器坏〉ロクロ不使用（A類）のもので、底部形態、外面の沈線・段の有無、器面調整から次のように分類される。全て内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

A-1類 丸底で体部外面に沈線・段をもたないもの。

A-2類 丸底で体部外面に沈線・段をもち、内面に稜をもたないもの。

A-3類 丸底で体部外面に沈線・段をもち、内面に明瞭な稜をもつもの。

A-4類 平底で体部外面に沈線をもつもの。

A-1類はA-4号住居跡の3、G-2号住居跡の24が該当し、後者の底部はハケメ調整を施している。法量と器形から細分が可能である。A-2類はA-4号住居跡の2、M-1号住居跡の40が該当する。A-3類はA-4号住居跡の4、G-1号住居跡の20、N-1号住居跡の45が該当し、底部にハケメ調整を施したこともある。A-4類は平安時代の土器と共存している。

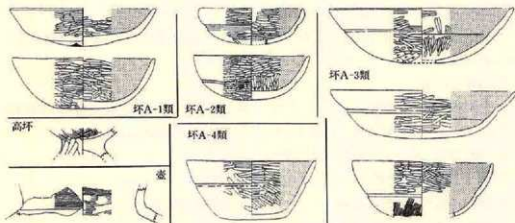
〈土師器高坏〉G-1号住居跡と遺構外から破片（A類）が2点出土している。外面はヘラミガキ調整され、内面は黒色処理したものと非処理とがある。後者には一部朱が塗られる。

〈土師器壺〉遺構内出土の大部分は破片（A類）で占められ、器形の全容を把握できるものはない。器面調整は外面がヘラケズリ・ヘラミガキ、内面がヘラナデ・ヘラミガキ調整等が施されている。全体に内外面はヘラミガキ調整を多様する傾向性を示している。現存する部位から器形は大・中・小に大別が可能である。底部は木葉痕も見られる。

〈土師器壺〉遺構外から口縁部の破片（A類）が2点出土している。口縁部外面はヨコナデ調整され、赤彩塗布されている。

〈その他の遺物〉砥石がG-1・M-1号住居跡、ふいごの羽口がA-4号住居跡、土製の紡錘車がG-2号住居跡、鉄製品の攝子がG-2号住居跡から出土している。量は僅少である。

各器種ごとの特徴と基準の分類を示したが、他遺跡の類例と対比し時期を推定する。各遺構の出土点数が少なく器種組成は不明である。土師器杯A類と同様なものは沿岸北部の久慈市源道遺跡、平沢I遺跡、中央部の宮古市長根I遺跡、大穂町夏本遺跡等から出土している。源道遺跡の杯1・3・4類、夏本遺跡のAA3住居跡に類例が見られる。また、「岩手の土器」の編年奈良時代II-2群（高橋信雄，1982）、「考古学論叢」の岩手県南部における土師器の細分7-a・7-b群（遠藤勝博・相原康二，1983）と分類される土器群に類似をする。共存する土師器杯A-1～3類をI期、A-4類をII期に時期区分した。I期は土器様相から8世紀前半、II期は8世紀後半に位置づけられるものと推定される。



平安時代の土器

〈土師器杯〉ロクロ使用（B類）のもので、底部の切り離し技法から次のように分類される。破片が多く図化できたのは2点で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

B-1類 回転ヘラ切りで、再調整されるもの。

B-2類 回転糸切りで、再調整されないもの。

B-1類はN-2号住居跡の47、B-2類はO-1号住居跡の52が該当する。前者はロクロ不使用の杯A-4類と共存出土している。

〈土師器壺〉破片が大部分を占めており、器形の全容を把握できるものは少ない。ロクロ不使用（A類）とロクロ使用（B類）に大別される。

A-1類 口縁部がくの字状に外傾するもの。

A-2類 口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

B-1類 ロクロ成形で、口縁部に最大径を有するもの。

B-2類 ロクロ成形で、体部中央に最大径を有するもの。

A-1類はF-1号住居跡の12、H-2号住居跡の31・33、N-2号住居跡の51、A-2類はJ-1号住居跡の39が該当する。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラナデ、内面がヘラナデやハケメ調整を施している。器形は大・中・小に細分が可能である。

B-1類はH-2号住居跡の32、B-2類はF-1号住居跡の18が該当する。前者は体部下半にヘラケズリやヘラナデ調整を施すものが多い。後者は体部上半に耳を付してある。

〈土師器鉢〉ロクロ使用（B類）のもので、H-2号住居跡の29・30が該当する。底部の切り離しは回転糸切りで、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。29の外面上位にはヘラケズリ調整が施されている。

〈須恵器杯〉ロクロ使用（B類）のもので、底部の切り離し技法から次のように分類される。

B-1類 回転ヘラ切りのもの。

B-2類 回転糸切りで、再調整されるもの。

B-1類はO-2号住居跡の54が、B-2類はF-1号住居跡の10、N-2住居跡の48が該当する。口縁部は外傾して立ち上がっている。

〈須恵器壺〉破片が大部分で、器形の全容を把握できるものはない。大壺はN-2号住居跡の50、O-1号住居跡の53が該当する。F-1号住居跡からは体部の破片が出土している。

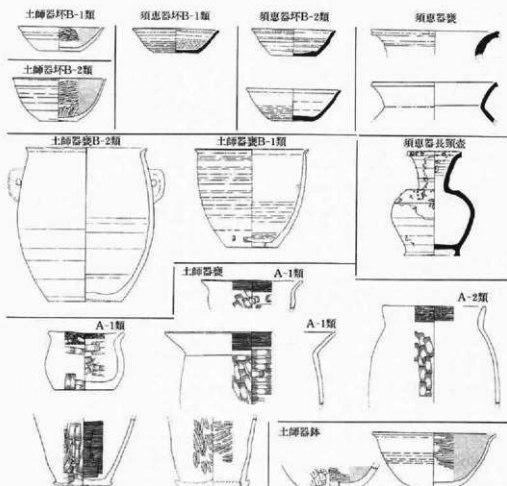
〈須恵器壺〉完形の長頸壺がF-1号住居跡から出土している。器高は15.9cmである。

〈その他の遺物〉磁石がF-1・O-2号住居跡、ふいごの羽口がH-2号住居跡から出土している。

器種組成は各遺構とも出土数が少なく不詳な点が多い。F-1号住居跡は須恵器杯B-2類、土師器壺A-1類・B-2類、須恵器長頸壺が、N-2号住居跡は土師器杯A-4類・B-1類、土師器壺A-1類、須恵器杯B-2類、須恵器壺が、H-2号住居跡は土師器壺A-1類・B-1類、土師器鉢B類が共伴している。東北や沿岸北部の平安時代の器種組成に類似性が見られる。時期区分は杯の共伴と土器の様相からⅢ～Ⅳ期に分けられる。先行する奈良時代の土師器杯A-4類と杯B-1・B-2類が共伴するものをⅢ期、須恵器杯B-1類と外面にヘラミガキ調整の土師器壺と共伴するものをⅣ期、土師器壺A類とB類、須恵器等が共伴するものをⅤ期とした。「岩手の土器」の編年平安時代Ⅲ-1・2群（高橋信雄，1982）の土器群に類似するもので、Ⅲ期は9世紀前半、Ⅳ期は9世紀前半、Ⅴ期は10世紀の範囲におさまると推定される。

集落の変遷

奈良時代の住居跡は9棟で、内4棟が重複関係にあり、新旧の時期が確認された。各遺構の



出土遺物量も少なく、器種組成による時期差は不詳である。カマドが北壁中央部に設置される遺構は、コーナー側に寄る遺構よりも旧いことが重複関係からも指摘できる。主軸が東・西・北壁側からずれるもの2棟が存在する。個々の住居跡の時期決定はできないが、カマドの設置位置からⅠ期（北壁側）、Ⅱ期（東・西壁側）、Ⅲ期（北東・北西壁側）に区分される。これらの集落は8世紀前半から平安時代にかけて継続して営まれていたと推定される。

平安時代の住居跡は、先行する奈良時代の集落の東側に一部重複して分布する。遺構から共存する遺物の年代と重複関係等からⅠ期 N-2号住居跡、Ⅱ期 O-2号住居跡、Ⅲ期 F-1・H-2・J-1・O-1号住居跡に区分される。Ⅰ期は9世紀前半葉、Ⅱ期は9世紀前半、Ⅲ期は10世紀に推定されるものである。平安時代の集落は、小規模で10世紀まで継続する様相を示している。

Ⅶ 鑑定・分析結果

上村貝塚動物遺存体について

陸前高田市立博物館 佐藤正彦
岩手考古学会会員 熊谷 賢

- 動物遺存体は、軟体動物腹足綱 20 種、二枚貝綱 7 種、節足動物蔓脚亜綱 1 種、棘皮動物海胆綱 1 種、脊椎動物硬骨魚綱 7 種、爬虫類 1 種、哺乳綱 5 種が出土した。
- 出土した貝で主体をなす種は、コクマガイ・チヂミボラであった。出土総個体数 1028 点のうちコクマガイが 417 点 (40.56%)、チヂミボラが 263 点 (25.58%) で全体の 66.14% を占める。この他に出土点数の多い種ではタマキビガイ 69 点 (6.71%)、ムラサキインコガイ 67 点 (6.52%)、コシダカガンガラ 57 点 (5.54%) があるが、割合としては全体の 18.77% である。
- 出土した貝で、岩礫部に生息するものは全体の 51.83%、砂底部に生息するものは 40.85% である。
- 出土した魚は、マイワシ・ニシン・スズキ科の一種・アジ科の一種・ウミクナゴ・マサバ・アイナメである。三陸沿岸の貝塚に普通見られるマダイ・カツオ・マグロ類などの大型魚は出土していない。
- 脊椎動物の絶対量は貝に比べると非常に少ない。

1. 上村貝塚出土動物遺存体種名一覧表

I・軟体動物 MOLLUSCA

i・腹足綱 GASTROPODA

- 1・クロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus* REEVE
- 2・シボリガイ *Patelloida (Chiazacmea) tymaca signata* PILSBRY
- 3・アオガイ *Notoacmea schrenckii schrenckii* (Lischke)
- 4・シロガイ *Collisella pelta shirogai* Habe et Ito
- 5・イシダタミガイ *Monodonta labio confusa* Tappaarone-Canefri
- 6・コシダカガンガラ *Omphalius rusticus* (Gmelin)
- 7・カワザンショウガイ *Assiminea lutea japonica* v. Marteus
- 8・タマキビガイ *Littorina brevicula* (Philippi)
- 9・クロタマキビガイ *Neritrema sithana* Kurila (MIDDENDORFF)
- 10・イボニシ *Reishia clavigera* (Ktister)

- 11・レイシガイ *Reishia bronni* (Dunker)
- 12・チヂミボラ *Nucella heyseana* (Dunker)
- 13・エゾチヂミボラ *Nucella freycineti* (Deshayes)
- 14・クロスジムシロガイ *Relicunassa fratercula fratercula* (Dunker)
- 15・ホタルガイ *Olivella japonica* PILSBRY
- 16・キセルガイ科の一種 *Clausiliidae gen. et sp. indet.*
- 17・オカチョウジガイ科の一種 *Subulinidae gen. et sp. indet.*
- 18・ホソオカチョウジガイ *Opeas pyrgula* (Schmacker et Boettger)
- 19・バツラマイマイ *Discus pauper* (Gould)
- 20・オオコハクガイ *Zonitoides yessoensis* (Reinhardt)
- ii・二枚貝綱 BIVALVIA
 - 1・ムラサキインコガイ *Septifer (Mytilisepta) virgatus* (Wiegmann)
 - 2・エゾイガイ *Crenomytilus grayanus* (Dunker)
 - 3・イガイ *Mytilus corsucus* Gould
 - 4・ホタテガイ *Patinopecten (Mizuhopecten) yessoensis* (Jay)
 - 5・マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)
 - 6・コタマガイ *Gomphina (Marcrisdiscus) veneriformis melanaegis* (Römer)
 - 7・オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai* Makiyama
- II・節足動物 ARTHROPODA
 - i・蔓脚亜綱 CIRRIPIEDIA
 - 1・チシマフジツボ *Balanus cariosus* (PALLAS)
- III・棘皮動物 ECHINODERMATA
 - i・海胆綱 ECHINOIDEA
 - 1・ムラサキウニ *Anthocidaris crassispina* (A. AGASSIZ)
- IV・脊椎動物 VERTEBRATA
 - i・硬骨魚綱 OSTEICHTHYES
 - 1・マイワシ *Sardinops melanostictus* (Temminck et Schlegel)
 - 2・ニシン *Clupea pallasii* Valenciennes
 - 3・スズキ科の一種 *Percichthyidae gen. et sp. indet.*
 - 4・アジ科の一種 *Carangidae gen. et sp. indet.*
 - 5・ウミタナゴ *Ditrema temmincki* Bleeker
 - 6・マサバ *Scomber japonicus* Houttuyn

7・アイナメ *Hexagrammos otakii* Jordan et Starks

ii・爬虫類 REPTILIA

1・ヘビ目的一种 *Ophidia* fam. indct.

iii・哺乳類 MAMMALIA

1・齧歯目的一种 *Rodentia* fam. indct.

2・リス科的一种 *Sciuridae* gen.et sp.indet.

3・ネズミ科的一种 *Muridae* gen.et sp.indet.

4・イノシシ *Sus scrofa* LINNÉ

5・シカ *Cervus nippon* TEMMINCK

種名の記載にあたっては、主に軟体動物に関しては学研の『学研生物図鑑「貝Ⅰ・Ⅱ」』（波部監修：1983）、魚類に関しては東海大学出版会の『日本産魚類大図鑑』（益田・岡岡他：1984）、その他の脊椎動物・節足動物・棘皮動物に関しては北隆館の『新日本動物図鑑[中]・[下]』（岡田・内田監修：1965）を参考している。

2. 各遺構内出土の動物遺存体

B-1号住第2貝層

I・軟体動物

i・腹足綱

クロアワビ：殻頂部付近の破片が1点出土。クロアワビとして扱ったが、エソアワビの可能性もある。

シロガイ：4点出土。最大殻は高1.9mmと小型である。岩礫性の二枚貝に附着してきたものだろうか。

コシダカガンガラ：9点出土。殻径7mm以下と小型で、磨滅が著しい。

カワザンショウガイ：1点出土。殻高3.0mm、殻径2.6mmと小型である。

タマキビガイ：22点出土。最大殻は殻高10.4mm、殻径9.5mmと小型である。14点が完存貝である。

クロクマキガイ：1点出土。殻口部を欠損する。

イボニシ：完存貝1点、殻頂部のみ2点出土している。完存貝の計測値は殻高32.9mm、殻径23.0mm

チヂミボラ：69点が出土。完存貝は11点あり、計測値はすべて殻高18.0mm、殻径12.0mm以上である。他は破碎されており、特に体層部の破碎が多く見られる。1/3以上は破碎が著しく、食用とは思われない小型のものが目立つ。

エゾチデミボラ：2点出土。殻径 27.5 mm と 17.0 mm で前者は比較的大型である。
クロスジムシロガイ：1点出土。殻高 6.8 mm、殻径 4.3 mm でほぼ完存である。
ホタルガイ：1点出土。殻頂部は欠損する。殻径は 5.7 mm で、体層正面に径 1.5 mm の人為的な孔を有する。

キセルガイ科の一種：殻口部が 1点出土。幼貝である。陸産巻貝。

オカチョウジガイ科の一種：殻口部のみ 1点出土。陸産巻貝。

ii・二枚貝綱

ムラサキインコガイ：右殻 47 点、左殻 42 点が出土。いずれも破砕が著しい。岩礫性の二枚貝である。本遺構中には他の岩礫性二枚貝、巻貝も多く見られ、岩礫性の貝に対する依存が強く、本遺構の特色の一つと思われる。

エゾイガイ：右殻 4 点、左殻 8 点が出土。破砕が著しい。

イガイ：右殻 6 点、左殻 5 点が出土。破砕が著しい。本遺構より出土したムラサキインコガイ、エゾイガイ、イガイは焼けて灰色に変色した個体が多く見られた。

ホタテガイ：腹縁の破片 1点が出土している。左右は不明。

マガキ：右殻 1点と、左右不明破片が数点出土。最小個体数は 2~3 個体程度と思われる。

コタマガイ：右殻 68 点、左殻 71 点が出土。いずれも破砕が著しい。本遺構中、最も出土量の多い種である。

II・節足動物

i・蔓脚亜綱

チシマフジツボ：殻板 50 点が出土。最小個体数は 9 個程度と思われる。

III・棘皮動物

i・海胆綱

ムラサキウニ：少量の棘、殻板が出土している。最小個体数は 1 個体程度と思われる。

IV・脊椎動物

i・硬骨魚綱

マイワシ：腹椎骨 7 点、尾椎骨 5 点が出土している。頭骨及び内臓骨の出土は見られない。

ニシン：腹椎骨が 1 点出土しているのみである。

スズキ科の一種：腹椎骨が 1 点出土している。スズキの現生骨格標本と近似するが、完全に一致しないためスズキ科の一種に留めた。

マサバ：右前上顎骨 1 点、右方骨 1 点、腹椎骨 1 点、尾椎骨 3 点が出土している。それぞれの大きさから見ると小型の個体である。

アイナメ：尾椎骨 1 点が出土している。椎体の大きさから比較的小型の個体と思われる。

ii・爬虫類

ヘビ目的一种：脊椎骨が1点出土している。本遺跡出土のヘビ目のものとしては最も大型の脊椎骨である。ほぼ完形。頭骨及び肋骨の出土は見られない。種同定は非常に困難なためヘビ目的一种に留めた。

iii・哺乳類

リス科的一种：左下顎 M_2 の遊離歯が1点、完形で出土。磨滅が著しいため種同定が困難であり、リス科的一种に留めた。予想される種としてはムササビが挙げられる。

ネズミ科的一种：右上顎切歯の遊離歯1点、 $M_1 \cdot M_2$ を伴う左下顎骨1点が出土している。標本の不備から種同定には到らず、ネズミ科的一种に留めた。

イノシシ：右肋骨1点が出土している。肋骨結節は残存するが肋骨頭は欠損する。

種不明の哺乳類遺存体：種不明の中型陸獣のものと思われる肋骨片が1点出土している。

この肋骨片には解体時における切痕と思われる傷が見られる。

B-2号住居跡埋土

6層：大型哺乳類のものと思われる骨片が出土している。

8層：大型哺乳類のものと思われる左右不明の脛骨片が1点出土している。破砕が著しく、同遺構内から出土した小骨片には脛骨片の混入も考えられるが、細片のため明確ではない。

10層：鹿角片2点、種不明の右橈骨片と思われるもの1点、種及び部位不明のものが1点出土している。右橈骨片と思われるものは遠位端が残存しているが、骨端が癒着していないことから若獣のものと思われる。

11層：イノシシのものと思われる左右不明の肋骨片が3点出土している。これらは同一個体のものと考えられる。

A-5号住居跡埋土 (2~4層)

I・軟体動物

i・二枚貝類

マガキ：小破片が1点出土しているが、左右不明である。

コタマガイ：右殻10点、左殻11点が出土。破砕が著しく完存貝はない。

II・脊椎動物

i・哺乳類

シカ：枝種不明の鹿角の先端部が1点出土している。破砕が著しく内部の海绵質が露出している。

3. 遺構外貝層出土の動物遺存体

遺構外からはA・B・F・G・Nグリットで出土しているが、最も出土量の多いA・Bグリットを中心に記述する。

(1) Aグリット

I・軟体動物

i・腹足綱

シボリガイ：2点出土している。1点は破砕が著しい。計測値は殻高3.3mm、長径6.4mm、短径5.3mm。

アオガイ：1点出土している。殻高1.4mmと小型である。岩礫性の二枚貝に付着してきたものであろうか。

シロガイ：2点出土している。長径4mm以下の小型のものである。岩礫性の二枚貝に付着してきたものであろうか。

イシダタミガイ：1点出土している。殻口の一部分が欠損するのみでほぼ完形である。殻高14.4mm、殻径13.3mm。

コシダカガンガラ：48点出土している。すべて殻径1cm以下の小型のものであり、食用とは思われない。破砕が著しい。

カワザンショウガイ：1点出土している。殻高4.2mm、殻径3.0mm。

タマキビガイ：40点出土している。殻高3.4～15.0mm、殻径3.3～12.2mmの範囲にばらつきが見られ、大きさの均一性はない。40点中23点が完形貝である。

イボニシ：2点出土している。うち1点は破砕が著しい。計測値は殻高23.3mm、殻径15.2mmである。

レイシガイ：2点出土している。破砕が著しい。

チヂミボラ：109点出土している。コクマガイに次いで出土数の多い種で、本貝層中より出土した貝全体の25.53%を占める。破砕した個体が多く、完形貝は7点（完形率6.42%）である。最大殻は殻高31.4mm、殻径20.6mm。

クロスジムシロガイ：3点出土している。1点は完形貝である。計測値は殻高12.0mm、殻径6.6mm。

キセルガイ科の一種：2点出土している。1点は成貝で殻口部のみが残存する。1点は幼貝である。陸産巻貝。

ホソオカチョウジガイ：1点出土している。殻高3mmと小型である。陸産巻貝。
バツラマイマイ：6点出土している。最大殻は殻高2.3mm、殻径5.3mm、陸産巻貝。
オオコハクガイ：6点出土している。微小陸産巻貝である。

i・二枚貝綱

ムラサキインコガイ：右殻8点、左殻4点が出土している。破砕が著しく完存貝はない。
エゾイガイ：右殻5点、左殻5点が出土している。破砕が著しい。
イガイ：右殻5点、左殻2点が出土している。破砕が著しい。
マガキ：右殻3点、左殻4点が出土している。破砕が著しい。
コタマガイ：右殻152点、左殻172点が出土している。最も出土数の多い種で、本貝層中より出土した貝の40.28%を占める。(左右それぞれの個体数で多い方を最少個体数として扱っている。)破砕が著しく、計測可能個体はない。
オオノガイ：右殻殻頂部が1点出土している。破砕が著しい。

II・節足動物

i・蔓脚亜綱

チシマフジツボ：殻版75点が出土している。最少個体数は13個体程度と思われる。比較的大型のものが多いが食用であるかは不明である。

III・棘皮動物

i・海胆綱

ムラサキウニ：少量の棘及び殻版が出土している。最少個体数は1個体程度と思われる。

IV・脊椎動物

i・硬骨魚綱

マイワシ：本貝層では最も出土量の多い魚種である。第二脊椎骨1点、腹椎骨52点、尾椎骨73点が出土している。マイワシの脊椎骨数は腹椎骨30、尾椎骨20の計50である。最少個体数は出土した尾椎骨数73を尾椎骨数20で割り、4個体を算出した。出土総数が絶対的に少ないため、明確には判断しかねるが、頭骨及び内臓骨の出土が見られないことから処理段階での頭部の切り離し、及び別の場所への廃棄が考えられる。

アジ科の一種：右上顎骨1点が出土している。ブリに近似するが現生骨格標本と完全には一致しないためアジ科の一種に留めた。

ウミクナゴ：右後側頭骨が1点出土しているのみである。

マサバ：左主髻蓋骨1点、腹椎骨3点、尾椎骨9点、尾部棒状骨1点が出土している。椎体の大きさから見て小型のものが大半を占める。

アイナメ：左左上顎骨1点が出土している。完形である。

種不明の魚類遺存体：魚鱗片が数片出土している。破片資料のため種同定は不可能である。

ii・爬虫綱

ヘビ目的一种：脊椎骨3点が出土している。2点はほぼ完形であるが、1点は脊椎骨片である。頭骨及び肋骨の出土は見られない。種同定は非常に困難なためヘビ目的一种に留めた。

iii・哺乳綱

齧歯目的一种：種及び歯種不明の遊離歯片が3点出土している。予想される種としてはネズミ、ウサギなどが挙げられる。

(2) Bグリット

I・軟体動物

i・腹足綱

クローアワビ：破片1点が出土。人為的と思われる径2mmほどの穿孔を1固有する。エゾアワビの可能性もある。

シロガイ：1点出土。殻高2.3mm、長径4.7mm、短径3.5mmと小型である。

タマキビガイ：7点が出土。最大殻は、殻高13.0mm、殻径12.8mmである。

イボニシ：2点出土。1点はほぼ完形で、1点は殻頂部が欠損している。前者の計測値は殻高27.4mm、殻径19.4mmである。

レイシガイ：1点出土。殻口部が欠損する。

チヂミボラ：84点が出土。本貝層より出土した貝全体の33.2%を占める。完存貝は19点で、すべて殻高18.1mm、殻径11.0mm以上であり、小型のものはない。最大殻は殻高34.5mm、殻径22.6mmである。破砕が著しいものには小型のものが多し。

ii・二枚貝綱

ムラサキインコガイ：右殻10点、左殻8点が出土しているが、破砕が著しい。

エゾイガイ：右殻2点、左殻1点が出土。破砕が著しい。岩礫性の二枚貝に対する依存度は非常に低い。

イガイ：右殻1点、左殻5点が出土。いずれも破砕が著しい。左殻のうち3点は焼けて灰色を呈する。

マガキ：右殻3点、左殻1点、ほかに破片が数点出土している。殻頂部の大きさから見ると、小型のものを採集していたようである。

コタマガイ：右殻 136 点、左殻 129 点が出土。本貝層中最も多く出土している種で、出土した貝全体の 53.8% を占める。破碎が著しく、計測可能個体は左殻 1 点のみで殻高は 47.2 mm である。殻頂部の大きさを見ると大型のものはあまり採集されていない。

オオノガイ：左右不明の腹縁の破片が 1 点出土している。

II・節足動物

i・蔓脚亜綱

チシマフジツボ：殻板 21 点が出土しているが、最少個体数は 4 個体程度と思われる。

III・棘皮動物

i・海胆綱

ムラサキウニ：少量の棘および殻板が出土している。最少個体数は 1 個体程度と思われる。

IV・脊椎動物

i・硬骨魚綱

マイワシ：腹椎骨 7 点、尾椎骨 11 点が出土している。頭骨及び内臓骨の出土は見られない。

ニシン：腹椎骨 2 点が出土している。マイワシと近似するが、大きさ及び前神経関節突起のつき方などからニシンと同定した。

マサバ：基後頭骨 1 点、腹椎骨 1 点が出土している。大きさから見ると小型の個体である。

アイナメ：腹椎骨 2 点、尾椎骨 1 点が出土している。椎体の大きさから比較的小型のものと思われる。

種不明の魚類遺存体：種不明の魚類の脊椎骨が数点見られた。また、脊鰭棘と思われるものが 1 点出土している。予想される種としては、ウマヅラハギなどのカワハギ科の一種が挙げられる。

ii・哺乳綱

種及び左右不明の小型陸獣の髁骨と思われるものが 1 点出土している。

この他の遺構外からは F グリット 2 層からコタマガイ、G グリット 2 層からコタマガイ、N グリット 2 層からコタマガイがそれぞれ少量出土している。

写真図版



□遺跡

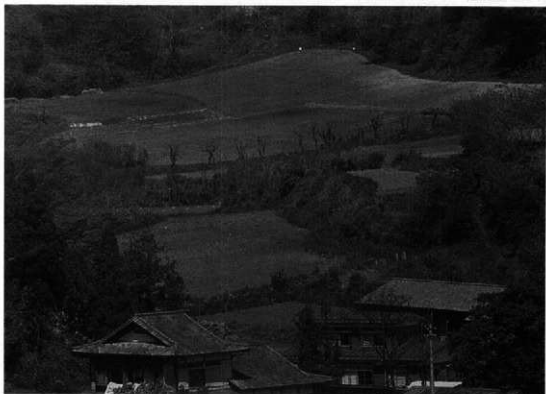


遺跡全景 (南から)

写真図版1 遺跡全景(1)



遺構全景（南から）

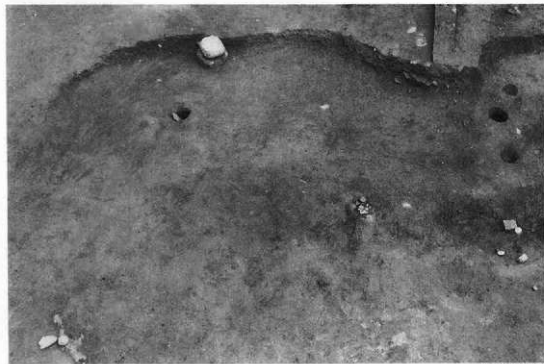


宅地造成前の遺跡（1978、5、13、森田陸氏撮影）

写真図版 2 遺跡全景(2)

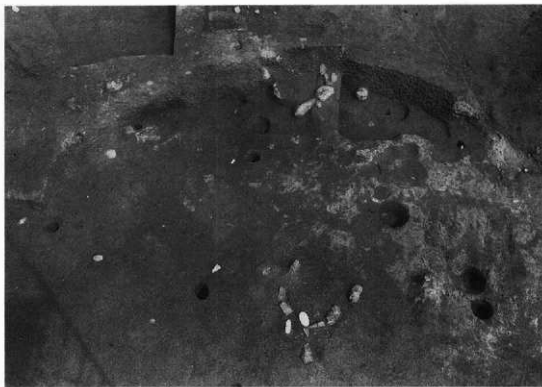


A-1号住居跡



A-2号住居跡

写真図版3 A-1・A-2号住居跡



全景



断面

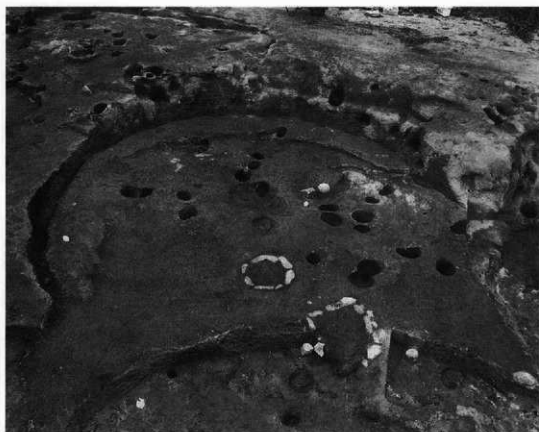


伊断画



伊跡

写真図版 4 A-3号住居跡



全景



埋土断面

写真図版 5 A-5号住居跡(1)



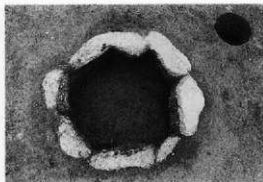
1



2



3



4



5



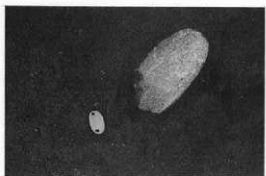
6

1. 全景
2. 拡張後の粘床部分
3. 3号炉
4. 2号炉
5. 1号炉（ピット内の土器は埋藏）
6. 埋土4層内の石柱および角柱
7. 同 上



7

写真図版 6 A-5号住居跡(2)



1



2



3



4



5



6



1. 漆器出土状況
2. 土器出土状況
3. 土器出土状況
4. 土器出土状況
5. 土器出土状況
6. 土器出土状況
7. 埋土断面と壁

写真図版 7⁷ A-5号住居跡(3)



全景



炉竈出状況



土器出土状況

写真図版 8 A-6号住居跡



全景

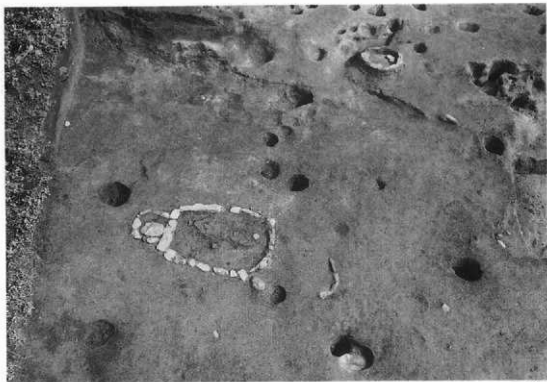


礎・土器の出土状況



埋土断面

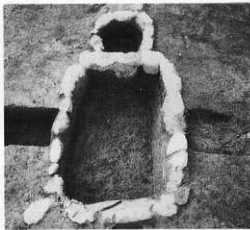
写真図版9 A-7号住居跡



全景



伊模出状況



伊模掘



伊模掘



土器出土状況

写真図版10 A-8号住居跡



全景



住居跡内の風層

写真図版11 B-1号住居跡(1)



貝層断面



貝類出土状況



(コタマガイ)

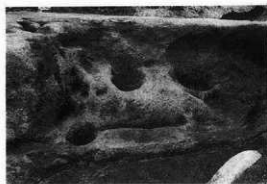


獣骨出土状況



(イノシシ肋骨)

写真図版12 B-1号住居跡(2)



全景



全景 (上から)

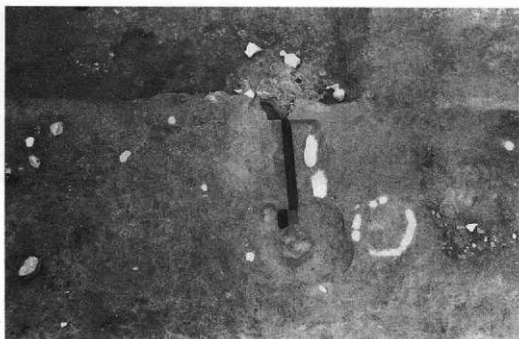


埋土断面



獣骨出土状況(シカ、イノシシ)

写真図版13 B-2号住居跡



全景



炉検出状況

床面遺物出土状況



写真図版14 F-3号住居跡



1



2



4



3

1. N-3号住居炉跡
2. N-3号住居炉跡
3. N-3号住居炉跡
4. V-1号炉
5. 志M-1号・右H-1号配石



5

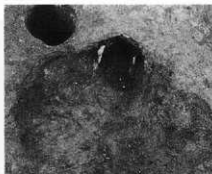
写真図版15 N-3号住居跡、V-1号炉、H-1号・M-1号配石



1



3



2

1. 検出状況
2. 底部付近検出状況（手前はA5号住1号炉）
3. 土壇と5号住床面

写真図版16 A-1号埋甕検出状況

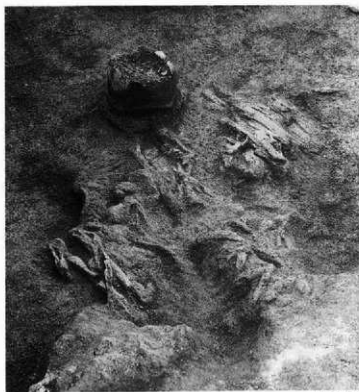


h : (51.0cm)

写真图版17 A-1号埋甕



北側より



北東側より

写真図版18 人骨群検出状況



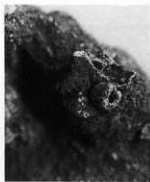
h : 31.2cm

写真図版19 人骨群内出土土器



2 A号頭骨

2 B号頭骨



2号人骨齒



1号人骨頭骨外



1号人骨脊椎・胸骨



1号人骨四肢骨

写真図版20 人骨剖出状況



K-1号土壙全景および遺物出土状況

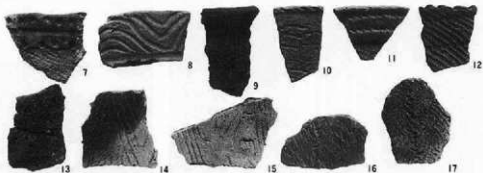


K-1号集石全景

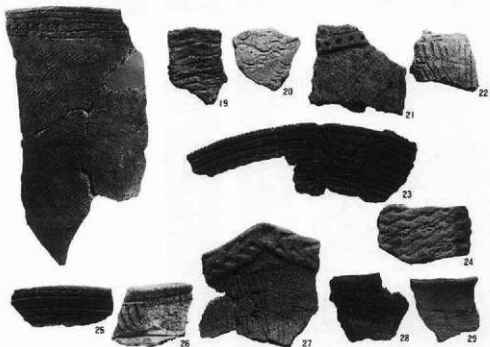
写真図版21 K-1号土壙、K-1号集石



1 土製円蓋

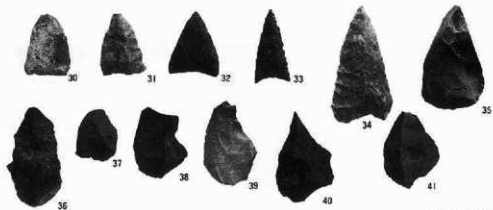


2~3 床 4~5 伊出土 (第7回): ()は図版番号, 以下同じ

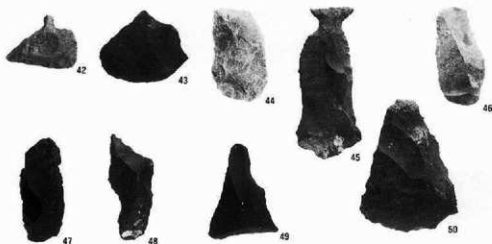


(第8回)

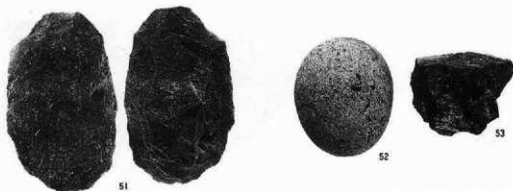
写真図版22 A-1号住居跡 土器



石鏃外 (第9回)



石匙・石篋外 (第10回)



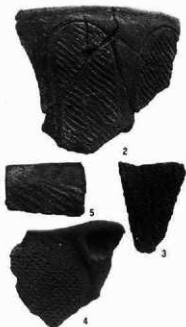
石斧・磨石・石槌 (9・10回)

写真図版23 A-1号住居跡 石器

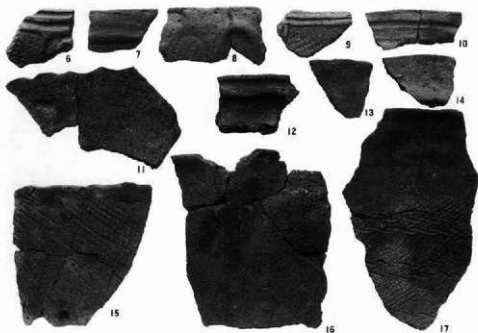


1~2床 3~12埋土 (1200)

写真図版24 A-2号住居跡 土器



1~3 塚, 5 伊出土 (第14回)



6~17 塚土出土 (第14~15回)

写真図版25 A-3号住居跡 土器



A-2号住居跡 石器外(第12回)

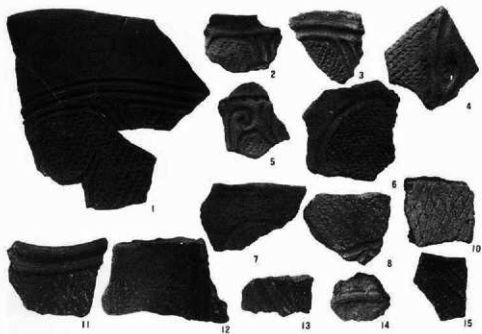


A-3号住居跡・石器・雑外(第16回)

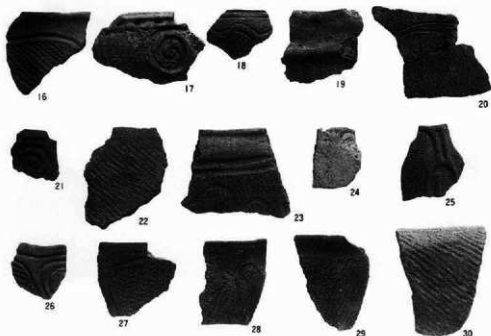


18
A-3号住居

写真图版26 A-2号、A-3号住居跡 石器



床 柱穴出土 (第19回)



16~5層出土 (第19・20回)

写真図版27 A-5号住居跡 土器(1)



3153



3254



3356



3457



3559



3658

床・13～10層出土 (第21図) ()内は図版番号



3709



3800



3900



4000



4100



4200

13層出土(第21段)

写真図版29 A-5号住居跡 土器(3)



4369



4436



4679

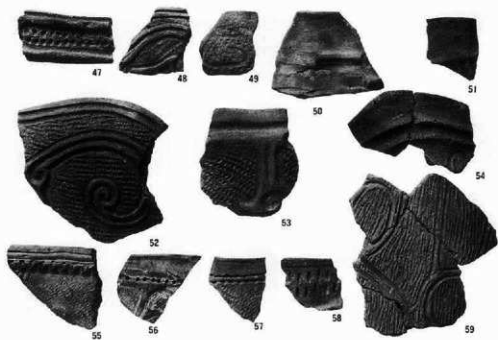


4578

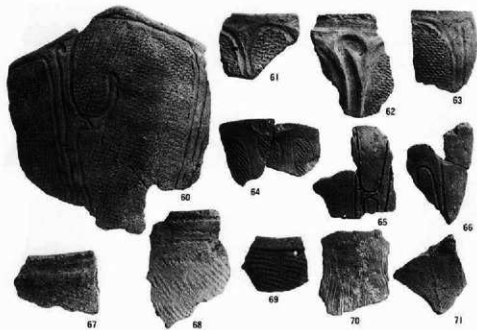


13層出土 (第22回)

写真図版30 A-5号住居跡 土器(4)

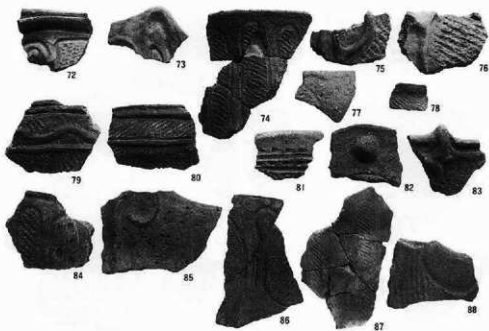


13層出土 (第23回)

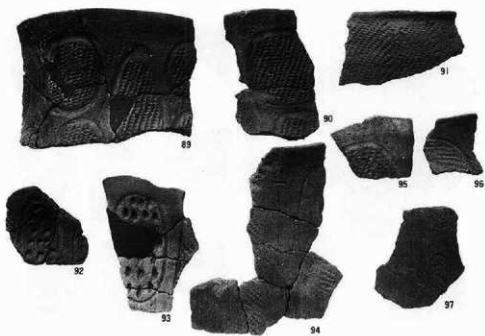


13層出土 (第24・26回)

写真図版31 A-5号住居跡 土器(5)



72~78, 14~15層 (第27回) 79~88, 4層出土 (第25回)



89~91, 3層出土 (第30回) 92~97, 2~1層出土 (第34回)

写真図版32 A-5号住居跡 土器(6)



98(16)



99(16)



100(16)



101(16)



102(16)



103(16)

4層出土(第26回)

写真図版33 A-5号住居跡 土器(7)



104(171)



105(176)



106(122)



107(174)



108(175)



109

104~109, 4層出土(第28回)

写真図版34 A-5号住居跡 土器(8)



110(225)



111(226)



112(224)



113(227)



3層出土(第30回)

写真図版35 A-5号住居跡 土器(9)



114(219)



115(222)



116(223)



117(221)



118(221)

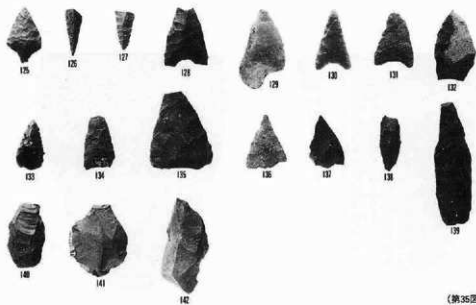
3層出土 (第31回)

写真図版36 A-5号住居跡 土器00

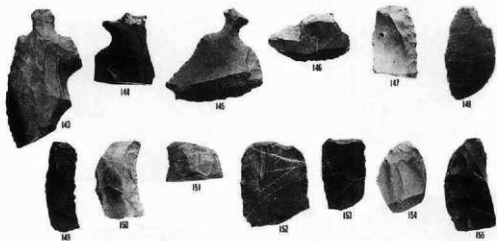


119~122, 2層 123~124, 1層出土 (第320区)

写真図版37 A-5号住居跡 土器(1)



(第35回287-304)



(第36回305-317)

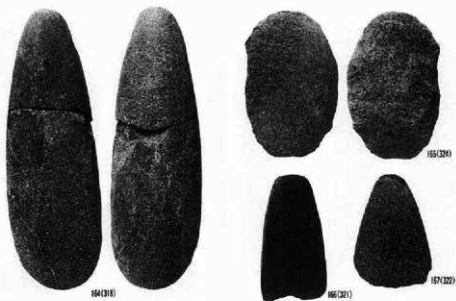


(第37回25-28)

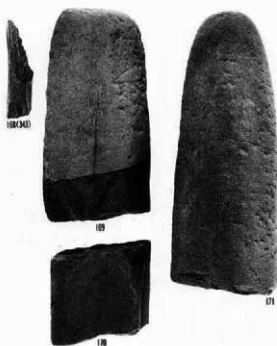
写真図版38 A-5号住居跡 石器(1)



写真図版39 A-5号住居跡 石器(2)

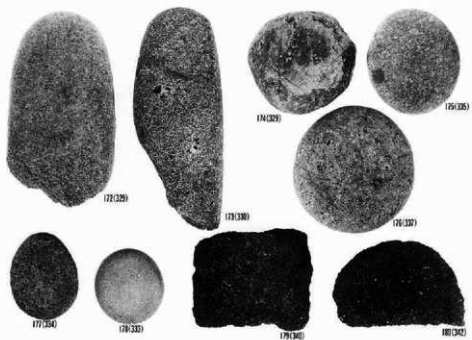


石斧 (第37回)

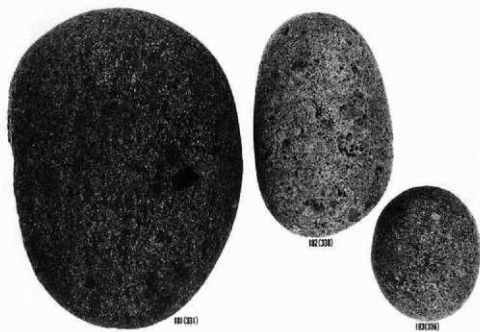


石剣・石棒 (第39・40回)

写真図版40 A-5号住居跡 石器(3)

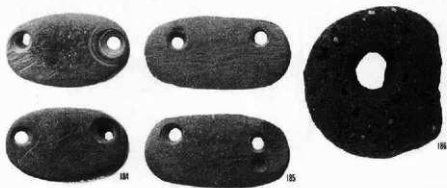


石製品172~173 (第38回) 174~180 (第39回)

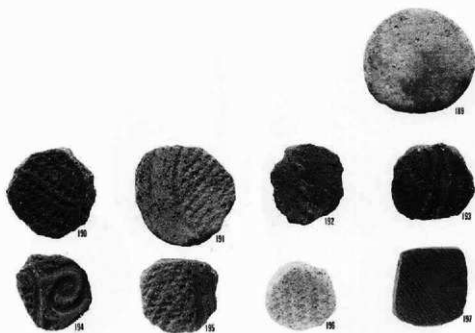


撻り石 (第38・39回)

写真図版41 A-5号住居跡 石器(4)

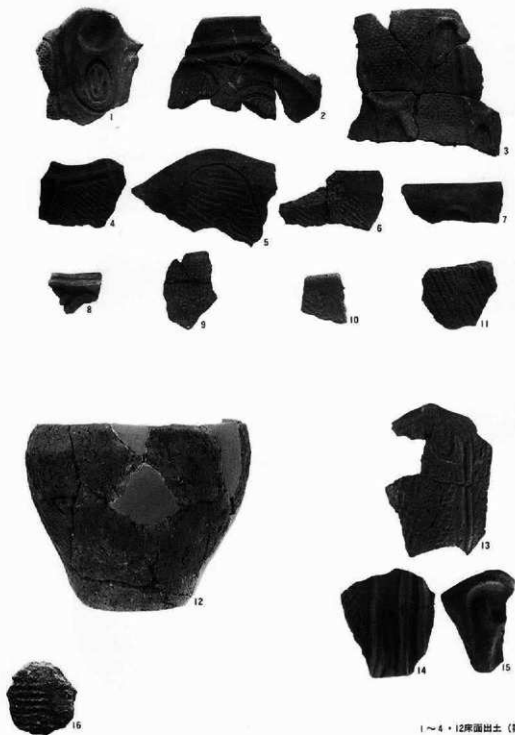


石製裝飾品 (第41図)



土製円盤 (第42図)

写真図版42 A-5号住居跡 石・土製品

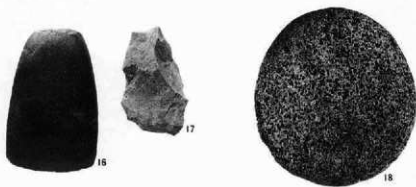


1~4・12摩面出土(第42図)

写真図版43 A-6号住居跡 土器



1~15・A-7号住出土 (第45回)



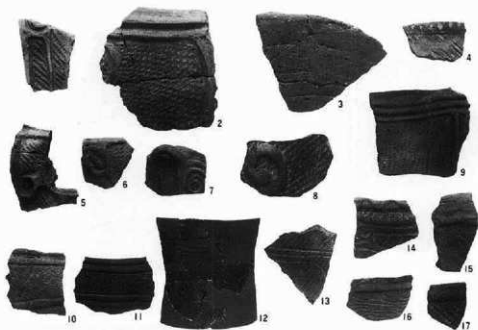
16~18・A-6号住石器 (第43回)

写真図版44 A-7号、A-6号住居跡 遺物

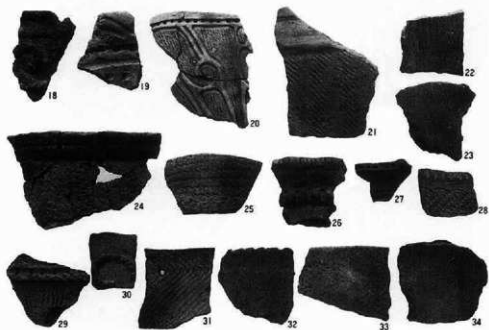


· 伊 4 · 采出土 (第47・48回)

写真図版45 A-8号住居跡 土器(1)

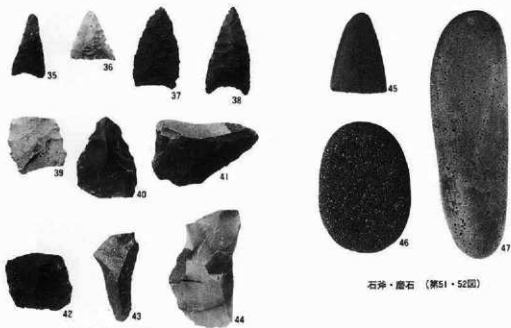


1~2・埴 3~4床出土 (第47・48回)



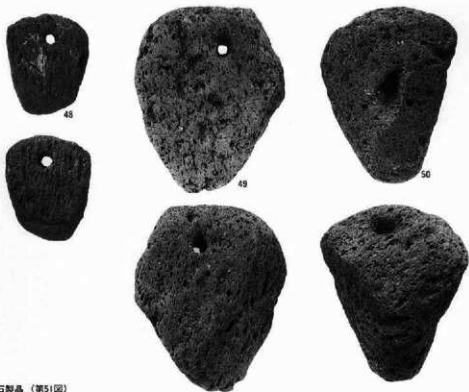
(第49回)

写真図版46 A-8号住居跡 土器(2)



石斧・磨石 (第51・52图)

削片石器 (第50图)

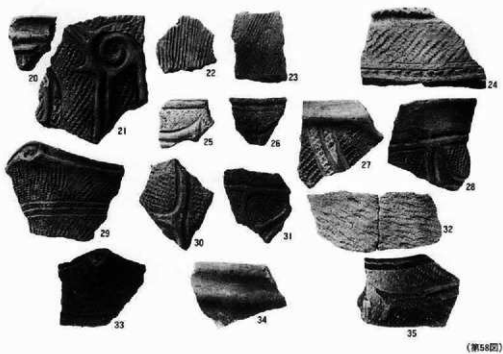
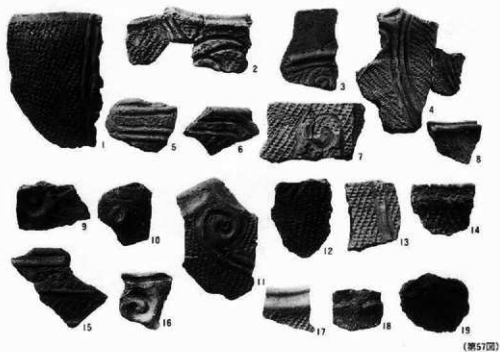


有孔石器 (第51图)

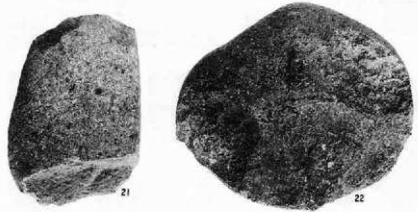
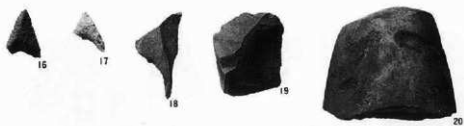
写真图版47 A-8号住居跡 石器



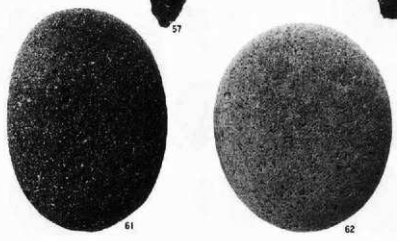
写真图版48 B-1号住居跡 土器(1)



写真図版49 B-2号住居跡 土器(2)

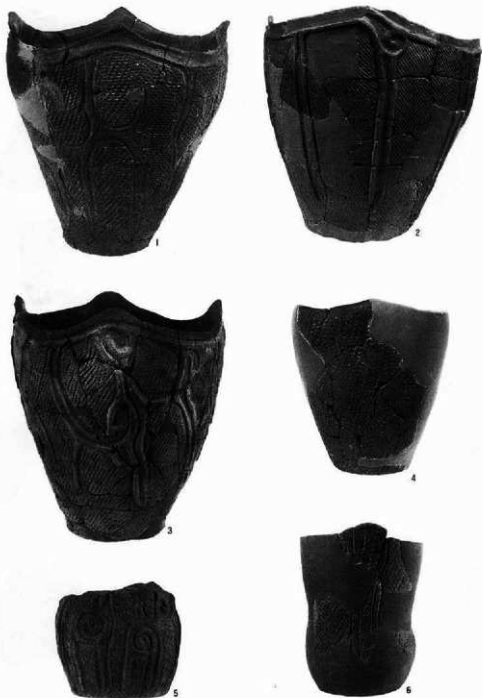


B-1号住居 (第55回)



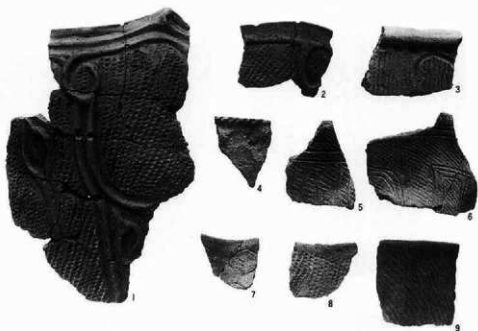
B-2号住居 (第59回)

写真图版50 B-1号・B-2号住居跡 石器

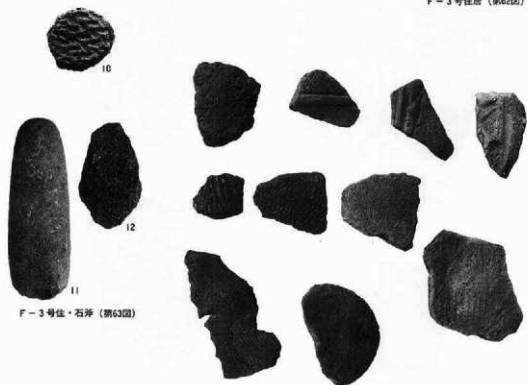


1~6床面出土 (第61、62回)

写真図版51 F-3号住居跡 土器



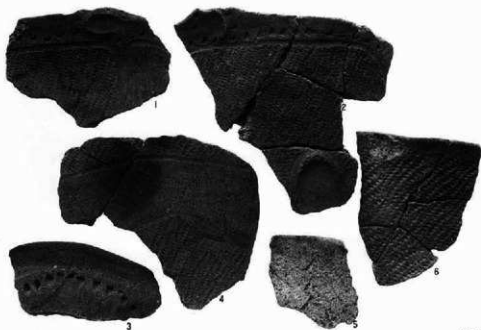
F-3号住居 (第62回)



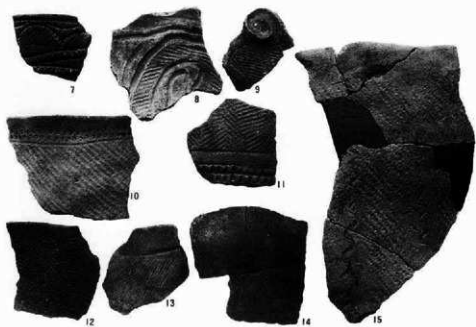
F-3号住・石杵 (第63回)

N-3号住居 (第64回)

写真図版52 F-3号・N-3号住居跡 遺物



(第71圖)



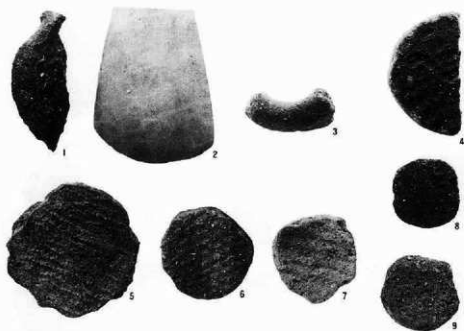
(第71・73圖)

写真図版53 K-1号土坑 土器(1)

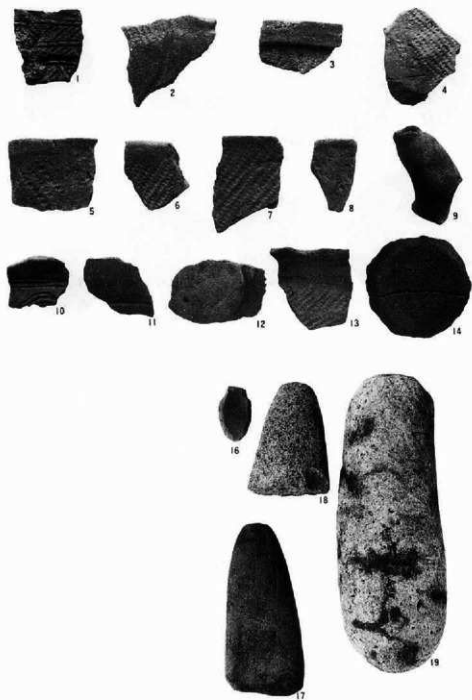


(第72・73图)

写真图版54 K-1号土坑 土器(2)



石器・土製円盤外 (第74回)

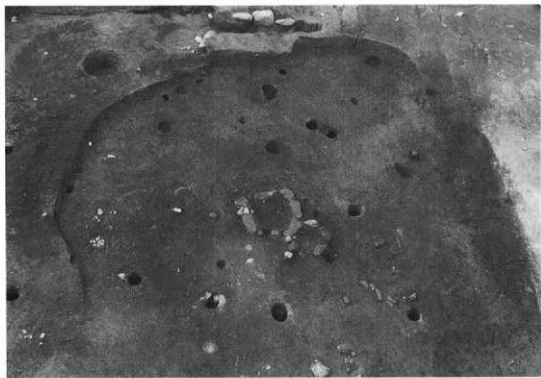


(第75・76頁)

写真図版56 K-1号集石 遺物



写真图版57 骨角器



全景



埋土断面

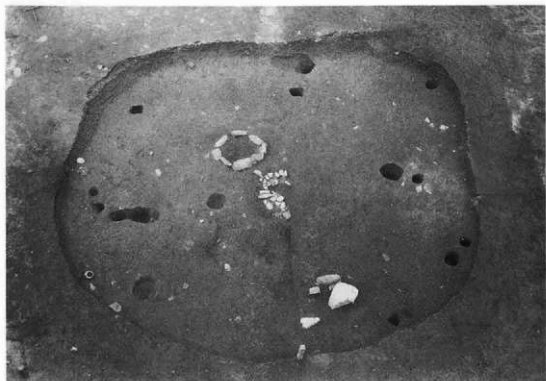


炉断面



床面遺物出土状況

写真図版58 F-2号住居跡



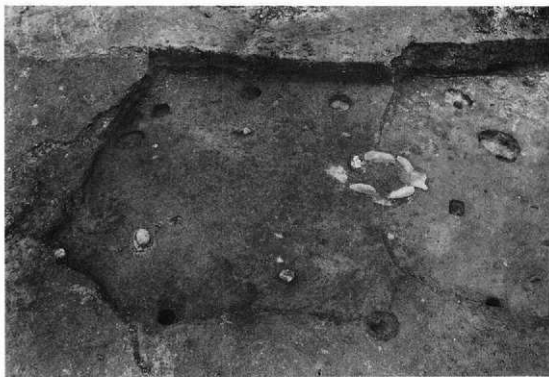
全景



伊跡

伊検出・床面土器出土状況

写真図版59 F-4号住居跡



全景 (右側はG-1号住)



埋土断面



炉全景



炉横出状況

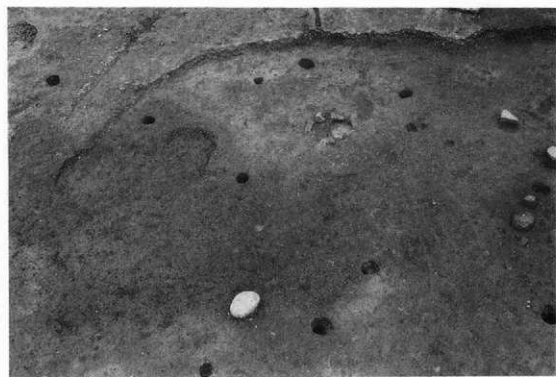


遺物出土状況

写真図版60 G-3号住居跡



L-2号住居跡全景



K-1号住居跡全景

写真図版61 K-1号・L-2号住居跡



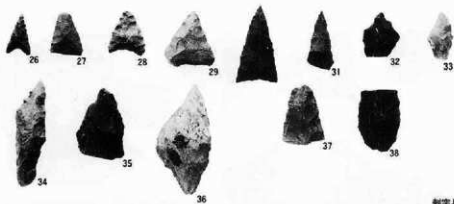
数字は実測図番号に同じ、以下同様（第80図）

写真図版62 F-2号住居跡 土器(1)

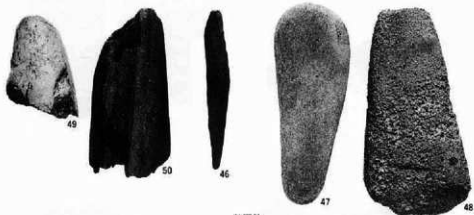


(第81・82图)

写真图版63 F-2号住居跡 土器(2)



刺突具類



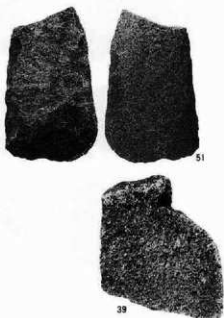
敲石外



剥片石器



磨石



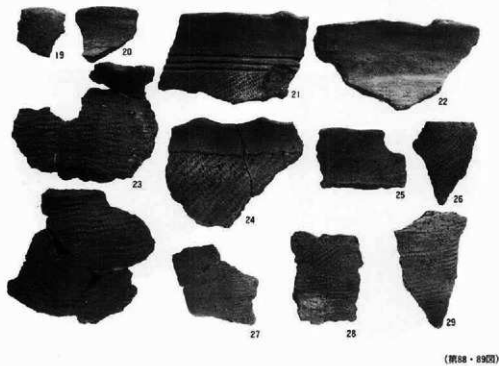
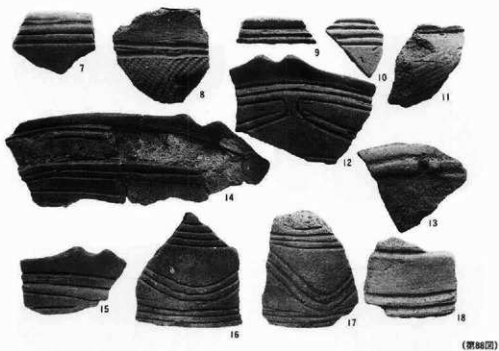
写真図版64 F-2号住居跡 石器

(第83・84回)

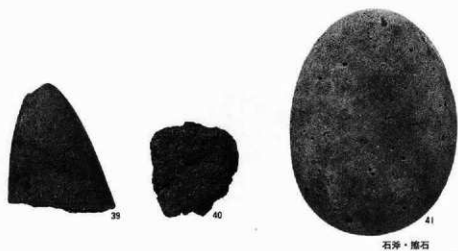
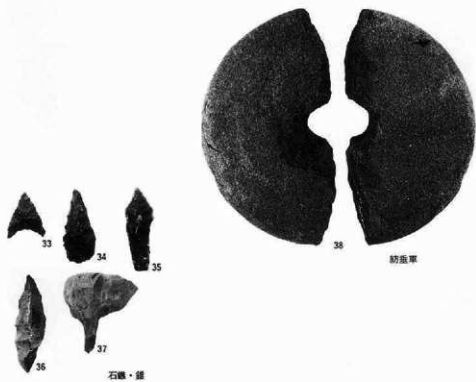


1~6 床面出土 (第86・87頁)

写真図版65 F-4号住居跡 土器(1)



写真図版66 F-4号住居跡 土器(2)

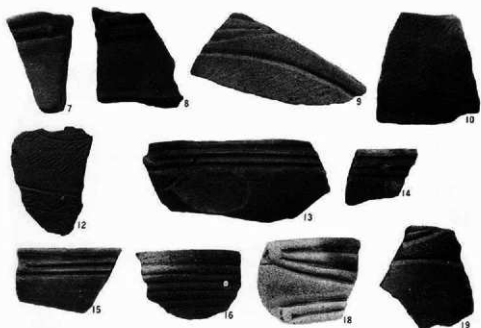


写真図版67 F-4号住居跡 石器

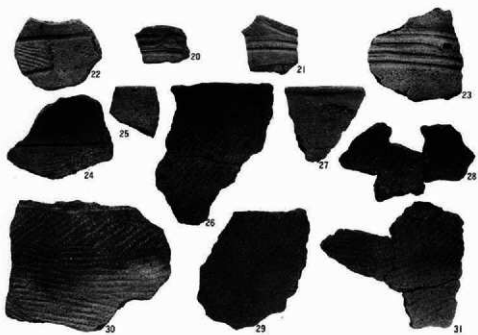


1. 罎、2~5 床 (第92回)

写真図版68 G-3号住居跡 土器(1)

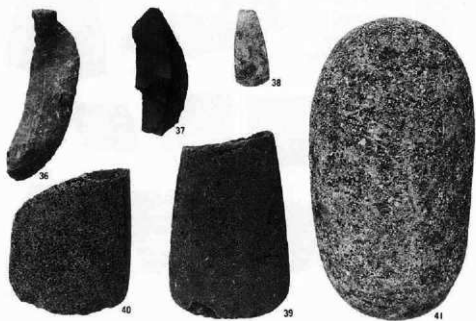


(第93回)

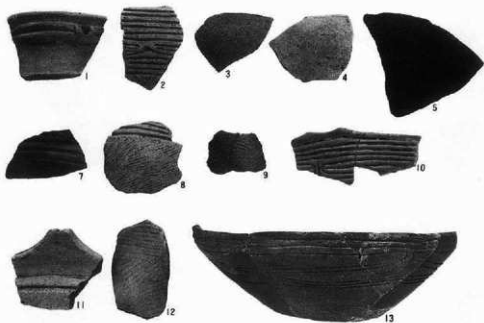


(第93・94回)

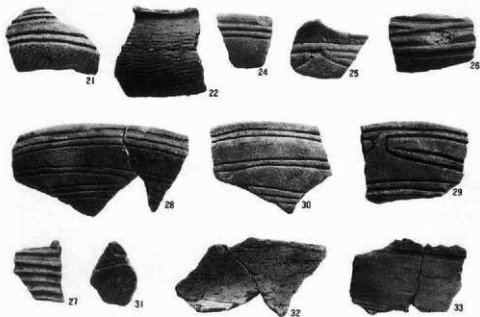
写真図版69 G-3号住居跡 土器(2)



石匙・石斧外 (第95図)



1~13床出土 (第97・98図)



(第100図)

写真図版71 K-1号住居跡 土器(1)



15



16



17



18



19



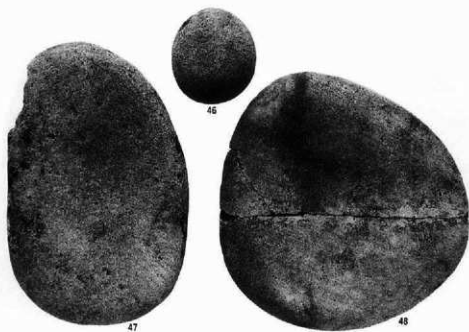
20

(第98・99图)

写真图版72 K-1号住居跡 土器(2)

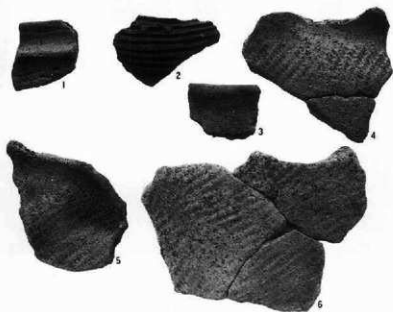


石礫・石斧外

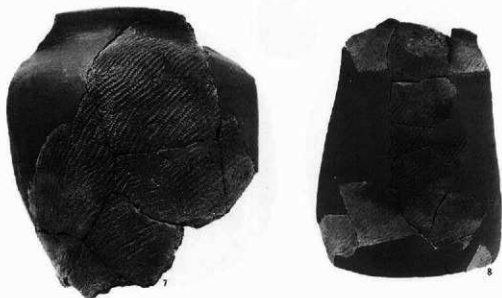


推石外(第101回)

写真図版73 K-1号住居跡 石器



1~3 床面出土 (第102回)



(第103回)

写真图版74 L-2号住居跡 土器



石槌・石匙外

(第104図)

写真図版75 L-2号住居跡 石器



カマド完備 (東から)



炭化材出土状況 (東から)



炭化材出土状況



遺物出土状況



写真図版76 A-4号住居跡(1)



完掘 (東から)



P₁土坑検出状況 (東から)



P₁土坑完掘 (南から)

写真図版77 A-4号住居跡(2)



遺物出土状況（東から）



カマド完備（西から）

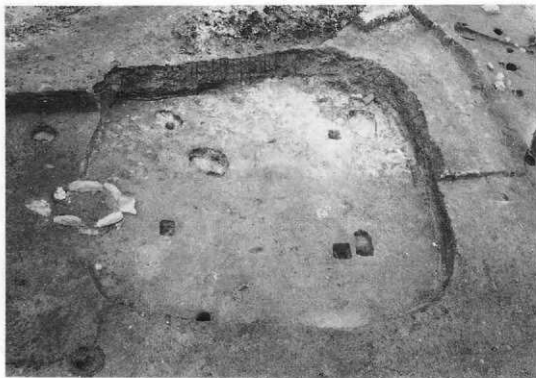


カマド断面（南から）



長頸壺出土状況（西から）

写真図版78 F-1号住居跡



完備（南から）



礎出土状況（西から）



埋土断面（南から）



埋土断面（西から）

写真図版79 G-1号住居跡



穴場（南から）



カマド横出状況（南から）



埴土断面（西から）



炭化材出土状況



紡錘車出土状況

写真図版80 G-2号住居跡



完備（南から）



カマド検出状況



カマド断面（南から）



カマド完備（東から）

写真図版81 H-1号住居跡



史蹟 (南から)



カマド史蹟 (西から)



埋土断面 (南から)

写真図版82 H-2号住居跡



検出状況 (南から)



埋土断面 (南から)



カマド出土状況 (南東から)



カマド断面 (西から)



完掘 (南東から)

写真図版83 I-1号住居跡



埋土断面 (西から)



埋土断面 (南から)



遺物出土状況 (東から)



北カマド突眼 (南から)



突眼 (南から)



J-1-2号住居跡完掘 (南から)



J-1号住居跡埋土断面 (東から)



M-1号住居跡埋土断面 (西から)



M-1号住居跡周溝完掘状況 (西から)

写真図版85 J-1-2号・M-1号住居跡



変遷 (南から)



カマド突掘 (南から)



埋土断面 (西から)



上G-2・FM-2号住居跡 (南から)

写真図版86 M-2号住居跡



埴土断面 (北西から)



カマド完掘 (南西から)



カマド断面 (南西から)



N-1号住居跡完掘 (南西から)

写真図版87 N-1号住居跡



突圍（西から）



カマド突圍（西から）



周溝断面（西から）



柱穴P,埋土断面（南から）

写真図版88 N-2号住居跡



0-1号住居跡埋土断面（東から）



0-2号住居跡埋土断面（東から）



0-1号住居跡完掘（南から）



0-2号住居跡完掘（南から）

写真図版89 O-1・2号住居跡



M-1号土坑断面（東から）



O-1号土坑断面（東から）



O-1号土坑断面（東から）



N-1号溝跡断面（南西から）



N-1号土坑断面（北から）

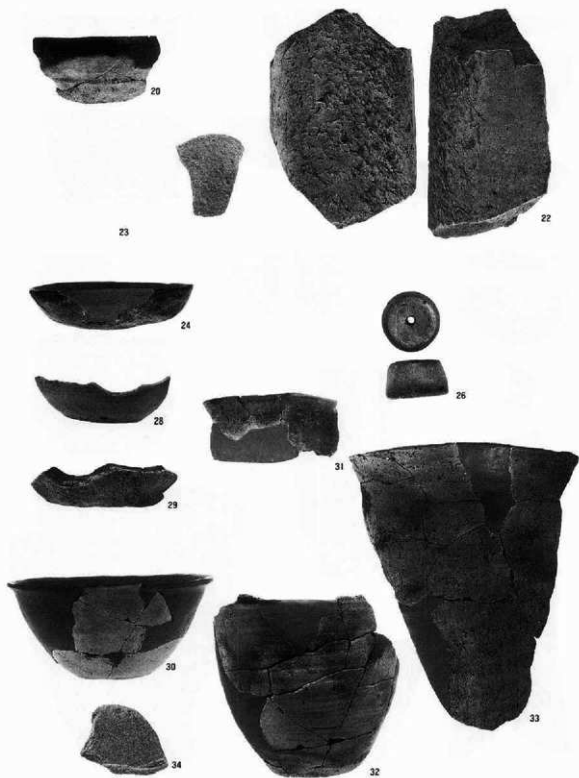


N-1号溝跡断面（南から）

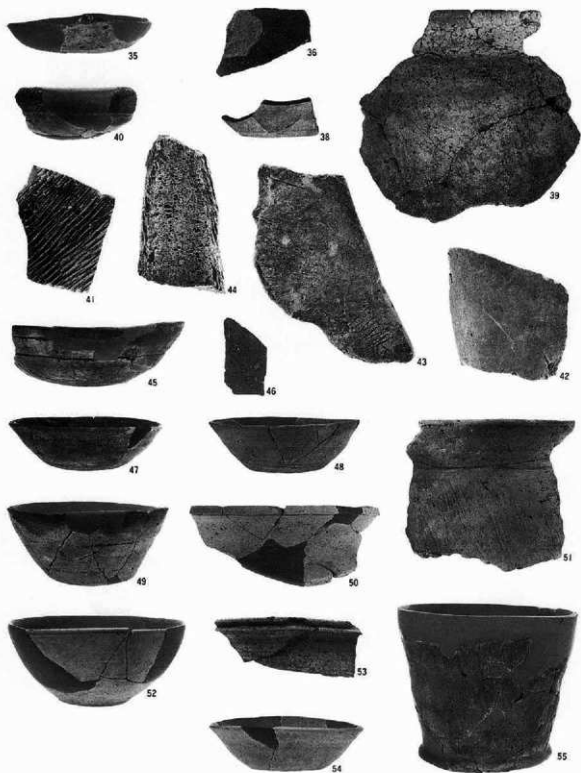
写真図版90 土坑・溝跡



写真图版91 A-4·F-1号住居跡遺物



写真図版92 G-1・2・H-2号住居跡遺物



写真図版93 I-2・J-1・M-1・N-1・2・O-1・2号住居跡遺物



56



57

K-1号土坑



58

M-1号土坑



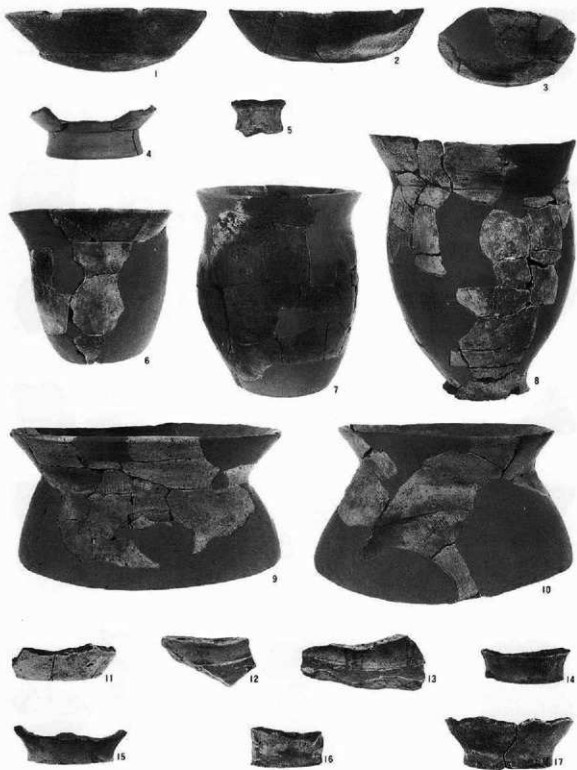
59



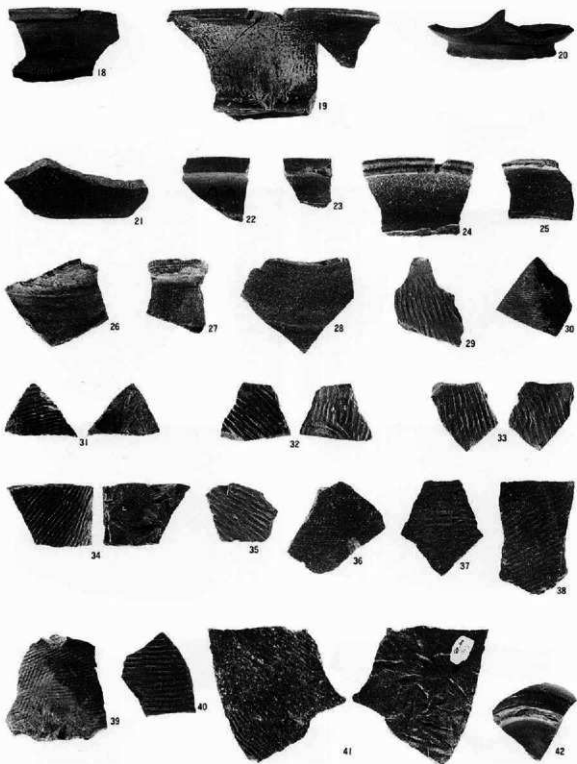
60

N-1号土坑

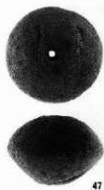
写真图版94 K-1·M-1·N-1号土坑



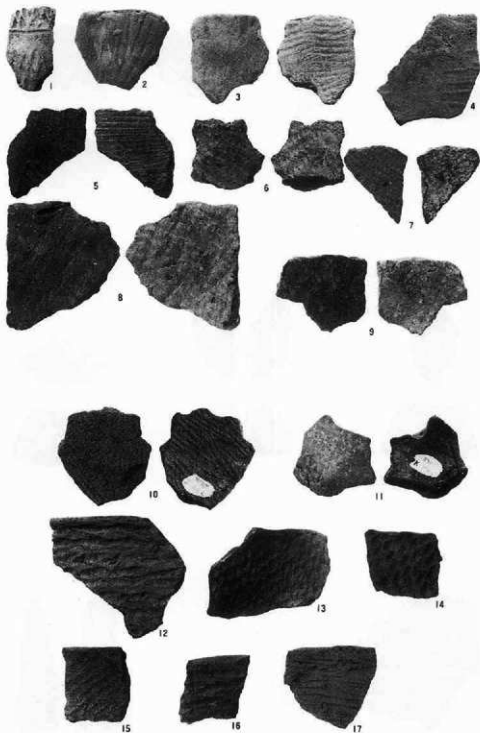
写真図版95 遺構外遺物：土師器



写真図版96 遺構外遺物：須恵器

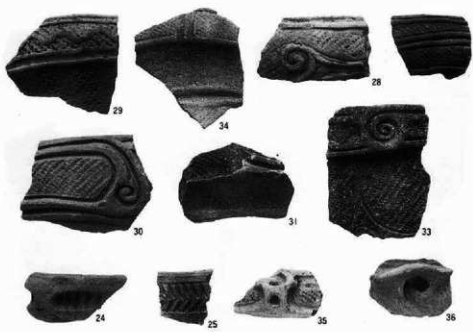
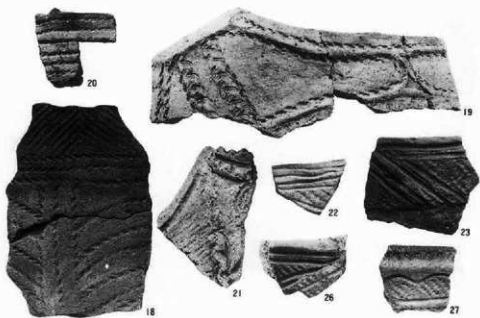


写真図版97 遺構外遺物：土製品・石製品



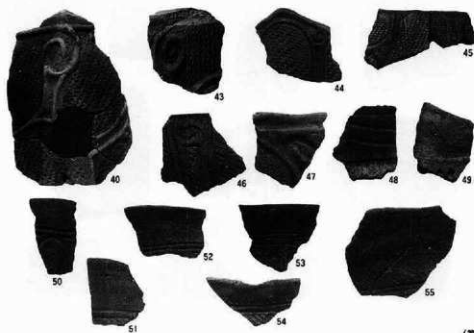
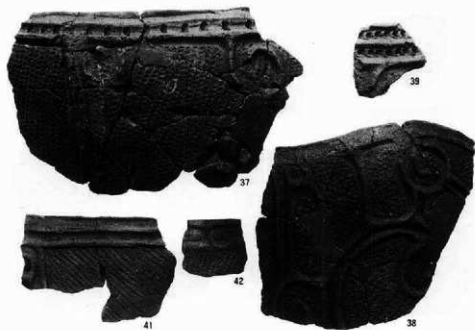
番号は実測図の番号と同じ(第14図)

写真図版98 遺構外遺物：縄文土器(1)



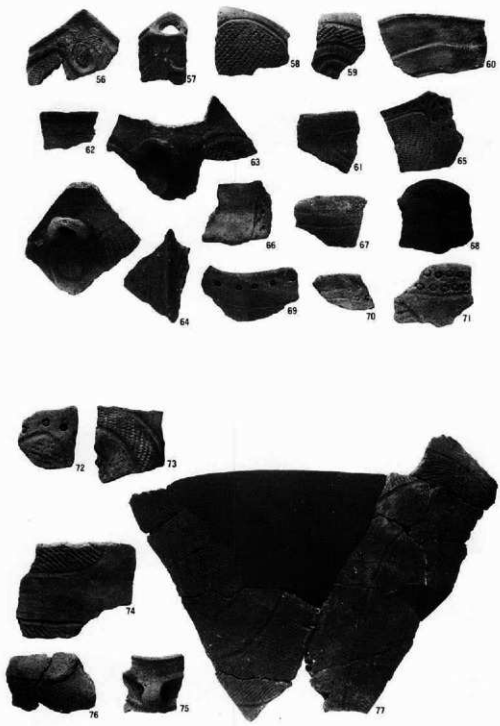
(第15回)

写真図版99 遺構外遺物：縄文土器(2)



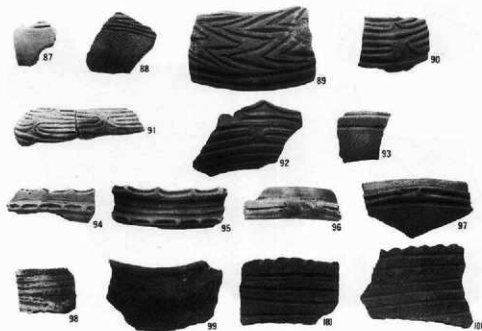
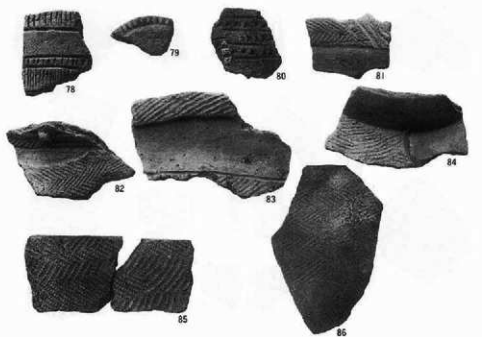
(第16回)

写真図版100 遺構外遺物：縄文土器(3)



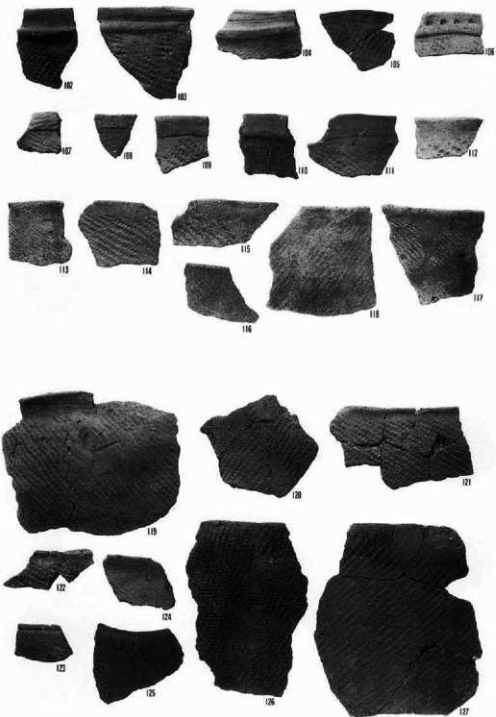
(第137図)

写真図版101 遺構外遺物：縄文土器(4)



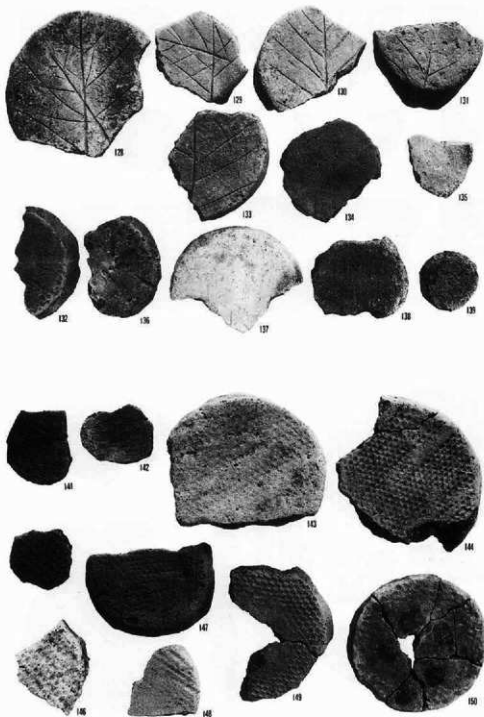
(續前頁)

写真図版102 遺構外遺物：縄文土器(5)



(第125回)

写真図版103 遺構外遺物：縄文土器(6)



(第143図)

写真図版104 遺構外遺物：縄文土器(7)



(第140圖)

写真図版105 遺構外遺物：縄文土器(8)



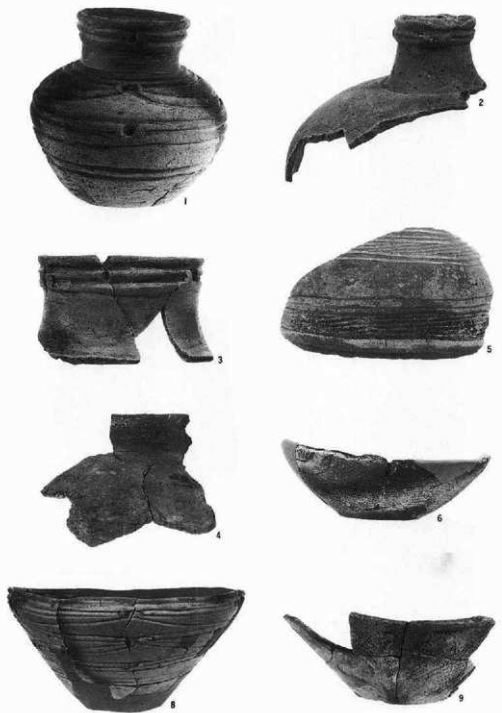
(第141回)

写真図版106 遺構外遺物：縄文土器(9)



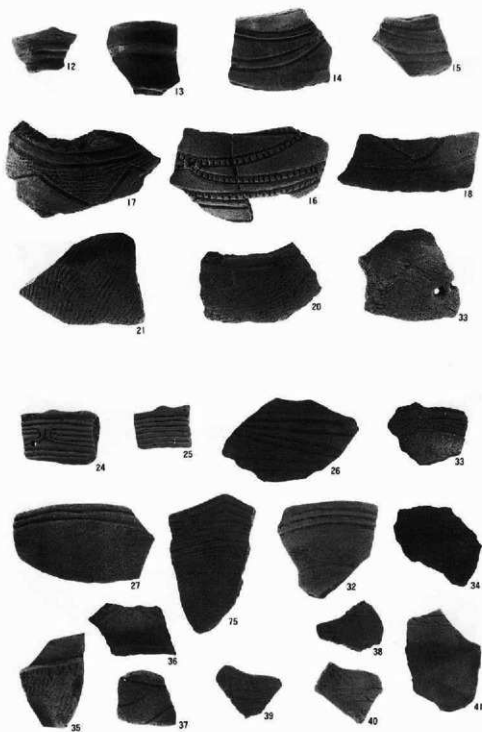
(第142回)

写真図版107 遺構外遺物：縄文土器(10)



(第14図)

写真図版108 遺構外遺物：弥生土器(1)



(第145・146・150图)

写真图版109 遗構外遺物：弥生土器(2)



(第10回)

写真図版110 遺構外遺物：弥生土器(3)



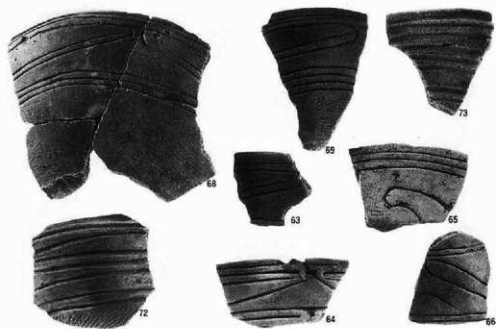
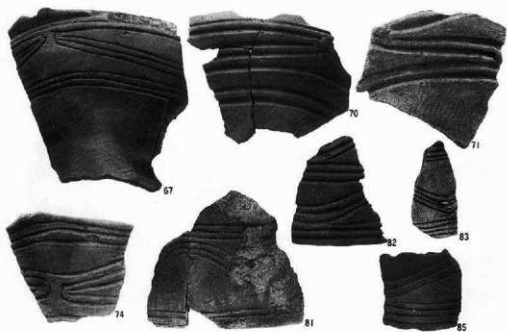
(第14回)

写真図版III 遺構外遺物：弥生土器(4)



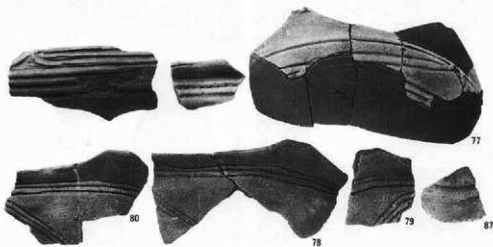
(第142圖)

写真図版112 遺構外遺物：弥生土器(5)

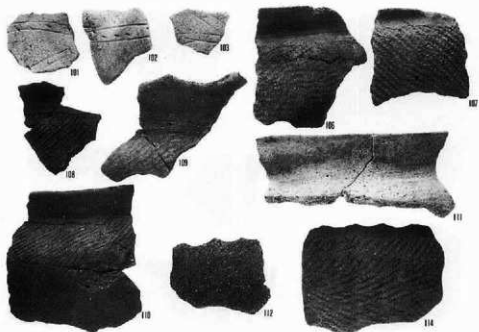


(第14、15、16圖)

写真図版113 遺構外遺物：弥生土器(6)



(第151圖)



(第152圖)

写真図版114 遺構外遺物：弥生土器(7)



88



89



90



91



92

(新編・153頁)

写真図版115 遺構外遺物：弥生土器(8)



93



94



95



97



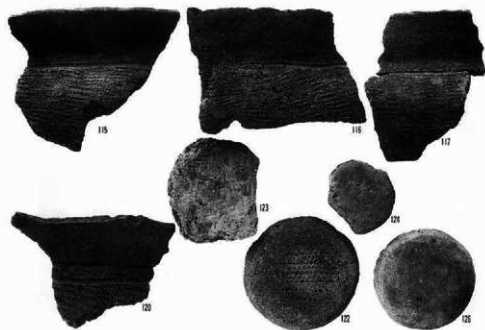
96



98

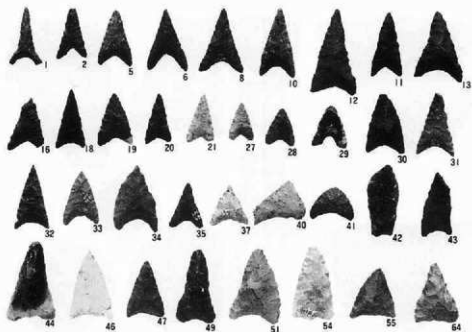
(第14回)

写真図版116 遺構外遺物：弥生土器(9)

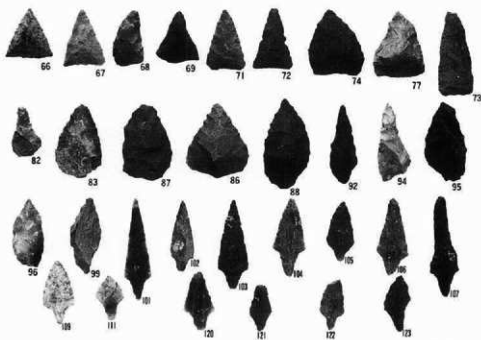


(M115429)

写真図版117 遺構外遺物：弥生土器(10)

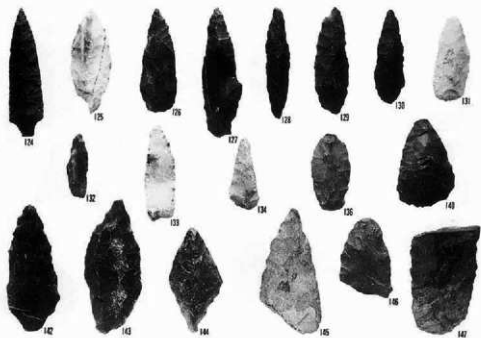


(第157・158回)

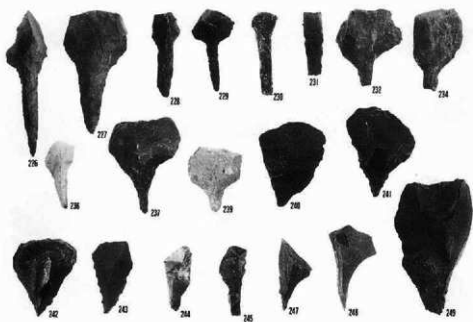


(第159・160回)

写真図版118 遺構外遺物：石器(1)

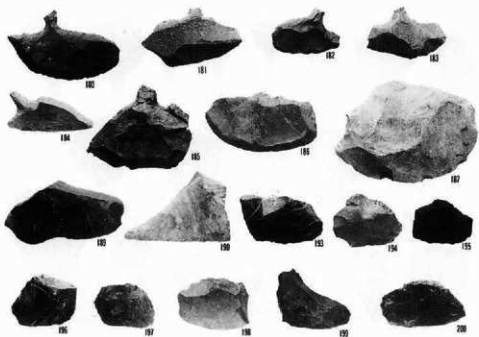
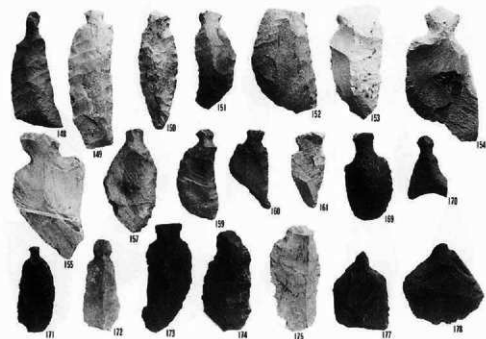


(第161・162図)



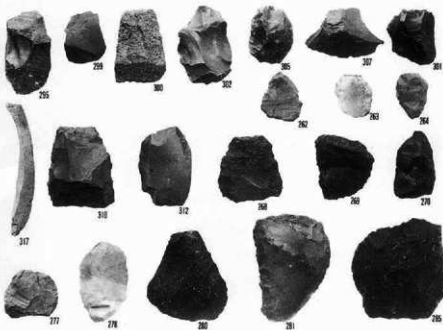
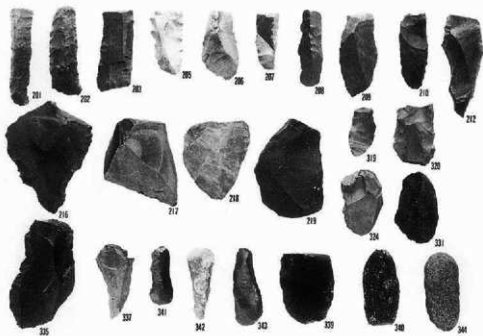
(第167図)

写真図版119 遺構外遺物：石器(2)



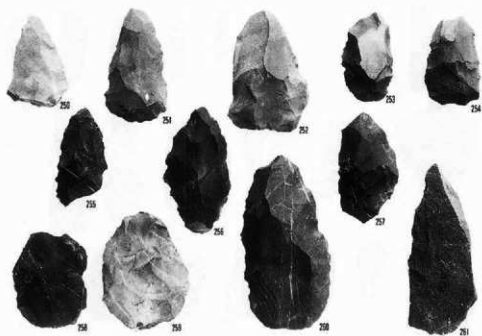
(图163 - 164 - 165(2))

写真图版120 遺構外遺物：石器(3)

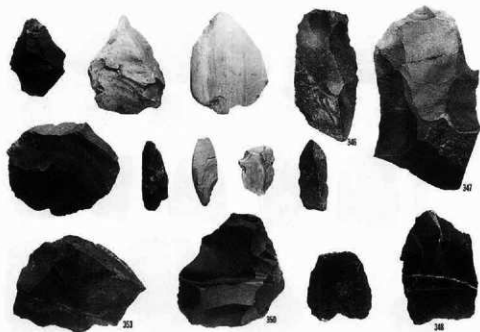


(第166・169・170・171図)

写真図版121 遺構外遺物：石器(4)

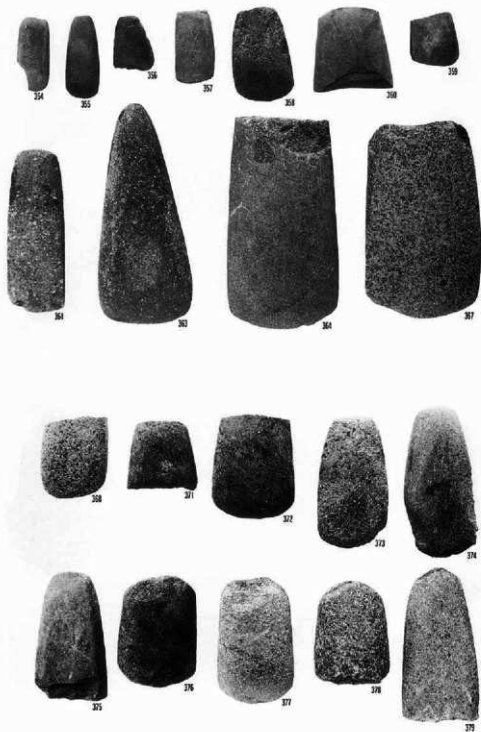


(第168回)



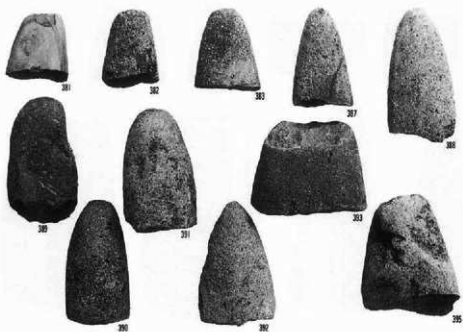
(第172回)

写真図版122 遺構外遺物：石器(5)

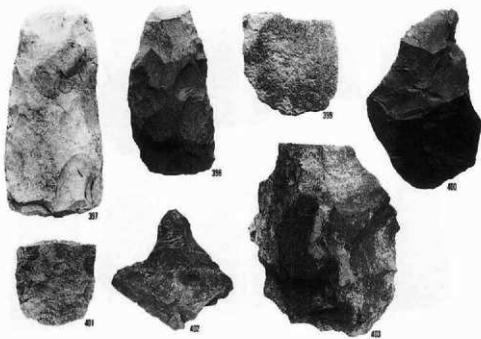


(第173・174・175図)

写真図版123 遺構外遺物：石器(6)

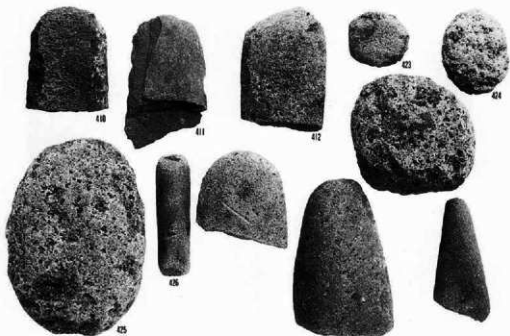
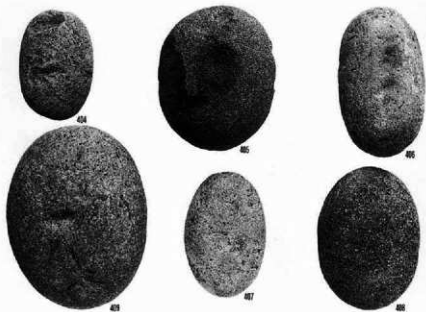


(第176・177図)



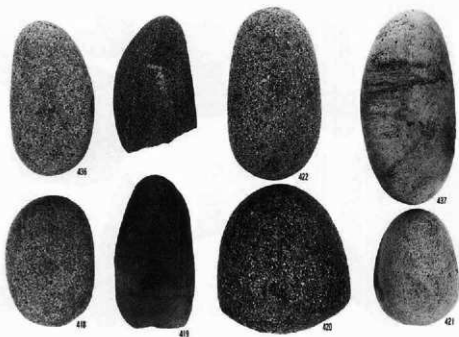
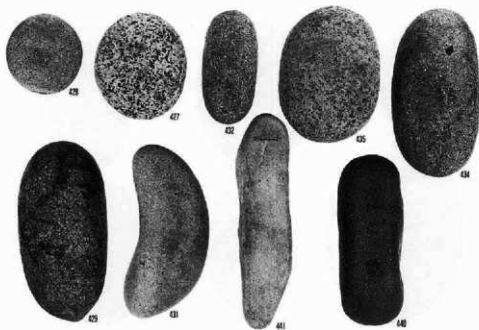
(第178図)

写真図版124 遺構外遺物：石器(7)



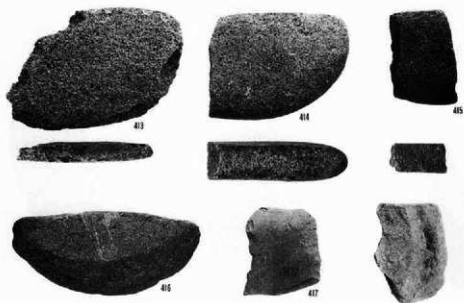
(第179・182回)

写真図版125 遺構外遺物：石器(8)

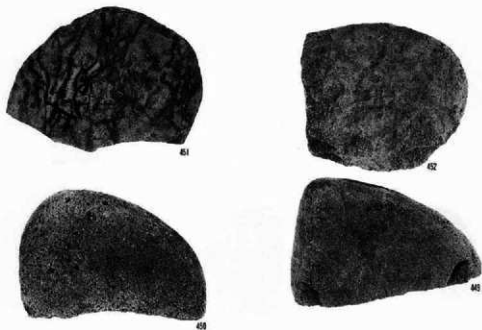


(第181・182・183頁)

写真図版126 遺構外遺物：石器(9)

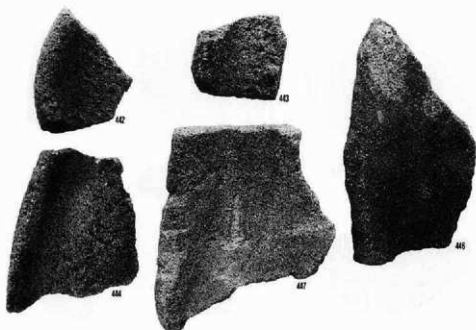


(第180図)

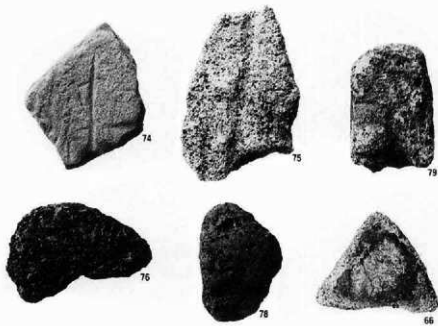


(第185図)

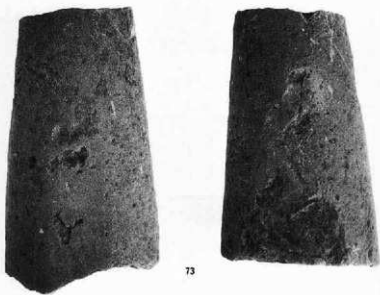
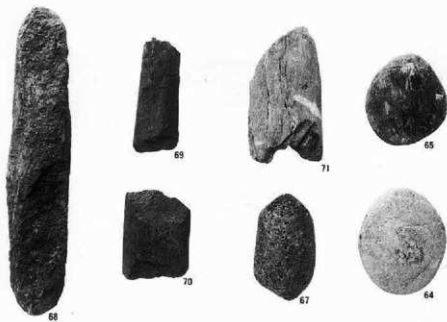
写真図版127 遺構外遺物：石器(0)



(20115120)

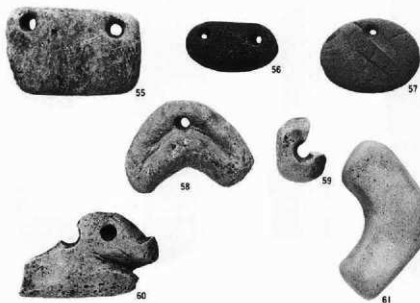


写真図版128 遺構外遺物：石器(1)・石製品

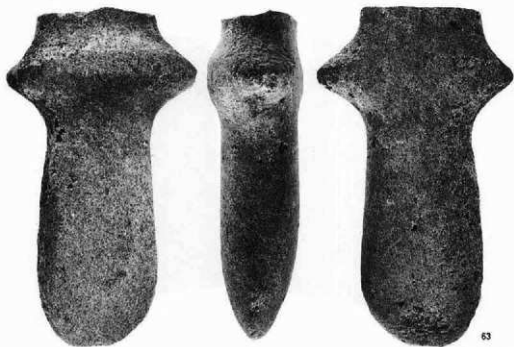


(第189・190図)

写真図版129 遺構外遺物：石製品

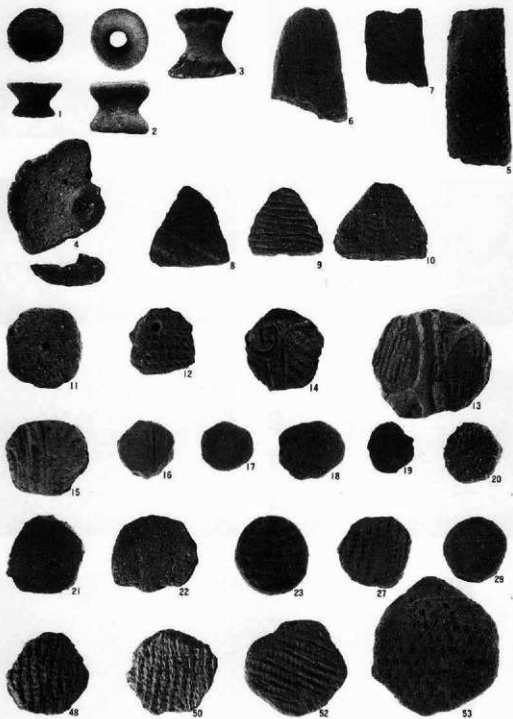


〔縄文時代〕（188回）



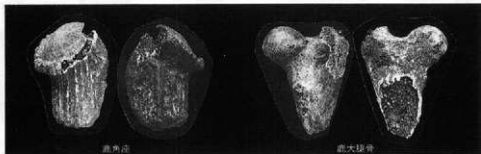
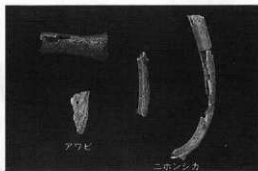
〔実大〕（189回）

写真図版130 遺構外遺物：石製品・有角石斧



(第186・187圖)

写真図版131 遺構外遺物：土製品



写真図版132 自然遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 小笠原 喜一
 副所長 米澤 康雄

[管理課]

管理課長(兼) 米澤 康雄
 課長補佐 森岡 陽一
 主事 阿部 隆広

[調査課]

調査課長 昆野 靖
 課長補佐 佐々木 嘉直
 主任文化財 小田野 哲憲
 専門調査員 三浦 謙一
 " 工藤 利幸
 " 高橋 與右衛門
 " 平井 進一
 " 中川 良紀
 " 中川 重紀
 " 藤村 敏男
 " 高橋 義介
 文化財 高橋 實
 専門調査員 斎藤 隆
 " 千歳 孝雄
 " 斎藤 博司
 " 東海林 隆幹
 " 佐々木 弘均
 " 川村 均行
 " 鈴木 貞格
 " 伊東 修
 " 遠藤 邦雄
 " 斎藤 敏明

[資料課]

資料課長 高橋 薫
 主任文化財 田 領壽夫
 専門調査員

嘱託 吉田 一男
 " 山 館 昇
 兼 技 士 佐藤 春男
 運 転 兼 技 能 員

文化財 佐々木 信一
 専門調査員 小原 眞一
 " 村上 修孝
 " 酒井 宗彦
 " 松本 建昭
 " 金子 昭宏
 " 渡田 久裕
 期 限 付 菅 常伸
 専門調査員 相原 靖世
 " 及川 勝則
 " 阿部 池明
 " 菊池 芳涉
 " 及川 雅之
 " 星 下 宏
 " 森 鈴 木 知
 " 菊 地 幸
 " 藤 村 隆
 " 千 葉 悟
 " 大 久 保 茂
 " 熊 谷 博 由

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集

上村貝塚発掘調査報告書

印刷 平成3年3月25日

発行 平成3年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社
〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5
TEL (0196) 41-0585